屍鬼
小野不由美
SHI KI
二
新潮文庫
屍　鬼　（二）
小野不由美
お
37
4
新潮文庫
¥667

新潮文庫のエンターテインメント

カバー装画　藤田新策

9784101240244

1920193006674

定価：本体667円（税別）

「尋常でない何かが起こっている」。死者の数は留まるところを知らず、村は恐怖の連鎖に陥っていた。山々に響き渡る読経、毎日のように墓場に消えていく真白き棺。さらにそのざわめきの陰で、忽然と姿を消している村人たちがいた——。廃墟と化した聖堂に現れる謎の少女。深夜、目撃されるトラックの残響。そして闇の中から射る、青白い視線……。目が離せない展開、戦慄の第二幕。

ISBN4-10-124024-8

C0193 ¥667E

新潮文庫

―――新潮文庫―――
小野不由美の本

魔性の子
東京異聞
屍鬼（一～五）

カバー印刷　錦明印刷　　デザイン　新潮社装幀室

新潮文庫

屍鬼

(二)

小野不由美著

新潮社

屍鬼 (二)

小野不由美著

新潮文庫

新潮文庫

屍鬼

（二）

小野不由美著

新潮社版

6802

屍鬼（二）

——To 'Salem's Lot

第二部　深淵（しんえん）より呼びぬ

一章

I

後藤田ふきの葬儀が終わったその日、静信は夜の墓地を抜け、尾崎医院を訪ねた。控え室の明かりは消えている。代わりに庭の奥に面した窓に明かりが点いていた。母屋の一階、いちばん端にあるそれが敏夫の私室だった。

庭木を迂回し、植え込みを避けて庭を奥に向かう。かつては応接間だった洋間。敏夫の部屋が二階の一室からそこへ唐突に移されたのは、小学校の何年生の時だったろうか。二階の部屋よりもはるかに広いのだが、敏夫は「二階」に未練があるようだった。——そう、それは敏夫の意思ではなかった。孝江がなぜ突然、敏夫の部屋をそこに移したのか、子供だった静信にもすぐに理解できた。以来ずっと感じ続けてきた一抹の罪悪感をこの夜も感じながら、静信はガラス窓を叩いた。床に坐り込んでいた敏夫は顔を上げ、軽く顎をしゃくって中を示す。

「——よう」

部屋は雑然として、敏夫の人生史をそのまま留めている。子供時代から一度も場所を移動しないベッド、勉強机。本棚の中身は参考書から医学書に、ローボードの中身は屈託のない収集品やレコードから洋酒の瓶へと変わったものの、変化は徐々に進行したので違和感はなかった。

「飲むか？」

敏夫は軽くグラスを示し、こればかりは、家を継ぐために戻ってきてから増えた家財である小さな冷蔵庫を開けた。静信の返事も待たず、ひとつ余分に出してあったグラスに氷を入れる。

「――それで？　どうした」

酒を注いで水を足す敏夫の声には、どこか何気なさを装っている風情が滲んでいた。静信は言い淀み、しばらくの間、言葉に困ってグラスを見ていた。敏夫はことさらのように平静な顔をして、およそ興味を持っているとも思えないテレビ番組に目をやりながら煙草をふかしていた。

「……なあ、村で何が起こっているんだ？」

「何が、って？」

「秀司さん、山入の三人、恵ちゃん、義一さん、ふきさん。――一夏の話にしては、死人が多すぎるとは思わないか？」

敏夫は素っ気ない声を出した。

「去年の夏には四人、死んでる。多すぎると言ってもたかだか三人のことだろう。夏は年寄りも体力が落ちる。持病を抱えた年寄りならなおさらだ。今年は例年より暑さも厳しいしな」

「そういうことを言ってるんじゃない」

昨年の夏、何人が死んだか、一昨年はどうだったか、他ならぬ僧侶の静信が知らないはずがない。

「たしかに、義五郎さんのように不調を抱えた老人が村にはいくらでもいる。義一さんのように寝たきりの老人だって少なくない。その老人が死ぬのは、例年のことなのかもしれない。だが、秀司さんのような働き盛りの人間が突然に死ぬことがどれだけある？事故ならともかく病死で？」

答える敏夫の声は必要以上に素っ気ない。

「秀司さんは成人病の危険年齢だ。悪性腫瘍、心不全、脳出血、あるいはいわゆるポックリ病、突然に死ぬことがないわけじゃない」

「じゃあ、恵ちゃんは？　――もちろん、若い者が急の病気で死ぬことがないわけじゃなかった。これまでだってあったし、これからだってあるだろう。けれどもそれがたかだか半月の間にこれだけの数、続いている。これは尋常のことなのか？

ふきさんだって、いつ何時、何があってもおかしくない年齢だった。本人もそれを自覚していて、墓地の整理を自発的にやっている。そのふきさんが、急病で死んだだけなら、これは本当によくあることだ。別におかしくも何ともない。——だが、そのほんの半月前には、息子が死んでいるんだ。働き盛りの健康な中年の男で、体力もあったし、特にこれと言って持病もなかった。それが突然死んで、その半月後には母親が急死する。どちらも病院にかかる間もなく、本当に突然に。これがよくあることなのか？」
「あり得ないことでもないだろう。息子が死んで、高齢の母親はガックリきたんだ」
「その息子が死ぬ前に、実の兄が死んでいても？」
静信は敏夫を見つめたが、敏夫はことさらのようにテレビを見守っている。
「村迫の秀正さんだって、いつ何があってもおかしくはない歳だった。秀正さんだけが突然死んだのなら、ぼくだって疑問には思わない。義五郎さんだってそうだし、三重子さんだってそうだ。だが三人が、——それも同じ集落に住んでいる三人が、一度に死んだんだぞ？　その直後には、働き盛りの甥が急死し、半月後には妹が死んでいる。全員が全員、医者にかかる間もなくて、どこが悪かったのか分からない、治療も療養もしないまま、いきなり結論が出ているんだ。そんなことが尋常の状態であるものなのか？」
敏夫の返答はない。自分の吸う煙草の煙を厭うようにして、ただ眉を顰めている。
「個別の死は、たしかに不審なところなんてない。老人が死ぬのはよくあることだし、

若い者が急死するのだってないことじゃない。どれかひとつ、あるいはふたつなら、そういうこともあるかもしれないと思えるんだ。けれども、それがこれだけの数、続いている。続いていることに意味はないのか？」
「どういう意味があるって言うんだ」
「……疫病じゃないのか」
静信の問いに、敏夫はテレビの画面から視線を外して静信を振り向いた。煙草を灰皿に押しつける。
「古風な言い方をする」
軽く笑って、テレビのボリュームを下げ、ローテーブルの下に積み上げてあった書類の束を持ち上げた。それをテーブルの上に載せる。
「たしかに、この夏は死人が多すぎた」
敏夫は書類の上で指を組む。
「老人が多いこと、連日の酷暑を考慮に入れても異常だ。ほぼ半月の間に、おれが知っているだけでも七人の人間が死んでいる。大川義五郎、村迫秀正、村迫三重子、後藤田秀司、清水恵、安森義一、後藤田ふき、——都合、七人だ」
静信は頷いた。
「昨年一年間に村で死人がどれだけ出たと思う？　おれが知っている人間だけで八人だ。

おれが死亡診断書を書いたのが五人、残る三人は転院させた溝辺町の病院から死亡の報告が上がってきている。その他にもおれの関知しない死者がいるだろうが、せいぜいが十人と少しというところだろう。全国的な平均よりも老人が多いぶん、少しだけ多い——それが昨年までの状態だった。にもかかわらずこの八月、たった半月で、すでに一年間に迫る勢いで死人が出ている。数のうえだけでも異常だよ。これは尋常のことじゃない」
「……ああ」
「人数だけの問題じゃない。秀司さんの死因は分からない。とりあえず額面は急性心不全ということになっているが、正直に言うなら死因不明だ。義五郎さんもそう、秀正さんもそう。恵ちゃん、ふきさん。五人の人間が唐突に死んで、その死因がよく分からない。三重子婆さんは、警察が持っていって解剖したが、やはり明解に死因を特定できたとは言い難い。疑問の余地がないのは、義一さんだけだと言っていい」
　敏夫は書類の束を軽く叩いた。
「これはどう考えても異常だ。しかも秀司さんは秀正さんの甥だ。ふきさんは秀司さんの母親だ。山入の三人は、家族同然に生活していた。不透明な死を迎えた六人のうち、他の死人となんの関係も持っていないのは恵ちゃんだけ、あとは全員、何らかの密接な関係で繋がれていた。この不透明な死には近しい人間に飛び火する傾向がある。たしか

に――伝染しているとしか思えない」

静信は深い息をついた。不安を不安のまま抱え込んでいるのは苦しい。明らかになったほうが安堵できるのは確実だが、そうやって明らかにされたものは村にとって最悪の代物だった。

「もしも伝染病だとしたら、おおごとになる」

村の人間関係は密接で、網の目のように入り組んでいる。下水道は完備されていると言うにはほど遠い。兼正の後押しもあって町から補助金が出され、合併槽の設置が推進されていたが、生活排水の何割かは依然として川に放出されている。上水道は通っていても、村人の多くは何らかの形で地下水を使っており、いったん山に入れば人は沢から飲料水を汲み上げる。だが、村を取り巻く山のあちこちには墓所が散在しているのだ。そこでは死者を未だに土葬にしている。

静信がこれを指摘すると、敏夫は軽く首を振った。

「伝染病だとすればな。――だが、まだ決まったわけじゃない」

「けれど」

「先走るな」敏夫は低く、ぴしゃりと言う。「予断は良くない。事が事だけに、妙な予断を抱くと、かえって実態の把握が遅れて大事になる可能性がある」

「ああ――そうだな、済まない」

「伝染病のように見えるが、たしかなこととは言えない。病名を特定できないんだ。少なくとも今のところ、症状が合致する伝染病は思い浮かばない。正体不明、というのが正直なところだ。伝染するのかもしれないし、しないのかもしれない。するとすればウイルス性のものなのか、細菌性のものなのか、これも五里霧中だ。寄生虫の可能性もあるし、あるいは集団中毒の可能性もある。分かるのは明らかに異常なことが起こっている、ということだけだ」

静信は頷いた。

「問題は何が起こっているのか、ということだ。どうしてこれだけの死者が出ているのか、そこをまず摑まないといけない」

敏夫は書類の束の中から、カルテを捜して抜き出した。

「恵ちゃんを往診したのが八月の十二日のことだ。恵ちゃんはその前日の十一日に倒れている。山狩りをして倒れているところを発見された、以来ずっと具合が悪かったようだから、十一日に発症したと考えてもいいんだと思う。それ以前には、特に不具合はなかった。少なくとも家族には具合が悪いようには見えなかったし、本人も不調を訴えてはいなかったんだ。これはおかしい、というので家族がおれを呼んだのが十二日の夜、そこからわずか三日で死亡している。発症してから四日だ。ところが恵ちゃんは、おれが診た時点では、どう見ても三日後に死亡するような重症患者には見えなかった」

「そう……」
「恵ちゃんは貧血以外に、これと言って悪いところはないように見えた。どうして突然、死ぬようなことになったのか、正直言って、おれには分からない」
敏夫は恵のカルテをテーブルの上に投げ出し、煙草に火を点けて煙を吐いた。
「伝染病の恐れがある、これはおれも否定しない。万が一、伝染病なら、おおごとになる可能性がある。だから調査をして実態を把握する必要があるんだが、これが難問だ」
「難問なのか?」
敏夫は頷いた。
「恵ちゃんを最初に見たとき、ひどく怠そうで、口を利くのも億劫、という様子だったが、本人はあまり不調を意識していないふうだった。実際、そうだろう。貧血以外にはこれと言って不具合がないんだからな。痛みや発熱、目に見える異常があれば、患者自身だっておかしいと思うし不安を抱く。だが、単に怠い、疲れやすいという程度では医者にかかる踏ん切りだってつかないだろう。あれがこの病気の初期症状だとしたら、厄介な話だ」
言わんとするところを了解して、静信は頷いた。
「ああ、そうか。なんとなく怠い、なんてことはよくあることだ。夏場なら特に。熱でもあるのだろうかと思って測ってみても、別段、熱はない、そういうことは本当によく

ある」

「そう。それですぐさま病院に駆け込む人間はいないし、こっちだってそれだけで来られちゃあ、たまらない」

「それを患者のほうも分かっているからなおさらだ。適当な原因を探す。風邪、前日の疲労、飲み過ぎ、あれのせいだろうか、と思いながら日常をこなそうとするだろう。それがさらに酷(ひど)くなれば、とりあえず横になっているだろうが、それでも医者にかかろうと思うかどうかは疑問だ」

「そういうことだ。患者はまだ不審を感じない。寝ていれば治るだろう、ぐらいに思っている。ところがこの病気は勝負が早い。本来なら迷っている時間はないんだ」

迷っているうちに死因不明の死体がひとつ現れる。敏夫が目にするのは、不透明な死体だけだ。経過を観察している暇も、検査をして原因を追究する暇も、治療方法を模索する暇もない。実際、そのようにして事態は進行してきた。もしも清水が恵を敏夫に診せていなければ、静信たちの目の前には「不可解な連続する急死」という現象以外、何ひとつ残らなかったはずだ。

「それはごくさりげなく始まる」敏夫は書類を無目的に掻(か)きまわす。「恵ちゃんは貧血で始まった。義五郎さん、秀正さんについては分からないが、三重子婆さんは二人の爺(じい)さんが死ぬほんの少し前に病院に来て、二人の具合が良くない、夏風邪だろうと言って

いた」
「秀司さんの時にも同じようなことを聞いたな。夏風邪かさもなければ夏負けだろうと思った、とふきさんが言っていた」
「おれも聞いたよ。夏風邪にしては熱がなかったと、ふきさんは言っていたし、三重子婆さんもそう言っていた。要は怠そうだ、食欲もなさそうだし、顔色も良くない。どこがどうとは言えないが、なんとなく調子が悪そうに見えた、ということだろう。ひょっとしたらやはりそれも貧血のせいだったのかもしれないし、あるいは、貧血以外の現れ方をすることもあるのかもしれない。いずれにしても、貧血をはじめとする些細な症状でそれは始まるんだ。そうして、数日のうちに急激に増悪する。劇的に、と言ってもいい」
「三重子さんは肝不全だな？」
「そう。山入の爺さん二人と秀司さん、恵ちゃんは不明。ふきさんはおそらく急性腎不全だ。腎不全から来る尿毒症、これが死因だと、おれは思っている。義一さんは除外できるかもしれないが、とりあえず嚥下性肺炎。おれの手持ちのカードはこれだけだ。七人も死んでいるというのに」
　静信は喉の奥で呻いた。敏夫は詳しいデータを得る必要があるが、初期のそれが引き起こす不具合はあまりに些細で、患者自身が危機感を抱かない。来院してもらわなけれ

ば、臨床例を集められない。だからと言って、役所なりを通じて危機感を煽れば、始まりがあまりに些細であるだけに、誰も彼もが病院に殺到してパニックになりかねない。
　静信の考えを読んだように、敏夫は呟いた。
「馬鹿正直に事態をアナウンスするのは、危険なだけで益がない。怠い、食欲がない、疲れやすい気がする、それだけで病院に来られちゃあ、病院は麻痺する。そればかりじゃない、もしも本当に伝染病だった場合、病院自体が汚染源になりかねない」
「だが放置はできないだろう？　とにかく、不調が起こった時点で病院に来てもらわないことには」
「手に負えんな」敏夫は溜息をついた。「罹患した患者には、たいしたことはないからといって軽く考えず、もっと重大視して来院してほしい。罹患していない患者には、いたずらに騒がずあまり神経質にならないでほしい。ところが、罹患しているかどうか、患者自身に分かるはずがない」
　静信は頷き、「けれども、とりあえず注意を促す必要はあると思う。体調を崩す者が多いので注意するよう、その程度の呼びかけはしておかないと」
「その結果、何が起こるかを考えるとウンザリするが、それしかないか。役場に協力してもらう必要があるな」敏夫は深い溜息をついた。「保健係の石田さんに相談して、役場を通じてそれとなく指導してもらう。とにかく、そこから取りかかるしかない」

2

　かつては独立した村であった外場は、現在では溝辺町の中に編成されている。その溝辺町には保健センターが置かれているが、外場における保健業務は役場——外場出張所の保健係が担っていた。各集落に係がいて、これを役場の保健係が取りまとめる。とは言え、担当者は石田がたった一人しかいない。そもそも石田は溝辺町の指導に従って、各集落の保健係を指導する、上意下達の立場でしかなかったし、専門の知識も何もない完全な事務屋だった。もしも万が一、大規模な伝染病が流行し始めた場合、もちろん石田一人の手に負えるものではない。
　八月二十三日の夜、静信と敏夫は石田を寺に呼び出し、事態の説明を行なった。石田は最初、半信半疑の様子だったが、敏夫の説明を受けるにつれて顔色を変えていった。
「昨年の夏には四人が死んでる。六月に二人、八月と九月に一人ずつ。正確に言うならそれだけの死者をおれが看取っている。八月の死者は心筋梗塞が原因だった。例年まあ、こんなものだな。これに対して、今年は一気に七。まだ八月は終わってないが、とりあえず今のところまでの死者を単純に比較しても昨年の一に対して今年は七、六人が余剰だということになる」

「余剰……」

敏夫は頷いた。

「言葉は悪いが、あって当然の死亡より明らかに多すぎるぶん、ということだな。もっとも、こういう場合には生の数字を取り上げて昨年より六人も多い、と騒ぐことには意味がない。統計学的な処理をしなければ、たしかなことは言えないわけだが、それでも六人となると異常な数であることは確実だろう」

そうですね、と石田は呆然とした様子で頷いた。

「この八月、村で何かが起こっているのは間違いない。それが異常な数の余剰死を招いている。外場というごく狭い場所で、しかもたったこれだけの期間に七。それも、そのうちの多くが突発的な内因死だ。ということになると、何らかの疾病の集団発生を疑うのは、決して不当ではないはずだ」

はい、と頷いて石田はハンカチで汗を拭った。異常に蒸す夜だった。空気は重く淀み、温い湿気が立ち込めている。石田の前に置かれたビールのグラスは、水滴をつけたまますっかり泡が消えていた。

「しかしながら、実際に何が起こっているのかという段になると、皆目、見当がつかない。今の段階で言えることは、それは些細な症状で始まり、たいした自覚症状もないうちに劇的に増悪して死に至る、ということだけだ。そして、それは近親者に飛び火する

傾向がある。少なくとも、拡大しているのはたしかだと思う」
石田は縋るような目で敏夫を見た。
「まだ伝染すると決まったもんじゃないわけですね？」
「確定的なことは言えないな。だが、希望的観測に縋って事態を舐めてかかると、万が一本当に伝染病だったときには取り返しがつかない。伝染病を想定して警戒しておいたほうがいいと思う」
「しかし、ですね」と、石田はハンカチを額に当てた。「うかつに伝染病だなんて言おうものなら……」
「問題はそれなんだ」
敏夫は息を吐いた。
「なにしろ結果が最悪だ。伝染するなんて噂が村の連中に広まればパニックになる。初期症状があまりにも些細でよくあるだけに、連中が冷静さを失ってしまえば、たちまち病院の業務は麻痺する。伝染病だと限ったものでもないが、もしもそうだった場合、病因も感染ルートも分かっていない状態で患者が病院に押し寄せてくれれば、迷惑なだけでなく危険だ。可能な限り伏せておきたいんだよ、できることなら」
石田は頷いた。外場は尾崎医院に依存している。人口わずか千三百十九人の山村に、ちゃんとした医院があること自体、希有なことだ。外場はこれまでずっとその恩恵に浴

してきたし、だからこそ尾崎医院への信頼感は大きい。村人の中には確実に、尾崎に紹介されたのでなければ別の病院にはかからない、という一種の仁義が浸透しており、だからこそ疫病の噂が立てば、村人のほとんどが尾崎医院に殺到することは間違いがなかった。
「でも……しかし、どうすれば」
目に見えて狼狽えた石田に、静信は説明する。
「石田さんのほうから、保健係を通じて通達を出すことはできませんか。とにかく、近頃、夏バテが多いので注意してほしい、というふうに」
「通達を出すのは簡単ですが」
「もしもバテているなと思ったら、素人判断をせずに病院にかかるように、と」
敏夫が頷く。
「そもそも夏場は、水分だけ摂って食が細る連中が多い。まだまだ残暑も厳しいことだし、とりあえず三度の食事はしっかり摂れ、ダイエットは控えるように言ってもらえないか。単に健康に注意しましょう、でもいい。そうやって本当に単なる不調がある程度予防されれば、それだけでも患者の篩い分けにかなり役に立つ」
「はい、ええ——そうですね」石田は陽に灼けた首筋を拭う。「しかし、それだけでいいんですか。感染が拡大するのを防ぐとか、何か具体策を講じないと」

「具体策を講じようにも、現在の段階では講じようがないんだよ。せいぜい、井戸水は飲むな、できれば山や畑に出るときには水筒を持参しろ、手洗いやうがいを励行しろ、というぐらいしか。あまりに仰々しく騒ぐと、それこそ藪をつついて蛇を出すことになる」

「はあ」

「そうやって、とにかくデータを収集するところから始めるしかない。村の連中は死体に手を出させてくれない。病理解剖なんてのはもってのほか、死後の血液採取にさえ難色を示す。死体になる前に病院に来てもらわないことには、村で何が起こっているのか把握することさえできないんだ」

「そう——そうですね」

「そうやってデータを集めて、これを取りまとめ、行政に動いてもらうしかない。実際に伝染病だということになるとおれたちだけの手に余ることは確実だ」

「今から県の保健所か町の保健センターのほうへ、それとなく報告を上げておいたほうがいいんじゃないですか」

「そうしてみてもいいが。とりあえず、病名が特定できなければ役所は動いちゃくれないよ。なにしろあの連中が言う『伝染病』は、伝染する病のことを指すんじゃない、既存の、法律やマニュアルに伝染病として書かれたもののことなんだ。よほどの事態にな

らなけりゃ、援助は期待できないだろう。連中だって手が出せないんだ。方便として、たとえば食中毒だの肝炎だのが流行っている、という報告を上げることも可能だが、役所から問い合わせを受ければ、おれだって虚偽の病名は答えられない」
「そ、それはたしかに、そうですね」
「とにかくデータを集めることだ。たしかに何かが伝染しているという証拠を取り揃えて、あとは兼正に頼んで動いてもらうしかない」
言って、敏夫は顔を蹙めた。
「とは言っても、先代ならともかく、あのおっさんにそれほどの期待をしていいものかどうか分からないが」
石田は思わず頷いた。兼正の先代、先々代はともに町長も経験した実力者だ。その先代が昨年死んで、今は息子が議会に入ってはいるものの、血気盛んだった先代に比べればいかにも頼りない。
「先代が生きていてくれれば良かったんですけどね」石田は呟いて、ふと、「そう言えば、兼正の先代も急死しているんですよね」
敏夫は突然、苦いものでも口に放り込まれたような、複雑な顔をした。
「そうだが——。いくら何でも、あれは関係ないだろう。去年の七月の話だろう、たしか。一年前のことだからな」

「そうですけど。まあ、なんとなく」
「とにかく、データを集めるためにも、まず患者に病院に来てもらわないことには」
「ええ、はい。分かります」
「とりあえず石田さん、夏——そうだな、七月からこちらの死亡者リストが見たい。おれが看取った以外にも、死人が出ているかもしれない。もしもいれば死亡診断書の写しがほしいんだが」
石田は頷いた。
「明日には、なんとか。遅くとも明後日までには用意します。動態調査はわたしの管轄なんですがね、取りまとめて定期的に一気にやることにしてるもんで」
「明後日でいい。ただし、明後日には必ず」
「承知しました」

3

敏夫が石田と会ったその翌日も、異常に蒸した。病院にやって来た患者の誰もが露骨にげんなりとしている。どうやら一雨来そうな気配だった。そんな中、門前の安森奈緒がやって来た。奈緒が診察室に入ってきた瞬間に、敏夫は一種の予感のようなものを感

じた。

どうしました、と敏夫は訊いたが、奈緒の顔色は明らかに悪かったし、いかにも気怠げな様子だった。同じく怠そうにしていても、暑さと湿気にぐったりしている患者とは確実に何かが違っていた。奈緒は返答するようにわずかに唇を動かしたものの、それさえも億劫そうにやめてしまう。

「どうした？　怠そうだな」

再び促しながら、敏夫は奈緒の手を取った。力無く、しかもひんやりとして感じられる。脈はやや速いが、頻脈というほどではない。間近から顔を覗き込むと、その目にはどこか憑かれたような印象がある。結膜が異様に青味を帯びているせいだ。

「とにかく怠くて……義母がどうしても病院に行けと言うので」

「そう。熱はないみたいだな。ということは、風邪ってわけでもなさそうだが。いつぐらいからそんなふうなんだい？」

「昨日……いえ、今朝です」

「どっちだい？」

「今朝、起きるとすごく怠かったんです。ゆうべは暑くて寝苦しかったし……。でも、義母は昨日から何度も大丈夫かって訊いてきました」

敏夫は首を傾けた。妙な言い方だ。

「奈緒さん自身は、昨日の時点じゃ、別に怠いとは思ってなかったのかい？」
「……分かりません。言われてみると怠いような気もしたと思いますけど。……なんだか、頭が重くて。ぼうっとしてるんです」
「そのようだな」敏夫は頷く。「息切れや動悸は？」
訊きながら脈を取る。少し脈が弱いのか、あまりはっきりと触知できない。
「いえ、はい、……よく分かりません」
「食欲は？」
ありません、という声は消え入るようだった。眼瞼を持ち上げて粘膜を見ると、色が薄い。爪の色も白く、念のために口を開けさせて口腔粘膜を確認すると、これも健康な赤味を失っていた。似ている——恵と。
「立ち眩みは」
「ええ、少し」
「生理は順調かな。今、生理中？」
はい、と奈緒は頷いた。
「そりゃ結構。ちょっと貧血が出てるようだな」敏夫は言い、そして言い添える。「念のために詳しく診ておこう。どこか他に辛いところは？」
「いえ……別に」

そう、と呟きながら、敏夫は奈緒に隣の診察室に行って着ているものを脱ぐように言う。看護婦の清美に身長と体重、脈拍と血圧、体温を測るよう指示した。

別の患者を診ている間に、清美が測定を終えていた。血圧はやや低く、脈拍はやや多い。わずかに微熱があるが、とりあえず異常なし。一見して、肌は健康な色味を失っているが、黄疸や特筆するような紫斑は見られない。爪や舌も正常、毛髪にも異常なし。

「ちょっと両膝を立てて。——特にトイレが近いとか、尿が出にくいとかあるかい」

「いえ……」

頷きながら、肝下縁に触れる。肝臓には異常が感じられない。

「色には異常はない？　茶色がかっているとか、赤味があるとか」

「……ないと思います」

奈緒の返答は、いかにも億劫そうだった。既往歴や生活歴、家族歴を訊きながら触診を行なう。特に脾臓が腫れている様子はない。頸部、腋下のリンパ節が若干、腫脹している。聴診器を当ててみても、心雑音や静脈雑音はない。——やはり単なる貧血に見えた。

「貧血だと思うんだけどね」敏夫は奈緒に服を着るよう言い、「ただ、身体の中で内出血が起こっていて貧血が出ることもあるんで、レントゲンを撮っておきたいんだが、いいかな？」

奈緒が頷いたので、清美に指示を出す。
「胸部と腹部のXP。あと、尿を採って血液検査。うちのぶんと検査に出すぶん。それと骨髄穿刺」
「骨髄穿刺ですか。胸骨で？」
清美は怪訝そうにした。
「うん。それから、末梢血と穿刺液の塗抹標本を採るから」釈然としない顔つきの清美を目線で抑え、敏夫は奈緒に笑いかける。「ちょっと骨髄液を採らせてもらうよ。少し痛むかもしれないけど、別に怖い検査じゃないから。とりあえず今日のところは検査してビタミン剤だけ出しておくんで、三日後にもう一度来て」
ただし、と敏夫は強く言い添えた。
「明日の朝になって、今日よりも身体が怠いとか、熱があるとか、具合が悪くなっているようだったら、明日も来るんだ。いいね？」
奈緒は頷いたが、その顔は淡々としていた。まるで他人事のような顔をしている。不安を感じていないふうなのが、むしろ気にかかった。清美に促されて処置室のほうへ向かう奈緒を見送り、やすよが小声をかけてくる。
「先生――何か難しいことでも？」
いや、と敏夫は肩を竦めた。

「難しいことなら、国立病院あたりを紹介するさ。ただ、念のためにな」
「でも」
やすよが言いかけたのを、手を振ってやめさせる。
「単なる風邪でも、単なる腎炎でもここまで警戒はしないさ。奈緒さんは貧血を起こしているように見える。それも『単なる貧血』だ。本当なら神経質になるようなことじゃない。――だが、恵ちゃんもそうだったんだ」
やすよは心得た顔で頷く。
「後悔はしたくないからな」
「そうですね」

「田中さん、済まないが頼まれてくれないかね」
田中良和は保健係の石田に拝まれて、瞬いた。石田は突然、七月に入ってからの死亡者が知りたい、と言う。人口動態調査の時期ではないし、今月の人口推計はとっくに終わっている。理由を訊いても言葉を濁すので釈然としないが、とりあえず田中は頷いた。
「死亡者の名簿を出して、死亡届のコピーを取ればいいんだね。内密で？」
「別に怪しげなことじゃない。気になることがあって調べてみたいだけなんで。大騒ぎするようなことじゃないから、こっそりやりたいだけなんだよ」

田中は頷き、昼休み、出張所の人々が出払った頃を見計らって死亡届の控えの綴りを引っぱり出した。
乾いた音を立てて、水滴が役場の窓を叩いた。午前中に蓄積した湿気が、ついに飽和量を超えて水滴となって落ちてきた——田中はそういう印象を受けた。大粒の雨が撒き散らされ、すぐに水桶の底を抜いたような驟雨に変わった。久々のまとまった雨になりそうだった。人の気配が絶えた役場の中は急速に翳っていく。
田中は綴りを抱えて自分の席に戻った。いちばん上に綴り込まれていたのは、清水隆司のものだった。田中はこの男を知らない。四十一歳、死亡診断書を出したのは、溝辺町の総合病院になっている。その前は後藤田ふきという老女のもの。その前は大塚康幸。
田中は思わず顔を甕めた。大塚製材の息子だ。弔組は別だが、すぐ近所の住人なので田中自身も葬儀に行った。
(そう言えば、今年は葬式が続く……)
大塚康幸の前にも、清水恵が死んでいる。大塚康幸の下、門前の老人の次に診断書が綴り込まれていたのが、恵のものだった。娘の幼馴染みで、ひとつ上、まだ高校一年生だった。清水一家の落胆ぶりも哀れだったが、友人を失った娘の嘆きようも酷かった。
その前には山入で人が死んだ、と大騒ぎしていた。老人が三人死んで——。
田中は綴りをめくる手を止めた。石田が調べたいことというのは、これだ、と思った。

そう、明らかに死人が多すぎる。
清水恵の前には中外場の青年、そして山入の老人三人。その前にも上外場の誰かが死んでいる。これも八月に入ってからのことだ。
（……こんなに？）
田中は戸籍や住民票の担当をしているが、実際のところ、手の空いた者が窓口に出て届けを受け取るし、その後の処理もする。外場出張所は小さい。総勢六人の組織だ。担当業務が決まっていても、実状はそんなもの、だから意識していなかった。だが、八月に入ってからの、この数は異常だ。
田中はどこか血の気の引くような気分で綴りを繰った。上外場の死人の前は、外場の老人、これは七月の三日。溝辺町の国立病院で食道癌のために死亡しており、その前になるともう五月の死者になる。
異常なことが起こっている。それも八月に入ってからだ。
田中は資料を取りまとめ、ロッカールームで昼食を摂っていた職員の中から石田を呼んだ。田中の血相に気づいたのか、石田は表情を強張らせて出てくる。
「石田さん、これ」
石田は礼を言ってコピーの束を受け取った。田中は引きつった表情で石田を見る。
「石田さん、何が起こってるんですか」田中は小声で言った。地響きを立てるような雨

音の中、遠雷が鳴った。「八月に入ってから、この村はどうかしてる。石田さんが調べたいことというのは、これですか」
「何人いました」
「十です」
石田は田中の硬い表情をまじまじと見返した。想像よりも、はるかに多い。
「田中さん、あんたの気持ちは分かります。けれども今の段階では、何とも言えない。とにかく、しかるべく手を打ってますから」
「しかし……」
石田は怯(おび)えた色を浮かべた田中の目を覗き込んだ。
「これはあんたの胸に畳んでおいてください。分かるでしょう？　これが外に漏れたら、えらいことになる。その代わり進展を知らせますから。頼まれついでに、今後、死亡届が出たら、その都度コピーを取ってわたしに廻してもらえませんか」
田中は息を呑(の)み下すようにして頷いた。

「あれ、降ってきたのかい」
長谷川(はせがわ)は店に入ってきた若い男の姿を見てそう声を上げた。
結城(ゆうき)は窓を振り返る。とは言え、クレオールの窓はひとつしかなく、そこにはステン

ドグラスが入っている。窓の外の景色が見える道理もないが、窓の外が暗い。叩きつけるような雨音がBGMの合間に聞こえていた。

「本格的な雨になりそうですよ」と、若い男は笑って、カウンターの脇に抱えてきたケースを置く。「これ、伝票です。他に何かありますか」

ちょっと待って、と長谷川は厨房に行ってメモ用紙を持ってくる。

「これを頼むよ。数は書いてあるから。今日は、三上くんは?」

「三上さん、辞めちゃったんですよ。急に引越すことになったとかで」

「へえ? 先週、来たときは何も言ってなかったのになあ」

若者は頷いた。

「そうなんです。本当に急で。突然、辞められてみんな困ってるんですよ、実は」

「だろうねえ」長谷川は言って、ガムの包みを投げた。「こんなものでも。帰り、運転に気をつけて」

どうも、と若者は白い歯を見せて店を出て行く。ドアを開け閉めする際、さらに強くなった雨音が流れ込んできた。

「えらく降ってますね」

結城が言うと、長谷川はケースに手をかけながら窓に目をやる。

「蒸しましたからねえ。これで少しは涼しくなるかな。やれやれだ」

「本当にそうなるといいんですけどね」広沢(ひろさわ)が苦笑した。「これまで雨のたびに肩すかしでしたからねえ」

広沢はカウンターで教科書とノートを開いている。八月も二十四日になった。新学期の準備をしているのだろう。その隣では、例によって書店の田代(たしろ)が遅い昼食を摂っている。

「本当に」と、長谷川は大仰に溜息(ためいき)をついた。「今年の夏はどうなってるんでしょうねえ。雨は少ない、暑さはきつい。熱中症って言うんですか？　溝辺町でも死人が出たそうで。ＪＡの倉庫で働いてた人が亡(な)くなったって、新聞に書いてありましたよ」

結城は思わず顔を蹙めた。死人、という言葉が妙に身に迫って聞こえた。つい一昨日、弔組で後藤田ふきの葬式に出たばかりだ。思えば、クレオールに最初に来たのも葬式の帰りだった。ふきの息子の葬儀――初めて参加した弔組。あのとき喪主席で身を竦めるようにして坐(すわ)っていた老婆(ろうば)は半月を経て息子の近くに埋葬された。

結城は軽く溜息をついた。

「なんだか……死人が多いんですね」結城が言うと、長谷川も広沢も、そして田代も結城を見た。「こんなもんなんですか」

結城が以前住んでいた街では、これだけの短期間に死亡が続くなどということはなかった。わずか半月の間に、後藤田秀司、ふき、清水恵と三軒の葬式に結城は参加してい

る。しかも山入の事件がある。亡くなったのは山入に住む老人で、結城とも結城の所属する弔組とも関係はなかったが、後藤田ふきの実兄が死んだと聞いている。半月に四軒、六人の死者は多すぎはしないだろうか。ましてや人口を考えると、これは尋常のことではないように思われた。

「こんなもの、ということはありませんが」広沢は苦笑した。「ただ、続くこと、というのはありますね、基本的に老人が多いですから。気候の変わり目にバタバタと死人が続くというのは、よくあることです」

おまけに、と長谷川が笑った。

「ここは人口が少なくて、住人の関係が密なぶん、どこかの誰それが死んだって話もあっという間に伝わりますからね。弔組もありますし。隣で葬式が出ているけど誰が死んだんだろうか、なんてことはない。都会じゃ、そういうもんでしたけど」

「ああ、たしかに」

「だからまあ、死人が多いような気がするんですけどね。実際、人口に対する割合から言ったら多いんじゃないですか。年寄りばっかりですからね」

広沢も頷いた。

「不思議に、死に事というのは続きますね。一度、弔組で出かけると、しばらく弔組の用で出てばかりいる、ということがありますから。それがやむと、しばらく何もなくて、

いずれまた続く。何かこう——波のようなものがあって」
たしかに、と長谷川も田代も同意した。
「偏り(かたよ)があるんだよね」田代は盛んに頷いている。「ある時期に、弔組の用が続いて、こっちは走りまわってるのに、よその組じゃまったくの平穏無事ってことがあるからね」
「へえ?」
長谷川は笑う。
「現にほら、わたしはこのところ弔組には御無沙汰(ぶさた)です。そもそも、わたしが弔組に参加したのって、まだ一度だけですからね。外場に越してきて以来」
「そうなんですか」
「越してきたばかりのころ、一度あっただけです。越してくる前に女房の親父(おやじ)が死んで、それを含めても二度ですよ。これは別に弔組に参加したわけじゃないですしね。弔組に関しちゃ、結城さんのほうが経験豊富になっちゃいましたね」
そんなものか、と結城は思う。広沢がやんわりと微笑(ほほえ)んだ。
「わたしも、弔組は久々です。秀司くんの件で出かけたのが、五年ぶりになりますね。その前は自分の母親の葬儀でしたから。あのときも続いてね。さすがに半月というのは珍しいですけど、一月(ひとつき)ほどの間に二軒ぐらい続いたんじゃなかったかな。続くな、と思っていたらその次が自分の母親の番でね。これは引かれたな、と思ったもんです」

「引かれた?」

広沢は頷く。

「母親の前に死んだのが、母親と仲の良かった人だったので。これは寂しがって母親を呼んだんだな、というふうに思いました。あの世へ引っぱっていった……」

「ああ、それで『引く』ですか」

「迷信なんですけどね。ただ、本当に不祝儀というのは不思議に続くものですから。馬鹿馬鹿しいようで、それなりに説得力を感じますね。理屈ではない、皮膚感覚として」

長谷川はどこか感じ入ったふうに言う。

「秀司さんが残された母親を憐れんで、引いていったのかねえ」

広沢は苦笑する。

「そんなはずはない、と頭では分かっているんですけどね。村迫の秀正さんが、可愛い甥を引いていって、引かれた秀司さんが残された母親を引く。——そういうふうに表現すると、なんとなく説明がついたような気分になりますね。釈然とする、というか」

実際にそうだったので、結城は無言で頷いた。同時に、不可解なものだ、と思う。死は普遍的な現象だ。生まれた以上、死なない人間はいない。人の死は当然のことなのに、周辺の人間の死に対して、起こるべきことが起こった、と感じることはほとんどない。むしろ逆だ。起こるべきでないことが起こったという感触を抱く。それが続く。

起こるべきでないことがまた起こったという、まるで災厄にでも遭遇したかのような感覚。常には意識することのない何者かが、理不尽な現実を捏造し自分に対して突きつけてきたような、不快感とも畏怖とも不安ともつかない不可解な情動。こんなことが起こり得るのか、という感慨と、また続いたらどうしようという不安、それが事実になったときの、やはりという原初的な畏怖。そうとはっきり分かるほど明瞭な感情ではないのだけれども、振り返って言葉にすると、そう表現することになるのだろう。

偶然の仕業だと分かっていても、何かの選択が働いているとしか思えない。自分の外部に歴然として存在する「死」というもの。支配することも関与することもかなわない無情の摂理。それに対する曖昧模糊とした不安は、「引く」という言葉に出会って解消される。――不思議にも。

「人間というのは、妙な生き物ですね」

結城は呟いた。怪訝そうに首を傾げる広沢らに、結城は微笑む。

「人間にとっての死というものは、と言ってもいいのですが。死というものに対して人間は奇妙な振る舞いをするものだな、という気がして」

そうですね、と広沢は穏和な笑みを見せた。

夕刻になっても雨はやまない。それどころか次第に強まり、豪雨の様相を呈してきた。

厚い雲と雨の幕で五時前だというのに、すでに暗い。高見は腰を上げて電灯を点けた。戸口から外を窺っても、道の向かい側の家並みでさえ霞んでいた。道の表面を水流が洗っていく。さすがに人通りも絶えて、駐在所は雨の中に孤立しているようだった。

地を揺るがすような雨音が響いている。どこか不安を煽るような音だった。切れかけた蛍光灯が、それに拍車をかけるように短く瞬く。不吉な予兆のように電話が鳴った。

高見は古色蒼然とした黒い受話器を取る。電話してきたのは、安森徳次郎だった。

「ああ——高見さん。酷い降りだね」

「まったくです。どうしました」

「いや、さっき川を見てきたんだが、かなり増水してるんだよ。水の色も泥の色でなあ。相当土が洗い流されてるらしい。それでなくても連日の日照りで草の根も干上がってるんで、あちこち斜面が脆くなってる。このまま雨が続くと万が一ってこともあるから、消防団に召集をかけようかと思うんだが」

高見は頷いた。

「それがいいでしょうね。わたしが詰め所を開けときますから」

消防団の詰め所は駐在所のすぐ隣にある。こういう時のために、高見が合い鍵を預かっていた。

「渓流の土手は滅多なことで切れるようなことはないと思うんだけどね。ただ、下の川

や排水路があふれるってこともあるからな」
「ええ。あとは山際ですな。土砂崩れなんてことがなきゃいいんだが」
「まったくだ。ちょっと区長会から気をつけろって連絡を廻すよう頼んでおこう」
徳次郎は二、三の申し伝えをして、電話を切った。高見は詰め所の合い鍵を持ち、合羽を着込んで表に出る。傘は持つ気にもなれなかった。こりゃあ酷い、とひとりごちながら、高見は詰め所の錠を外す。明かりを点けておいた。おっつけ、手の空いた者から順に団員が集まってくるだろう。駐在所に戻り、妻に炊き出しの手伝いをするよう言わねば、と思いながら、高見は詰め所を出る。戻りかけてふと足を止めた。水は長靴の甲を洗おうかという按配だ。徳次郎の心配は杞憂とは言えない。下手をすれば本当に斜面が崩れる恐れがある。
高見は西山のほうを仰いだ。雨の幕に覆われて、もちろん山は見えない。
「……まずいかもなあ」
高見はひとりごちる。兼正の家のことを思った。そもそも高台の家、しかも昨年、建物を普請して土台を弄っている。鬱蒼とした庭木も整理された。つまりは根が掘り上げられ、地面が均されたということだ。徳次郎は注意を廻すと言っていたが、あの家に連絡を廻す者がいるだろうか。
高見は少し迷った。本来なら転居者があれば戸別訪問をしなければならない。家族構

成や電話番号を訊いて台帳に控えておかねばならないのだが、高見はそれを今日まで怠っていた。家の佇まいが部外者を拒絶しているふうで気後れがしたせいもある。二度ほど訪ねたのに、インターフォンに応答がなかったせいもある。そもそもこの夏、家に転居者がいるかどうかを確かめたくて忍び込んだ、それが後ろめたかったのもあった。機会を逃してそのままずるずると今日に至っている。だが、高見でさえその有様なら、電話で連絡しようにも電話番号を知る者はいないかもしれない。それでなくても増水や土砂崩れが心配されるときに、兼正のことを思い出す者がいるだろうか。この雨の中、わざわざ知らせに行く者がいるだろうか。

「行かにゃならんな、こりゃ」

高見は気を奮い立たせて足を西のほうへ向けた。激しい雨足に肩を背中を叩かれながら、浅瀬と化した道を急ぐ。誰かが連絡をしたほうがいい。たとえ二重になっても、悪いということはないだろう。

高見が出かけたあと、詰め所は無人で残された。周囲は墨色に滲んでいる。そこにぽっかりと詰め所の戸口が開いて、黄味を帯びた明かりが漏れていた。

4

その夜、敏夫は石田から、早急に会いたいと切羽詰まった声で連絡を受けた。病院の外は文字通りの土砂降り、診察室に入ってきた古老たちは、一様に増水や土砂崩れを心配していた。

診察を終えて夕飯を搔き込んでいると、溝辺町へと法事に出ていた静信が敏夫を迎えに来た。ワイパーを無用の長物にするほどの雨の中を寺に戻ると、石田はすでに到着して応接用の座敷で静信と敏夫を待っていた。

石田は硬い表情で書類の綴りを差し出した。

「十です」

「――十？　待ってくれ。そんなに？」

敏夫は愕然とし、書類を引ったくるようにして手に取った。

「秀司さん、義五郎さん、秀正さん、三重子さん。それから八月十一日、広沢高俊、急性心不全――誰だ、これは？」

静信は首を傾げた。少なくとも静信には聞き覚えのない名前だった。葬儀を依頼された覚えもないから檀家ではない。住所は中外場、年齢は二十八歳。石田も知らないのか、首を横に振っていた。

「狭いようで広いな、この村も。八月十五日、清水恵。それから丸安製材の義一さん」

敏夫は一人頷く。

「八月十八日、大塚康幸——これは大塚製材の息子じゃないのか？」
「そうです。あそこの長男で」
「そうか、あそこはたしか、どこかの新興宗教に入ったんだよな」
静信は頷く。大塚製材は、もともとは檀家だったが、今では縁が切れていると記憶していた。
「三十五歳か。消化管出血による失血死、とあるな。これは国立が看取ってる。急性肝不全から来る消化管出血だ。そして二十一日、後藤田ふき、昨日にも死人が出てるな。清水隆司——これは？」
「まさか、清水園芸の？」
静信が問うと、石田は頷いた。
「そうです。外場の上のほうにある清水園芸、あそこの長男ですよ」
「檀家か？」
敏夫の問いに、静信は首を振った。
「いや、檀家じゃないのだけど、清水園芸は庭木の手入れに入ってもらうことがあるから。大将が雅司さんといって、もう還暦を過ぎてるんじゃないかな。うちに来るのは大将のほうで、息子さんはたしか勤め人だけれども、何度か親父さんの手伝いで来たことがあったと思う。その隆司さんだろう」

「四十一歳か。溝辺町の病院で死んでるな。急性心不全だ。心不全で倒れて病院に運び込まれて——蘇生術でいったん、持ち堪えているが、その後に期外収縮で再び心停止、蘇生術を試みるも蘇生しなかった。昨日の早朝、午前四時に死亡」

そう、と静信は呟く。知人が自分の知らない間に死んでいたという、言葉では表すことのできない寂寞感。

「その前は七月三日。これはたぶん関係ないな。始まったのは秀司さん——いや、山入の三人からか」

石田は敏夫に縋るような目を向けた。

「やはり伝染病でしょうか」

さあな、と言って、敏夫はメモ書きをしていく。

大川義五郎——（八月一日？）

七十七歳／山入

死因不明

村迫　秀正——（八月一日？）

七十五歳／山入

死因不明

村迫三重子——八月五日

六十八歳／山入
急性肝不全？

後藤田秀司――八月六日
三十九歳／上外場
死因不明

広沢　高俊――八月十一日
二十八歳／中外場
急性心不全

清水　恵　――八月十五日
十五歳／下外場
死因不明

安森　義一――八月十七日
七十四歳／門前
肺炎

大塚　康幸――八月十八日
三十五歳／下外場
急性肝不全

後藤田ふき――八月二十一日
六十七歳／上外場
急性腎不全？
清水　隆司――八月二十三日
四十一歳／外場
急性心不全

静信はメモを覗き込んだ。
「義一さんを除いては、原因不明かまたは急性不全、ということにならないか？」
「そう言ってもいいだろうな。誰もが突発的な臓器不全にみまわれて急死していると表現できる。唯一、義一さんだけは例外のように見えるが、ただ……」と、敏夫は眉根を寄せてメモに見入った。「臓器不全と言うのは、要は臓器の機能が著しく損なわれて本来の使命を全うできなくなった、という状態を指す言葉だ。ひとつの臓器だけに単発することは滅多にない。得てしてひとつの臓器の機能低下が他の臓器にも影響を与えて、多臓器的に発展する。全身的な症状として現れてくるのがほとんどだ。死亡原因はひとつでも、実際の症状は多臓器的であった可能性が高い。実際、三重子婆さんがそうだった」
ああ、と静信は頷く。解剖された三重子はあちこちに不具合が発見されている。肝不

全ということになっているが、これは肝臓の壊死が顕著だったからだ。
「易感染もそのひとつだ。生体の防衛機能が下がって感染症に罹りやすくなる。義一さんの肺炎は、その一環として見ることができなくもないから、単純に死因だけでこれは別物だと切り分けるわけにはいかないな。疑問符つきとは言え、一連の死に含めて勘定したほうがいいだろう」
静信は頷いた。
「症状として共通するのは——急性の発症、臓器不全、全身の不具合？」
「経過を観察したわけじゃないから何とも言えないが、これを見る限り、最終的に多臓器不全に至る、という言い方はできると思う。肝臓を壊しているのでも心臓を壊しているのでもない、何らかの原因があって、それが最終的に多臓器不全を引き起こしている、という印象だな」
石田が首を傾げると、敏夫は息を吐く。
「つまり、こういうことだ。これが感染症かあるいは中毒か、もっと別のものかは分からない。いずれにしても、犯人がいて、十人の人間を殺害した、と考えられる。三重子婆さんは肝不全で死んでいる。だがこれは、この連続殺人犯が肝臓を攻撃したせいだとは言い切れない。殺人犯はもっと別の部位を攻撃したのかもしれないいんだ。
実際のところ、三重子婆さんの解剖結果を見ると、肝臓はもちろん、肺、心臓、腎臓

の重要臓器のすべてに不具合が見られる。殺人犯が最初に攻撃したのは肺だったのかもしれない。他の臓器は機能低下を起こした肺に引きずられる形で悪くなって、最終的に、肝臓がまず陥落した、という解釈もできるんだ」
「ああ、なるほど」
「何かが十人の人間を攻撃した。それが引き金となって全身の機能が損なわれ、多臓器的に機能不全を起こしたと考えたほうがいいだろうな。問題は、何が多臓器不全を引き起こしたのか、ということになるわけだが――」
「大変なことですよ、これは」石田は頭を抱える。「とんでもないことだ」
「死亡例が十で、そのどれもが本質的には同一のものである可能性がある。まず、必要なのは共通項を探すことだな」
「共通項？」
「そうだ。死んだ十人には何か共通するものがあるはずだ。同じ場所に足を踏み入れたことがある、どこかで接触している、同じものを口にしている、――何かが」
　静信はメモ書きを見た。年齢はバラバラ、最初の三件だけは山入に集中しているものの、場所もバラバラだし、特にこれと言う偏り(かたよ)はないように見える。そう言うと、敏夫もこれに頷いた。
「男が七で女が三、これも偏りと言うにはまだ弱いな。年寄りもいるが高校生もいる。

地域的にも外場の全域に及んでいると言っていい。最初の三人の行動範囲は、かなりのところ山入に限定されていただろうが、恵ちゃんが山入に足を踏み入れていたとは思えない。ましてや義一さんは寝たきりだ。むしろ、他の九人が門前に足を踏み入れていたと考えたほうが順当だが、門前に何か原因になるものがあるのだとしたら、門前での死亡が一例だけというのは解せない。もっと門前の死亡が多くてしかるべきだ」

石田は唸った。

「これは一軒一軒、当たってみるしかありませんね。わたしが——」

「それはまずい」敏夫は石田を留めた。「石田さんが出て行って根ほり葉ほり訊けば、家族は何事かと思うだろう。もっと穏便にそれとなく調べる方法はないかな」

「とりあえず」と、静信はメモを敏夫から受け取った。「ぼくが訊ける限りのことを聞いてみるよ。どうせほとんどの家には法事で出入りすることになるわけだし。清水園芸と大塚製材も縁がないわけじゃないから、話を聞くぐらいのことはできるだろう。この、広沢高俊という人も、檀家のつてでなんとかなるかもしれない」

敏夫は息を吐いた。

「いかにも怪しげだが、それがいちばん穏当だな。じゃあ、そのへんは静信に任す」

静信は頷いた。

「とりあえず、最悪の事態を想定して伝染病を疑う。とすると、ふきさんは秀司さんが

原因だろう。直接にしろ間接にしろ、秀司さんが汚染源だと思って間違いがない。問題は秀司さんだが、秀正さんから、というのがいちばん疑わしい。おそらくは山入の三人の誰かが最初の一人、指針症例なんだ」

静信は頷き、メモを取る。

「恵ちゃんが倒れたのが八月十一日、死亡したのは十五日だ。十日の様子は分からないが、とりあえず発症が十一日だと考えると死亡までに四日」

「ふきさんは、秀司さんの様子が二、三日前からおかしかったと言っていた」

「発症日は明らかじゃないが、やはり恵ちゃんと似たり寄ったりだな。村迫の三重子さんは、七月の末――」敏夫は手帳に目を落とす。「七月三十日の土曜、義五郎さんの薬を取りに病院にやって来た。そのときに義五郎さんが夏風邪を引いて、それが秀正さんにも移ったようだ、と言っていた。警察の検屍（けんし）では義五郎さんと秀正さんの死亡推定日は八月一日前後だ。秀正さんが発症したのが不調が伝えられた三十日の前日、二十九日だと考えると、死亡までに三日」

清水　恵　――発症・八月十一日（？）
　　　　　　死亡・八月十五日
後藤田秀司――発症・八月三日（？）
　　　　　　死亡・八月六日

大川義五郎——発症・七月二十八日（？）
　　　　　　死亡・八月一日（？）
村迫　秀正——発症・七月二十九日（？）
　　　　　死亡・八月一日（？）

「いずれも、発症から死亡まで数日以内。仮に幅を取って五日以内とすると、ふきさんの死体が発見されたのが二十一日——死亡はたぶん前日の二十日だから、発症したのは十五日以降だ」

静信は頷く。

後藤田ふき——発症・八月十五日（？）
　　　　　死亡・八月二十日

「ふきさんはおそらく、秀司さんから移ったのだと思う。秀司さんの死亡が六日で発症は推定で三日だ。秀司さんが発症してから、ふきさんが発症するまでの間隔は十二日。秀司さんが死亡した時点から起算すると、九日ということになる。幅を取っても一週間から二週間、これが潜伏期間だということになるわけだ。恵ちゃんの発症が十一日、すると、恵ちゃんは八月四日から七月二十九日頃に感染している。これはちょうど山入の三人の発症・死亡時期に重なる。直接感染なら恵ちゃんはこの時期に山入の三人に接触したはずなんだが——ないだろうな、普通」

静信も石田も頷いた。下外場に住む高校生が、山入に住む老人と接触した可能性は、どう考えても低いだろう。

「いかにもなさそうなだけに、どこかで接触したことがはっきりすれば、直接感染することが確実になるとも言えるわけだが。三重子婆さんの死亡が八月四日。三十日に病院に来たとき、自分の不調については何も言ってなかったところからしても、発症はそれ以降、三十一日か八月の一日あたりで間違いないだろう」

村迫三重子――発症・七月三十一日（？）
　　死亡・八月五日

「すると、感染は七月十七日から二十四日頃で、秀正さんから感染したと考えるには時期的にやや無理がある。むしろ、義五郎爺さん、秀正さんと相前後して感染したと考えるのが妥当だろう」

「七月の半ば過ぎに何かがあったんだな。それもたぶん、山入で」

「だろう。その時期にどこかに出かけたのでなければ、汚染源は山入にあるんだ。問題は秀司さんだが」

「山入の三人か、あるいは山入そのもの」

「ということだろうな。丸安の義一さんは、同じ病気かどうかはっきりしないが、もしも同じやつだとすれば、感染時期は恵ちゃんと大同小異だ。ただし義一さんは寝たきり

で、自分から出かけることはできなかった。今のところ、丸安製材で具合の悪い者はいないようだから、感染したとすれば見舞客が怪しい。義一さんのところに七月の末、誰か見舞客がなかったか――それも、山入関係者で」
「訊いてみる」静信はメモにそれを書き添えた。「――他には？」
「安森工務店だな。今日、工務店の奈緒さんが診察を受けに来た。うちで出来るかぎりの検査をしたが、明らかな貧血だ。それ以外にこれと言った不具合はない。似てるんだよ、恵ちゃんと」
静信は手を止めて敏夫の顔を見る。
「まさか――？」
「断言はできないが、可能性としては大だ。今日が二十四日だから、もしも奈緒さんが感染したんだとしたら、八月の十日から十七日だ。義一さんの死亡にちょうど重なる」
安森工務店は丸安製材の分家だ。義一は、安森工業の社長である徳次郎の兄にあたる。仕事の上でも付き合いが深く、家も近いので関係は密だ。
「奈緒さん自身に訊いたところによると、その頃、特にどこかに行ったとか、特に何かがあったということはない。山入には行ってないし、山入の三人にも会っていない。後藤田の秀司さんとは面識がない。名前を聞いたことがある、という程度だ。ただ、製材所に行ったついでに義一さんの様子を見舞って、ということは何度かあったらしい。も

ちろん、通夜にも葬儀にも出ている。もしも奈緒さんが例のやつなら、義一さんも例のやつだったと思って間違いないだろう」
　石田は深い息を吐いて頭を振る。
「じゃあ、とにかくそのあたりの調査は若御院の御厚意に甘えることにして……あとは具体的には何を？」
　敏夫は小さく唸った。
「とにかく、情報が少なすぎるんだ。まず、何が起こっているのか確実なところを掴むことが急務だろう。具体的に言えば、最優先の課題は死亡原因の特定だ。病名の特定、あるいは病因の特定。何が原因でこれだけの死者が出ているのか、それはどういう性質のもので、本当に伝染するのかどうかを明らかにする必要がある。そのために必要なのは臨床例なんだ。今のように、すべてが終わって訃報だけが飛び込んでくるようでは、死因の特定も満足にできない」
　静信は呟く。
「けれども、不安に駆られた患者が大挙して病院に押し寄せてくるような事態は避けたい……」
「そう。そのへんがジレンマだ。ネックは初期症状が軽微で見落とされやすいことなんだ。これは石田さんのほうから注意を促して、夏風邪だ、夏バテだと素人判断をせずに

病院にかかるように、と呼びかけてもらうしかない」
　石田は頷く。
「とにかく、大至急、チラシを作ります。夏風邪の症状や、夏バテの症状を知らせて、その場合の対処の仕方を告知してはどうかと思うんですが、いかがでしょう」
「そうしてくれるとありがたいな。夏風邪や夏バテの見極め方と、家庭内でどう対応すればいいかを告知して、症状が合致しない、あるいは対処したのに効果がない場合は、病院にかかるようにと呼びかける」
「そうします。これは早急に」
「頼む。それから、おれ以外の医者が出した死亡診断書が役場に届いたら、即座に知らせてほしい」
「死亡診断書をコピーしてお届けします。ファックスは避けたほうがいいでしょうね？」
「そうだな。そのほうがいいだろう。御足労だが、直接頼む」
「承知しました」
「それらの死亡者については、静信に調査を頼む。あとで調査項目を知らせるから。事情を言うわけにはいかないから、それとなく聞ける範囲内でもやむを得ない。どうせ本人がすでに死んでいるわけだから調べようにも限界があるしな。むしろ、あまり事を荒

立てたくない」
静信は頷いて敏夫を見た。
「溝辺町や保健所には？」
「問題はそれだ。どうしたもんかな」
「伏せておくわけにもいかないだろう？　死亡者数は出張所から役所に上がってるんでしょう、石田さん」
敏夫は息を吐いた。
「八月分はまだですが、当然、上げることになります」
「とりあえず、保健所に報告する義務のあるようなことは起こってないわけだが。死亡が多いことは報告する必要があるだろうな」
石田は頷く。
「何らかの疾病が集団発生している可能性があることを報告します」
「相手が信用してくれるか、問題視して対応に乗り出してくれるかどうかは疑問だがな。さしあたりこれまでの経過を取りまとめて知らせる。あとはこまめに経過を報告することだな」
「一週間ごとでいいですか？」
「いいだろう。あとは、それとなく兼正に話を繋いでおいたほうがいいだろう。これは

おれから連絡しておく」
「田茂（たも）は？」と、静信は訊いた。田茂定市（さだいち）は実質上の村長であると言っていい。本来的には、三役を召集すべき事態だ。「定市さんにも知らせておく必要があるんじゃないだろうか」
敏夫は考え込む。
「まだ伏せておこう、定市さんには悪いが。なにしろ疑惑だけがあって、何ひとつ確定しているわけじゃないからな。定市さんのほうから問いかけがあれば、実状を報告しないわけにはいかないが、そうでなければ、せめて伝染病かどうかが確定してからのほうがいいだろう。あの人もこれを知れば、区長会に報告しないわけにはいかなくなるからな」
そうですね、と石田が頷いてメモを取っていた手帳を閉じた。
「では、当面はこの線で」

5

敏夫は石田と連れだって庫裡（くり）を出た。境内は文字通り滝のような雨に洗われている。ただでさえ乏しい外灯が水煙で滲（にじ）んで、境内はいっそう暗かった。

石田の車で病院まで送ってもらうことにし、敏夫はほとんど用をなさない傘をさしかけて境内を小走りに横切った。足許は水たまりのない場所を探すほうが難しい。白いカローラに乗り込んだときには、すでに膝から下がずぶ濡れになっていた。

運転席に石田が滑り込み、ドアを閉める。とたんに雨音が少し間遠になって、車の中には密室に特有の静けさが訪れた。

「……石田さん、相談があるんだが」

はい、と石田はエンジンをかけ、敏夫のほうを見る。

「この件、しばらく伏せておいてもらえないか」

「ええ、それは、もちろん」

敏夫は湿気で曇ったフロントガラスの向こう、境内の闇と雨を見つめながら言う。

「そういう意味じゃない。しばらく、上には報告しないでもらいたいんだ。おれが良いと言うまで、外場の外には出さないでもらいたい」

でも、と言いかけた石田を制して、敏夫はとりあえず車を出すよう促した。尾崎医院の前までほんの少しの道程、それを無言で通し、着いたところで口を開いた。夜の駐車場、周囲は見通しの利かない雨の幕、車の中は完全に外界から隔絶されている。

「……石田さん。実を言えば、おれはこれを疫病だと思っている。おそらく間違いないだろう。それも尋常のやつじゃない。調べても調べても、症状に合致する伝染病が出て

こないんだ」

「まさか、新種の？」

「新種なのか変異種なのか分からない。ひょっとしたら、単にそう見えるだけかもしれないが。いずれにしても確実なのは、こいつはとんでもない代物（しろもの）である可能性がある、ということだ。目に見える被害者だけを見ていると、こいつは恐ろしく致死率が高い。もちろん、不顕性感染ということもある。発症したが誰も気づかないうちに治癒してしまった、ということがね。だがそうでない場合、急激に悪化して対処のしようもないほど即座に死亡する。しかも死亡診断書を見る限り、周囲が発症に気づいた段階では、すでに打つ手がないに等しいんだ」

石田は、こくりと喉（のど）を鳴らした。

「感染したら必ず発症するものかどうかは分からない。だが、発症したら手がつけられない、という印象を、おれは抱いている。それが山入から始まって、外場を汚染している。こうしている間にも広がっている」

「は……はい、ええ」

「これを行政に訴える。すると何が起こると思う？」

「何がって……」

「これが結局のところ、知られている伝染病だっていうんなら怖くないんだ。おれにだ

って報告の義務がある。黙っているわけにはいかない。しかしこれが、さっきも言ったように新種の何かだったら？　その場合、行政に何かできるのかい」
　石田は喉の奥で唸った。
「……できません。伝染病予防法に定められた伝染病か、食品衛生法に定められた食中毒でない限り、対応の拠り所になるものがないです」
「その通りだ。こいつの場合、食中毒はない。伝染病予防法に定められた伝染病は？」
「ええと……」
「法定伝染病十一種、指定伝染病二種、届け出伝染病十二種、寄生虫病予防法、結核予防法、らい予防法によるもの各一種、性病予防法によるもの四種で計三十二種。さらにサーベイランス事業の対象となる感染症のうち、三十二種と重複しないもの。――この中に含まれていれば問題ないんだ。たとえ変異種であろうとな。しかし、もしもそうでなかったら？　行政には手出しのしようがない」
「はい……」
　石田は震えた。その通りだ。法的な拠り所がなければ患者を隔離することすらできない。本人の意向を無視して医者と役所の独断で身柄を拘束することはできないのだ。
「そこをゴリ押しして救済を求めるには、兼正の息子は頼りない。あんたの言う通りだ。先代が生きていてくれりゃ良かったんだがな。これが外に漏れても行政の援助は期待で

きない。それだけじゃない。もしも、新種の疫病だったとして、しかもそれが直接伝播するということになったら、何が起こると思う？」
「……分かりません」
「エボラを見ても分かるだろう。封じ込めだよ。得体の知れない伝染病が外場で流行っていると漏れる。するととにかくまず、打つ手としては封じ込めしかないんだ。外場を隔離して、患者の流出を防ごうとする。それも法的な根拠がなければ、陰湿な形にならざるを得ない。行政と医師会が結託して、水面下で外場を隔離するように動く。そうなるしかないんだ」
「はい、ええ」
「たしかに、それで流行の拡大は防げるかもしれない。特にこいつのように致死率の高い伝染病に封じ込めは有効だ。だが、それでは外場は救われないんだよ、石田さん。火事の時に消防車を出さずに見守って、自然鎮火に任せるに等しい。燃え草がなくなれば自然鎮火するかもしれないが、そうすれば外場はどうなる？」
石田は頷いた。
「おれは事態を揉み消したいわけじゃない。もしも法定伝染病ならおれには報告の義務があるし、もちろんそうと確定した時点で報告をするさ。直接伝播ではないことが確認されて、だから外場を封じ込めても意味がないんだと訴えられるようであれば、行政を

突き上げる。だが、本当に汚染源が山入で、これがまだ外場にしかない伝染病で、直接伝播するということになれば、デリケートな取り扱いを要する」
「若先生の言うことは分かります。分かりますが……」
「本当に直接伝播するなら、おれだって対応策は考えるさ。自主的に封じ込める努力だってするし、医師会を通じてそれとなく通告もする。それに関しては、約束するから、しばらく伏せておいてくれないか」
石田は返答に迷った。逡巡を見透かしたように、敏夫は石田を見る。どこか底冷えのする声で低く囁いた。
「外に飛び火したほうがいいんだよ、石田さん。もしも行政に手出しのできない種類のことならね。自分たちの足許に火が点かなきゃ、連中は何もしない。自分たちを守る以外のことは、何ひとつ」
「若先生」
「普賢岳、奥尻島、松本」
敏夫は呪文を唱えるように囁く。
「……あんたが、行政は現場の人間を救うために努力すると信じるのなら、その根拠を聞かせてもらおう」
石田は口を開きかけ、迷った末に噤んだ。石田の沈黙を見て取って、敏夫は助手席の

ドアを開ける。とたんに耳を聾するほどの雨音と水煙が流れ込んできた。
「悪いな、石田さん。よろしく頼む」
「……はい」
車から降りた敏夫は、身を屈めて石田に言う。
「それから、このことは静信にも内密にしといてくれないか。あいつは理想主義者でね、清濁を併せ呑むということができないんだ」
分かりました、とだけ石田は答えた。

二章

1

田島予研に大至急で頼む、と依頼した奈緒の検査結果が敏夫の手許に届いたのは、翌日の昼前のことだった。昨夜の雨は上がっている。またうんざりするような陽射しが降り注いでいた。

コーヒーと一緒に検査表を運んできた律子は、少しの間に本で埋めつくされた控え室を見て溜息をついた。少し片付けてもいいですか、と言うので律子の好きにさせ、敏夫は検査結果に見入る。昨日、病院で行なった簡単な検査の結果と突き合わせてみた。

恵の場合と同じだった。各種血球の減少、ヘモグロビン量、ヘマトクリット値の減少。明らかな貧血傾向。しかも正球性正色素性貧血。ただし、血清ビリルビン、ＬＤＨは正常値。その他の値も正常で、肝機能、腎機能には異常が見られない。特に追加したクームス試験の結果も陰性。これが陰性である以上、通常の溶血ではない。恵と同じだ。貧血以外にはこれと言って不具合はないように見える。

（本当に単なる貧血なのか、それとも……）

昨夜、末梢血の塗抹標本と骨髄液の標本を顕微鏡にかけた。血液像では網赤血球が増加しており、有核赤血球も見られた。骨髄では赤芽球の過形成が起こっているが、血液学の専門家ではない敏夫では形態異常は発見できなかった。造血レベルの異常ではないように思える。むしろ大量に赤血球が消費されているために、造血が促進されて幼若な赤血球が放出されていると考えたほうがいいのだと思う。
（だとしたら）
内出血による喪失か、あるいは溶血による破壊亢進か。
（内出血はない……）
触診でもレントゲン像でも、特に内出血は見られなかった。内臓の腫大も、とりあえずないように見える。
（しかし、溶血とも思えない）
クームス試験の結果は陰性。自己免疫性の溶血ではないし、赤血球像からすると、赤血球の形態異常から来る溶血でもない。血清ビリルビンやＬＤＨが正常なところからしても溶血とは思えない。
何度、検討してみても、考えれば考えるほど、すべての可能性が否定されるように思われた。起こるはずのないことが起こっている。何かがおかしい。
敏夫は深く考え込んでいたので、本の山を整理していた律子が、何かを話しかけてき

ているのにしばらく気づかなかった。
「——先生、聞いてます?」
「ん?　ああ?」
律子は少し表情を曇らせた。
「そんなに悪いんですか、奈緒さん」
「いや。そういうわけじゃない。ちょっと理に合わない結果が出てるような気がしてるだけだ。——何がどうしたって?」
律子は苦笑する。
「たいしたことじゃないです。ゆうべ、あちこちで山が崩れたようですねって」
「へえ?」
「さっき、中外場の佐川さんが来てたんです、物療に。佐川のお爺ちゃんのところ、西山の崖に面して建ってるんだけど、ゆうべそれが崩れて泥が家の中に入ってきたんですって。後始末がたいへんだって嘆いてました」
「そりゃあ——泥を被ったぐらいで済んで良かったな」
「お爺ちゃんもそう言ってましたけどね。座敷が泥田になったけど、そんなもんで済んで良かったって。本格的に崩れたら、おおごとになってたかもしれませんもんね」
「まったくだ」

「北山でも崩れたんじゃないかなあ。ゆうべ音を聞いたんですよ。発破でも使うみたいな音で、どーんって」
「……北山？」
ええ、と律子は頷く。律子の家は上外場にある。北山の麓に近い。
「北山だと思うんです。音からすると、かなり大きな崖崩れだったんじゃないかしら。でも、北山ってお寺さんの地所だから、人も入りませんしね」
そうだな、と敏夫は呟いた。静信に知らせておいたほうがいいだろうか。思っていると、律子が最後の本をローテーブルの上に積み上げた。
「開いてあったページにメモ用紙を挟んで分かるようにしてありますから、安心してくださいね」
ありがとう、と苦笑して、敏夫は退ろうとする律子を呼び止めた。
「悪いんだがね、律ちゃん。工務店に電話して奈緒さんの様子を訊いてくれ。本人でなければ家族でもいい。とにかく様子を訊いて、再検査のために夕方でもいいから、必ず来るようにと」
律子は眉を顰めた。
「そんなに……？」
「悪いわけじゃない、と言ったろう。検査結果が変なんだ。もう一度調べ直しとこうか

と思ってね」
　そうですか、と律子は釈然としないふうだった。トレイを抱いて退ろうとする律子を、もう一度呼び止める。
「そうだ、律ちゃん、もうひとつ。昼休みが終わったら、受付開始の前にみんなを集めてくれないか」
「はい？」
「予約制を入れようと思う。すべての患者に、というわけじゃない。おれが指示した患者だけでいい」
「あの……明日から、ですか？」
　敏夫は頷く。細かい指示はみんなが集まってからするから、と退らせたが、律子の表情はどこか不安気だった。
　怪しんだろうな、と思い、敏夫はそれでもいいのだ、と自分を納得させる。病院のスタッフは最前線にいる。早晩、異常な事態に気づくし、また、最前線で脅威に立ち向かわざるを得ない以上、いつまでも伏せてはおけない。
「どういうことだと思います？」
　律子はやすよに訊いた。やすよは清美と目を見交わし合い、重々しく頷く。

「……やっぱりね。何か変だと思ったのよ」
そうね、と清美は溜息をついた。
「安森の若奥さんを明らかに警戒してる感じだったものねえ」
どういうことですか、と聡子も雪も首を傾げた。やすよは逞しい腕を組む。
「だからね、このところ死人が多いじゃない。雪ちゃんたちはピンと来ないかもしれないけど、八月に入ってから、どうも変なのよね」
「そうなんですか？」
「そう思うのも無理はないけど。なにしろ、患者が来ないで、死んだって知らせだけが来るんだものね。それも、朝っぱらから。あたしたちが出勤する前だもんねえ」
清美も頷く。
「上外場で四十前の人が死んだでしょ。それから山入で三人」
ああ、と雪も聡子も頷く。
「そのあとで、下外場の高校生。でもって、義一さんと最初に死んだ人のお母さん」
ええ、と雪は折った指を見た。
「七人ですか？　八月に入ってから？」
「そうなのよ。絶対におかしいと思ったのよね。死に事っていうのは不思議に続くもんだけど、どう考えても続きすぎだもの」

「何が起こってるんでしょう」
律子が二人に訊くと、年輩の看護婦たちは心得たふうに頷く。
「伝染病じゃないかしら。少なくとも若先生はそれを疑ってるんでしょ。これからも患者が来るかもしれないから、そういう患者だけ優先的にきっちり診られるようにしておきたいのよ」
「じゃあ、奈緒さんも……」
「あの警戒ぶりからすると、疑ってるんでしょうね」
雪と聡子は不安そうに目配せをする。
「あの……あたしたち、大丈夫なんでしょうか」
やすよは首を傾げる。
「さあね。でも、危険があれば若先生が言うでしょ。何も言わないってことは、まだ確証がないか、とりあえず病院は大丈夫なんじゃない。あの人は、そういうとこだけは、きっちりした医者だからね」
清美は再び溜息をついた。
「とにかく、消毒と手袋の着用だけはちょっと意識して徹底しといたほうがいいわ。あたしたちもそのくらいは心得とかないと」
やすよは頷く。

「最近は得体の知れない病気があるもんねえ。……妙な病気でなきゃいいんだけど」

2

静信は路肩に車を停めて、敏夫の作ったメモを見つめた。そこには調べなければならない要素が列記してある。

死亡者の性別、年齢、職業。教育歴と生活水準。住居環境、特に井戸の使用状況。家族構成、婚姻状態、両親の年齢、出生順位、家族の健康状態。本人の既往歴、飲酒・喫煙などの嗜好、食生活、習慣。日頃の行動半径、特に七月の行動。メモに従ってノートを作り、埋められる箇所は死亡診断書や戸籍から埋めておいたものの、空欄は多い。

発病の順番から言えば、最初に罹患したのは山入の三人。義五郎から移ったという三重子の言を信じるなら、大川義五郎だと思われる。感染したと推定されるのは、七月の中旬あたり。もしもこの頃、義五郎たちがどこかに出かけていれば、そこで感染したことも考えられる。――これは遺族に訊いてみれば、すぐに分かるだろうと静信は最初、楽観していた。ところが、話はそう簡単ではなかったのだった。

村迫秀正は、妻、妹、甥の三人を失っている。ごく親しい血縁はもう村には残っていなかった。だが幸い、山入の三人の葬儀は寺で行なわれており、村迫家の縁者の連絡先

が寺に残っていた。もともと山入に住んでいて、今は下の集落の親族の許に身を寄せている古老とも連絡がついたが、電話してみた結果は虚しかった。誰も、村迫夫妻の最近の動向を知らない。

村迫家の子供たちは、決して両親と縁が切れていたわけではなかったが、結局のところ両親は、外場に置き去りにしてきたものの一部なのだった。忘れているわけではない、疎遠なわけでもない、ましてや情愛を失ったわけではなくても、彼らには彼らの生活がある。ひとむかし前なら盆正月に帰省して集まることもあっただろうが、子供が小さければ塾だ習い事だと、住居を離れられない事情があるし、子供が独立する年齢に達すれば、彼らのほうが家に留まって子供の帰省を待ち受けることになる。結果として、田舎に置き去りにされた両親は、顧みられることが減っていくのだった。

「具合でも悪ければねえ」と、秀正の娘は言った。「こっちも心配だから様子を窺うんですけどね。なにしろ二人とも元気だったから。こっちも心配しないでいいんだと思うと、何て言うか——忘れてしまうんです。気にかからなくなっちゃって」

彼女は自分が密に連絡を取っていなかったことを悔いていたが、この場合、なんの助けにもならないことは確実だった。

とりあえず取れる限りの連絡を取ってみて、静信は村迫家に関しては——少なくとも親類縁者の線から、何かの情報を得ることは不可能に近い、と悟らざるを得なかった。

事情を明かして丹念な質問ができればともかく、ありもしない用を捏造して、ついでを装う限り、訊けることにも限界があった。

残るは大川義五郎だが、と静信は車を村道に向ける。大川義五郎には、村に甥が残されている。大川酒店の大川富雄がそれだった。とりあえず遣い物を買うふりで、静信は大川酒店を訪ねたのだった。

世間話のついで、義五郎の死について触れ、さぞかしお寂しいでしょうね、と静信は大川に話の水を向けてみた。

「いやいや」と、大川富雄は笑いまじりに顔を顰めて手を振る。「もう歳だったからね、あの爺さんも」

「けれども、驚かれたでしょう」

「驚いたと言やあ、驚いたけどね。なにしろ手前の伯父貴がいきなり死んで、警察から連絡があったんだからね。おまけに行ってみりゃあ、相好の区別もつかないほど腐って、バラバラになってるって話だ。まあ、滅多に経験することじゃないのはたしかだな」

そうでしょうね、と静信は頷く。

「大将が最後に義五郎さんにお会いになったのは、いつ頃でした？」

いつだったかな、と大川は酒瓶を包みながら首を傾げる。

「そう頻繁に会うわけじゃなかったからな。こう言っちゃあなんだが、可愛気のある爺

さんでもなかったから、用がなきゃ会おうって気にもならなかったからね。向こうだってろくすっぽ連絡をしてくるわけでなし、たまに電話してきたと思ったら、出かけるから車を出せだの、あれを買ってこい、これを都合してくれって話でね」言って、大川は口許を歪(ゆが)める。「甥なんだから自分の都合を聞いてくれて当然だと思ってたんだろう。ひょっこり店にやって来ちゃ、店のものを持っていって代金を置いていったこともない。なにしろ手前の都合ばっかりでね。こっちだって、伯父貴だってだけで偉そうにされちゃあ適(かな)わない。いつまでも洟垂(はなた)れ小僧ってわけじゃないんだから。そう言うと、二言目にはおれを何だと思ってるんだって煩(うるさ)いんで、死に損ないの糞爺(くそじじい)だと思ってらあ、って怒鳴り返してやったんだ」

大川は言って、大きな身体(からだ)を揺すって笑った。静信はその大声に眉を顰めながら、では、と問う。

「あの事件の直前には会ってないんですか」

「会ってないねえ。前にも――ありゃあ、春先だったかなあ、いきなりやって来て棚から酒瓶を抜いて帰ろうとするんでね、代金ぐらい置いていきやがれって怒鳴ったんだよ。そしたら、親戚(しんせき)の間で細かいことを言うな、なんてぬかしやがる。親戚親戚って、こっちは爺さんに助けてもらった覚えも、役に立ってもらった覚えもないからね、そういうことは親戚らしいことをしてから言えって、酒瓶を取り上げて、店の表に突き出してや

ったんだ。そうしたら、店の表で、だいたいお前は昔からどうだのと怒鳴り始めてね。あんまり腹が立ったんで水を撒いてやったんだよ。そしたら、二度と来ねえ、縁を切る、なんてことを言ってたけどね」

「……そうですか」

「それからも性懲りもなく、車を出してくれだの、JAに行ってくれだの電話がかかってましたけどね、電話、叩き切ってやったんで最近はそれもなくてね。そしたら、いきなり警察から電話があって、くたばったって話でさ。いまさら葬式を出してやる義理もねえようなもんだけど、身内はもう、おれだけだからね。あとはみんな、おっ死ぬか村を出るかしちまってて。さすがに葬式もないのは哀れなんで、最後の最後に面倒を見てやったけどね。おれもたいがい、人が好いよ」

　大川は身体を揺らして笑った。妻のかず子も追従するように笑う。静信は割り切れない思いで代金を払い、店を出た。店の脇では、大川の息子の篤が、まるで敵でも襲うような調子で段ボール箱を壊していた。軽く会釈すると、ぷいとそっぽを向く。膝丈のスウェットから出た素足には包帯が巻かれていた。怪我ですか、と問いかけてみたが、突き放すような調子で、犬に咬まれた、とだけ答えが返ってきた。篤には静信と会話をする気がなさそうだった。静信もそれ以上、話の接ぎ穂を見つけられず大川酒店をあとにする。

溜息(ためいき)が漏れた。大川のあの調子では、義五郎の動向など分からないだろう。義五郎は村外にも、ほとんど付き合いのある縁者がいない。かろうじて義五郎と親しかったのは誰だろう、と大川に問いかけてみたものの、これにはあっさりと「村迫のとっつぁん以外にはおらんだろう」という答えが返ってきた。

山入は孤立していたのだ、と静信はメモを見ながら思う。地理的に下の六集落から孤立していただけでなく、地縁的にも血縁的にも孤立していた。たしかに、そうでなければ、いつまでもあんな山奥には残るまい。多くのものから見放された老人が三人、肩を寄せ合って暮らしていたのだ。その三人がいっときに死んでしまって、三人の生命の足跡さえ宙に浮いた——。

無に帰す、とはこういうことか、と静信は思った。人の拠(よ)って立つところのものを、すべて無意味なものに還元してしまう。

——だから死は酷(ひど)いことなのよ。

「その通りだ……」

3

安森奈緒は、結局、二十六日の朝、夫の幹康(みきやす)に抱きかかえられるようにして来院した。

敏夫は愕然とせざるを得なかった。奈緒は半ば朦朧とし、支えがなければ満足に歩くこともできないように見えた。

「奈緒さん、どんな具合です？」

問いかけたが、奈緒の返答はない。いかにも億劫そうに口を動かしたが、ついに返答は出てこなかった。とにかく診察台に横になるよう指示する。看護婦に支えられて診察台に昇る奈緒を、付き添った幹康がいかにも心配そうに見守っていた。

「敏夫さん、奈緒はどうしたんですか」

「それが分からないから、再検査しようということだったんだが。一昨日、来てもらったときに、具合が少しでも悪いようなら必ず翌日にも来るようにと言ったんだが、昨日は来なかったな」

幹康は首を振った。

「そういう話は何もしてなかったな。母さんが結果を聞いたら、貧血だろうと言われた、とは言ってたけど」

「昨日、奈緒さんはどうだった」

「一日中、寝てたと思う。おれは仕事してたんで、ついてたわけじゃないけど。熱もあるようだったし、ひどく怠そうで」

敏夫は頷く。奈緒の顔色は相変わらず悪い。ノースリーブのワンピースの襟ぐりや二

の腕がいかにも青白い印象を与えた。その腕の内側に顆粒状の紫斑が見える。首筋や腕のあちこちに虫さされの痕が見えたから、あるいは掻いた痕かもしれない。だが、その虫さされの痕は膿んでいるふうだ。

呼吸は浅く、診察台に横になる間にも、もう息を切らしている。脈を取ってみるとかなり速い。熱があるようだが手足は冷たく、うっすらと冷や汗をかいている。

「やすよさん」敏夫は指示をメモ書きして、やすよを呼んだ。「血液検査。頻脈があるんで、念のために心電図を取っておいてくれ。あと、下山さんに言ってUSとCTの準備」

「あ——はい」

不安そうな表情をした幹康を、敏夫は控え室に連れて行った。

「敏夫さん、あの……奈緒、どうかしたんですか」

「まあ、坐って」敏夫はソファを示す。

「なんか悪い病気なんですか」

「いや。少なくとも今のところ、特に重大な病気だという証拠はないな」

幹康は細面の顔に、縋るような表情を浮かべている。同じ門前、家も近いし、年齢こそは四つ離れているものの、幼馴染みの部類に入る。負けん気の強い敏夫は餓鬼大将だったから、小さい頃は子分のようなものだった、と言ってもいい。小さい頃もこんなふ

うだった。困ったことがあると、縋るような顔をして敏夫を見る。
「でも……」
「今の段階では何とも言えないんだ」言って、敏夫は再度ソファを示して幹康を坐らせた。「奈緒さんはいつから悪かったんだ?」
「ええと……二、三日前かな」
「一昨日? その前?」
「その前の日から怠そうだったよ。母さんが何度も大丈夫かって訊いてたから。病院に行け行けって言って」
「さらにその前日は?」
「どうだったろう……。覚えてない。特に悪い感じはしなかったんじゃないかな」
「幹康はどうだ?」
敏夫が訊くと、幹康はきょとんとした。
「おれ?」
「お前でも、徳次郎さんでも節子さんでもいい。あるいは工務店の若いのでも。誰か同じように具合が悪そうな人間はいなかったか? もしもいたとすれば、夏風邪かなんかを移されたとも考えられるんだが」
幹康は首を傾けて考え込み、ややあって、いないと思う、と答えた。そうか、と敏夫

は息をつく。
「一昨日、来てもらったときに、色々と検査をしたんだがね、結果はとりあえず貧血がある、それだけのことだったんだ。生理中でもあるってことだったから、ごく単純な貧血だ、と言いたいところだ。——だが貧血といっても、いろいろあるからな」
　幹康は血相を変えた。
「その……おれは詳しくないんだけど、悪性貧血とか、不良貧血とかあるんだよね？」
「少なくとも検査結果から見る限り、悪性貧血や再生不良性貧血はないと思う。たぶん、そういう造血レベルの問題じゃない。疑わしいのは溶血性貧血ってやつなんだが、これはたしかなこととは言えない」
「それ、かなりヤバいんですか」
「おいおい」敏夫は無理にも笑ってみせた。「そういうことじゃない。実を言うと、よく分からないんだ。溶血性貧血のように見えるが、少しそれとも違う感じだしな。しばらく様子を見てもいいんだが、この陽気だろう。何のかんのと言っても工務店の若奥さんだ。気苦労もあるだろうし、出入りの若い衆の面倒も見なきゃならん。手のかかる子供もいる、体力がどっと落ちる時期でもあるんで、ちょっと大事を取っておこう、って話さ」
「なんだ……」幹康は息を吐いた。「脅かさないでくださいよぉ。わざわざ看護婦さんか

ら連絡があって、連れてこいって言うし、いきなり物々しい検査の話をしてるし、おれ、てっきり」

「まあ、だが、病名がはっきりするまで油断はしないほうがいい。かなり具合が悪そうなのは事実だしな。念のために血液を再検査して、ＣＴかけるから、それでもはっきりしないようなら、国立病院に連れて行くんだな。なんなら大学病院に紹介状を書くから」

「ああ……うん。はい」

敏夫はあえて、恵のことには触れなかった。幹康は安堵したようだったが、そうやって慰めた敏夫は安堵できない。奈緒は格段に悪くなっている。この勢いのつきかたが、いかにも不安だった。

4

静信は「ちぐさ」の脇に廻り、自宅のほうの玄関先を覗き込んだ。居間でテレビを見ていた矢野妙は、すぐに静信の姿に気づき、あら、と声を上げて出てくる。

「どうなすったんですか」

「溝辺町に行ってきたもので。お店で一服していこうと思ったんですけど、妙さんはど

うしてらっしゃるかと思って」
「お上がりください」言ってから、妙は気づいたように、「ああ、店のほうにいらしてください。若御院は麦茶よりコーヒーのほうがいいでしょう？　あっちならクーラーもありますしね」
突っ掛けを引っかけて静信の先に立ち、店のほうへと向かう妙は、どことなく瘦(や)せたふうだった。
「ひょっとして、お瘦せになったんじゃないですか」
妙は陽射しに灼(や)かれた庭先を横切りながら振り返る。
「夏瘦せってやつでしょうかね。最近、どうも食事がまずくって」
「ふきさんのことで、気落ちしてらっしゃるんじゃないですか」
妙は胸を衝(つ)かれたように瞬き、悄然(しょうぜん)と息を吐いた。
「……そんなことはないんですけど。なにしろわたしだって、いつお迎えが来てもおかしくない歳ですもんねえ。ふきさんも同い年ですしね。学校の同級生だったんですよ」
「そうですか」
「こういうことは決まったことですからね。そう思いはするんですけど。けども、わたし、ふきさんが亡(な)くなったその日に会ってたんですよ。具合が悪くて、何度も若先生に来てもらおうかと思ったんだけど、ふきさんが、いいって言うものだから。でも、あの

ときに若先生を呼ぶなり救急車を呼ぶなりしてたら、あの人ももう少し長生きしたんじゃないかと思うとねえ……」
「そんなふうに考えては」
妙は首を振った。
「どうしてもね、忘れられないんですよ。どうして電話しなかったんだろう、と思って。やることとやって、どうにもならなかったんならともかく、そうじゃないでしょう。いまさら取り返しのつくことじゃないんですけど、気がつくと、あのときこうしてればって、そればかり考えてるんです」
寂しげに言って、妙は店のドアを開いた。店内に客の姿はない。静信たちが近づいてくるのが見えていたのだろう、カウンターの中の加奈美が頭を下げた。
「いらっしゃい。――やっぱり若御院の車だったんですねえ」
「あたしの様子を見に来てくだすったのよ」
妙が言うと、加奈美は微笑んだ。
「ありがとうございます。……お母さんたら、すっかりしょげちゃって」
「おいおい慣れるわよ」
「そうしてね。友達だからって、ふきさんに引かれてっちゃ嫌よ。急がなくても、ふきさんは待っててくれるわよ、きっと」

はいはい、と笑う妙と加奈美を、静信は微笑ましく見た。
「妙さんのところはいいですね、こうして加奈美さんが一緒におられて」
「そうですかねえ」と言いながら、妙は嬉しそうだった。「戻ってきたのは嬉しいんですけど、出戻ってきたんじゃ心配で」
「そんな憎まれ口を叩けるんじゃ、心配ないわね」
加奈美は笑って、アイスコーヒーのグラスをカウンターに載せて勧めた。
「……山入の村迫さんや、大川さんは寂しいものです。別段子供さんと疎遠だったわけではないんでしょうが」
妙は同情するように頷いた。
「あそこは全員、村を出ちゃってますからねえ」
「なにしろ突然のことで、何が起こったのかよく分からないでしょう。それで御遺族に生前の御様子を伺ってみようと思ったんですけど、誰も御存じなくて」
「あらまあ」
「ふきさんも大同小異なんでしょうね。たった一人、手許に残っておられた秀司さんが亡くなってますから。もっとも、ふきさんはお友達がおられたので、まだしもですが」
加奈美は眉を寄せた。

「なんだか、今年は死に事が続きますね。よくお店でも言ってるんですよ、酷い按配だって。とにかく、ふきさんのところがね。お兄さんと息子さん、あげくに本人でしょう。悪い病気でも流行ってるのかしら、と思うこともあるんですよ」

静信はひそかに息を詰めた。まじまじと見返した加奈美は、しかし、自分でもその言葉を信じているわけではないらしい。微苦笑を浮かべている。

「夏風邪も馬鹿にできませんもんね。義五郎さんの様子が変だと思ったんですよ」

「――大川の？」

「ええ。あれはいつだったかしら。義五郎さんがね、バスから降りてくるのを見かけたんです。それが具合でも悪いふうで、妙にふらふらしてたんですよ。声をかけたんですけど、気がつかないみたいで。そしたら、あの知らせでしょう。やっぱりあのとき、どうにかしてたんだなと思って」

「それはいつ頃ですか？」

「七月の終わりじゃなかったかしら」加奈美は記憶を探るように宙を見る。「――そうです、七月の終わり。あのあと、義五郎さんと秀正さんの具合が悪いらしいって話を聞いたんですよ。なんでも買い物に下りてきた三重子お婆ちゃんがそう言ってたそうで。あんな山奥で具合が悪くなって、おおごとになったら怖いな、と思ったらその通りになったでしょう。それで気味が悪くって」

「何日頃だか覚えてませんか」
加奈美は首を傾げた。
「何日だったかしら。二人の具合が悪いらしいって話を聞いたんですよね。その時、そう言えば、と思ったんですよ。その何日か前に、義五郎さんを見たなあ、と思って……」
「義五郎さんが出て行った翌日よね」妙が口を挟んだ。「朝っぱらからバスに乗ってどこかに出かけて行って。その翌日に帰ってきたっていうから、一泊で出かけるなんて、どこに行ったのかしらと思ったんですよ」
「そう言ってたわよね」加奈美は頷いて微笑む。「お母さんは朝が早くて。たまたま義五郎さんがバス停にいるのを見てるんですよ。溝辺町に向かうバス停にいたって。その翌日に戻ってきて、その——何日後だったかしら。具合が悪いらしいって話を聞いたんですよ。店でそういう話をしてて……」
加奈美はふいに眉を顰めた。
「そうだわ、それを聞いて、秀司さんが見舞いに行くって言い出したんだわ」
静信は何かが琴線に触れるのを感じた。
「秀司さんが？」
「ええ。ちょうどその日の夜、飲みに来てて。ずいぶん飲んでたんで、やめときなさいって言ったんですけど、大丈夫だって。ここから家に電話して、見舞いに行くから遅く

なるって。それがもうずいぶん遅い時間で、こんな時間から見舞いに行ったんじゃや、かえって病人は迷惑なんじゃないかしらと思ったんですけど」

加奈美は言って、一人頷く。

「そう——そうだったわ。それから六日後ですよ、秀司さんが死んだって聞いたのは。秀司さん、それきり店に来なかったんです。あの人が三日以上こないことって珍しかったんで、どうしたのかしらと思っていたら死んだって」

静信はカウンターの木目を見つめる。秀司が死んだのは八月六日、その六日前なら三十一日の話だ。三十一日に秀司は山入に行った。だが、三十一日——一日早朝と言えば、秀正と義五郎の死亡推定日だ。警察の見解を信じるなら、秀司が山入に行ったとき、義五郎も秀正もすでに死亡していた可能性がある。おそらくは三重子ももう発病していて——。

静信は違和感を感じた。秀司は結局、秀正と三重子に会わなかったのだろうか。家の中に入れば、伯父がただならぬ容態であることを知ったはずだ。ならば当然、誰かに連絡をしただろう。連絡をしなかった以上、秀司は秀正に会わないまま帰ったのだろうが、——だが、三重子もまた誰にも連絡をしていない。側で夫が死んだというのに、連絡さえすることがないまま本人も死亡した。

（何だろう、この相似形は……）

静信が考え込んでいると、加奈美は、そうか、と声を上げた。
「思い出したわ。義五郎さんが出かけた前日、その日に元子の子供が事故に遭ったのよ」
静信は顔を上げた。
「ほら、若御院と病院で会ったじゃないですか。茂樹くんのお母さん」
「ああ……」
静信は元子の神経症ぎみに取り乱した姿を思い出した。
「あたしの同級生なんです。夕方の仕込みを手伝ってもらってて。元子の子供が車に引っかけられたのが七月の二十七日のことだったでしょう。その翌日、二十八日に義五郎さんが出かけて、帰ってきたのが二十九日です。具合が悪いって話を聞いて、秀司さんが見舞いに行って、それが亡くなった六日前」
七月三十一日だ、と静信は頷く。
「その前に義五郎さんを見たのは？」
「その前は——いつだったかしら、戻ってきたのを見たとき、久しぶりだなと思ったぐらいですから、たぶんずいぶん姿を見てなかったんだと思います」
「義五郎さんや秀正さんは、そうやって頻繁に旅行に出たりしてたんでしょうか」
これには妙が首を振った。

「義五郎さんはないわね。あの人は滅多に村の外に出なかったから。なにしろ、スクーターより他に運転できなかったんですもの。車は秀正さんが持ってましたけど、運転できるのは秀正さんだけだし、だから義五郎さんは外に出るのが億劫だったんじゃないかしら」

「秀正さんは？」

「あの人も腰の重い人だったわねえ。旅行なんてのは、滅多になかったと思いますよ。いつだったか、ふきさんとこで三重子さんに会って、三重子さんがたまには温泉にでも行きたいって言ってましたから。最後に旅行に行ったのは何年前だ、なんてね」

「七月に旅行する気になったとか」

「ないでしょう。田圃や畑があるもの。あの人たちは年金で生活してるようなもんだから、田圃や畑に生ってるのが自分たちの食い扶持ですからね。農閑期ならともかく、この時期に旅行はしないんじゃないかしら。おまけに今年はほら、雨がないから。ポンプで水上げて、撒水しないといけないって、どこの人も畑を離れられないみたいですもんねえ」

　そうか、と静信は思った。今年の猛暑と渇水。一昨日にはまとまった雨があったが、川の水位にはほとんど影響がなかった。村ではさほど深刻ではないが、下流では水が不足して、外場でも取水を絞り込んでいる。村の農家は沢や井戸から水を上げて畑まで運

んでいる。たしかにそれで、旅行になど行けるはずがない。
では、と静信は思った。三人はやはり山入で感染したのだ。あるいは――?

5

敏夫の不安は的中した。
翌日、午前の診察時間の最中に安森幹康から電話があった。奈緒が息をしてない、と泣きながら言う。すぐに来てくれと言われ、工務店に駆けつけたときには、奈緒は死亡していた。すでに瞳孔は散大しており、口の中には泡状の喀血が見られた。心不全から来た肺水腫が原因の窒息死。八月二十七日、午前十一時二十分のことだった。
静信がその訃報を受け取ったのは、田茂定市からだった。昼下がり、寺務所には静信だけが残って原稿に向かい、上滑りする思考を弄んでいた。
「工務店の奈緒さんが亡くなったんですわ」
受話器から流れてくる定市の声に、静信はやはり、という言葉を呑み込んだ。その沈黙を誤解したのか、定市は続ける。
「幹康くんの奥さんですよ。二十六か、そのくらいじゃなかったですかね。なんとも急

なことで。肺を悪くしたらしいんだけどね、そういうわけで、わたしが助番を務めさせてもらいますんで」
「ああ、……はい」
工務店の安森徳次郎は門前の弔組世話役だった。その世話役の家で不幸があった場合には、助番が世話役を代行する。特に助番という役職があるわけではないが、各集落にはそれなりに序列というものがあり、助番となるべき人物は暗黙の了解として決まっていた。
「まだ暑さもきついんで、ちっとせっついて申し訳ないんですが、今夜のうちに通夜をやってしまおうと思いましてね。徳次郎さんとこは、親類縁者、この近辺だから、特に遠方から駆けつけにゃならん人もいないんで」
「ええ」
「そういうわけなんで、枕経だけ、早い目にお願いできますかね」
「分かりました。伺います」
同じ門前の集落にある安森工業は、寺からいくらも離れていない場所にあった。安森工業の社長である安森徳次郎は、そもそもは丸安製材の次男坊だった。徳次郎が独立して安森工務店を興し、建設業から始まって不動産業、土木業まで手を広げてかなりの規

模になっていた。現在では、工務店を長男の幹康に譲り、不動産業のほうは市街地に住む徳次郎の弟が、土木業は同じく市街地のはずれに事務所を構えて徳次郎の娘婿が采配している。

しょせんは田舎のこと、立志伝中の人物になり得るほど破格に急成長したわけではないが、徳次郎自身は七十を目前にして、なお血気盛んな精力的な人物だった。にもかかわらず、静信が訪ねたとき、その徳次郎は打ちのめされた様子で嫁の枕許に坐っていた。

「徳次郎さん、このたびは……」

静信が声をかけると、言葉もなく頭を下げる。まるで実の娘を失ったかのような悲嘆ぶりだった。喪主の席に坐った幹康は幼い子供を抱いて深く俯いている。忍びやかな慟哭が聞こえた。その肩を、目を真っ赤に泣き腫らした節子が、辛抱強く撫でている。

奈緒は嫁であって徳次郎の娘ではない。節子は後妻で、幹康と節子の間には血のつながりがなかった。にもかかわらず、徳次郎一家は誰が見ても羨むほど仲が良かった。幹康と奈緒と、まるでどちらも血を分けた子供のようだ、と言われていたことを静信は知っている。

「節子さん、幹康くんも」静信は言いかけ、きょとんとしたふうの子供と視線が合って、先の言葉を失った。奈緒の産んだ長男は進。たしかまだ三歳にしかならないはずだ。「――本当に御愁傷様です」

母親の死の意味を理解することができず、自分の周囲で何が起こっているのだろう、と小首を傾げている進の、無邪気な様子を見れば、通り一遍の言葉しか出てこない。この幼い子供は母親を喪失してしまったのだ。

徳次郎も、そして幹康も節子も、嗚咽に塞がれて声が出ないようだった。揃って無言で頭だけを深々と下げた。

静信もまた、それ以上は言葉が出てこなかった。静信は嗚咽を漏らしている幹康に目をやる。しっかりと子供を抱き寄せた腕は、子供を庇護しているようでもあり、子供に縋って懸命に自分を支えようとしているようでもあった。同じような腕を見たことがある。清水の家でもそうだった。それが痛ましく、同時にどこか危うげに見えた。この人々は、自分たちの家の中に危険なものが入り込んだことに気づいてない。

――泣く子のところには鬼が来るぞ。

村に流布する「起き上がり」――鬼の伝承は間違いなく疫病の暗喩だ。鬼は安森家に入り込んだ。鬼の触れたものは死に感染し、死はそこから広がっていく。

気をつけて、と言いたい気がした。気持ちは分かる、死者を悼む心は。だが、死体に取り縋ってはならない。早く、棺の中に納めて蓋をしてしまわなければ。何もかも告白して、充分に気をつけろ、と言いたい気が。

だが、と理性が囁く。もしもこれが疫病なら、それを告げても遅いのだ。奈緒は死ん

だ。この死が連続するものなら、たぶんもう、鬼は次の贄(にえ)を捕まえている。

6

安森家で通夜を終えたその夜、静信は敏夫を訪ねた。敏夫はそのとき、ちょうど私室で奈緒の検査結果を見ていた。
「よう」
例によって裏庭から現れた静信に、敏夫は中を示す。
「奈緒さんは——やっぱり?」
静信の問いに、敏夫は頷いた。
「おそらくな。奈緒さんが病院に来たのが二十四日、死亡が今朝で二十七日。二十三日から具合が悪かったようだし、死亡までは四日だ。ほとんど自覚症状はないふうだったが、疲れやすい、頭が重い、ぼうっとしていると言っていた。とりあえず問診した限りでは、貧血だと思われたし、検査の結果でも貧血と出ている。貧血以外に格別の不具合はない」
「それは恵ちゃんと」
「そう、同様にな」敏夫は頷く。「本当にぼうっとしているふうで、何を訊(き)いても打て

ば響くように答えが返ってくるとはいかなかった。口を利くのも億劫、あるいは注意力が散漫になっていて思考をまとめられない、という印象を受けた。これも恵ちゃんと似ている」

「そう……」

「二十四日の血液検査の結果では、貧血以外の異常はなかった。正球性正色素性貧血で、全般的に血球が減少していて、網赤血球が見られる。腎機能、肝機能の結果は正常値の範囲内、内出血を探したが、これも見つけられなかった。ところが」

敏夫はカルテに貼った検査結果表を示す。

「次に来院した二十六日の結果だ。今日戻ってきた。これを見ると、どこもかしこも悪い。腎機能も肝機能も正常値の範囲を大きく外れている。貧血は若干、改善されているが、反対にそれ以外の部分のどこもかしこも悪い、という風情だ。そして今朝には死亡。死体を見ると、軽微な黄疸、水腫、腹水、出血傾向など、腎不全や肝不全の兆候が見られる。窒息した様子を呈しており、実際、気道内容物を吸引してみると、泡状の喀血が気道を塞いでいた。心不全から来た肺水腫による呼吸不全だ。だが、こちらも事前に心電図は取ってある。少なくとも最初に来院した時点では、心不全に至るような兆候はまったく見られなかった。貧血以外のいかなる不調もなかったんだ、ほんの三日前までは。そこから彼女は、転がるように全身を蝕まれていった。死因は心不全から来る窒息死だ

が、これはたまたま心臓がトリガーになったというだけだろう。経過を見ると、腎臓や肝臓、どこがトリガーになってもおかしくなかった。心不全と言うよりやはりＭＯＦ――多臓器不全だ」
「……伝染病の可能性は？」
「ない。少なくとも、検査に出した限りでは陰性だ」
「例のやつか……」
「おそらくな。最初の不具合は、夏バテや夏風邪だと思われても仕方のない状態だ。そこから急激に増悪して死に至るが、経過は不透明。死に至るまでの期間といい、最初に貧血が観察されたことといい、恵ちゃんの例と非常に似ている」
「最初は貧血で始まる？」
「その可能性は高いと思う。石田さんに言って、貧血が多いので注意するよう、チラシを書き換えてもらったほうがいいかもしれない。貧血の自覚・他覚症状を列記して、それが見られたらすぐに病院に来るよう」
　静信は頷いた。
「かろうじて本人から聞いた話と、あとで幹康から聞いた話を総合すると、実家の家族にはこれと言う持病がないようだ。奈緒さんの実の父母は失踪していて、奈緒さんを育てたのは伯父夫婦だが、とりあえず幹康が聞いている限りでは、遺伝的に問題があった

とは思えない。特に問題になりそうな生活習慣も嗜好もない。酒は付き合う程度、煙草は吸わない。生活範囲はほぼ村の中に限られており、山入に行くこともなければ、山の中に入ることもない。溝辺町に買い物に出るのがせいぜいというところだ」

静信はノートの、「安森奈緒」のページに敏夫の言をメモしていった。医者が当人とその家族に訊いたものだから、さすがに遺漏がない。

「工務店には井戸がない。まるきり上水道に頼っているが、事務所のクーラーだけは地下水を使っている。これは丸安製材も同様だ」

静信はメモを取りながら頷いた。山入には上水道が通っていない。義五郎も、村迫夫妻も井戸水を使っていた。後藤田家は、飲料水は上水道だが、風呂や洗濯には井戸も使っている。恵の住む下外場は、ほとんどの家が上水道のみに頼っているが、農作業には地下水を使うし、恵は死の直前、西山に登るのを目撃されている。そうやって頻繁に山に入る習慣があったとしたら、山の中で沢の水を飲んだこともあったかもしれない。これらを考え合わせると、あるいは水が原因かとも思われたのだが。

「……水のせいじゃない?」

「工務店と丸安のことを考えると、可能性は低いだろうな。何らかの形で水が汚染されていて、中毒を起こした、あるいは感染したという可能性は、ほぼ消えたと言えると思う。そもそもの始まりが水である可能性は依然として残っているが、水が直接の汚染源

じゃない」
「たとえば、山入の水が汚染されていて、そこから山入の三人が感染、あとは直接伝播」
敏夫は頷く。
「水に原因があるとすれば、そういうことになるだろうが、ネックになるのは恵ちゃんと義一さんだ。当たり前に考えると、恵ちゃんが山入の三人や秀司さんと接触があったとは思えない。ただ、これは確実なこととは言えないわけだが」
静信は頷いた。恵は住まいこそ下外場だが、失踪した日の例でも分かるように、行動半径は上集落にまで及んでいる。どこかで山入の三人や秀司とたまたま出会わなかったとも限らない。
「さらに問題になるのは義一さんだ。奈緒さんがもしも例のあれなら、汚染源は義一さんとしか思えない。感染したのは八月半ばで、これはちょうど義一さんが死亡した時期に重なる。幹康によれば、奈緒さんはしょっちゅう丸安製材に出入りしていた。義一さんを見舞うために病床を訪ねたことも再三あるし、盆には一族が丸安に集まっている。義一さまさに八月半ばだ。義一さんから移ったとしてもぜんぜん不思議じゃない。ところが、義一さんがどこからこれを拾ったのかが分からない。義一さんの行動半径はゼロに等しい。まったくの寝たきりだったんだからな。考えられるのは、山入の三人、秀司さんの

ほうから義一さんに会いに来た可能性だが――」

「それはないようだ」と、静信は首を振ってメモに目を落とした。「丸安の厚子さんに訊いてみたんだけど、秀司さんは義一さんとまったく付き合いがなかった。丸安にも足を踏み入れることはなかったようだ。山入の三人は、丸安と付き合いがなかったわけじゃない。義一さんとも面識があったが、特に親しかったわけでもない。わざわざ義一さんを訪ねてきたことはないそうだよ。丸安に用があって、ついでに義一さんを見舞っていく、ということはあったかもしれないが、義一さんは患って長い。以前には、丸安に来たついでに義一さんを見舞っていく客もあったが、最近ではそれも絶えていた、というのが実状らしい」

「だろうな。あの人が寝付いて、六年かそこらになるだろう。おれが戻ってきたときには、もう寝たきりだったからな」

静信は頷く。

「だから、義一さんに会ったのも、ほとんどが身内だけだ。特に工務店の人たち。あとは、田茂の本家の人々。特に定市さんは、義一さんと親しいから。あとは仲のいい内輪の人々、ということになる」

「接点がないな……。やはり直接伝播はあり得ないか」敏夫はうんざりしたように溜息をついた。「――他の連中は？」

促されたので、静信はノートを開いて挟んであったメモを差し出す。

「山入の三人、後藤田家については、家族が離散していて詳しいことが分からないんだ。……ただ」

静信は「ちぐさ」で聞いた話を繰り返した。秀司が倒れる前日、山入に向かっていること、義五郎が外場を出て、戻ってきたときには様子がおかしかったこと。

「秀司さんが山入に行ったのが三十一日か……」敏夫は渋面を作った。「それはたしかに気になるな。三十一——一日早朝なら、秀正さんは死んでた可能性が高い。ならば、秀司さんが死体を見てなかったはずはないし、見たなら連絡しなかったはずがない。それをしてないってことは、訪ねたが会えなかった、ということなんだろうが」

「そうだな」

「しかし三重子婆さんがいたんだよな。本人も具合が悪くて、横では亭主が死んでる。肝不全から来る意識障害があったとして、それでも人が訪ねてきたのを無視するかな。単に眠っていて、秀司さんが訪ねてきたのに気づかなかったのかもしれないが……」

「それと義五郎さんだ。——なあ、義五郎さんが、外場の外から何かを持ち込んだってことは考えられないだろうか。そしてそれを、秀司さんは山入で拾った」

「どうだろう」敏夫は首をひねった。「もちろん、ものによっては潜伏期間が数日以内、ということもある。インフルエンザなら平均して二日だし、コレラなら一両日中に発症

することもあるわけだが。だが、そう考えると、ふきさんがどこで感染したのか分からなくなる」

「そうか。ふきさんは、秀司さんから移ったのか……」

「確実に、とは言えないが。日本脳炎のような例もあるからな」

静信が首を傾(かし)げると、

「日本脳炎は、蚊が媒介する。人から人へは伝染しないんだ。ひょっとしたら、そういう可能性もあるかもしれない」

実際、と敏夫はカルテを指先で叩(たた)く。

「最終的に、多臓器的に不具合が現れていることから考えると、病原体は血液の流れに乗って全身を蝕んでいるように見える。消化器系、呼吸器系を侵入門戸に、そこから血液中に病原体が侵入することがないわけじゃないが、だとしたら、最初に消化器系や呼吸器系で異物に対する防衛反応が現れそうなもんだ。だが、嘔吐(おうと)や下痢、咳(せき)なんかの症状は見られない。これを考えると、単刀直入に血液を汚染しているとも解釈できる」

「傷口などから?」

「そう。実際、恵ちゃんの身体には山で転んだときについたんだろう、小さな擦り傷なんかがいくらでもあった。奈緒さんには特に怪我(けが)はなかったが、虫さされの痕(あと)がいくつ

もあった。日本脳炎のように動物が媒介している可能性はあると思う。人から人へは移らず、蚊やノミ、ダニの類が媒介する。そうすれば、山入組と恵ちゃん、義一さんの間になんの接触もなかったことの説明にもなるんだが」

　言って、敏夫は静信を指さす。

「その可能性も否定できない。お前も気をつけろよ」

「なぜ？」

　なぜって、と敏夫は呆れたように目を見開いた。

「山入、だろう。恵ちゃんが発見されたのは丸安の裏手の山の中だ。奈緒さんの家は少し離れているが、丸安製材に頻繁に出入りしてる。丸安製材はお前んちの麓だ」

「そう……だけど」

「北山周辺だよ。媒介動物が山入から北山を抜けて広がっている可能性がある。山入は北山の裏側だし、恵ちゃんが見つかったのは、ちょうど北山と西山がぶつかるあたりだ」

　静信は頷いた。たしかあのあたりの谷川に沿って山入に向かう抜け道があったはずだ。静信が小さい頃には、山入から直接、丸安製材に材木を下げて降ろすためのワイヤーが杣道の脇に設置されていた。林業が廃れて、もはや利用する者もいないだろうし、すでに道は下草に埋もれているだろうが、谷川に沿ったあの道を使って動物が移動すること

は充分、可能だ。――たとえば野犬などの。

静信は山入の惨状を思い出した。

「野犬？」

「考えられるな。死人には生前の咬み傷がなかったから、野犬そのものから移ったということはないだろうが、野犬についたノミやダニのせい、ということはあり得る。ちょっと前に、大川酒店の息子が野犬に咬まれてやって来たことがあるんだ。その前にも猪田の元三郎さんだったか、やっぱり野犬に襲われてる。周辺の山で野犬が増えてるのは事実だ。山に入る連中は、それで戦々恐々としているらしい。診察を受けに来た連中の噂話を総合すると、山入から増えてだんだん南下してきている、という感じだな。つい最近も神社の上で三頭ほどの野犬を見た、と言う患者がいたし」

「野犬狩りの必要はないだろうか」

敏夫は考え込んだ。

「野犬が保菌生物である可能性はあるな。調べてみる必要があるが……」言って、敏夫は大きく息を吐き出した。「しかし、一体何を調べりゃいいんだ？　野犬を捕まえて病原体を保有してないか調べるったって、肝心の病原体が何だか分からないんじゃあな」

「そうだな……」

「まあ、野犬狩りはしておくに越したことはないんだろうが、何て理由をつけるかが問

題だ。下手をすると、藪(やぶ)をつつくことになりかねないが、野犬が原因とは限らない。かなりリスキーだな」

　静信は頷いた。大川篤や猪田元三郎の事例を理由として引っぱり出すには、時期を逸した感が否(いな)めない。理由づけとしては取ってつけたように見えるだろう。

「それこそ、次に誰かが襲われるかどうかして、チャンスがあれば、というところじゃないか」

「しかし……」

「疫病の存在がバレるってだけじゃない。お前は簡単に野犬狩りと言うが、それを実際にやる連中の安全をどうやって確保するんだ。野犬を捕まえに行く連中は、牙(きば)に対する用心はしても、ノミやダニには用心しないだろう。それをさせるには、最初から疫病の存在を言い含めておかないといけない」

「毒餌(え)は？」

「それもリスキーなことには代わりがない。もしも媒介しているのがノミだとする。だが、ノミってのは犬が死ぬと、死体を離れてしまうんだぞ。同時に大がかりな駆除をしながらやるんでなきゃ、かえってノミをばらまくことになりかねない」

　そうか、と静信は唇を噛(か)む。

「まあ……保菌生物は野犬なのかもしれないが、野犬だけではない可能性もあるからな。

ネズミやウサギ、あるいは野鳥。それについているノミやダニ」
だとしたら、と敏夫の声は暗い。
「これは手こずる」

三　章

I

八月二十九日早朝、呪(のろ)われた八月もあと三日で終わろうという頃になって、静信の許(もと)に訃報(ふほう)が届いた。外場に住む太田(おおた)健治(けんじ)が亡(な)くなったという。太田は五十三歳、高校教師だった。それが学校で倒れ、そのまま共済病院で息を引き取ったという。

「なんでも、このところ調子が良くなかったらしくて」と、外場の世話役である村迫宗秀(むねひで)は電話で言う。「本人も身体(からだ)が辛(つら)いんで退職するって言ってたらしいんだわ。でも、学年途中だろう。それで慰留されてる間に、ぽっくり逝(い)っちゃったらしいんだ。肝臓がいけなかったらしいねえ」

そうですか、と答えつつ、静信は思いをめぐらせる。これは果たして例のものだろうか。とりあえず宗秀と葬儀の打ち合わせをし、静信は敏夫に連絡を入れた。

「石田さんから診断書の写しが届くと思うけど、外場の太田健治さんが亡くなった」

そうか、と敏夫の返答は短い。一昨日に亡くなった奈緒に続いて十二人目の死者になる。静信は受話器を置いて、離れに父親を訪ねた。

寺務所を出て行く静信を見送り、池辺（いけべ）は黒板を見上げる。
「ねえ、鶴見（つるみ）さん」池辺の声に、机に向かって帳面を開いていた鶴見が顔を上げ振り返った。「この太田さんというのは、どういう人なんですか?」
「どういうって？　たしか、高校の先生だったと思うがな。教頭かなんかだと聞いた気がするが」
「ということは、まだ定年前ですよね」
「そりゃそうだろう」
老人ではないのだ、と池辺は思った。いつ何が起こってもおかしくないような老人ではない。つい昨日、安森奈緒の葬儀が終わったばかり、池辺は今月に入って、一体何軒の葬式に立ち会ったのか、自分でも思い出すことができなかった。
「なんだか変じゃないですか」
うん、と鶴見は生返事をする。
「こんなに人が死ぬものなんでしょうか」
鶴見は屈強な肩を、わずかに揺らした。そういうこともあるんだ、と低く言ったが、声には不審なものが滲（にじ）んでいる。それきり沈黙するので、池辺もまた話の接（つ）ぎ穂を見失って黙り込んだ。寺務所の中に妙な沈黙が立ち込めたところに、朝仕事を終えた光男（みつお）が麦茶の入ったポットを提げて入ってきた。

「――？　何だい、取り込み中かい？」
　いえ、と池辺は答える。
「ついさっき連絡があって、外場でまたお弔いだそうです。太田さん」
　光男は瞬いた。
「太田――剛造さんかい？」
「いえ、健治さんというらしいですよ」
「じゃあ、息子さんのほうだな。……なんてこった」
　光男は頭を振ってポットを据える。
「今年は多いですね」
　池辺が言うと、光男は大きく息を吐いた。
「まったくだ。つい昨日、安森の嫁さんの葬式が終わったばかりだっていうのに、今日はまた通夜で明日は葬式か。そうこうしているうちに、四十九日で彼岸か。この暑さだ、考えただけで目眩がするねえ」
「いつまで続くんでしょうか」
「さてなあ。来月も半ばになりゃあ涼しくなって、ちょっとは楽になるんだろうがね」
「いえ、そういう意味じゃ……」
　言いかけた池辺の脇から、鶴見が低い声を上げた。

「死人がいつまで続くんだと言いたいんだ、池辺くんは。――だろう？」
光男が二人を振り返ると、池辺は鶴見を不安気に見てから頷いた。
「八月に入ってから、何か変じゃないかい、光男さん。たしかに池辺くんの言う通りだよ。こんなことがいつまで続くんだろうな」
ああ、と光男は気まずい思いで口を濁した。
「八月の初っ端に後藤田の息子が死んで、それから山入のあの事件だよ。老人とは言え、三人もいっぺんに。それから清水さんちの嬢ちゃんに丸安の義一さん、後藤田の婆さんに工務店の嫁さん。このうえまだ――」
「たしかに多いとは思うけどね。なにしろ八月に入ってから葬式が七軒だ。死人が九人。尋常のことじゃない気もするね」
「気もする？　光男さん、こりゃあ尋常のことじゃないよ。そうだろう。たった一月に九人だよ。そりゃあ今年は暑かったさ。だが、暑かった夏、寒かった冬、これまでにだってなかったわけじゃない。けれども一月に九人なんてこと、これまでにあった覚えがあるかい」
それは、と光男は言葉に詰まった。実を言えば、光男自身、どこかおかしいという気がしている。死者というのは不思議に続くことがあるが、こうまで続くということは記憶になかった。

「たしかに、これだけ続くなんてことは、今までなかったことだけどね」
「だろう？　だが、この間から考えててね、これによく似たことがあったのを思い出したよ」
え、と光男は鶴見を振り返る。
「光男さんも覚えてるんじゃないのかい。おれもあんたも親父(おやじ)が役僧で、餓鬼の頃から寺に出入りしてるんだからさ。立て続けに葬式があって、寺が天手古舞してたことが大昔にあったよ」
光男は軽く息を詰まらせた。そう、たしかにあった。光男がまだ小学校を卒業するかしないかの時分だ。父親が始終お斎(とき)の折り詰めを持ち帰って、最初は嬉(うれ)しかったのが、次第に閉口した覚えがある。
「だが、あのときだってこんなに多くなかった。——いや、思い出すと、ちょうどこのくらい続いたような気がするから、実際にはもっとずっと少なかったんだろう」
「ああ……そうだね。そうだった」
これを聞いていた池辺は、ほっとしたように口許をほころばせた。
「なんだ。珍しいことと言え、こういうこともあるんですね」
安堵(あんど)したように言う池辺に、鶴見は陰鬱(いんうつ)な表情で頷いた。
「そう、……アジア風邪のときだよ」

池辺がとたんに顔を強張らせる。
「アジア風邪って……インフルエンザの大流行のことですか？」
「ああ。あんときは酷かったんだ。ばたばた人が倒れてさ。そりゃあ、死んだ人間こそ数えるほどだが、あのときの寺が、ちょうどこんな按配だった気がするんだよ、おれは。光男さん、どうかね」
光男は頷いた。じゃあ、と池辺は血相を変えた。
「まさか、今度も——伝染病……」
鶴見はこれには返答せず、腕を組んで光男を見た。
「このところ、若御院が尾崎の若先生と何やら額を突き合わせているだろう。小説のほうの仕事もそっちのけで出歩いて、あちこち調べまわってる様子だ。……そういうことじゃないのかい」

「じゃあ、お父さん、お願いします」
病床の父親に一礼して、静信は信明の部屋を出る。朝食を退げに来た母親が、扉を閉めるなり息を吐いた。
「どうしたことかしらねえ。今年はお葬式ばかりで頭が痛いわ」
ええ、と静信は曖昧に言葉を濁す。

「当たり年ってやつなのかしら。あなたも注意してね。あまり無理をしないのよ」
「分かってます」
静信は言って、母屋の台所へと向かう美和子と別れた。廊下を寺務所に戻ろうとすると、途中で光男が不安気な表情をして待っていた。
「ああ——光男さん、実は」
聞きました、と光男の表情は硬い。
「太田さんの息子さんでしょう」
「ええ。太田さんはうちの墓地に埋葬ですから、よろしくお願いします。お葬式も寺でということなので」
光男は頷いて、静信の腕を軽く摑む。
「若御院、どうなっているんですか」
「どう——?」
「鶴見さんが、こんなことはアジア風邪以来のことだって」
静信は返答に詰まった。光男たちがいつまでも異常に気づかないはずがない。当然、いつかは妙だと言い出すだろうとは思っていたが、こんなにも早く核心を衝かれるとは思っていなかった。
「そう……アジア風邪……」

「何か悪い病気なんですか。最近、尾崎の若先生と頻繁に話をしているのは」
　静信は光男を遮る。
「光男さん、その件はしばらく伏せておいてもらえませんか」
「でも」
「実を言うと、敏夫にもよく分からないんです。伝染しているように見えますが、敏夫に言わせると伝染病とは症状が合わないんだそうです。もちろん、だからと言って伝染病でないとは言い切れませんが、それについては今、調べていますから」
「じゃあ——やっぱり」
「伝染病なのかどうか調べよう、ということで、まだ何ひとつ確定ではないんです。とにかく役場の石田さんと、石田さんを通じて保健所や兼正とも相談をして対処を考えていますから、しばらくその件は檀家さんには」
「それは……若御院がそうおっしゃるのなら、黙っていますが」
「お願いします。もしも本当に伝染病で、いたずらにみんなが騒ぐと、かえって病気を広めてしまいます。わたしのほうからいいと言うまでは、決して広まらないように」
　光男は不承不承というように頷き、そして吹っ切ったように顔を上げ、笑った。
「承知しました。鶴見さんにも池辺くんにもそのように言っておきます。その点は安心なすってください」

静信は頭を下げた。光男の信任がありがたかった。立ち去っていく光男を見送りながら、しかし、と静信はどこか後ろめたい気分を感じていた。
光男も鶴見らも、死者の実数を知るわけではない。檀家でない死者の訃報は耳に入らないのだから。光男らにとっては、太田は九人目の死者だ。しかしながら、その実数は十二。しかもそのうちのほとんどすべてが、突発的な急死を遂げている。数日前には健康そうに見えた者が突然、死亡する。それが十二件、続いている。それを知っても光男はああして笑ってくれただろうか。

2

いずれにしても彼は弟を屠った罪によって放逐され、荒野を彷徨うことになった。二度と戻れない光輝、荒れ果てた土地を彷徨ってなお、罪は荒野に彼を追ってきた。罪は屍鬼となって弟の姿で彼を追い、永劫の間、彼を苦しめようとした。
いや、弟の意図が那辺にあったのか、彼は知らない。彼は幾重にも苦しんだ。なぜなら、彼は弟を彼なりに愛しており、一時の衝動を憎んでいたからだ。弟は秩序に寵愛された。慈愛深く、憐れみを知り、余人に対して光輝の具現であるかのようだった弟。人々は弟を愛し、慕った。彼もまた、そうならざるを得なかった。人々はその慈愛深い

魂を殺傷せしめた彼を憎んだが、彼もまた同様にして己を憎んだ。

弟の彼を憐れむ目は、彼の憎悪と悔恨を際限なく膨らませた。彼は弟の喪失を悲しみ、その死を嘆き、殺した者を憎み、己の罪を憎むゆえに、己を憎まずにはおれなかった。悲しみと憎悪は、凍てついた風よりもなお鋭く、無限に彼を切り裂いた。

静信は溜息をついて、読んでいた原稿用紙を放り出した。少しも気持ちがついてこない。筆は上滑りを繰り返し、意識はメモに舞い戻ろうとして空転する。諦めて原稿用紙を束ね、抽斗の中にしまった。裏返しにして端を揃え、文鎮を載せ、代わりに別の抽斗からノートを引っぱり出す。後藤田秀司、大川義五郎、村迫秀正、……十人。そして新たに加わった安森奈緒と太田健治。こうしている間にも、それは外場のどこかで進行している。じりじりと断崖に向かって動いているのだが、静信たちにはその動きが察知できない。

(こんなことをしていていいのだろうか)

静信には事態を調査する資格がない。事態について言及することもできなかったから、人に話を訊こうにもできることには限りがあった。やはり一刻も早く、しかるべき筋に事態を預けたほうがいいのではないか、という気がする。敏夫とて医師ではあっても疫学の専門家ではない。門外漢の医師とまったくの素人が右往左往するより、専門家の手

に委ねたほうが迅速に確実に対処できることは明らかなように思える。
だが、とその一方で思う。
専門家が事態を詳らかにして調査に当たれば話は早いだろうが、事態が悪化する可能性は、たしかに高かった。疫病だと知れば村人は不安になる。自分は、自分の家族は大丈夫なのか。不安になった村人は、間違いなく尾崎医院に向かう。敏夫に安心を与えてもらおうとして。そうやって人の動きが錯綜すればするほど、事態は拡大する。無用の不安を与えるだけでなく、無用の危険すら呼び込むことになりかねない。
（いや……）
そもそも、まだ疫病と決まったわけですらないのだ。何が起こっているのか、確実に把握できているわけではない。疫病だという感触、まさかという思い、もしもという予想と不安、そしてそれらが何ひとつ確定ではないことに対する苛立ち。
ノートを見つめてじっと考え込んでいると、電話が鳴った。静信は椅子ごと背後を振り返り、事務机の上の電話を引き寄せた。電話の相手は書店の田代だった。
「ああ、マサさん」
お久しぶりです、と言おうとした静信の言葉を、田代は遮った。
「静信、聞いたか？　駐在の高見さんが亡くなったんだって」
え、と静信は目を見開いた。

「――高見さん？　まさか」

「それが、本当なんだよ。夕方に救急車が来てさ。何だろうと思って店の前に出たら、駐在所から高見さんを運び出すところだったんだ」

　高見の妻、秀子も救急車に乗り込んでいった。高見のところには子供が二人いるが、子供たちに訊くと、高見が突然、倒れたと言う。昨日から風邪を引いて寝込んでいたのが、手洗いに行って昏倒したらしい。ともかくも子供だけを放置しておくこともできず、田代留美が駐在所に残って面倒を見ていたが、つい先ほど高見秀子が戻ってきた。様子を尋ねると高見は死んだ、と答えた。

「とにかく奥さんも呆然としてる様子でね、――取り乱してるというか。詳しい様子を訊けるような状態じゃないんだ。なんで、詳しいことは分からないんだけど、静信たちは高見さんとも付き合いが深いから、耳に入れておいたほうがいいと思って」

　静信は苦いものを呑み下した。

「風邪を引いて、寝込んでいた？」

「うん。らしいな」と、田代の声にはなんの緊張感も窺えなかった。だが、静信はじわりと汗が浮かぶのを感じる。――嫌な予感。

「あの人はほら、駐在所に住んでいても外場の人じゃないだろう。弔組にも入ってないし、どうするのかと思ってね」

「そう……ですね」
「なんなら手伝おうと言ったんだけど、とにかく実家に連絡して、実家になんとかしてもらうって言うんで。たぶん、溝辺町の葬儀会社に頼んで、荼毘(だび)にして、という話になるんじゃないかな。とにかく、肝心の奥さんが一人にしてくれって言うんで、留美もおれも戻ってきたんだけど」
「ありがとうございます。とにかく、奥さんに連絡をしてみます」
　そうしてやってくれ、と田代は言って電話を切った。
　静信はすぐさま、駐在所に電話をかけた。だが、呼び出し音を十五まで数えたが、応(こた)える者はいない。病院にでも出かけているのだろうか。受話器を置き、改めて敏夫に電話をする。病院のほうに――夜間や休日には自宅のほうに切り替えられる――電話してみたが、敏夫は出ない。一瞬、躊躇(ちゅうちょ)して自宅に電話すると、孝江が出て木で鼻を括(くく)るように、出かけた、と答えた。
「どこに出かけたか、御存じありませんか」
「さあ。病院のほうに電話があって、それで出かけましたからね、往診じゃないですか」
　ひょっとしたら、高見の訃報を伝える電話だったのかもしれない。それで駐在所に出かけたのかも。自分も行ってみようか、迷っているうちに当の敏夫から連絡があった。

背後からは人のざわめきと、微かにディキシーが聞こえている。クレオールからの電話のようだった。

やはり敏夫は駐在所に駆けつけたのだった。そして、駐在所には誰もいない、と言う。

「近所の者が、奥さんが子供を連れて車に乗り込むのを見てる。遺体を迎えに行ったか、子供を実家に預けに行ったか、そういうことなのかもしれない」

そう、と静信は答えたが、どこか釈然としなかった。

「とにかく、詳しいことが何も分からない。奥さんが戻ってこないことには」

そうだな、と答え、静信は声を低めた。

「——あれだと思うか」

敏夫の声は、いっそう低かった。

「たぶんな」

3

カレンダーの上では九月に入ったが、残暑はいっかな衰えたとは思えなかった。

律子が病院を出ると、真昼の陽射しに灼かれた駐車場には熱気が立ち込めている。

久々にお湿りでもあるのかもしれない、茹だるように蒸した。

「うわー、暑い」
雪は言って、オモチャのようなフォルムの車に駆け寄った。車の窓は開け放したままだ。どうせ外場では車を盗んでいく者などいない。
「律子さん、暑いけどいい？」
「いいよ」と、律子は答える。商店街で買い物をして帰る、と言う律子に、雪はだったら途中まで乗せていってあげる、と言ってくれた。駐車場で炙られていた車の中は路面よりも暑いくらいだが、この陽射しに焦がされながら歩くよりは、はるかにましだ。
ありがたく車に乗り込み、商店街のはずれで降ろしてもらう。とりあえず昼食を摂ろうと、クレオールの扉を開けた。
静かなピアノの音と、クーラーの冷気にほっと息をつく。たかだか病院からここまで、車で十分もかからない。そのおかげでクーラーの利く間もなくて、それだけの間にもうブラウスの背中が濡れている。
「こんにちは」
「ああ、律ちゃん」
長谷川は、まるで律子を待ち受けていたかのように勢い込んで顔を上げた。カウンターには、書店の田代が坐っている。長谷川はその隣に律子を手招いた。
「いいところに来た。律ちゃん、先生から高見さんのとこがどうなってるのか聞いてな

いかい」
「高見さん――駐在の？　いいえ」
高見が亡くなった、という話は聞いた。看護婦たちはそれでいっそう、不安を感じている。けれどもそれきり、高見がどうした、という話を聞いた覚えがなかった。
「そうか。若先生、防犯委員だからなあ。何か聞いてるんじゃないかと思ったんだけどな。コーヒー？」
「アイスで。それとランチ。――高見さん、どうかしたんですか？」
それが、と長谷川と田代は目を見交わす。口を開いたのは田代のほうだった。
「引越しちゃったんだよ、高見さん」
律子は首を傾げた。
「だからさ、高見さんのところ、あれきり奥さんの姿が見えなくて。高見さんが亡くなったって、病院から戻ってきてそう言ってて。そのまま夜に子供を車に乗せてどこかに行ったきり、家に戻ってなかったんだよ。こっちはさ、葬式をするなら手伝いぐらいしようと思ってるし、人手が必要ないにしても線香ぐらい挙げに行かなきゃ、と思ってるじゃないか。ところが、それきり戻ってきた様子がない」
「まあ……」
「そしたら、ゆうべ、いきなり家に明かりが点いてさ。――いや、おれは家に帰ってた

から、近所の連中に聞いたんだけど。やっと戻ってきたのかと思ったら、派出所の前に高砂松(たかさご)をつけたトラックが横着けになってて、奥さんも子供の姿も見えなくて、顔を見たこともない若いのがいたってんだよ」
「運送屋ですか？　まさか引越したの？　ゆうべ？」
「そうなんだよ。それも遅い時間だよ。薬局の森さんが見たのって、十二時近くの話だったって言うからさ」
「そんな夜中に、ですか？」
「うん。その若いのが――佐々木(ささき)とかいうんだけど、どうやら後任らしいんだな。高見さん、結局実家のほうで葬式を出したらしいんだよ。で、後任が決まったから引き払うって。その佐々木ってのが奥さんに頼まれて家移りをしたらしいんだけどね。とは言え、着るものとか私物を運び出した程度でさ、家具なんかは置いたままなんだよ。佐々木さんが、自分が使うのに譲り受けたとか言ってたらしいんだけどね」
「急な話ですねえ」
「だろう？　周りに挨拶(あいさつ)もないんだから、驚くよ。こっちは高見さんには世話になってるから、それなりに見送ろうと思って待ってたのにさ」
しかもね、と長谷川が田代のあとを継ぐ。
「後任の佐々木ってのが、妙な感じらしくてさ。何て言うか――目が据わってて、あん

まり人相が良くなかったらしいんだよ。それで森さん、一瞬、後任っていうのは出任せなんじゃないかと思ったらしいんだけどね。いちおう、手帳を持ってたらしいし。三十くらいの男でね、どうやら独り者みたいだったたって」
そうですか、と律子は呟く。
「こんなにすぐ、後任って決まるものなんですね」
そうだねえ、と言う長谷川の声を聞きながら律子は内心で首を傾げた。何がどう、というわけじゃない。けれどもどこか、とても奇妙だ。突然の転居、それも深夜の。しかも高見の家族はいなくて、他人だけが立ち会って。家具を残して運び出される荷物、積み込まれるトラック——。
漠然と様子を思い浮かべて、律子はひとりごちた。
「高砂松……」
家紋にもあるあの高砂松だろう。——高砂運送。その名前には聞き覚えがある。
「うん?」
田代に促され、律子は口を開いた。
「高砂松って、それ、高砂運送ですよね」
「知ってるのかい?　そんなに有名な引越屋だったかな」
「そうじゃなくて……。うちの近所でも最近、引越があったんですよ。一日だから、つ

い最近」
上外場の篠田母娘が引越した。
「それが似たような話なんです。夜中にトラックが横着けになってて、突然、引越しちゃったんですよ。近所に挨拶もなにもないまま。あんまり唐突だったんで、夜逃げかしら、なんて言っている人もいるぐらい」
「へえ。本当に似たような話だな」
「それが、やっぱり高砂運送だったんですって。名前はすごくおめでたいのに、夜逃げに使われるなんてね、なんて言ってたから」
「高砂運送？」
ええ、と律子は頷く。
「妙な符合ですよね、それ。ひょっとして、夜にだけやってる運送屋さんなのかしら」
言って、律子は自分の言葉に失笑した。「……そんなの、あるわけないか」
長谷川も田代も、顔では笑いながら困惑したように視線を交わらせた。どうもね、と長谷川はサラダを盛りながら言う。
「このところ、どっか妙だよ、この村は。妙な引越といい、妙な余所者といい」
言って、長谷川は自分も余所者であることを思い出したかのように苦笑した。
「そう言えば、兼正も夜中に越してきたんですよね。流行ってるのかしら」

「まさか。……おまけに、死人が続くし。清水さんとこの恵ちゃんと高見さん、立て続けだろう？　広沢さんも、弔組の用が続くって言ってたしさ」

律子は思わず、長谷川の顔を見返してしまった。一瞬、長谷川が冗談を言っているかのように感じてしまったのだった。見返した長谷川の顔は大真面目だった。本当に不安を感じているよう。——だが。

律子の顔を見て思い出したのか、長谷川はああ、と手を叩いた。

「そうそう、山入だよ。山入でも年寄りが死んだんだよねえ」

律子は息を呑む。死人はそれだけではない。長谷川は知らないのだ。無理もない、付き合いがなければ訃報など入ってこないだろう。だから後藤田秀司も、その母親のふきの死も知らなくて当然、安森義一や安森奈緒の死も知らなくて当然と言えば当然のことなのかもしれない。小耳にぐらいは挟んでいるのかもしれないが、意識に引っかかっていないのだろう。

（それだけじゃない）

律子は思わず、口にしそうになった。後藤田秀司、ふき、安森義一、奈緒。山入の三人と恵、高見で総計九人。この数は異常だ。

——だが、そんな律子でさえ、正確な実数を知っているわけではなかった。

4

敏夫は電話で眠りから叩き起こされた。目覚め、ベッドに起きあがるまでに、覚悟はできていた。早朝の電話は訃報だ。それがこの夏に敏夫が学んだことだった。

「――はい」

答えたとき、敏夫の脳裏にあったのは、何が起こったのだろう、ということではなく、誰が死んだのだろう、ということだった。

二十九日には静信から太田健治の死が伝えられた。翌、三十日には高見の訃報が入った。その後にも、つい一昨日の五日、四日に外場の佐伯明（さえきあきら）が死んだと石田から連絡があったばかりだ。

「安森です、工務店の」

電話の相手は工務店の節子だった。では、奈緒から移った誰かだ、と敏夫は思った。どうしました、と訊いたものの、これは相槌（あいづち）以上の意味を持たなかった。

「進の――孫の様子がおかしいんです。ぐったりして、揺すっても叩いても目を開けなくて。真っ青で……」

「すぐに行きます。とにかく、救急車を呼んで」

はい、と涙まじりの声を出す節子の通話を断ち切り、敏夫は服を着る。家を飛び出し、工務店に車で駆けつけたときには、まだ進は息をしていた。

呼吸は浅く、早い。頻呼吸と言うより、明らかに過呼吸だった。処置をしているうちにその呼吸が途絶えた。過呼吸から来るアシドーシスだろう。敏夫が心停止を確認したところで、ようやく救急車が到着した。

「心停止。たった今だ、急げ」

救急隊員に伝える。それが聞こえたのか、節子は悲鳴に似た声を上げた。

「進は——死んだんですか」

安森徳次郎が震える手で縋りついてくる。

「まだ蘇生の望みがないわけじゃない」

答えながら、敏夫は眉を顰めた。孫の異常に逆上した徳次郎と節子。肝心の父親である幹康はそれを妙にどんよりとした目で見つめている。狼狽えている様子がなかった。

「幹康、大丈夫か？」

進を救急隊員に任せ、敏夫は幹康の側に寄る。妻と子を一夏の間に失った——失おうとしている男。だが、幹康の表情には変化が見られなかった。放心したように虚ろな視線を息子へと注いでいる。

「幹康、——おい」

何を伝えようというのか、幹康は頷いた。
「お前、気分はどうだ?」
幹康は機械的に頷き、それからふと思い出したように、呟いた。
「進、死んだの、敏夫さん」
イエスと言ったものか、ノーと言ったものか迷いながら、敏夫は幹康の顔を覗き込んだ。目に妙な光があるのは、白目が異常に青味を帯びているせいだ。間近で見ると、呼吸が浅い。脈を取ると明らかな頻脈がある。
「幹康」
「敏夫さん、ゆうべさあ……」幹康は虚ろな目をしたまま、わずか、泣き笑いとも取れる形に口許を歪めた。「進が寝言を言ったんだよ。ママ、って」
淡々と、抑揚のない声で呟いた。
「それで目が覚めたんだ。あれが……おれが最後に聞いた進の言葉になったなあ……」
敏夫は幹康の手を握った。指先が冷たい。膝の上に投げ出された腕のあちこちには奈緒の時に見たような癤が見える。
「待ってくれ」敏夫は振り返って、進を運び出そうとする救急隊員を呼び止めた。「こいつもだ。国立に運んでくれ」
徳次郎と節子が進のあとを追おうとした足を止め振り返った。

「若先生――」
「詳しいことは分からないが、再生不良性貧血か急性白血病の疑いがあると、向こうさんに伝えてくれ」
救急隊員は驚いたように目を見開き、担架を取りにいった。その間に、敏夫は注射器を出す。
「幹康、ちょっと手を」
採血をしようとして駆血帯を巻いた左腕の、ちょうど静脈の上に瘤がふたつ並んでいた。それを避けて針を刺し、駆血帯を解いて末梢(まつしょう)血を吸い上げる。
「若先生、幹康は――」
敏夫は徳次郎の狼狽(ろうばい)しきった顔を見返した。
「別に確定じゃない。最悪の場合、そういうこともあり得る、ということだから」
「しかし……」
「用心のためです。――さあ、進くんと幹康についていってやりなさい」
敏夫は末梢血を持ち帰り、その半分を田島予研に検査に出すよう、付箋(ふせん)をつけて保存庫にしまった。半分を入れたスピッツを持って検査室に向かう。ヘマトクリット値減少、ヘモグロビン濃度も減少、明らかな貧血、しかも塗抹標本を見てみると、網赤血球が増えている。

「……あれだ」
「――進くん？　工務店の坊や？」
ナース服に着替えながら、やすよが目を見開いた。律子は頷いた。
「今朝だそうです。幹康さんも具合が悪くて、溝辺町の国立病院に運んだとか」
そう、とやすよは低く、声とも溜息（ためいき）ともつかないものを漏らした。永田（ながた）清美はナース・キャップを髪に留めつけながら、深い息を吐く。
「……可哀想（かわいそう）に。けど、これはいよいよ本物だわね」
「そうねぇ」やすよが頷いた。「嫁さんと息子と旦那（だんな）と続いちゃあね。伝染病だわ」
清美も頷く。
「こないだから気になって本をひっくり返してるんだけど、何なのかが分からないのよね。どれ見ても怪しいような気もするし、どれも違うような気がするし」
「あたしらは医者じゃないんだから。……でも、あんまり見かけない症状よねえ」
答えたやすよも、やはり調べるだけは調べてみた、という顔だった。
「大丈夫なんでしょうか」
律子の問いに、やすよはあっけらかんと笑う。
「あたしたちが心配したって始まらないわよ。若先生が心得てるわ。あたしらは若先生

の言う通りに動いてればいいのよ。それが仕事なんだから。……でもまあ、酷いことにならなきゃいいんだけどね」

「これで収まればいいんだけど」清美はもう一度、溜息をついた。「下手をすると忙しくなるかもね、……これから」

「ありがたくはないけど、仕事なんだからしょうがない。病人がいれば、医者の指示に従って動く、それが務めってもんだからね。医者がなんとかする気になってるのに、得体が知れないってだけで逃げ出すわけにはいかないでしょ」

そうね、と清美は笑う。律子もなんとなく微笑んだ。年長の看護婦たちの逞しさが心強い。自分のやるべきことを心得ている、という自信と自負のようなもの。

「済みません。ちょっと、狼狽しちゃって」

やすよは屈託なく笑う。

「そりゃそうよね。まあ、せいぜい食べるもの食べて、体力をつけないとね。下手をすると、体力勝負になるかもよ」

「痩せるかしらね」

清美の茶々に、やすよは豪快に笑う。

「そうなりゃ儲けだわ。——もっとも、あたしらがスマートになってる頃には、律ちゃんなんか線みたいになってるかもしれないけどね」

律子は微笑む。
「きっとその頃は、先生、影だけを残してなくなってますよ」
「違いない」
笑いながら、律子は更衣室を出て、休憩室へと向かう。それをパートのミキが呼び止めた。ミキの背後には藤代が不安そうに控えている。
「あのねえ、律ちゃん、工務店の坊やが死んだって聞いたんだけど」
「そうみたいですね」
「大丈夫なのかねえ。……ほら、なんだか死んだのなんのって話が続くでしょう」
藤代がおろおろと口を添える。
「悪い病気でも流行ってるんじゃないかしらねえ。うちには小さい孫がいるもんで……」
律子は微笑んだ。
「先生が心得てらっしゃると思いますよ。どうしても心配なら、一度、先生に相談してみたらどうかしら」
「ああ、……そうねえ」
ミキは呟いて、藤代のほうを振り返った。藤代も頷いたが、釈然としたふうではなかった。
「なんだったらわたしから、ミキさんたちが心配してました、ってそれとなく伝えとき

ます」
「そうしてもらえると」
ミキも藤代も頭を下げる。
「先生はまだ何もおっしゃってないけど、念のためということがあるから、医療ゴミは気をつけて取り扱ってくださいね」
二人は言葉を噛みしめるようにして頷いた。

5

静信はランプの中に火を入れた。暗い明かりに廃墟と化した教会の内部が浮かび上がった。
古風な石油ランプは、そもそもここに残されていたものだった。ランプに限らず、教会の内部にはかつてここに住んでいた隠遁者の私物が残されたままだった。埃と鼠の糞にまみれた着替え、黴びてぼろぼろになった書籍、彼が自分の周囲において日用の足しにし、心を慰撫してきたすべてのものが。
静信がそもそも、ここに通うようになったのは、最初それらのものから、ここで聖堂を営み個人的な信仰のために己を捧げていた人物の、精神の断片を読みとることが楽し

かったからだった。それらはおよそ統一性を欠き、ひとつの人格を垣間見せるにはあまりにも脈絡を失っているのだが、ひとつひとつの品物に意味を探し、他のものが暗示する意味と結び合わせてみるのは興味深い作業だった。
魔術や呪いに関する書籍、あるいは歴史に関する書物、怪しげな宗教の小冊子。それらの間には物理学や生物学の本が交じり、子供向けの他愛もない教訓的な小説が交じっていたりもした。
彼が何を思ってこれらの本を収集したのかは分からない。ただ——と、静信は思う。彼が殉教者に憧れていたのは間違いがない。彼は何かに殉ずることを望んでいたけれども、実を言うと何に殉ずればいいのか、彼自身にも分からなかったのかもしれなかった。ずっとここで、帰依すべき摂理を探していた。そうでなければ、彼は直感として摑んでいた彼自身の神を、表現する言葉を探していたのかもしれなかった。
彼はここから引き出され、連れ戻されて、そこでそれを見つけることができたのだろうか、と思う。ここを発見したばかりの頃、兼正に住人の消息を尋ねたことがあるけれども、彼は戦後の混乱の中で行方不明になったまま、今日に至るもその後の消息は分からない。もしも彼が仕えるべき摂理を見つけたのだとしたら、それを知りたい、と思う。
そんなことを考えながら染みだらけの本を開いていると、かたん、と小さな音がした。

ランプの明かりの中、物音のした出入り口のほうに視線を向けると、沙子(すなこ)が顔を覗かせていた。
「——室井(むろい)さん？」
静信は驚いて本を閉じる。沙子は軽い足取りで、ベンチの間の通路を歩み寄ってきた。
「明かりが見えたから、そうじゃないかと思ったの。家の窓から見えたのよ」
「ああ、……そう」
「約束を覚えてる？　本を持ってきたの。サインをしてもらえるかしら」
静信は頷き、沙子の差し出した本を手に取った。静信が二冊目に出した本だ。まだ美本に近かったが、この著作はもう流通していないはずだ。丁寧に扱われていたのだろう。表紙を開き、遊び紙に署名をした。一時は物珍しさもあってか、檀家(だんか)の人間によくサインを求められたが、近頃ではそういうこともない。なんとなく面映(おもは)ゆかった。
「ありがとう。大切にするわ」
嬉(うれ)しそうに笑った少女の顔を、ランプの光が照らしている。
前回に会ったあと、ＳＬＥについて調べてみた。全身性エリテマトーデス。日本では膠原(こうげん)病の一種とされているが、正確には結合組織病の一種らしい。とはいえ、静信にはその結合組織というものが具体的にはどういうものなのか、イメージできなかった。若い女性に多く、発病者のほとんどを女性患者が占める。家族的に発病する傾向があると

されているが、遺伝との関係は分かっていないらしい。特徴的な紅斑に代表される皮膚症状と関節痛を主とする疾病のようだが、全身症状を伴う。特に問題になるのは腎機能の低下と心肺機能の低下だった。全身の衰弱、易感染の恐れ、脳・神経系にも病変を起こすことがある。紫外線に対して過敏で、紫外線刺激によって発病、重症化することがあり、腎機能の低下や心肺機能の低下から尿毒症、弁膜症、心膜炎を起こせば一命にかかわる。免疫異常が原因だと推定されるものの、発病の原因は明らかでなく、治療方法も確定していない。生涯にわたって闘病生活を余儀なくされ、社会や職場に復帰することが困難なことから、難病に指定されている。

　その知識のせいか、ランプの不安定な光源のせいなのか、少女の顔には陰鬱な陰影がついていた。

「顔色が悪いように見えるよ」

「そう？　――そうかもね。しばらくちょっと寝込んでいたから」

「大丈夫かい？」

「もう慣れっこだもの」

　少女は淡々と肩を竦めた。白い肌は病的なようにも見えたが、特徴的と言われる紅斑は見られない。ＳＬＥの治療はステロイド剤の内服が基本らしく、長期にわたる服用がまた重大な副作用をもたらすのだが、とりあえず沙子には副作用として著名な満月様顔

貌やバッファロー頸などの外見的な特徴も見えなかった。顔色が悪いことを除けば、ごく健康そうに見える。それが素人目にはそう見えるだけのことにしろ。
だが、と静信は思う。沙子の生命は危うい均衡の上に成り立っている。そう、命は脆いのだ、人間がそうと信じている以上に。安森進は死亡した。おそらくは幹康も生きて戻ってはこないだろう。
（幹康……）
四つ下で、近所に住んでいた。寺と安森家は関係も深い。小さい頃にはよく一緒に遊んだ。幼馴染みだと言ってもいい。
この夏、多くの村人が死んだ。知っている者もいたし、知らない者もいた。けれども幹康のように人生のあるいっときを、共有した者が倒れたのは初めてだった。例のあれなら、幹康は助からない。最後に会ったのは奈緒の葬儀の時だったか。おそらくもう、生きた幹康に会うことはないだろう。今度会うときは、幹康は抜け殻になっていて、そして自分は幹康の抜け殻に引導を渡すのだ。
「また、誰かが死んだの？」
沙子に問われて、静信は我に返った。
「……なぜ？」
「前もそうだったから。誰か女の子が死んだって。室井さんは、あのときと同じように

落ち込んでいるように見えるわ」
そうか、と静信は苦笑した。
「檀家の人?」
「そう」静信は頷き、「まだ死んだわけじゃない。けれども……危篤なんだ」
そう言ってもいいだろう。しかも回復の望みはまったくない。
「檀家なんだけれども、どちらかというと、幼馴染みと言うべきかな」
「へえ?」
静信は軽く息を吐く。
「小さい頃はよく一緒に遊んだんだよ。と言うより、遊んでほしがってついてきた、と言うほうが正解かな。四つも下だったから」
「子分みたいなものね」
沙子は控えめに笑った。
「そうかもしれないな。ぼくは子供の頃から引っ込み思案なほうでね、人見知りも激しくて、敏夫より他にあまり親しい子供がいなかったんだ」
「敏夫さん?」
「尾崎医院の院長だよ。敏夫とは仲が良かったんだけど、敏夫は負けん気が強くて。年長の子供の手下に納まる気性じゃないから、いきおい、ぼくと敏夫と二人で遊ぶ破目に

なるんだ。敏夫は年長の子供とは折り合いが悪かったんだけれども、年下の子とは折り合いが良かった。結構、理不尽なことも言うし、その時の気分で邪険にしたりもしたんだけど、それでも慕われた、というか」
「典型的な餓鬼大将だったのね」と、沙子は笑う。「でも、餓鬼大将と一緒に遊んでいる室井さんって想像がつかないわ。なんだか、子供の頃から一人で本を読んでばかりいたような印象があるもの」
「そうでもなかったよ。よく悪戯（いたずら）もしたし」と、静信は微笑む。「だいたい、言い出すのは敏夫なんだけどね。とんでもない悪戯を考案したり、無謀な遊びを発見するのが得意だったんだ。タブーに挑戦するのが好きでね。ぼくはたいがい反対するんだけど、敏夫は絶対に言うことをきかない。それでいつも一緒についていく破目になるんだ。敏夫が無茶をしすぎないようにブレーキをかけるのが自分の役目だと思っていたのかな」
「……なんだか、らしいわ」
静信はランプの明かりに目を移した。
「村に虫送りという祭りがあってね。その行列のあとをつけていったことがあるな……」
静信はなんとなく、今年の虫送りの夜のことを思い出していた。遠いようで、すぐこの間のことのような気もする。

「本当は、そういうことはしちゃいけないんだ。それは神事で、村人がついていってはいけない宗教上の理由がちゃんとある。真夜中のことだし、子供があとをつけるなんてとんでもない。けれども毎年、必ずあとをつけていく子供が出るんだね。子供というのは、そういう生き物なんだろう」

「かもしれないわ」

「いくつの時だったかな。敏夫がつけてみようと言い出してね。ぼくはもちろん反対する。幹康は――危篤になっているそいつは、ぼくと敏夫の間に挟まって、おろおろしてね。……幹康は怖がりだったんだ。すごく臆病で気弱な子供だった。だから、行列のあとをつけるなんてことは、怖いことだったんだろう。大人に見つかったら叱られる。それだけじゃなく、少し怖い雰囲気のある祭りだし。ぼくが反対すると、ほっとしたような顔をして、ぼくに同意するんだけどね、けれども敏夫が、だったらいい、一人で行くと言うと、一緒に行きたくて我慢できないんだ」

「なんとなく分かるわ」

沙子は微笑んだ。静信も軽く笑う。

「いつもそんなふうだったな。幹康は結局、おっかなびっくり敏夫についていくんだ。ぼくは仕方なく、敏夫が破目を外しすぎないようついていく。ずっとそんなふうで……」

一緒に遊ぶことがなくなったのは、いつ頃のことだろう。静信らに限らず、子供は思

春期に入って大人と子供の狭間に至ると、子供だけのグループを抜けて、同じ狭間の年代でグループを作るようになる。いつの間にか馬鹿げた悪戯や無謀な遊びをすることがなくなって、動きまわるより話をする時間が増えた。その頃には敏夫も年上の人間と折り合う術を見つけ、書店の田代や村迫米穀店の兄弟とは、ずいぶん本やレコードの貸し借りをした覚えがある。そうして静信は幹康を見かけなくなった。幹康は幹康で、別の友人を見つけ——そして大人になり、結婚して家業を継ぎ、父親になった。だが、確実にある時期、幹康とは時間を共有していたのだ。

静信は口を噤んで、村の外、どこかの病院の一室で眠っている幹康のことを思った。妻を失い、子供を失い、そして自分自身を失おうとしている——。

ねえ、と唐突に沙子が声を上げた。

「室井さんに大切な誰かがいたとして、その人を自分の望むだけ生かしたいと思ったら、どうすればいいか分かる？」

「医者になる？」

「違うわ」沙子は笑う。「殺すの」

静信は、ぽかんとした。

「自分の望むだけ相手を生かす——相手の死期を支配したいんだったら、自分の意思で相手を殺すの。そうでなければ誰かがその人を殺すのよ。室井さんの手から奪ってい

く」

沙子は言って、小声で笑った。

「面白いでしょ？　身近な人が死ぬのは辛いことよね。自分がそれを許してないのに、自分の人生から奪われてしまうなんて、とても酷いことのような気がするんだけど、それを避けようと思うと、相手を自分が殺すしかないの。わたしたち、そういう生き物なのよ」

「そう……そうだね」

沙子はベンチから立ち上がって、聖堂の闇を見渡した。

「……可愛いと可哀想って似てない？」

「うん？」

沙子は笑って振り返る。

「たとえば小鳥を飼ってたとするでしょ？　とってもよく懐いて、温かくて愛しくて、すごく可愛い」

静信は曖昧に頷いた。

「でも、どんなに可愛く思っていても、小鳥はいつか死んでしまうの。どんなにどんなに大事にしても死なないようにはしてやれない。誰にも奪われまい、自分の望むだけ生かそうと思ったら自分で殺すしかないくらい、これはどうしようもないことなの。だか

らね、可愛ければ可愛いだけ、可哀想なの。……そういう気、しない？」

「……なるほど」

「死んでしまったら可哀想だって思うことを、可愛いって言うんだわ。失いたくない、失うのが惜しいっていうのを愛おしいって言うんだと思うの。――いと、惜し」

「……うん」

静信は微かに笑った。沙子の理屈っぽいようでいて、理を欠いた意見が微笑ましかったせいもあるし、娘ほどの歳の少女に説得されている自分がおかしくもあった。

「君はいつも、そんなことを考えているのかい？」

静信が問うと、沙子はちらりと静信を見て、視線を逸らすようにステンドグラスを見上げた。

「そうね。生きることや死ぬこと――そういうことはよく考えるわ。考えないでいられないの」

どこか沈痛な声音に、静信は胸を衝かれる。沙子は重大な健康上の問題を抱えているのだ。常に生死の狭間にいると言ってもいい。愚問を発した自分に狼狽え、そしてふと思い至った。ＳＬＥの特徴のひとつに易感染性がある。免疫系に問題があるのだ。だから感染症に罹りやすく、そもそも随所に問題を抱える身体は抵抗力に欠ける。そして村には危険な疫病が蔓延していこうとしている。

「あの……」
静信はこの夜も、沙子を何と呼んでいいのか分からずに言葉を濁した。
「ここには、あまり来ないほうがいいんじゃないかな」
沙子は振り返った。
「やっぱり迷惑？」
「そういう意味じゃないんだ。ただ……野犬もいるし」
「いるという話ね。でも、わたしはまだ姿を見たことがないわ」
「夜は危険だよ、こんな田舎でもやはりね」
沙子はじっと静信を見つめ、不承不承というように溜息まじりに頷いた。
「分かったわ。家でおとなしくしてる。室井さんのテリトリーは侵さないようにするわ」
「そういう意味じゃないんだ、本当に」
「はっきり言ってくれていいのよ。物事が思い通りに行かないのには慣れてるわ」
「そうでなく」静信は言い淀み、「……これは秘密にしてもらいたいのだけど」
沙子は首を傾げた。
「御両親に言うのはいい。特にお母さんも知っておく必要があると思う。君の家のお医者さんもね。だが、村の人たちには知られたくないんだ。家の外には漏らさないでもら

いたいんだよ」
「ひょっとして、それだけ重大な秘密？」
「そうだね。今はまだ」
「いいわ、約束するわ」
生真面目な顔で頷いた少女に、静信は告げた。
「村では現在、正体不明の病気が流行っている」
沙子は訝しむように眉を顰めた。
「……伝染病？」
「その疑いが濃厚だ。敏夫は山に住む野犬か小動物——それについているノミやダニが媒介している可能性があると考えている」
「それ、危険なの？」
「危険なんだ。少なくとも、これまでに出た患者は全員、最悪の経過を辿っている。——皮肉なことだね。君たちはここに安全な生活を求めてきたのに」
「そうね。町にいるより危険だったかしら。でも、そういうこともあるわ。それ、どういう病気？」
静信は首を振った。
「よく分からないんだ、まだ。敏夫は既存の伝染病には合致しないと言ってる」

「新種?」
「分からない。新種や変異種である可能性もある、とは言っているが。なにしろ劇的に悪くなるから、詳しく調べている余裕がないんだ。都会の人と違って、村の人たちは病理解剖なんてことにも消極的だしね。それほどの設備のある病院もないし。それで詳しいことは五里霧中だ」
「そう……」
「だから、あまり不用意に出歩かないほうがいい。特にこのあたりに媒介している生物がうろついている可能性がある」
「分かったわ」沙子は頷き、小首を傾げる。「せっかく室井さんに会えたのに、残念だわ。たまにならいいかしら?」
「さあ……。実を言えば、正体不明だから自衛策も分からないんだけどね。家に閉じ籠もっていたから安全とはいかないかもしれない。たしかなことは何ひとつ言えないのだけど」
「ルーレットみたいなものね。運が悪いと捕まってしまうんだわ。でも、危険に遭遇する可能性は減らしたほうがいいのは確実よね」
「だと思うよ」
「ありがとう。母にも江淵さんにもそう言うわ。でもって家の外には話を出さない。パ

ニックになったら大変だもの。そういうことでしょ?」
静信は頷いた。
「充分、気をつけるし、ごくたまにするわ。だからまた来てもいい?」
「ぼくに許可を求めるようなことじゃないよ。けれども、本当に気をつけて」

四章

I

敏夫が溝辺町の国立病院から電話を受けたのは、九月十日、午前の診療が始まって、最初の一段落が着こうかという頃だった。
「先生、お電話です。国立の谷口(たにぐち)先生から」
律子が電話を廻してくれて、敏夫は患者に断って控え室に戻る。そこで電話を受けた。
国立の谷口は敏夫より年上の内科医だった。同じ大学の七年先輩で、だからもちろん、大学時代には面識はなかったものの、先輩・後輩の縁で何かと便宜を図ってくれる。とは言え、谷口自身は近辺の生まれではないし、溝辺町近辺に住んでいるわけでもない。谷口は国立に週に二度来る傍ら、大学で講師をしている。都会から高速に乗って通ってくるのだ。
国立病院は、ＪＡが母体の共済病院と並んで溝辺町では大きな病院だったが、内実はその程度のものだった。常勤の医者は若くキャリアがない。中央から飛ばされてやってきて、そこでキャリアを作って中央に戻るなり実家に帰って開業医になったりする。そ

うでなければ中央に居場所を失ったロートルだ。経験のあるそれなりの医者は、都会で相応の地位にありつつ、週に何度か診察日を設けてやってくる。
「代わりました」
敏夫は受話器を取る。
「ああ、尾崎くん。先日、君から廻されてきた患者なんだけどね」
先輩・後輩の仲だから、谷口をあてにして敏夫はしばしば手に負えない内科の患者――それは長期入院が必要な患者も含む――を国立に廻す。外科ならあそこ、脳外科ならあそこと、それなりのルートを持っていた。敏夫のほうには儲けはあまりないが、その代わりに何かあれば知らせてもらえる。経過についても尋ねやすいのが利点だった。
「安森幹康ですか」
「うん、そう。彼なんだけど、腎不全で本日の午前五時十六分に死亡した」
そうですか、と敏夫は呟いた。救急車に運ばれて行く幹康を見送ったとき、それが幼馴染みを見る最後の機会になるだろうということを、敏夫自身、覚悟していた。
「経過はいかがでした」
「運び込まれたときには、かなり酷い貧血が出ていたようだね。わたしはいなかったんで分からないが。クレアチニンが上昇してたんで腎不全を警戒したんだが、MODSからDICを併発してMOFに至った。詳しい経過が必要かい？」

「お手数ですが、ぜひお願いします。できれば急いで」
「勉強熱心だね、相変わらず」
敏夫は苦笑した。
「幹康は幼馴染みなんです。――狭い村ですから」
ああ、と谷口は気まずげな声を出した。
「そりゃあ、申し訳なかったな。ちょっと妙な経過でね。カルテを見る限り、当初はさほど深刻な腎障害があるとも思えなかったんだが。わたしが最初から診てれば良かったんだけど診察日じゃなかったもんだから」
「残念です。――再生不良性貧血や白血球の異常はありましたか」
「それが、なかったんだよ」
「ない？　たしかですか」
「うん。君がそう言っておいたんだろう。いちおう、こっちでもきっちり検査させてもらったんだけどね。再生不良性貧血ではなかったようだな。骨髄には異常がない。好中球は増えているが、白血球、造血細胞の形態異常もなしだ」
「そうですか」敏夫は答えながら、やはり、と思っていた。
「ファックスでいいかい？」
「結構です」

敏夫は谷口に礼を言って電話を切った。

（敏夫さん）

耳の奥に残る幹康の、どこか甘えるような声は故意に忘れようと努めた。いつまでも心に留めても始まらない。これは特別な悲劇ではない、もはや村にとっては。

幹康の訃報が入る直前、石田から下外場の男が死んだと知らされたばかりだ。昨日には静信が中外場の老女の死を報告してきた。一昨日にはこれも石田から、外場に住む会社員の死亡が伝えられている。ここに至って、事態は急加速していた。

（伝染している）

確証はないが、すでに確信になっていた。第一の感染者が汚染源になって二次感染を起こす。二次感染の患者は一次感染の患者よりも多い。それら二次感染した患者たちが汚染源になってさらに三次感染へ。――事態はそのように、感染の拡大を示している。

（スパンが短い……）

潜伏期間を一週間から二週間と見たにもかかわらず、感染が拡大していくスパンは、それよりもはるかに短かった。やはり人から人へは移らないのかも。ノミやダニが媒介していて、一両日中に発症するのかもしれない。だが、山の中の暮らし、村の住宅のほとんどは気密性が低く古い。媒介動物をどうやって根絶しろと言うのか。

敏夫は微かな悪寒のようなものを感じる。ひょっとしたらこれは、敏夫らが最初に想定した「最悪の事態」以上の災厄かもしれない。

「幹康さんが亡くなったの？」

律子の言葉に、やすよは目を剝いた。

「ええ。さっき国立から連絡があって」

そう、とやすよは湯呑みを洗っていた手を止めて厨房の流しを見つめる。

厨房は以前入院患者を受けつけていた頃の名残の代物だった。かつてはここで入院患者の食事を用意し、隣の食堂では職員も食事をすることができた。その食堂は今では休憩室になっている。一郭には、今はいない厨房の職員のための洗面所があり、休憩室があったが、休憩室のソファは昼寝のためのスペースになっていた。

この先、厨房が使われることはないのかもしれなかったが、今も、いつでも使えるように維持はされているし、律子らは時折、ここで弁当を温めたり、軽い煮炊きをすることもある。お茶を用意するための湯沸室は別にあったが、休憩するときには厨房を使ったほうが便利だ。しかも湯沸室は手狭なので、後片付けなどの際には、厨房全体を使って複数で一気にやってしまうことのほうが多かった。

やすよは、手を止めたまま考え込んでいたが、吹っ切ったように顔を上げて手を拭い

た。
「律ちゃん、悪いけど続きを頼むわね。あたしゃ先生と話をしてくるわ」
「やすよさん」
「ちょっとね、さすがに先生に事情を聞いておかないと。パートの人たちも不安に思ってるみたいだからさ」
言い残して、やすよは厨房を出て行く。しばらくしてから戻ってきた。
「律ちゃん、今日の午後は用がある？」
「いいえ」
「じゃ、終わってから残ってくれるかしら。ちょっとミーティングするんで。お昼は先生がお弁当を取ってくれるそうだから」
はい、と答えながら、律子は「きた」と思っていた。敏夫から説明があるのだろう。それを聞きたいような、聞きたくないような気がした。聞けば確定してしまう、という気がする。律子たちが想像で言っているのと、医師である敏夫が言明するのとでは訳が違う。
緊張して片付けを終え、仕事に戻った。顔を合わせる職員の誰もが、同じように緊張した様子だったけれども、誰も何も言わなかった。妙な緊張感の流れる中、午（ひる）になったが患者の診察が終わらない。最近、じりじりと昼休みが遅れる傾向にあった。患者が多

いのだ。特に病気が多いという印象ではない。いつもなら病院に来もしないような、些細な症状の患者がやって来ている、という印象。そういう患者に限って、長々と敏夫に話しかけ、診察時間を引き延ばす。
（不安なんだ……）
律子はそう思う。患者が――村人が、異常に増えた死を意識しているにしろ、いないにしろ、何かがおかしいと分かっているのだ。健康や生命は、意外に簡単に損なわれるものだということを、漠然と意識している。それが村人の間で蔓延しつつあるのだろう。そしてこれは、きっとこの先、今よりももっと増えていく。
交代で昼食を摂りながら、律子らは患者をこなしていった。最後の患者の診察が終わったのは、二時を過ぎてからだった。後片付けを終え、休憩室に向かうと、すでに全員が揃っている。
「律ちゃんで最後か？」敏夫はテーブルに積んだ書類を前に笑う。「ドア閉めて、坐って」
いつもの調子の声だった。それに安堵しながら、律子はドアを閉め、空いた椅子に坐る。休憩室の中には、クーラーの冷気と、それ以上にひんやりとした緊張が漂っていた。
「もう知っているかもしれないが、今日、工務店の幹康が亡くなった」敏夫はそう切り出して、武藤と十和田のほうを見る。「ちょっと武藤さんたちには分かりづらい話にな

るかもしれないが、不明なことがあれば質問してくれていい。辛抱してくれ」
武藤と十和田は頷く。
「幹康が亡くなって、これで、八月以降の死者は十九人になった」
それは爆弾のようだった。律子は背筋を伸ばした。そんなに、と言う声は複数のもの、ひょっとしたら律子自身も、無意識のうちに声を上げていたかもしれない。
「そんなにいたんだ、実は。中にはうちとは一切関係なく、溝辺町で倒れて病院に運ばれ、息を引き取った者もいる。とりあえず役場に死亡届が出ている者を勘定すると、幹康で十九人目。——異常事態だ」
律子は軽く息を呑んだ。
「しかも幹康は、工務店では奈緒さん、進くんに続いて三人目の死者だ。ひょっとしたらみんなも薄々気づいていたかもしれないが、伝染病の可能性がある」
「先生、たしかなんですか」
武藤が身を乗り出した。
「死人が出ているのはたしかだ。それも明らかに超過死亡で、しかも次第に数が増える傾向にある。おそらく伝染病だと思って間違いないと思う」
言って、敏夫はざっとこれまでの経過を説明した。具体的な死者の名前とその死亡原因。

「ちなみに、工務店の奈緒さん、幹康の血液を検査させた結果では、伝染病に対して陰性だ。検査結果から言うなら、二人はいかなる伝染病にも感染していない。培養検査も依頼しているが、こちらの結果はすべて出揃っているわけじゃない。培養するには時間がかかる。結論が出るのは、もう少し先になると思うが、少なくとも現在の時点で分かる限り、二人は急に一命を失うような微生物には感染していない。村迫三重子さんも同様だ。警察から戻ってきた結果では完全にシロだ」

あの、と十和田が声を上げた。

「結果が出てないのに、伝染病じゃないと断言できるんですか？　さっき先生は伝染病だ、と言ったと思うんですけど」

「うん、こういうことなんだ。――伝染病の原因になるのは病原微生物だ。これらの病原微生物に生体が冒されることを感染症と言う。これら感染症のすべてに伝染性があるわけだが、このうち、人体に重大な被害を与え、社会にとってもその影響を無視できないものを特に伝染病と言うんだ。感染症の中から伝染病として切り分けて、特別に警戒している。――ここまではいいか？」

「ああ……はい」

「だから伝染病とは、厳密には感染症のうち『伝染病』として定められたもののことだと言えるわけだ。今、村で流行（はや）っているやつは、この伝染病には該当しない。症状から

言っても検査結果から言っても完全にシロだ。だから伝染病ではないんだが、患者の増加する様子を観察していると、明らかに伝染していると考えられる。しかも結果は重大で、患者の数も多い。既存の伝染病ではないが、社会的に重大な感染症であることはたしかなんだ。人や社会に及ぼす影響力を考えると、伝染病だと言ってもいいと思う」

「ああ、分かりました」

敏夫は頷き、

「既存の伝染病ではないし、感染症ではない可能性もわずかだが残っている。ひょっとしたら、何らかの物質に対する中毒やアレルギーということも考えられるからな。とにかく、まだ何が起こっているのか分からない、というのが正確なところだ。病因も分からないし、伝播(でんぱ)する方法も分からない」

やすよが手を挙げた。

「新種の伝染病って可能性もあるんじゃないですか」

「新種の可能性は、もちろんある」

「どうするんですか、これから」

武藤が途方に暮れたように言った。

「それが分かればね。とにかく、一連の死の原因をつきとめないことには手も足も出ない。治療や予防ができないだけじゃなく、行政に救済を求めることもできない」

「行政に調べてもらうわけにはいかないんですか？」
「そのつもりだ。とは言え、そのためには、それなりにデータを取りまとめて資料を揃えないといけない。そうやって、行政に調査の必要があると認めさせなければ。これについては、保健係の石田さんと検討中だ」敏夫は言って苦笑した。「これが既存の伝染病や、その変異種なら話は早いんだがな。今のところそういう結果が出ていないから、説得力のある資料を作るところから始めないといけない。にもかかわらず、確実に伝染するという証拠もまだないし、一連の死が同一の原因によるものだという証拠もない。かなり時間がかかると思っておいたほうがいいだろう」
「行政はこういうとき、対応が遅いもんですからねえ。よほどの証拠を揃えてせっつかないと……」
武藤は深い溜息をついた。全員が同意するように息を吐いた。
「今のところ分かっているのは、それは貧血で始まるらしいということだ。少なくとも、清水恵ちゃん、安森の奈緒さん、幹康の三人は当初、貧血以外にはこれと言った不調はなかった。貧血が起きている、だから顔色が悪い、倦怠感がある、食欲がない。周囲は夏バテだろうか、風邪だろうかと思って見過ごしやすいということのようだ」
「貧血の原因は何なんですか？」
清美の問いに、敏夫は首を振る。

「それが分からないんだ。検査結果からすると、正球性正色素性貧血だ。少なくとも、鉄欠乏性貧血や悪性貧血などではない。造血障害ではなさそうだ。国立では幹康の検査をしているが、再生不良性貧血でもないし、白血病でもないだろうと言ってきている。検査結果からすると、出血か溶血のせいで貧血が出てるんだと思うんだが、貧血の原因になるような内出血は見られない」

下山が頷いた。

「それでCTを使って、あちこちを探してたんですね。——そうです、内出血はないです。少なくとも安森さんの奥さんには、なかった」

敏夫も頷く。

「少量の出血が持続的に続いている場合、X線や超音波では出血箇所を見つけられないこともあるが、この場合、それはないと思う。なにしろ急激に増悪するからな。これまでの事例から考えると、数日以内に決着がついてしまう。それくらい進行が速い」

「じゃあ、溶血ですか?」と、やすよが訊いた。

「消去法で行くと、溶血しか残らないんだが。しかし溶血の場合には、ビリルビンとLDHが上昇するはずだ。なのに初期段階では、それは見られない。クームス試験の結果も陰性で、少なくとも自己免疫性の溶血でないことはたしかだ」

「その——何とかが」武藤は言う。「上昇しない溶血ってのはないんですか」

「なくはない。溶血には血管内溶血と血管外溶血があるが、血管内溶血の場合、血清ビリルビンやＬＤＨは上昇しない。その場合は、血漿中にヘモグロビンが出たりヘモグロビン尿が見られたりするはずなんだが、奈緒さんにも幹康にもこれはなかった。一方、血管外溶血の場合には、ビリルビンやＬＤＨの上昇が起こることが多いが、これは必ずというわけではないらしい」

武藤はひどく困惑したように唸った。

「とにかく、溶血の可能性は高いと思う。それも先天的なものじゃない、後天的なものだ。免疫性のものではなく、補体の感受性が異常を起こしているのか、あるいは何らかの原因で赤血球が破砕されているのか、あるいは、薬剤や毒のせいかもしれない」

「毒ですか」

やすよが言うと、敏夫は頷く。

「蜘蛛毒や蛇毒、蜂毒が原因で溶血が起こることはあるらしいな。蛇や蜂なら、患者にせよ家族にせよ、刺されたのを覚えているだろうが、蜘蛛ということはあり得るし、他の昆虫が何らかの原因で溶血を起こすような毒を得た、ということもあり得る。——あとは薬剤。サルファ剤やサリチル酸、鉛や砒素の影響でも溶血が起こるものらしい。この場合は、土壌や水、あるいは食物が汚染されているということだろうが、患者の出方を見ると、これは非常に可能性が低いと思う」

「既存の伝染病では？」
「マラリアが代表的だが、マラリアではないだろうな。マラリアに特徴的な高熱が見られない。変異種だと考えることもできるが、変異種でもマラリアの検査に関しては、陽性の反応が出るはずだと思うんだが」
「患者さんが亡くなるのって、だいたい夜のうちですよね。朝いちばんに知らせが来るじゃないですか」清美が言う。「ＰＮＨってことはないですか」
「限りなく疑わしいと思ってる」
　ＰＮＨ、と武藤が呟いて、やすよがこれに答えた。
「発作性夜間ヘモグロビン尿症だったかしら。ただ、ＰＮＨはゆっくり進行するって本には書いてあるんだけどね。それの激しいやつかしら」
　清美は頷いた。
「ＰＮＨだと、汎血球減少が起こるんですよね。でもって、奈緒さん、全部の血球が減ってたじゃないですか。そのせいで感染症を起こしやすくなるし、出血傾向が出たり血栓ができたりする。奈緒さんって心不全でしたよね。そこから来る肺水腫」
「血栓が原因の心不全かしらね」
「ということはあり得るでしょ。あと、腎不全で死ぬことがあるって本には書いてあったけど。後藤田ふきさん、腎不全ですよね」

敏夫は苦笑した。
「よく宿題をやってるな。恐れ入った」
やすよと清美は声を上げて笑う。お互いがお互いを指さして、自分にはそんな気はなかったのだが、この人が、と相手のせいにする。敏夫も笑って、
「工務店の幹康も腎不全で死亡してる。病院に担ぎ込まれた当初、ＢＵＮが上昇してるんだ。クレアチニンは正常値の範囲内だったんで、最初、医者は暑さのせいで脱水症状を起こしてるんだと思ったようだが、のちに血尿が出て、顕著な腎不全の兆候が現れた。医者のほうはこれに手当てをしたんだが、結局、腎不全が契機となってＤＩＣを併発、容態が急転して死亡している」
ＤＩＣって何ですか、と十和田は聡子に訊いている。聡子が答えあぐねているうちに、清美が答えた。
「播種性血管内凝固症候群。要は血液の凝固異常ね」
「うちの看護婦は有能だ」敏夫は笑う。「ただ、結果として死亡原因は尿毒症だが、腎臓だけでなく、肺や肝臓にも障害が出ている。最初に呼吸不全が起こってるな。最後には肺炎も併発してたようだし、肝機能もはなはだしく落ちてる。死亡したのが尿毒症のせいだから腎不全が前面に出ているだけで、これで呼吸障害で死亡してれば肺不全と言われてたんだろう」

「多臓器不全——MOFですね。今は二次性MODSとか言うんでしたっけ」
清美の言に、やすよも頷く。
「とにかく、全身がガタガタになっちゃうってことよね。最初に特徴的な症状は貧血で、どんどん悪くなってMOF。問題はそこまでに、どれだけの猶予(ゆうよ)があるかってことだわ」
やすよは言って、敏夫を見る。
「最大で三日、というところだな」
やすよは大きく天井を仰いだ。
「三日以内になんとかしないと、手に負えなくなるってことですね。何が起こってるのか調べる暇もなけりゃ、治療法を探してる間もない。……おおごとだわ、こりゃ」
「感染方法は何です？」
清美に問われて、敏夫は首を傾けた。
「それがよく分からない。静信に患者同士の関係を調べてもらってるんだが、どう考えても接点のなさそうな患者がいるんだ」
「直接感染ってことは考えにくそうですね。清水さんとこも、被害に遭ったのは恵ちゃんだけだし。丸安製材は義一さんだけでしょ。丸安なんて、義一さん、寝たきりで下の世話まで家族がやってたんだから、真っ先に家族に移りそうなのに」

「あたしたちも、でしょ」と、やすよは茶々を入れる。「訪問看護に行ってたんだから。あたしたちがこうして雁首並べてられるんだから、直接感染はないでしょ。飛沫感染もないわよね。血液感染ってことはありそうだけど。あたしたちは手袋するけど、家族はしてなさそうだもんね」

「だったら、それこそ丸安の家族に被害が出て当然でしょ。それがないんだから、血液感染ってこともないいんじゃないの」

「じゃあ、媒介動物？　そりゃ、本当に大変だ」

「媒介動物なら、もっと犠牲者が出た場所が集中するんじゃないの。もう村全体で出てるって感じじゃない。むしろ発症率の問題じゃないの？　感染しても発症率が低いんじゃないかしら。続く家族と続かない家族がいるのは、体質の問題じゃないの？」

「そうねえ……」

「続く家族と続かない家族、か……」敏夫はひとりごちる。「まあ、ここでそういう話をしても始まらない。とにかく、もっと症例が集まらないことにはな」

「そうですねえ」

「今のところは媒介生物を疑っている。それが最も可能性が高そうだ。ただ、最近の患者の現れ方を見ていると、家族に集中して患者が現れることはまれだ。後藤田さんのところや工務店の場合のほうが例外的だな。どうやら感染率、もしくは発症率はあまり高

くない、とは言えそうだ。だからって気を抜くなよ。とにかく手洗いと手袋、これは徹底しとくように」

「それから医療ゴミの取り扱いですね」

清美が言って、敏夫は頷く。

「みんなも心配だと思うが、気をつけていれば予防は可能だと思う。自分の身を守るためでもあるし、病院を汚染源にしないためにも、充分に気をつけてほしい」

敏夫の言葉に、誰もが頷く。

「それから、このことは広めないように。まだ何ひとつたしかになったわけじゃないんだからな。無用の混乱を引き起こしても益がない。しかるべき処置は、おれと石田さんとでやるから、黙っているように」

これにも、全員が頷いた。

2

安森淳子(じゅんこ)は、自分がどういう顔をすればいいのか分からなかった。幹康の葬儀がじきに始まる。祭壇の前には徳次郎と節子が憔悴(しょうすい)しきった顔を深く面伏(おもぶ)せていた。まるで互いしか縋(すが)る者がない、というようにしっかりと手を握り合っているのが痛々しかった。

淳子の夫の和也は、仲の良かった親族を亡くして悲嘆に暮れている。いや、むしろ呆然としているようだった。呆然とするのは淳子も同様だったし、もちろん悲しくもあった。だが、工務店の葬儀はこれで三度目だ。最初に奈緒が死に、それから進が、そして幹康が。奈緒が死んだとき、声を上げて泣いた淳子は、三度目の今日、悲しみより深い困惑を持て余している。

それは舅の一成も同様だったようだ。控えの間から遠目に徳次郎と節子を見やり、渋い顔をして首を傾げた。

「どうなってるんだ、一体」

そうね、と溜息をついたのは、姑の厚子だった。

「立て続けに三人も。あたしはもう、かける言葉がなくって」

「まったくだ。だが、こりゃあ何かおかしくないか」

何がです、と厚子は瞬いた。一成はさらに渋い顔になった。

「続きすぎるとは思わんか。叔父さんのとこだけじゃない。親父も、山入も。まさか、悪い病気でも流行ってるんじゃないだろうな」

淳子はあたりを憚るような一成の低い声に、背筋を強張らせた。やめて、と厚子はさらに低い声を上げる。

「そんなことを口にしないで」

「しかしな、前にも若御院が来て、色々と親父のことを訊いていったろう。見舞客がどうとか。あれは、若御院もそれを考えてのことじゃなかったのかな」
「やめてください、ってば。うちでも葬式を出したことを忘れないで」
「忘れてない。だからこそ言ってるんじゃないか。親父を入れたら四度目だぞ。これで墓地に四本目の真新しい墓が建つんだ」
「お義父さんが変な病気のはず、ないでしょ。人に移るような病気だったら、世話してたあたしたちに、とっくに移ってますよ」
ねえ、と同意を求めるように厚子に見つめられ、淳子は釈然としないながらも頷いた。
「親父は、三人とは事情が違うだろう」
「違いますよ。もう長患いだったんだから。でも、余所の人から見たら違いなんて分からないわ。変に伝染病だなんて話になったら、お義父さんのせいにされちゃうわ。だから軽々しくそんなことを口にしないで」
しかし、と言いかけて一成は呻いた。
淳子は祭壇とその側の徳次郎夫婦を見比べた。そう、義一はもともと具合が悪かったのだし、それも他人に移るような病気ではなかった。だが、何かの伝染病だと考える以外に、立て続けの不幸を説明する方法があるだろうか。
淳子は不思議に、盆の初め、死んだ奈緒と材木置き場で話をしていた夜のことを思い

出した。正確には、桐敷正志郎に会ったときの気分を。なぜだか分からない。自分が取り返しのつかないことをした気がして背筋が寒かった。それと同じ気分がする。――そう、取り返しのつかない何かが動き始めてしまった、という気分が。

かおりは昼食時、茶の間のカレンダーを何気なく見ていて、今日が九月十一日であることに改めて気づいた。九月十一日、日曜日。十一という数字。一がふたつ。八月の十一日だった、恵がいなくなったのは。あれから、一月が経ったのだ。

とたんに胸のあたりが締めつけられるような気がした。夏休みの間、頻繁にあった気分だ。九月に入って新学期が始まって、それでようやく忘れた気がしていたのに、ささいなことを契機にして、こうしてまた甦る。

喉許に何かがつかえたような気分で、かおりは口の中のものを呑み下し、箸を置いた。食事が喉を通らない。――と言うより、恵のことを思い出すと、食事をしたり学校に行ったり台所を手伝ったりする、そういう日常的な行為の何もかもに気後れがした。それは、たとえば学校の朝礼で、笑うべきじゃないところで笑ってしまったときの気分に似ている。とても不謹慎なことをしてしまった感じ。一抹の後ろめたさ。

かおりが箸を置いたのを見とがめて、母親の佐知子が険のある顔をした。

「かおり、ちゃんと食べなさいよ」

促されて頷いたものの、喉に小骨が引っかかっているような気がする。ずっとこうだ。何気なくテレビを見ていても、こんなことをしていていいのだろうか、と思う。クラブに行っても授業を受けていても、恵が死んだのに、という思いから逃れることができなかった。テレビや本や友達の会話が楽しくて、声を上げて笑ったり、心底楽しんだりした自分に気づくと、恵の死を失念していた自分が、とてつもなく薄情で非道な人間のように思えて居場所のなさを感じてしまうのだった。

昼御飯を掻(か)き込んでいた昭(あきら)が、かおりのほうをチラリと見て「元気、出せよな」と言う。

「うん……」

佐知子も軽く溜息をついた。

「昭の言う通りよ。ショックだったのは分かるけど、いい加減に元気を出しなさい」

そうだね、とかおりは呟いた。けれども忘れられない。十一日、恵はいなくなった。十二日のまだ暗いうちに見つかった。十三日、お見舞いに行った。それが恵と会った最後になった。十四日、かおりは何も知らなかった。恵が死ぬほど悪いなんて夢にも思わずに、ありふれた夏の一日を過ごした。そして十五日、突然電話がかかってきた。

「恵ちゃんだって、あんたがそんなふうなのを見たら悲しむわよ。恵ちゃんのぶんも頑張らなきゃ」

かおりは俯いた。何度、佐知子にそう言われただろう。かおりが悲しんでいては、恵も悲しむ。そんなことでは安心して成仏できない。恵は哀れにも死んでしまったのだから、これからは、かおりが恵のぶんも生きなくてはいけない。恵が手に入れられなかった様々な喜びを、かおりが代わりに手に入れるべきなのだ、と。

そうだろうか、と思う。本当に恵はそんなことを望んでいるだろうか。それはひどく身勝手な言い分に聞こえる。恵だって、かおりが幸せになるのを見るより自分が幸せになりたかったに違いない。自分が死んだのに、友達が悲しんでさえいなかったら、そちらのほうが何倍も辛いのではないだろうか。佐知子の言葉は、まるで「片付けなさい」と言っているように聞こえる。死んでしまった人のことなんて、いつまでも大事にしてないで、片付けて捨ててしまいなさい、と言っているようだ。かおりにはそれが、恵に対する裏切りのように思える。佐知子にそう言われれば言われるほど、自分だけは恵のことを忘れたりしない、「片付ける」なんてことはしないのだ、と思わないでいられない。

軽く手を握って顔を上げると、卓袱台の向こうから父親が心配そうにかおりを見ていた。かおりはちょっと笑って箸を取る。食欲がないわけではないけれども、食事を続けることに抵抗があった。それは「片付ける」ことの一種だ、という気がする。

「そう言えばさ」と、昭が誰にともなく呟いた。「昨日、下外場のどっかで、また人が

死んだみたいだな。忌中の提灯が出てた」

佐知子は眉を顰める。

「あらやだ。……また？」

昭は妙に重々しく頷く。父親がそんな昭を見て、まるで苦いものを口に含んでしまったような顔をして目を逸らした。

「なんか変なんだよなあ。恵だろ、それから製材所の康幸兄ちゃん。その前にもさ、山入で三人も死んだじゃないか。なんでこんなにいっぱい、人が死ぬんだ？」

「そういうこともあるのよ」と、佐知子の声は素っ気ない。「死に事ってのは続くもんなの。とは言え、もういい加減にしてほしいわよね。こう続いたんじゃ験が悪くって」

「そういう問題かなあ。なんかさあ、良くないことが起こってるって感じがするんだよなあ、おれ」

「馬鹿なことを言わないで」佐知子は大仰に顔を歪めた。「山入の人たちはお歳だったんだし。康幸さんだって恵ちゃんだって病気で死んだんでしょ。別に殺されたわけじゃないんだから」

そうだけど、と呟く昭に目をやって、田中は口の中のものを呑み下した。中埜渡のことだ、と分かった。下外場に住む中埜が死んだ。昨日、死亡届が出されて、田中は石田にそれをコピーして渡した。そうやって夏以来、渡したコピーは十九枚にも及んでいる。

しかもこのところ、ペースが速い。素人目にも事態が加速しているのが分かった。出張所でも何かがおかしいという声が上がっている。尾崎医院の敏夫と石田が頻繁に連絡を取っているが、そのせいではないのか、と囁かれていた。誰も声を大にしないのは、所長の視線を慮ってのことだ。出張所の所長は外場の人間ではない。町役場から任命されて村外から通ってきている。石田は所長を無視する形で敏夫と行動しており、職員の誰もがそれを分かって口を噤んでいた。外場には外場のルールがあって、それでつつがなく動いている。村外者である所長は、三役を中心に編成された村のシステムの中に居場所がない。完全な部外者だが、所長には所長としての面目もあり立場もある。だから所長を通せば、かえって事態はスムーズに動かなくなることを出張所の誰もが心得ていた。

　そもそも村だった頃の体質を今も引きずっているのだ。溝辺町に合併されていながら、村は未だに独自の存在であろうとし、町の干渉を拒もうとする傾向がある。町のほうでもそれを了解していて、どこか放任しているような気配があった。何事かあっても、所長は通さず、ひいては町にも通さず、とりあえず蚊帳の外に置いておく、そういう暗黙の了解が出張所にはある。そうしているうちに兼正を通じて町を経由して所長に話が通る。それで初めて出張所の足並みが揃う。

　とは言え、十九枚の死亡届は、田中の胸ひとつに納めておくには重すぎた。特にこう

して、自分の妻が事態を軽視しているのを見ると、危機感が高まる。昭のほうが正しい。外場は変だ。そう言ってやれない自分に焦りを感じる。

重い息を吐いて顔を上げると、かおりと視線が合った。かおりは恥じるように俯く。田中が、気落ちしているのを責めているのだと思ったのかもしれなかった。いかにも不承不承、というふうに箸を使い始める。

無理をする必要はないのだ、と思う。かおりは友人が死んだことが悲しいのだ。悲しいという思いは、かおりの中に自然に湧き上がってくるもので、それを意思の力でどうにかできるものでもないだろう。悲しむな、と周囲が言えば、かおりはそれを隠すしかなくなる。佐知子のように元気を出せ、と命じることには害こそあれ、益はないような気がした。だが食事はしたほうがいい。体力はつけておくに越したことはない。――田中はそう思い、あえて口を挟まなかった。

元子はいつものように家を出て、遠目に葬式の行列を見た。輿の上に棺が載せられ、大勢の人間に担ぎ上げられて末の山のほうへと向かっている。

なんとなく親指を握り込んで隠した。元子の両親は二人とももう死んでいて、そんなことをする必要もないのだけれども、葬式の行列や霊柩車を見るとそうしないではいられない。隠した親指は今では、子供たちであり、夫や舅姑や――そんな家族の象徴

なのかもしれなかった。
　国道に出て、例によって感じる不安を堪えながら「ちぐさ」へと向かう。店に入ると、喪服を着た客が数人、見えた。埋葬式に参加しない会葬者が流れてきたのだろう。元子は少し胸を押さえた。きっと彼らは店に入るとき塩を撒いたりはしてないだろう。葬式で拾った何かは店の中にまでついてきているのだ、という気がしてならなかった。
　そんな元子を励ますように、カウンターの中から加奈美が笑い、軽く手を振る。元子は頷いてカウンターの中に入り、仕事にかかろうとしてきょとんとした。調理台の片隅の、客の目からは死角になる位置に、紙ナプキンを敷いてそこに塩が盛られていた。元子は、加奈美でもこんなことをするのか、と思った。
　目を丸くして加奈美を見ると、加奈美は会葬者の群を目線で示して、照れたように肩を竦める。
「なんとなくね。気持ちの問題」
「そうね」と、元子は微笑んだ。
「なんだか続いてる感じがして。ちょっと縁起担ぎになっちゃうわね」
　そう言えば、加奈美の母親と仲の良かった誰かが死んだ、という話を聞いた。山入でも不幸があり、常連客の娘も死んだ。夫が父親の同僚だから悔やみに行っていた。例年にない暑い夏だとはいえ、こうまで続くと、たしかに縁起のひとつも担ぎたくなる。

「……きっともう終わるわ」と、元子は小声で言った。「夏の猛暑も終わりがないように見えたけど、さすがに朝晩は涼しくなってきたもの」

そうね、と加奈美は笑った。

「葬式？　中埜の息子？　——あらまあ」

タケムラの店先には十年一日の如く、老人たちがたむろしている。大塚弥栄子の知らせを聞いて、広沢武子がすっとんきょうな声を上げた。

「あそこは爺さんのほうが酒飲みで、何度も倒れてたのにねえ」

「そうなのよ。中埜で葬式だって聞いたとき、わたしも爺さんがとうとう酒に呑まれたんだと思ったのよ」

武子は頷く。

「肝臓壊して、片足を棺桶に突っ込んでるようなもんなのにねえ。そういうのに限って、周囲に迷惑かけながら長生きすんのよ」

違いない、と笑った年寄りを、タツは冷ややかに見る。まったく、おめでたいことだ。この連中はこのところ葬式が続いていることをどう思っているのだろう。内心でひとりごちているタツの目の前を黒塗りのハイヤーが通っていった。立派な車だったから、おそらくは中埜じゃない。ついさっきも、立派な外車が通りがかって寺への道を訊いてい

った。工務店の葬式が寺であるという。おそらくはそちらに出る弔問客のものだろう。
思っていると、まだまだ夏めいた陽射しの中、伊藤郁美がやって来た。郁美は通り過ぎるハイヤーを見送り、これ見よがしに顔を顰める。
「また葬式かしらね」
「中埜で葬式なんですって」
武子が入手したばかりの情報を開陳する。
「中埜？」
大塚弥栄子が頷いた。
「そう。下外場のはずれのほうの家よ。そこの息子が死んだのよ。働き盛りなのにねえ」
郁美は鼻を鳴らし、薄く笑った。
「今年の夏は葬式ばっかりだわ。だからろくなことにならないって言ったのよ」
「あんた、毎年そう言ってるじゃないかい」
佐藤笈太郎が、脂で黄ばんだ歯を見せて笑った。いかにも汚れた前歯は自前のものだ。笈太郎はそれを自慢にしている。
「嘘よ、そんなの。別に毎年、言ってるわけじゃないわ。今年は特別。こんなに葬式が多いじゃない」

「仕方ないわよ。年寄りばっかりなんだからさ」武子が言うと、弥栄子も笑う。郁美はそれを底冷えのする目でねめつけた。

「よく笑ってられるわね。なにが年寄りばかりよ。弥栄さんのところだって若いのが死んで、葬式が出たばっかりじゃないの」

「うちじゃないわよ。製材所の話でしょ。大塚製材とはたしかに縁続きだから葬式には行ったけどね。縁続きったって、縁は切れてるもの」

弥栄子は手を振る。武子と笈太郎が心得たように頷いた。

「妙な新興宗教に入れあげちゃって、何かと言うとうちにまで勧誘に来るんで往生してるのよ。寺なんかあてにしてると、ろくなことにならないなんて言って、それで自分のところの孫が死んでりゃ世話はないわ」

笈太郎が深々と頷いた。

「お寺さんを粗末にしたから罰が当たったんだよ。そうなると思ってたよ、おれは」

まったくだわ、と弥栄子は笑う。

郁美が鼻を鳴らした。

「信心たって、ちゃんとした神様を信心しなきゃ意味がないからね。あたしは寺を崇めてたからって、御利益があるとは思わないけど。まあ、製材所がろくでもないのにたぶらかされているのはたしかだわねえ」

はいはい、と武子は言って郁美を遮った。このまま放置しておけば、怪しげなことを言い出すのに決まっている。
「まあ、葬式が多いのはたしかよね。こう続くと、次は自分の番のような気がしてびくびくしちゃうわ」
「あんたは大丈夫よ。何とかは世にはばかるって言うでしょ」
「そうなんだけどさ」と、武子は笑ったが、郁美は目をひたと宙に据える。
「兼正が越してきてからよね」
タツは目を見開いた。
「何を言い出したんだろうね、この人は。兼正が越してきたのは、山入で不幸があったあとだよ」
「でも、家が建って以来よ。あの場所は良くないのよ。造作しちゃいけなかったの。それに山入は関係ないのよ。あれは村迫の家の問題なんだから。義五郎さんは村迫の不運に巻き込まれたんだもの。そのあとに葬式が続いたのは、兼正が越してきてからでしょう。下外場で高校生が死んで」
「ああ、清水の徳郎(とくろう)さんとこの孫娘」
「それから立て続けじゃない。葬式があって、なんだか始終、救急車が出入りしてるのを見るわよ。兼正よ、兼正。絶対に何かあるわよ。あの連中が厄を呼び込んだんだわ」

タツは溜息(ためいき)をついて首を振った。また始まった、と独白する。
だが、葬式が多いのは事実だ。郁美が思っているより、ここに集まる老人が思っているよりはるかに多いのではないかという感触を、タツは得ている。
（何かが起こってる……？）
そうかもしれない、と胸の中に重いものが淀(よど)んでいく気がした。今年の夏はどこかおかしい。——いや、近頃の外場は変だ。それだけはたしかだという、直感があった。

夏野(なつの)は、武藤に行く、とだけ両親に声をかけて家を出た。数学でどうしても解けない問題がある。武藤兄弟は——徹(とおる)の妹の葵(あおい)も含め——教師としてはあまり頼りにならなかったが、保(たもつ)は虎(とら)の巻の収集家だ。ひょっとしたら一年の時のものがあるかもしれないと思いついた。高校は違うが、幸いなことに使っている数学の教科書は同じだ。
まだまだ残暑が厳しい。うんざりしながら青い空を仰いでいると、さほど遠くないところで鐘の音がした。脇(わき)の道を覗(のぞ)き込むと、道路際(ぎわ)の家から白い布で覆(おお)った棺が運び出されるところだった。
まただ、と夏野は足を止めた。その家が何という家なのかは知らない。ずいぶん近いな、とだけ夏野は思った。山入、恵、そしてそのあとにも両親が二度ばかり弔組の用で出ている。これで五軒目ということになりはしないか。それも一月(ひとつき)程度の間に。

昨年もこうだっただろうか、と思う。夏野は外場に越してきた昨年、葬式を見かけた覚えがなかった。今年の夏まではゼロだったのに、八月に入って以来、いきなり立て続けに葬式を見る。一月に五軒ということは、均せば一週間に一軒以上の葬式があった勘定になる。これはどう考えても多すぎはしないだろうか。

首をひねりながら、武藤に行った。保の部屋に上がり込んで、葬式があった、と告げたが、保は別に気を惹かれたふうでもなかった。

「なんか、葬式が多いのな」

夏野が言うと、保は「そうか?」と段ボール箱の中を探りながら気のない返事をした。

「こんなもんなんじゃねえの? 誰かが死んだとか、死にそうだとか、始終聞くぜ。――ああ、あった。物持ちがいいよな、おれも。感謝しろよ」

虎の巻を差し出す保に、夏野は溜息をついてみせる。

「こういうんでなく、教えてもらえるともっと感謝するんだけどな」

「他人を頼りにしちゃ、いかんなあ」保は笑って、「大学に行くつもりなんだったら、塾に行きゃあいいのに」

「こんな田舎の塾が大学入試の役に立つかよ。通信のほうがマシ」

「可愛くねえ」保は、わざとらしく渋面を作って腕を組んだ。「なにかっつーと田舎、田舎って馬鹿にするあたりも可愛くないけど、通信でちゃんと勉強するところが最高に

可愛気がない」
「おれ、堅実な性格だから」
よく言うよ、と保は笑う。夏野も笑ってノートを開いた。
勉強が好きなわけじゃない。これは夏野にとって、外場を出るために支払わねばならない代価だ。何がなんでも村を出たい。そのために必要だからやる。出たいという思いが切実だから続いているだけのことだ。
（それでも、あと二年……）
まだそんなにもある。たった二年だ、と自分を慰めるのが近頃は難しい。恵が死んで以来のことだ。外場に囚われたまま出られなかった恵——それが背中にぴったりと貼りついて後ろから夏野を急き立てる。早くしなければ、蜘蛛の糸のように何かが絡みついて解けなくなる。ここでの暮らしも悪くないか、と思うようになって、なにもムキになってまで村を出ようとする必要はないじゃないか、という気分になるのだ、という気がした。
——それでなぜいけないのだ、という内心の声がした。村に馴染んで居心地が良くなって、外に出ることを望まなくなるなら、それはそれで幸せな状態なのではないだろうか。なのに夏野は、そういう状態こそが忌まわしくてならない。それは蜘蛛の巣に引っかかった抜け殻を想起させた。安穏としてはいても、空疎になった自分が残る。おそら

くは。

頭をひとつ振って、問題に取り組んだ。ついでに武藤でちゃっかり夕飯を御馳走(ごちそう)になって、今日のノルマを片付けると十時を過ぎていた。保の両親に礼を言って武藤をあとにする。煙草(たばこ)が切れた、と徹が一緒についてきた。

「夜風はさすがに涼しくなったなあ」

徹は西の山を見上げた。虫の音が盛んだ。それに誘われたように暗い山肌から吹き下ろしてくる風は、いくぶん涼やかなように思われた。

「このまま秋になんのかな」

「さあて。彼岸頃に、また戻ったりするからな。でも、夏は暑かったから、今年の冬は早いかもな」

「なに、そういう法則があるわけ？」

「いや。単なる憶測」

これだよ、と夏野は徹を突く。徹は快活な笑い声を上げ、そして急に口を噤(つぐ)んだ。

「――何？」

徹は道の先を示す。西の山から外場の中心部に向かって、だらだらと道は下っている。その道の先のほう、一軒の家の塀も何もない地所の中にトラックが停まっていた。コンテナの扉が開いて、荷物が運び込まれている。

「引越だよ、こんな時間に」
徹が呆れたように言った。夏野も頷く。夜間の引越とは御苦労なことだ。コンテナの横腹に松のマークが見えた。文字は暗がりのせいもあり、遠目のせいもあって読みとれない。高砂、と書いてあるようにも見えた。——高砂運送。
「夜逃げかもな。文字通り」
徹が笑う。夏野はただ肩を竦めた。そう言えば、と徹は荷物を運び出す作業服の連中を見守りながら続けた。
「三安の嫁さんが逃げたって言ってたなあ」
「うん?」
「中外場にそういう家があってさ。正確には安森だけど。その三安の嫁さんが消えたんだってさ。朝、起きたらいなかったんだと」
「家出?」
「だろ。若い嫁さんなんだけどさ、舅姑と折り合いが悪かったらしいんだよな。旦那とも始終、揉めてて、そんでとうとう愛想をつかして出て行ったたって話」
「そういうことが、ここでもあるのか」
徹は苦笑した。
「田舎だって馬鹿にすんなよ。ここだっていちおう世間並みのことは一通り起こるんだ

よ」
「そりゃ、お見それしました」
夏野が言うと、徹は軽く背中を小突いて歩き出した。夏野はほんの少し、トラックを振り返る。夜逃げではないだろう。ああも堂々と大型トラックを横着けにして、夜逃げもなにもないいんじゃないかと思う。にしては、夜に引越というのも釈然としないが。
夏野はふと、少し前にも、夜に引越、という言葉を聞いたことを思い出した。そう、あれは越してきたのだ。兼正の住人が。夜に越してきて、そして——と、夏野は軽く首を傾げる。越してきた、住人を見かけたという噂は聞くが、夏野は今に至るも住人を見かけたことがなかった。徹の言うように、まったく無関係で終わりそうだ。予定通り夏野があと二年で外場を脱出できたならば。
「どうした？」
徹が振り返った。何でも、と夏野は呟いて小走りにあとを追う。徹が笑った。
「……羨ましいか？」
夏野は顔を顰める。
「そんなんじゃねえよ」

3

月曜日、大川富雄は、電話口から松村の声が聞こえてくるなり、怒鳴り声を上げた。
「松、お前、今何時だと思ってやがる」
「済みません」と、そもそも気弱な松村の声は、受話器の向こうでさらに蚊の鳴くような按配だった。
「朝から大口の配達が溜まってんだ。それを昼になろうかって時間になっても出てこねえ。月曜は忙しいことぐらい分かってるだろうが。何のために給料を払ってると思ってる。電話してくる暇があったら、さっさと出てこい」
「……あの、それが」
松村の声はさらに弱く、しかも途切れがちだった。この男はいつもこうだ、と大川は内心で舌打ちをする。松村安造は大川より十も年上だが、甲斐性という点では息子の篤といい勝負だと大川は思っている。ただ松村は根っからの小心者で、篤のように後先考えず無謀な真似をしたり妙に粋がってみせるだけの度胸がない。だから安心して集金を任せられるところだけが違っている。あとはもう、無能なところ、受け答えひとつからしゃっきりとしなくて大川を常に苛立たせるところまで大同小異だ。

「言い訳なら、出てきてから言いな。悠長に電話でお話ししてるような暇はねえんだ」
松村が何かを言いかけたが、大川はそれを制す。店の前に停めたトラックからビールのケースを運び下ろそうとしている若い作業服の男に大声をかけた。
「おい、どこに停めてる。そんなとこに荷を下ろすんじゃねえ！」
配送の若い男は、息子の篤と同年輩のようだった。同じような恨みがましい目を大川に向ける。初めて見る顔だった。
「倉庫は裏だ。脇に行け、脇に。店の前に積まれちゃ、商売にならねえ。路地に下ろしてくれっていつも言ってるだろうが。いつもの若いのはどうしたんだ」
これには返事をせず、若い男は大川をひと睨みしてケースを荷台に戻した。
「あの……大将、実はですね」
トラックがバックするのを見守っていて、大川は自分が受話器を握ったままで、電話が依然として松村と繋がっていることを思い出した。
「実はもへったくれもねえ。さっきからぐずぐずと、何なんだ、お前は」
「それが……娘が」
そこでようやく、大川は松村の声が涙まじりであることに気づいた。
「娘――康代ちゃんかい」
二十の半ばになるのだったか。父親に似ず、はきはきした、しっかり者のいい娘だ。

「……それが、亡くなりまして」
「亡くなった？　死んだのか、いつ？」
「今朝方、具合を悪くして、救急車を呼んだんですけど、さっきとうとう。……そんなわけなんで」
　レジの番をしていた妻のかず子が、怪訝そうな顔を大川に向けてきた。もの問いたげな視線を受けて、大川は頷いてみせる。
「……わたしゃもう……どうしていいか」
　松村の声が嗚咽に途切れた。
「馬鹿野郎。こんなときこそ、お前さんがしっかりしねえでどうする。今どこだ？　病院か？　どこの病院だ。ああ——とにかく、すぐに行ってやっから。世話役に連絡は済んだのかい」
　はいとも、いいえとも、松村の返答は、はっきりしない。大川は再度、とにかく行くから、と伝えて電話を切った。かず子がそれを待ちかねたように口を開く。
「亡くなったって、誰が？　まさか松村さんとこの康代ちゃんじゃないわよね」
「そのまさかだ」
　まあ、とかず子は声を上げる。棚の整理をしながら聞き耳を立てていたらしい篤が「もったいねえ」と、不謹慎なことを言うので、大川は息子を睨みつけた。

「行って加勢してやらにゃ。なにしろ松はあの通りの奴だからな」言っている間に、荷の積み下ろしが済んだのか、配送の若いのが伝票を持って店に入ってきた。大川はぞんざいにサインをして控えを受け取った。「とにかく上外場の世話役にも連絡しといたほうがいいだろうな。松のとこは、女房も頼りにならねえから」

「そうねえ。……あたしも行ったほうがいいかしら」

「行ってやれ。仏さんはまだ病院だから急ぐこたねえ。店を出る前に配達先に電話して、店の者に不幸があったんで配達が遅れると言うんだな。急ぐとこだけ篤に行かせて、あとは後日に廻してもらえ」

かず子は頷いた。夫は短気で粗暴なところもあるが、決して情のない男ではないし、口煩い代わりに面倒見もいい。こういうときは、夫に任せておけば間違いない。

上外場の世話役に連絡するため、大川は店の奥に連絡先を捜しに行った。かず子は配達のメモを引き寄せ、カウンターの抽斗から配達先の電話番号を控えた帳面を捜し出す。奥の住居から、大川に言われたのだろう、姑の浪江が出てきた。

「康代ちゃんが死んだって？　今年は死に事が続くわねえ」

「本当にねえ。つい先だっても」と、言いかけて、かず子はふと手を止めた。清水園芸で葬式があったばかりだ、と言いたかったのだが、それよりも気にかかることがあった。

「……ねえ、お義母さん。薄目を開けて寝るひとっているかしらね」

「いるんじゃないの。そういう人の話を聞いたことがあるわよ」

そうよね、とかず子はひとりごちる。

「なあに。どうしたの？」

浪江に問われ、かず子は自然、眉を寄せた。

「昨日、大沢さんとこに行ったのよ、郵便局の。なんでも大沢さんの具合が悪いらしくてね、お見舞いがてら様子を訊こうと思って。別にたいしたことはない、って奥さんは言ってたんだけどね、茶の間の襖が開いてて、間から大沢さんが寝てるのが見えたの」

窓際に面する寝室は茶の間よりも明るかった。大沢は茶の間のほうを向いて臥せっており、だからその顔がよく見えた。薄目を開いて瞬きもなく、身動きもない。顔色は土気色でどことなく弛緩して見え、蠟で覆ったような妙な質感があった。

「死んでたみたいに見えたのよ」

まさか、と浪江は顔を顰める。

「そんなはず、ないでしょう」

「そうなんだけど。でも死人の顔みたいだったのよ。まさか奥さんに、死んでるんじゃない、とは言えないから、ずいぶんと悪いんじゃないのって訊いたんだけど、奥さんはたいしたことない、よく寝てるって」

「じゃあ、そうなんじゃないの。奥さんがそう言うんだから」

そうね、とかず子は呟いた。大川がばたばたと出て行くのを送り出し、雑用を片付け、浪江に店のことを頼んで、かず子も支度をする。篤は留守居としては頼りないが仕方がない。こういうとき頼りになる娘と次男は、学校に行っている。

小走りに店を出て、上外場に向かう。その途中で郵便局の前を通りがかった。かず子はなんとなく足を止め、住居になっている二階の窓を見上げる。

(……あれは死人の顔だ)

どうしても、その印象が拭えない。かず子は、郵便局の中に入ろうとし、シャッターが下りたままなのに気づいた。貼り紙ひとつないのに困惑して、かず子は周囲を見渡した。向かいの後藤田衣料品店の久美と目が合う。店を訪ねようとする前に、久美のほうが店先に出てきた。

「ねえ、どうしたの、これ」

かず子が郵便局を示すと久美は首を傾ける。久美の老いた顔にもどこか困惑した色が浮かんでいた。

「それがねえ。引越したのよ、大沢さん」

まさか、とかず子は呟いた。

「そんなはずないわよ。あたしは昨日の夕方、会ったんだもの」

「それが昨日の夜中なのよ。夜中の二時過ぎだったかしらねえ。表にトラックが停まっ

てて、煩いんで目が覚めたのよ。そしたら荷物を運び出してたんだもの、驚くじゃない」
「そんな――あそこは、旦那さんの具合も悪くて」
久美は重々しく頷いた。
「運送会社の人が抱えて車に乗せてたわよ。毛布にくるんでねえ。慌てて表に出て、奥さんを捕まえて何事なのって訊いたんだけど。引越すことにしたから、ってそれだけ言って、お世話になりましたでもなくトラックに乗って行っちゃったのよ」
「まあ……そんな」
「長田さんたちにも連絡がなかったみたいよ。朝、いつも通りに出勤してきて、シャッターの前でおろおろしてたから。あたしゃ、大沢さんがこんな突拍子もないことをする人だとは知らなかったわ」
そうね、とかず子は頷いた。目の前に薄目を開けた大沢の寝顔（……死に顔のような）がちらついた。胃の腑のあたりが、ぞわりとした。何だろう、この得体の知れない気持ちの悪さは。

4

火曜、終業間際の大塚製材では、まだ帯鋸の唸りが響いていた。静信はその光景を感慨深く見た。製材所の建物の天井まで掛け渡されたベルト状の帯鋸、そこから落ちる大鋸屑を受け止める溜まり、小さい頃、丸安製材に入り込んで、よくあの溜まりに潜り込んで遊んだ。大鋸屑が満ちたプールは子供にとって砂場以上に魅力的だったし、その底のほうではカブト虫やクワガタの幼虫や蛹が見つかったものだ。

身体中を大鋸屑だらけにして母親に叱られたのはもちろん、衣服の下に入り込んだ大鋸屑は得てして子供に途方もない不快感を与えるのだが、それを我慢するだけの価値は充分にあった。

懐かしく製材所の様子を見つめていたので、声をかけられるまで大塚隆之が間近にいるのに気づかなかった。

「若御院じゃないですか」

声をかけられて、ようやく静信は我に返る。作業服に身を包んだ隆之と視線が合って、慌てて頭を下げた。

「お久しぶりです」

顔を上げたとき、鋸を監督していた大塚吉五郎と目が合った。吉五郎は不快気な顔をして視線を逸らした。

大塚製材は、丸安製材と並ぶ製材所だった。村に製材所は何軒もあるが、中でもこの

ふたつが群を抜いて大きい。かつては寺の檀家で、檀家総代でもあったと聞いているが、静信が大学を出、本山での修行から戻ってきて寺を手伝うようになる以前に檀家を抜けた。吉五郎の死んだ妻が新興宗教に入信して、吉五郎も同じく入信したせいだ。静信の父、信明は、何度も足を運んで説得に努めたらしい。その頃の確執のせいだろう、吉五郎は寺の者に当たりが悪い。

これに対して、息子の隆之は、当時の確執を知らないのか、知っていても拘るほどのことではないと思っているのか、格別に当たりが悪いというわけでもない。村のあちこちで顔を合わせても、特に不快な顔をされたことはなかった。

「お久しぶりですね」

隆之は笑顔を見せた。

「御無沙汰してます。お仕事中に申し訳ありません」

「どうしました」

「つい先だって、康幸さんが亡くなったという話を小耳に挟んだものですから」

ああ、と隆之は痛いところを衝かれたような表情を見せた。

「それでわざわざ。——ありがとうございます」

隆之は軍手を脱いで、作業服のポケットに突っ込む。汗を拭いながら事務所を示した。

「まあ、どうぞ。お茶ぐらいしかないですけど」

「お仕事中ではないのですか。御焼香だけさせていただいて、と思ったのですけど」
「いいんです。今日はもう、上がろうと思ってたところなんで」
隆之は笑い、近くの若い者に何事かを告げて、先に立って事務所へと向かった。製材所の脇(わき)にある事務所に入ると、隆之の妻の浩子(ひろこ)が事務机に向かって帳簿を開いていた。静信に気づき、腰を上げて会釈(えしゃく)をする。
「あら、お久しぶりです」
「康幸の悔やみに来てくだすったんだ」
隆之が言うと、困ったように笑い、礼を言う。
「突然、済みません。ひょっとしたら出すぎかとも思ったのですが」
「いいんですよ。ありがとうございます。わざわざ来ていただけるなんて――」
浩子は微笑(ほほえ)んだまま、くしゃりと泣き顔になって、それで静信はひそかに良心が痛むのを感じた。
「とりあえず、お茶でもどうぞ」
隆之は言って、事務所の隅の冷水器から麦茶の冷えたのを注いで差し出す。空いた椅(い)子(す)を勧めた。
「本当に、このたびは突然のことで……」
まったくねえ、と隆之は苦笑する。

「元気だけが取り柄のような奴がね、わたしより先に逝くとは思いませんでした」
そうでしょうね、と静信は低く返す。隆之と浩子の言によれば、やはり康幸は突然に寝込んだらしい。夏風邪だろうか、とここでもお定まりの台詞が聞かれた。甘く見ていた、まさかこんなことになるとは思わなかった、夜中に突然、呻き声を上げたと思ったら痙攣し始めて、と隆之は目を潤ませた。
「救急車を呼んで、国立に運び込んだら、腹の中が血だらけだって話でね。緊急に手術をすることになったんですが、死んで出てきました。間に合わなかったようで」
「そうですか……」
「肝臓を壊してたらしいんです。黄疸が軽かったんで、わたしらも気がつかなかったんですけどね。別に深酒をするわけでもない、壊すような理由もないと思ってたもんだから。本当に、寝耳に水とはこういうことを言うんですかね」
「それはさぞ、お辛かったでしょう。……もう落ち着かれましたか?」
そうですね、と隆之は寂しげに笑った。
「あいつが死んだ当初は、夫婦喧嘩ばっかりでね。わたしは母親がなんで気づかなかった、とこいつを責める、こいつはこいつで一緒に働いててどうして気がつかなかったと責める。おまけに親父は親父で、わたしらの信心が足りないせいだとか言うし、近所の者の中にゃ、新興宗教なんかにかぶれるからだ、と聞こえよがしに言うのもいて」

そんな、と静信は眉を顰めた。

「そういうことは、何も関係ないでしょう」

「若御院にそう言ってもらえると、正直言って溜飲が下がります」と、隆之は自嘲するように言った。「村の連中は――いや、寺を責めていると取らないでくださいよ――やっぱり檀家を離れることに批判的なんですよ。寺と村と、本当に一枚岩なんでね。実際、あちこちでね、かつかつと引っかかる。まるで村を離れた余所者のようだ、と思うことがありますよ」

浩子がとりなすように微笑む。

「特にね、ほら、お祖父さんが区長を降ろされちゃったでしょう。別にうちがどうこうなんじゃなくて、単にお祖父さんがもういい歳だってことなんですけどね、すっかり臍を曲げてしまって、悪し様に言うもんだから余計にこじれちゃって」

「そうですか……」

「一時はそれで、喧嘩ばっかりでしたよ」と、隆之は苦笑する。「家の中が寒々しくてね、わたしらにしたら、ちゃんと信心だってしてきたつもりです。なのになんでこんな目に遭うんだと思ったら、いっそ寺に頭を下げて檀家に戻ろうか、とか」

「いけません」とっさに静信は口を挟んだ。「そういうふうにお考えになっては駄目です。信仰は自生するもので、他から強要されるものじゃない。人の最も自由な部分の支

柱となるものなのですから、不自然な曲げ方をしてはいけません」
隆之は驚いたように口を開けて静信を見た。静信は我に返り、思わず恥じ入って俯く。
「済みません。……妙なことを」
いえ、と隆之は笑む。
「そう言ってもらえると安心します。——なあ？」
隆之は笑って浩子を振り返る。浩子も頷いた。
「ええ、……本当に」
その口振りで、どれだけの非難があったのか、想像がついた。たしかに村は寺を中心に結束している。強固な団結力は、強固な排他主義の上に成り立っているものだ。ましてや大塚製材は、ずっと檀家総代を務めてきた。いわば寺を支える柱だったのが、突然、寺に離反したにも等しいわけだから、檀家の者たちがそれをどう捉えるか、想像がつこうというものだ。
「……最初はそんなふうで、本当に喧嘩ばかりだったんですけどね。跡取りが死んだことだし、もういっそ製材所を畳んで引越そう、なんて話もしてたんですが。そうしたら都会に行っている次男が、自分が継ぐからと言ってくれましてね。ああ、自棄を起こしたらいかんと」
「本当に、そうです」

答えながら、静信は、温厚な父親が何度か見せた不機嫌な顔を思い出していた。滅多に不快な表情を見せない父が、大塚製材のことに話が及ぶと、明らかに不快そうな顔をした。別に非難をするわけではないが、周囲の人間にすれば、信明がこればかりは腹に据えかねているのが一目瞭然（りょうぜん）だった。静信はそのたびに、父親がなぜ怒るのか理解できず、そういう父親に微（かす）かな落胆のようなものを感じざるを得なかった。落胆というほど深くはないが、あんな顔をしなければいいのに、と思ったことを覚えている。今になってみれば、信明があからさまに不快そうにするからこそ、檀家も住職の意を迎えて、隆之らを非難したのだろう。それを思うと、申し訳ない心地がする。

「最近は落ち着きました。康幸のことは残念だけれども、一家でなんとかこれを乗り切ろうという感じですかね。……寂しいのもたしかですが」

「そうでしょうね」

なんだかね、と隆之は窓の外を見る。

「歳のせいなのか、近頃寂しくてね。心細い感じがすると言うか。季節のせいなのかもしれないですけど」

静信は、なんとなく頷いた。

「親父もいい歳だし、いつまでも生きてないな、なんてことを思ったり。盆の頃に近所で若い女の子が亡くなりましてね」

「清水――恵ちゃんですか」
「ああ、そうです。清水さんとこの娘さん。あんなに若いお嬢さんがねえ。自分とこでも葬式を出したせいか、近頃村を歩いてると、やたら葬式が目につくような気がしてね。考えてみると、村の人間なんて大半が年寄りですよ。今年は暑さも厳しかったし、がっくりきちゃった年寄りが多かったんでしょうな。製材所の若いのが、突然、家出して勤めを辞めたりね。近所の年寄りがいつの間にかいなくなったり」
隆之の述懐に、静信は眉を顰めた。
「そう言えば」と、浩子が口を挟む。「鈴木さんね、いたでしょう。康幸と同級だったあの家もねえ、越したんですって。最近、そういう話も多いわねえ」
静信は瞬く。浩子は寂しげに微笑んだ。
「みんな外場が嫌になっちゃったのかしら」
そうかもしれない、と静信は思う。
――されば汝は詛われ、此の地を離れ、永遠の流離子となるべし。
村は丘のように、異物を排除する。
（……嫌になっても不思議はない）

5

静信は寺務所で原稿を広げる。改稿を繰り返した文章をざっと目で追っていった。夜の静寂に、紙をめくる音がかそけく響いた。

兄は弟を殺した罪業によって丘を放逐され、荒野をさすらう。弟は屍鬼となってそれを追う。兄には弟がなぜ、そんなものになってまで自分を追ってくるのかが分からない。生前の弟を振り返ってみても、やはり弟の意図を推測することはできなかった。それどころか彼はもう屍鬼でない弟を明確に思い出すことができなかった。自分が弟を殺した瞬間も、そのときの自分の心情も。

そして——と、静信は刃物の切っ先のように尖った鉛筆の先を原稿用紙の上に下ろした。彼は

　弟の真情を忖度することを今日も諦めねばならなかった。弟の意図を量ろうとすると必ず辿り着く自身の混沌に阻まれ、なす術もなくそれを眺めるうち、悔恨が胸に迫り上がってきて、それ以上の思考を拒むのだった。

　彼は俯き、自分の足許に伸びる罪の色をした影を見つめ、そして振り返り、やはりいつかな遠くなった気のしない丘のほうを見やった。彼と丘の間には薄暮が満ち、悪霊ど

もの他に人影はない。実際、弟が背後から彼を追ってきたことはなかった。弟は必ず前方で彼を待ち受けている。

丘の上で雲は切れ、黄金の残照が降り注いでいた。その中に白く冴え冴えと光輝がある。街の頂上に鎮座し、彼に向かって容赦ない光を投げかけていた。

彼はずっと、少なくとも丘にあるときには、その園の東には荒野が広がるのだと教えられていたが、実際に荒野に立って丘を振り返ると、丘は四方を荒野に取り巻かれている。この地を東と呼ぶのは、ただ東にのみ、城門があるからなのかもしれなかった。

神の御手から零れ落ちた不毛の地が、ここ流離の地のはずだったが、実際のところ、不毛の地の直中に忽然と存在する緑野こそが丘で、美しく整えられた丘そのものが荒野に落ちた神の奇蹟のように思われた。

今になって彼は不思議に思う。丘の周囲に荒野が存在するのだろうか、それとも荒野に丘が存在するのだろうか。丘の裾野に巡らされた高い城壁は、神の秩序の終端を示すのか、それとも、神の奇蹟の限界を示すのか。

いずれにしても、丘は美しかった。

静信は少し手を止め、首を傾げる。彼は丘を追われた。荒野から振り返って見る丘は、やはり美しく見えるものだろうか。ましてや彼は弟に対する殺意がなく、自分の衝動の由来を知らない。

それは彼にとっても、驚愕すべき悲劇だったはずだ。それを裁かれ、呪いを受けて彼は追われた。自分を追った秩序を、閉め出した丘を、彼は虚心に賛美することができるのだろうか。

（もちろん、いいんだ……）

彼は放逐された丘を今も慕っている。もとより、最初からそのつもりだった。

いずれにしても、丘は美しかった。目を閉じれば、彼は今もそれを目の当たりに思い出すことができる。

ゆるやかな起伏を描く緑の野辺、そこには白く羊たちが群れ、緑の森にさしかかるまでの広大な緑地で安穏と草を食んでいた。点在する家々は、赤い石の小道で綴り合わされ、やがてそれは賢者の住まう街へと上り、聚斂していく。街の中心に屹立した尖塔、その頂上に神の座はあった。賢者と選ばれた者にしか登ることを許されず、たとえ登ってもそこにはただ光輝が降り注ぐだけ、いかなる姿もなかったが、そこには明らかな意思が存在した。

（そして彼は、その意思を崇拝していた）

――彼を放逐したのに？

（彼にとって丘は、愛おしむべき場所だったんだ……）

その光輝を点した尖塔を中心に、同心円を描きつつ、外周へと向かうほど低くなだら

かに広がりながら、ひとつの丘が形作られていたのだった。
尖塔を取り巻くのは賢者の住まう神殿、神殿を取り巻くのは石畳の街だった。円弧を描く街の外周の外には森が広がる。美しい枝を連ねた穏やかな森を、さらに碧く抱え込んだのは緑野だった。
緑野は果てしないほどに広がり、やがて緑の合間に白い石と赤い土が混じり始める。柔らかな緑を蘚のように張りつめた、起伏の多い丘陵地の果てには長大な城壁があった。
(長大な壁……頑な
　　堅牢なその城壁は、さながらその外部を住人の目から覆い隠そうとする
かのように
　　　さながら荒野に放逐された罪人を永劫の間、拒もう
とするように
　　広がり、そして、その東の一郭には、小さな門が閉じている。
　　　　　　二度と入れな
いために……)
静信は大きく息を吐いて鉛筆を放り出した。駄目だ、と思う。思考が滑る。大塚隆之と浩子の顔が、脳裏のどこかにちらついて離れなかった。
外場は結束が固い。そしてこれは、頑な排他性と表裏をなしている。寺の檀家でない

者は、村にとって異物だ。ましてや、もともと檀家だったものが寺に離反すれば、異物というより敵と見なされても無理はない。村人を束ねる信仰に疑問を投げかけて、もっと別の信仰を選ぶと言って立ち去ったのだ。人の集団というものの性質から考えても、そうやって外れていった者が排斥されることは避けられない。

だが、と静信は思う。なぜ人の群はそういう振る舞いしかできないのだろう。信仰は心の拠(よ)り所となるもの、人の心に安寧をもたらすものではないのか。それが人を隔て、人を排斥する大義名分になることに——それを誰も疑問に思いも恥じもしないことに、静信はいたたまれない思いがする。

内側に向けては穏やかに笑い、慈愛すら示しながら、外側に向けては冷淡で残酷な振る舞いをする。その二面性に寒々しいものを感じる。それとも、こういうところで躓(つまず)くのは、自分だけなのだろうか。

やるせなく息を吐いて、静信は原稿を重ねた。原稿を進めたいのに筆がついてこない。まさしく躓いているのだと自覚して、諦めて原稿を抽斗(ひきだし)に戻す。かわりに聞き込みのメモを取り出したが、それは開く気にもなれなかった。それすらも諦めて、静信は立ち上がる。寺務所を出、玄関の棚に置いた懐中電灯を手に取って表に出た。

樅(もみ)の間を吹き下ろしてくる風は、秋の気配を忍ばせている。虫の音は、真夏のそれとは音色を変え、どこか寂しげに聞こえた。寝静まった村を一瞥(いちべつ)し、境内を横切る。山の

中に分け入ると、林や下生えのあちこちに、秋が潜んでそろそろと忍び出てこようとしているのがよく分かった。黙々と歩き、まっすぐに廃墟へと向かう。村に居場所をなくし、ここで隠栖しようとし、やはり寺を核とする秩序に敵視されて聖堂から引き出された——彼。

隠遁者の苦渋を示すように、聖堂は傾き、荒廃している。中に入ると、蟋蟀の声がただ一匹ぶん、頼りなげに響いていた。もの寂しく鳴いては消え、消えては思い出したように鳴く。

静信は自分がいつランプに火を入れたのか、覚えていなかった。何もせずにぼんやりしているだけなら灯火は必要ではない。にもかかわらず灯を点けたのは、いつぞや「明かりが見えたから」と言って沙子が現れたことを、自分の無意識が覚えていたからかもしれない、と聖堂の扉が開く音を聞いてから思い至った。

振り返ると沙子が、短い身廊を歩いてくるところだった。片側に並んだベンチの背もたれを撫でるようにして、軽い足取りでやって来る。

「こんばんは」

やあ、とだけ静信は返した。

「言っておくけれど、ここに来たのはこないだ以来、初めてよ。家でおとなしくしていたの。だから大目に見てね？」

静信は微かに笑って頷いた。
「いちおう、虫除けのスプレーもしてきたし、御覧の通り襟の詰まった長袖を着てきたわ。ストッキングは二枚重ねよ。室井さんの忠告を無にする気はないんだって分かってもらえるかしら」
「……分かるよ」
良かった、と呟いて、沙子は静信のすぐ前のベンチに腰を下ろす。幼い子供のようにベンチの上に坐り込んで背もたれに両肘を乗せた。
「江渕さんとお母さんが、とても感謝していたわ。もちろん、絶対に外に漏らすようなことはしない。——もっとも、漏らしようもないんだけど」
「そう……」
「相変わらずなの？　浮かない顔」
静信は苦笑した。
「そう……相変わらずかな。事態は少しずつ悪くなっているようだね。なのになんの解決策も見えない」
沙子が先を促すように首を傾けたので、静信は手短に、自分が被害者の共通点を探していること、にもかかわらず、なんの手がかりも見つからないことを述べた。
「お寺の御用事もあって、小説のお仕事もあるのに、大変ね。なのに成果がないんじゃ、

室井さんがそんな顔をするのは当たり前ね」
「そんなに浮かない顔をしてるかい？」
「そうね。この間と同じよ。落ち込んでいるみたい」
言って、沙子は小さく笑った。
「ここで会うと、室井さんは必ず落ち込んでいるのね。ひょっとして、落ち込むと逃げ込んでくるの？」
静信は瞬いた。
「ああ……たしかに。そうかもしれない」
「自覚がなかったの？」
「なかったな。そうだな——たしかにそういうことのほうが多いね、圧倒的に」
「あまり落胆しないほうがいいわ。室井さんは疫学の専門家じゃないんだもの」
静信は軽く笑って首を振った。
「別に、成果がないからそれで落ち込んでいるわけじゃないよ」
「じゃあ、どうして？　また、誰かが亡くなったの？」
「いや——。被害者の足跡を辿っているとね、あまり楽しくないことも知ってしまうことがある、ということかな」
「楽しくないこと？」

うん、と静信は半壊した聖堂の内部を見渡した。
「外場はいいところだよ。住人は気持ちの良い人が多いし、それが和やかな円環を作っている。けれどもそれだけ、異物を撥ね除ける力も強いんだね」
沙子は首を傾け、そして何かを悟ったように頷いた。
「なんとなく分かるわ。身内に温かいということは、部外者に対して冷たいということなのよね。——そういうこと？」
そう、と静信は頷いた。沙子は背もたれの上に乗せた両手で頬杖をつく。
「……それで、室井さんは村の人が嫌いになっちゃったの？」
「いや。そういうことじゃない」
「村が嫌いになったとか。だから村のために苦労をするのに嫌気が差したとか」
「そんなことはないよ。きっと寄り集まる力が同時に異物を排斥する力になるのは、避けられない摂理の一種なんだと思うから。たぶん人間はそういう生き物なんだろう。だからそれを責めようとは思わない。けれども、少し残念な気がするだけだよ」
「だったら元気を出さなくちゃ。でもって、ちゃんと調べて、早く事態を解決しなくちゃいけないわ。このまま疫病が蔓延して、村の人が気づいてしまうと、室井さんにとって、もっと辛いことが起こると思うの」
静信は胸を衝かれた。沙子の顔をまじまじと見つめ、それが真理であることを悟る。

たしかにそうだ。このまま事態が悪化していけば、早晩、村人は疫病の存在に気づく。そうすれば何が起こるのか。異物を排斥してまで守ってきた結束が切れていくのだ。同じ檀家で、血縁に結ばれ、地縁に結ばれていても、汚染を恐れて排斥が始まる。そうならざるを得ない。

「……その通りだ」

「でしょう？　人は追いつめられると脆いもの。とても弱い生き物だから」

静信は頷いた。——そう、落ち込んでいる場合ではないのだ。そんなことに躓いている余裕はない。

そして、と静信は内心で自分を恥じた。原稿に逃避している場合でもないだろう。一刻も早く、この惨禍を止める方法を見つけなくては。村が内部から瓦解する前に。

五章

1

「大将、お久しぶりです」
静信が声をかけると、家の裏手に広がる農園の中で作業をしていた清水雅司が振り返った。
「ああ――若御院」
「御精が出ますね」
老人は立ち上がり、帽子を取って胡麻塩の頭を下げる。雅司の足許には畝に沿って、何のものだろう、緑の苗が並んでいた。
清水園芸は造園も行なうし、苗木の卸も行なう。村の者が請えば、直接販買もしてくれた。静信の母親の美和子も、時折、庭に植える植物の苗を買ってきたりする。
「まだまだお暑いですね。今日はどうなさいました」
「実は、先日、遅まきながら隆司さんが亡くなったと聞いて」
ああ、と雅司は表情を曇らせた。

「そりゃあ、ありがとうございます」雅司は移植鏝を傍らのバケツに放り込んで家を示した。「とにかく、どうぞお上がりになってください」
静信は軽く頭を下げ、先に立つ雅司のあとに続いた。
「驚きました。最後にお見かけした時にはお元気そうだったんで」
まったくですわ、と雅司は縁側に登りながら息を吐く。勧められるまま静信も座敷に上がり、仏壇の前に進む。仏壇には真新しい写真と位牌が飾られていた。息子の隆司は書類によれば四十一、たしか溝辺町の会計事務所に勤めていた。線香を挙げて手を合わせていると、雅司が麦茶を運んできた。
「こんなもんでも、どうぞ。済みませんね、今日は嫁が出かけてるもんで。どっかに茶菓子があったはずなんだが」
「お構いなく。――大将もお気落としでしょう。もう落ち着かれましたか」
雅司は苦笑する。
「まだピンと来ませんや。本当に元気なもんでしたからね。いつも通りに出て行って、そしたら事務所で倒れたって話でしょう。慌てて病院に駆けつけたら、もう意識がなくてね。それきり目を覚まさないままでしたから」
「心臓がお悪かったと聞きましたが」
雅司は、とんでもない、と首を振った。

「春の健康診断じゃ、ぴんぴんしてたんですよ。それがいきなり、心不全だってんですからね。――いや、具合が悪そうではあったんですよ、今から思うとね。ただ、その時はぼうっとしてるな、って程度でね。夜更かしでもしたのか、二日酔いか、と思ってたらあれでしょう。まったく……」

雅司は言葉尻を濁した。

「それも今だから思うことでね。あとから振り返って、そう言えば、って話ですよ。当日はそんなこととは思わねえ、いつも通り、ろくに顔も見ねえで畑に出ちまって」

「じゃあ、特に寝込んでいたとか、そういうことではなかったんですか」

「寝込んではいなかったなあ。……いやね、この歳になると、息子の様子なんかしみじみと窺ったりしませんからね。具合が悪かったのかもしれないが、嫁も気がつかなかったぐらいだから、さほどでもないように見えたんでしょう」

そうですか、と静信は呟く。清水隆司が例のあれだったのか、はっきりとしなかった。家族が気づいてから数日以内に死亡するのが通例だが、隆司はそれよりも若干、早い。例外的に早く事態が進行したのかもしれなかったし、例の病気とは無関係なのかもしれない。静信では見極めがつかなかった。

「けれど……それは本当に急のことで、お辛かったでしょう」

「おれより、嫁がね。こう言っちゃあなんだが、こういうこともありますよ。ただ、嫁

と孫が不憫(ふびん)でね。特に嫁が。なにしろ、おれも連れ合いを亡くして、嫁と孫がいなかったら一人ですからね。その孫も来春には高校を卒業して大学に行くなり就職するなりするわけだし、そうなって家を出ちまったら、血の繋(つな)がらねえ年寄りと二人きりですよ。実家に戻ってもいいぞ、とは言ってあるんですけどね。隆司もいねえのに、おれの死に水を取らせるんじゃ哀れだ」

　雅司は言って、木訥(ぼくとつ)とした顔に苦笑を浮かべた。

「昔なら、いったん嫁に来たんだから、って話になるんだろうが、今はそういう時代でもねえし」

　そうか、と静信は思う。村では、親子の同居はまだ当たり前のことだ。だが、家族の概念は確実に変化しつつある。中途半端(はんぱ)な変容。その、軋(きし)み。

「……まあ、おれだけを残すわけにはいかねえとは言ってくれるんですが、やっぱり悩んでいるようですわ。亭主に先立たれただけでも災難なのに、そのうえあとには頭の痛い問題が残ってるんだから不憫な話だ。退職金が出たのが、せめてもってとこで」

　静信は首を傾(かし)げる。雅司はさらに苦笑した。

「息子が倒れた日ね、あの日、隆司のやつ、何を思ったか、いきなり退職届を出したらしいんですわ。おれも嫁も知らねえ、自分の胸ひとつでやったことでね。事務所は引き留めたんだが、隆司のやつは今日限りで辞める、退職金も給料もいらねえと啖呵(たんか)を切っ

たって話で。会計士の先生と喧嘩して、それでばったり倒れたらしいんですよ。病院でそれ聞いて、嫁は真っ青になっててました。まだまだ孫にも金がかかるしね」

「それは……」

「まあ、先生が恩情で、なかったことにしてくれてね。在職中に死亡して退職って扱いにしてくれたんで、助かりました。本当に——我が息子ながら何を考えていたんだか」

老人は仏壇の遺影を見上げた。

「あのくらいの歳になると、もう他人も同然ですわ。同居はしてても、そりゃあここが田舎だからで、都会なら家を出て一家を構えてる歳なんですからね。手前のことは手前で決める。いつまでも親父にお伺いを立てたりはせんでしょう。だから、当然と言えば当然なんだが」

そうですね、と静信は呟いた。

「隆司さんは、もう大将の手伝いはしておられなかったんですか。以前、何度かうちに一緒にみえられたことがあったでしょう」

「いやあ、最近はないね。以前も、よっぽど手の足りないときだけでね。うちも造園ったって、それ専門にやってるわけでもないし、庭を造るってほどたいそうな造作をやってるわけでもないから、そうそう人手のいることもないしねえ」

「じゃあ、大将の跡を継ぐつもりだったとか、そういうことではないんでしょうか」

「そういうことじゃないでしょう。そんな気はなかったと思いますよ。おれもそんなつもりはなかったからね」

それでは、雅司について村のあちこちに出入りするということはなかったわけだ。思いながら、雅司の仕事の按配について尋ねた。どの家に出入りしているのか、山入に行くことはあるのか、丸安製材はどうか、隆司がそれに同行することはなかったか。それとなく訊いてみたが、雅司自身は山入に行くことも丸安に出入りすることもないようだし、ましてや隆司はなんの縁も持っていなかった。山に立ち入ることもない。雅司の家はそもそも山林を持っていなかった。雅司も隆司も、家は外場にあるものの、生活の場はもっぱら溝辺町にあって、近所付き合いの他は、さほどの縁を持たないようだった。

「親戚が門前にあるんだけどね」と、雅司は苦笑いした。「昔だったら、それこそ、何事かあるたびに出入りしたんだろうけど、従兄弟が死んでから、縁が切れちゃってね。死んだ親父の従兄弟だってだけで、親戚面して出入りする時代でもないでしょう」

そうですね、と静信は答えるにとどめた。

雅司の家を辞去し、静信は中外場に向かう。弔組世話役の小池老の家を訪ねた。八月十一日に死亡した広沢高俊は中外場の住人だった。この広沢家とは、静信はなんの縁も持たなかったので、とりあえず中外場の顔役とも言える小池老を訪ねてみたのだが、小池老もあまり付き合いはなかったようだった。

網の目のように入り組んだ人間関係、という気が、静信はしていた。村の者は地縁でしっかりと村の中に組み込まれている、という感触。だが、その地縁はいつの間にか、至るところで寸断されている。当人たちもさして自覚のないまま、村は時代の趨勢に従って、徐々に解体されていこうとしていた。

こんなものか、と静信は思った。静信自身は檀家の中心にいる。入り組んだ人間関係の要に位置するから、こういう変化を実感していなかった。だが、端々から村は変容している。——そう思ったのは、静信だけではなかったようだ。小池老も溜息まじりに首を振った。

「昔なら、どこの誰それ、と言われると、どういう人間で、どういう暮らしをしてるのか、自分の親戚か家族のように分かったもんだったけどねえ」

「これが時代ってものなのでしょうね」

「まあ、わしも弔組の世話をして、初めてそういう若いのがいたのか、ってぐらいのことだからね。本人自身、どっちかというと内向的で、親にもよく分からないところがあったそうだが」

「そうなんですか」

「親にしちゃ、分かってたつもりだったんだろうがね。親父さんは嘆いていたよ。なにしろ、突然に溝辺町で倒れてさ。それがパチンコ屋で倒れたって話さ。てっきり仕事に

行ってるたら、仕事を辞めてたんだと」
え、と静信は問い返した。
「仕事を、辞めていた？」
「らしいんだよ。親にも何も言わないままさ。二、三日前から具合を悪くしててね、ふらふらしながら、それでも背広着て出て行ったから、てっきりいつも通り会社に行ったんだろうと思ってたら、会社は三日前だかに辞めてたんだとさ。それでパチンコ屋で時間をつぶしていたんだろうな。そこで倒れてそのまんまだよ」
静信はひどい居心地の悪さを感じた。何だろう、これは。清水隆司とどこか似ている――。
静信の困惑には気づかなかったのか、小池老は苦笑した。
「寂しい話だが、仕方ないんだろうなあ。老い先短い者には心細い話だよ」言って、小池は首を傾げる。「しかし、なんだってこんなに死人が続くのかねえ」

2

九月十八日、日曜日は恵の三十五日の法事だった。
「これで忌明(きあ)けにするみたいね」と、恵の家に向かう道のり、母親の佐知子が言った。

九月も半分以上が過ぎて、茹だるような熱波は遠のいている。

「忌明け？」

かおりが問い返すと、佐知子は頷く。

「四十九日って言うでしょ。四十九日を過ぎると死んだ人の魂が家を離れるのよ。もう忌中じゃなくなるから忌明け。本当は四十九日の法要で忌明けにするんだけど、十月になっちゃうでしょ。忌中が三月にまたがるのは良くないって言うのよ。だから切り上げて三十五日で忌明けにするみたいね」

かおりは俯いた。そんなのは変だ、と思う。恵の魂が家にいようといまいと、恵が死んだという事実は変わらない。なのに四十九日が経ったら、悲しいのも可哀想なのも片付けてしまうというわけだ。しかも恵の場合は四十九日ない。まだ三十五日で、恵の魂は家に留まっているのに、早々に追い出してしまうのだ、と思った。

（恵……可哀想……）

死んでしまう、ということは可哀想なことだ。こうやってどんどん片付けられてしまう。きっとそのうち「もう済んだこと」になってしまうのだ。たしかに恵の生は、あの夏の日に「済んで」しまったのだけど、恵の死は始まったばかり、まだ三十五日しか経っていない。このまま永遠に「済んで」しまうことなんてないというのに。

どこか、さばさばしたふうの佐知子のあとに従い、かおりは俯いたまま歩いた。清水

家に着くと、佐知子と同じようにどこか気が済んだふうのお客が集まっている。恵の両親と祖父だけが、ちっとも肩の荷が下りたようではなかった。ちょうど葬式の時と同じように、とても悲しそうで打ちひしがれて見えた。かおりはほんの少し、それに慰められる気がした。

法事が始まるまでには、まだ時間があった。佐知子はお勝手を手伝いにいく。かおりもそれに従おうとしたのだけれども、弔組の女衆から、休んでいなさい、と言われた。たしかに台所はもう近所の女衆でいっぱいだったので、かおりは促されるのに従って二階に向かった。恵の部屋はかつてのまま、ドアには今も名札が下がっている。当然だ——少なくとも今日はまだ、恵はこの家にいるのだろうから。それとももう、いないのだろうか。恵はいつ、家を離れるのだろう。法事が始まると追い出されてしまうのだろうか。

（まるで、お祓いみたい……）

お経を上げるのは同じだから、実はそういうことなのかもしれない。お経が上がって、苦しくて、恵の霊は家にいられなくなる。仕方なく家を離れて、それでみんなは、やれやれと言って、恵の死を片付けてしまうのだ。

（この部屋も……）と、かつてのまま、少しも変わってない部屋を見渡し、かおりは思う。（片付けられてしまうのかしら）

かおりは自分の思考に、どきりとした。とっさに家具や持ち物の一切合財が整理され、がらんとした空洞になった部屋を想像してしまったせいだ。

「そんなの……ない」

恵が住んでいた部屋。ここが恵の居場所だった。恵の机、恵のベッド。たしかにもう持ち主はいないのだけれども、それは恵のものであって、他の誰のものでもない。恵が大切にしていた物たち。カーテンもベッドカバーも恵が選んだのだ。お小遣いで買った、雑貨やアクセサリー、どれも恵が心を砕いて集めたものだ。かおりがプレゼントしたぬいぐるみ、旅行の記念、みんな恵が大切にしていたもので、それを恵以外の誰に処分する権利があるというのだろう。恵はいなくても、この部屋は恵のものだ。なのにいずれ、この世から消えてしまう。そうやって恵の生きていた痕跡が拭い去られていく。

こんなのは嫌だ。恵の死が、こんなに簡単に忘れ去られていいはずがない。人が死ぬということは、もっと重大な悲劇のはずだ。一生、忘れられない、心の傷になるような。たった三十五日でキリがついてしまうような、そんな軽々しいことではないはず。

かおりは狼狽して周囲を見まわした。もう今すぐにでも弔組の女衆が上がってきて、部屋を片付けてしまいそうな、そんな気がした。忌明けだから、今日を限りに恵は家を離れるのだから。だから恵の部屋は必要ない、と言って。

頼んでみようか、恵の両親に。恵に断りもなく、勝手に部屋を整理してしまうような

ことはしないでください、と。そんなふうに恵を片付けてしまわないで。——そう頼んで、それで聞き入れてもらえるだろうか。

佐知子の顔が目に浮かんだ。恵の死を片付けなさい、と言う母親。佐知子ならきっと、恵の母親にもそう言うのだろう。片付けなさい、そのためにも恵の部屋は整理してしまったほうがいいと。寛子もそれに同意するのかもしれない。忌中ではなくなったのだから片付けよう、そして恵のぶんまで人生を楽しむのだと。部屋の中の一切合財を整理し、処分する。——するかもしれない。ここにあるものは、どれも恵にとって大切なものだけれど、大人は子供の「大切なもの」に敬意を払ってくれることなど、ほとんどない。

「駄目だよ、そんなの」

せめて何か、とかおりの目は部屋をさまよう。処分されてしまう前に、ここから運び出してかおりが大切に保管しておかなければ。そう——そうすればいい。恵の形見に、何か。かおりは忘れない。片付けたりしない。大切に「恵」を保存しておく。

ぬいぐるみは大きすぎる。とてもこっそり持ち出せない。あまり目立つものも駄目だ。恵の家族が、なくなったことに気づくかもしれない。盗んだなんて思われたくない。小物や雑貨ならポーチに忍ばせて持ち出せるだろうけれど、それらのどれを見ても、「恵」と呼ぶには不足がある気がした。

机まわりに目をやる。デスクマットの下のカレンダーは八月のまま。恵のカレンダー

はそこで止まってしまった。これをここに入れた時には、これが最後の月になるなんて、思ってもみなかっただろう。三分の一しか開かれていない教科書、買ったまま封を開けてない文房具。

（……恵はもういない）

かおりは棚や抽斗の中を検め、「恵」そのものである何かを探した。見つかるのは恵の断片ばかりで、それでいっそう、恵はもういないのだ、という気がした。恵はいない。その存在が消えてしまった。ここに残されているのは、「恵」にはぜんぜん足りない欠片ばかりだ。

泣きそうな気分であたりを探っていて、かおりは手を止めた。デスクマットの下、カレンダーの下から葉書を見つけた。

恵の文字だ。彼のために書いた残暑見舞い。書いてそれきり、投函できずに恵は死んでしまった。こんなに丁寧に書いたのに。

（恵……これ、出したかっただろうね）

それを思うと、涙が零れた。かおりは泣きながら、それをポーチに忍び込ませた。どれも「恵」には足りない。これだって「恵」じゃない。でも、恵はこれを家族には見られたくないだろう。もしも部屋を整理することになったら見つかってしまうし、そうして出しそびれた残暑見舞いなんて、真っ先に捨てられてしまうだろう。それだけはさせ

たくなかった。
「大丈夫だよ、恵……」
捨てたりさせない。かおりはポーチを抱き締めた。
「……いっしょに帰ろ」
家に連れて帰ろう。ここには今日限り、いられないから。四十九日まで、かおりの部屋にいればいい。自然に遠い場所へ行ける日までは。
「大丈夫、あたしは片付けたりしないから」

3

店のドアが開いて、長谷川は顔を上げた。
「おや、お珍しい」
電気店の加藤だった。加藤が店に来るのは珍しくもないことだが、今日は息子の裕介を連れている。カウンターに坐った二人に、長谷川はグラスを出した。
「お揃いで。今日は——ああ、日曜か」
曜日をすぐに失念する。クレオールは休みを決めてない。最初は道楽のつもりで開いた店だったから、面倒だったら休めばいい、というぐらいのつもりでいたが、意外に長

谷川も店を開けるのが楽しくて、結局、ほとんど年中無休の有様だった。そもそも商店街は日曜定休が当たり前だったらしいが、最近では日曜も開ける店のほうが多く、以前には五時六時で閉店していたものだが、これもじりじりと延びる傾向にある。それが時代の趨勢というものなのかもしれなかった。

「裕介くん、何にする?」

訊くと、裕介は含羞んだように俯いた。昔から人見知りをする子供だった。特に長谷川に懐きはしないのだが、長谷川は息子を亡くしているから、男の子は無条件に可愛く思ってしまう。常に息子と引き比べ、そのたびに様々のことが思い出される、それでなのかもしれない。亡くした当初は何を思い出しても悲しかったが、四年が経つと、懐かしいばかりで胸の内が温かい。

「うん?」と、促すと、道々決めていたのだろう、アイスクリーム、と小声で答えた。

加藤が微笑む。

「裕介が財布を拾ってきましてね」

「おや」

「女性のものらしい、年期の入ったやつなんですけど。それを交番に届けると言うので、褒美にアイスを奢ってやろう、と言っていたんです」

「なるほど。そりゃあ、裕介くん、偉いなあ」

「でも、いなかったよ、駐在さん」
裕介が言って、困ったように父親を見上げた。
「そうだな」と、息子に頷いて、加藤は長谷川を見る。「長谷川さんは、後任の駐在さんにお会いになりましたか」
ああ、と長谷川は呟いた。高見が死んで、そのあとを佐々木という警官が埋めた。
「それがねえ、わたしも見てないんですよ。いつ見ても空ですね、駐在所が」
「ですね。……変だな」
「田代さんは何度か見かけたようですけどね。交番は書店のすぐ斜め向かいだから。なんでも愛想のない人みたいですよ。声をかけてもろくに返事もしたがらない、って田代さん顔を顰めてましたから」
「へえ……」
長谷川は、特別に大盛りにしたアイスクリームの器を裕介の前に差し出した。
「せっかく行ったのに残念だったね」
言うと、やっと裕介は笑う。ありがとう、と小声で言った。それを微笑んで見守ってから、加藤は、
「メモを残して、財布は机の上に置いてきたんですけど。でも、そう始終いなくて大丈夫なんでしょうか」

「そうですねえ。まあ、平和な村なんで、もともと高見さんも暇だ暇だとは言ってましたけど。けども最近はどうもねえ。いつ行っても駐在がいないんじゃ、なんだか心配ですね」
ええ、と加藤は頷く。
「……兼正の桐敷さんといい、最近越してこられる人は、引っ込み思案な方が多いようですね」
「まったくねえ。来たって噂ばかりで姿を見かけない、そんなのばっかりですねえ。妙な感じだな、どうも」

4

静信は読経を終えて、背後を振り返った。大川家の人々に頭を下げる。
「どうも、ありがとうございました」
大川富雄が言って、かず子がお茶を運んでくる。山入で死んだ大川義五郎の四十九日だった。もうそんなに経ったのか、と静信は思う。
「これで肩の荷が下りましたよ。あんな爺さんでも、位牌を預かってると気になってね」
静信は特にコメントをしなかった。黙って出された湯呑みを手に取る。家族だけのひ

っそりとした忌明けだった。義五郎にも子供がいて、葬儀の時には夫婦連れ、子供連れでやって来ていたが、法事にまでは来られないということなのだろう。それぞれが遠方に転出していることを考えると当たり前なのだが、やはり寂しい気がしてならなかった。
外場は結束が固い。それは強固な身内意識と、同じく強固な排他主義のうえに成り立っていた。そのせいなのか、村にいる間は一分の隙もなく村社会に納まっている者が、いったん村を出ると憑き物が落ちたように村を忌避する、そういう傾向があった。転出して村の外に出ると、本人も周囲も余所者になった気がしてしまうのだろうと思う。
「何にせよ、これで一段落ですよ。今日は清水さんとこも法事だったそうで。若御院もお疲れでしょうな」
「いいえ。大将も大変でしたね」
まったくです、と大川は頭を振った。
「ついこの間もね、うちの松んちの娘が死にましてね。まだ若いのに」
ああ、と静信は頷いた。上外場の松村康代のことを言っているのだと分かった。
「本人はすっかり腰が抜けちまって、女房は女房で、泣きわめいたあげくに寝付いちまうし。結局、おれが葬式を出したようなもんですわ。二度あることは三度ってえ言いますが、これだけは三度目は勘弁してもらいたいもんだ」
「そうですね」

「それきり松は仕事に来たり休んだりだしね。それでなくても人手が足りねえっていうのに。おまけに配送の人間の顔ぶれがやたら変わってね。段取りが悪いったらありゃしねえ。なんだかもう、そういう按配で天手古舞ですよ。まったく」
それは大変ですね、と静信はとりあえず返した。大川の脇で、妻のかず子が釈然としない顔つきをしている。
「それにしてもお葬式が多いですよねえ。なんだか、この村はどうなっちゃったのかしら、と思ったりするんですよ、最近」
これに対しては、静信は答えるべき言葉を持たなかった。疑惑が浮上している。それも次第に強くなっている。そのうちに、堰を切ったようにあふれだすだろう。その時には何が起こるのか――。
かず子は静信の内心など知らず、ただ首をひねっている。
「なにかこう……嫌な感じがするんですよ。何が嫌って、はっきり言えないんですけどね。ついこの間も、郵便局が閉まったでしょう」
ああ、と静信は頷いた。光男がそんな話をしていたか。たしか引越したのだと聞いた。
「あれもねえ、妙な話なんですよ」
かず子が言うと、大川は嫌そうな顔をした。
「またその話か」

「だって妙だったんだもの。そりゃ、お父さんは見ていなかったから。でも、あたしはこの目で見たんですからね。考えれば考えるほど、あれは死に顔だったと思うのよ」
　静信は瞬いた。
「あの……それは？」
　ああ、と大川は渋面を作る。
「郵便局のね、大沢さんが死んでたって言うんですよ、こいつは。見舞いに行ったら顔が見えて、それが死に顔だったって。そんなわけがあるわきゃないだろうが」
　言葉の最後は、かず子に向けたものだ。かず子は恨めしげに大川を見た。
「だって、本当にそうとしか思えなかったのよ。なのに、その日の夜のうちに引越でしょう。それも夜中に。変だと思うのよ」
「失礼ですが……夜中だったんですか？」
「そうなんですよ」と、かず子は頷く。「具合が悪いって言うから、あたしはお見舞いに行ったんですよ。そりゃ、顔色がうんと悪かっただけで亡くなってたわけじゃないのかもしれませんけど。でも、病人がいるのに家移りなんてします？　それも夜中のことですよ。しかもあたしが見舞いに行ったときは、引越すなんて一言も。第一、家の中だっていつもの通りで、荷物ひとつ作っちゃいなかったんですから」
　もうよせ、と大川は妻を窘(たしな)める。かず子は不満そうに大川を見上げた。

「だって気味が悪いじゃない。本当に、この村はどうなってるんだか……」

5

両親を送り出して、清水寛子(ひろこ)は気抜けしたような、安堵(あんど)したような気分に陥った。実家の両親が法事のためにやって来て逗留(とうりゅう)していった。わざわざ三日もの間滞在していたのは、気落ちしている寛子を気遣ってのことだとは分かっている。ただ、娘を亡くして以来、寛子は自分の気力が萎(な)えているのを自覚していた。両親に気を配るのが疎(うと)ましく、同時に気を配られるのも疎ましい。

重い荷を下ろした気分で玄関を閉めて振り返ると、家の中はがらんとして見えた。電灯の明かりが白々しい。夜の村にはしんとした沈黙、弱々しい虫の音が秋の名残を鳴いている。

恵が欠落して、家の中には恵のぶんだけの空洞ができた。両親がいる間は二人の気配がそれを糊塗(こと)してくれていたが、二人がいなくなると、あまりにも露(あら)わだった。義父の徳郎も夫も恵の死以来、生気が抜けたようだった。家の中では人の気配が絶え、テレビの音だけが虚(むな)しく響いていることが多い。その空虚さが自分の気分には似つかわしいように思え、むしろ両親の気配が場違いなものに思えてならなかったが、二人がいなくな

ってみると家の中はいかにも寂しかった。

寛子は息を吐き、居間に向かう。義父と夫が二人、無言でテレビの画面を見守っていた。そこに自分が参加して三人になっても、人が集まっている、という感触が生じることはないだろう。

寛子は無言でダイニングテーブルに向かって坐り込んだ。誰も寛子には声をかけなかったし、寛子もまた声をかけなかった。テーブルの上に開いた帳面に、法事のためにかかった費用をつけていく。何もしたくはなかったが、何かをしないと時間が経たない。忍従の時間にも似て、とにかく時間を消化することだけを考えていたが、この忍従には終わりがなかった。

無言で徳郎が立ち上がり、居間を出て行く。寛子も清水もそれを見送ったが、どこへ、とも何か、とも訊かなかった。徳郎が抜けたぶん、いや増した沈黙に耐えかね、寛子は口を開いた。

「……若御院と何を話していたの？」

「うん？」

「法事のあと、何か話し込んでいたでしょう」

ああ、と清水は呟いた。恵が行方不明になる前、何か変わった様子はなかったか、七月半ばから八月にかけて、どこかに出かけたりはしなかったか。山入に行くことはあっ

ただろうか、後藤田某という男と面識がなかっただろうか、そういうことを訊かれたように思う。

清水が低くそう答えると、寛子が沈黙し、会話はそこでぷつりと途切れる。清水もその沈黙に身の置き所のない思いをしながら、自分が答えたこと、答えなかったことについて考えた。

恵は山入に行ったりしないと思う。後藤田秀司などという男とは面識がなかったと思う。けれども確証はない。後藤田なる男がどういう男なのか、清水も知らないし問いもしなかったが、ひょっとしたら、と思わないでもない。――死んだ恵の部屋には薄く香水の匂いが残っていた。

今も鼻腔に残るその匂いは、清水を苦しめた。芳香剤ではない、あれは香水の匂いだ。寛子には日常、そんなものをつける習慣はない。ちょうど盆休み、清水は家にいて恵の許を訪れた人間を把握していたが、恵を訪ねてきたのは尾崎医院の敏夫と、近所の田中かおりだけだった。かおりも香水をつけたりはしないと思う。だとしたら、それは恵のものとしか考えられない。

恵が帰ってこない、と寛子が騒ぎ、近所の者に真っ先に言われた言葉がある。「色気づく年頃だから」と。恵はまだまだ子供だ。そのとき清水はそう思ったが、部屋に残っていた香りが、少なくとも誰かのために香水をつけて装うような歳になっていたのだ、

と囁く。山の中に倒れていた恵、恵に何が起こったのか、近所の心ない者の中には、答えはひとつしかない、と言外に匂わせる者がいる。清水自身、疑っている。敏夫から心配ないと言われたものの、単なる貧血だと言ってのける医者の保証が本当に信じられるものだろうか？

恵に何があったのだろう。恵は誰のために香水などつけていたのだろう。いつから、娘は「女」に変貌していたのだろう。清水は娘を亡くし、同時に娘を見失おうとしていた。

「……妙なことを訊くのね」

ぽつりと寛子が言った言葉が、何に対するものなのか——誰に対する言葉なのか、清水は一瞬、分からなかった。ぽかんとして振り返ると、寛子は清水のほうを見ている。

「……ああ……そうだな」

「その後藤田という人は誰？」

「さあ」

「その人が、恵と何かあったのかしら」

「何かって？」

「……嫌な感じね」

寛子は清水の問いには答えず、そう言った。

「何が」
「なんだか、嫌なことが続くわ」
「そうかな……」
「大塚製材でも息子さんが死んだじゃない。ついこの間、中埜さんのところでもお葬式があったみたいよ」
「そう」
「山入でも人が死んで。……今年はそんなことばっかり。どうかしてるわ」
「気のせいだろう」
清水はそう言ったが、これは必要以上に素っ気ない言い方になった。実を言えば、清水もそう思う。今年は妙だ。やたらと葬式を見かける。村では今、何か良くないことが起こっている気がしてならない。だが、清水がそう言うと、職場の同僚は考えすぎだと言う。同じく下外場に住む前田などには、娘を亡くして過敏になっているのだ、とさも心配そうに諭された。そうなのかもしれない、とは清水自身も思う。
「安森のお婆ちゃんが越したらしいの。息子さんと同居するんですって。……少しずつ人が減っていくみたい」
そうか、と清水は答えた。置き去りにされていく、という気がした。
「そう言えば、ＪＡの奈良さんも退職したな」

「奈良さんが？　だって、あの人はまだ」
「具合が悪いんだそうだ。早々に隠居を決め込むつもりらしい」
「そう……それも悪くないわね」
「突然、言われてもな。残されたこっちは、かなわない。出てこない事務員もいるし」
「事務員？　誰？」
清水は村外から通ってきていた女事務員の名を挙げた。在職して長いし、寛子とも面識がある。
「彼女が？　出てこないの？」
うん、と清水は顔を顰めた。
「ここだけの話だが、彼女、どうも駆け落ちしたらしいんだ」
まあ、と寛子は声を上げた。
「旦那さんと子供さんは？」
清水は溜息まじりに首を横に振った。寛子は驚き、そして自分が幾許かの羨望を感じているのを自覚した。羨望というほど強い感情ではないが、それに似た何か。
――現在を捨てて、未来へと逃げ出してしまえれば、どんなにいいだろう。
沈黙で押しつぶされそうな家、穴の空いた家庭。娘を失った自分自身。そして。
（……呪われたこの村）

6

敏夫が水口に住む大川茂の訃報を受け取ったのは、例によって早朝のことだった。九月十九日、月曜日。電話を受けて駆けつけると、すでに茂は死亡していた。大川茂は敏夫より一級上の三十三歳、三十四を目前にしての急逝だった。

茂は三日ほど前から寝付き、未明の頃に看取る者もないまま、ひっそりと息を引き取った。家族は朝に起きてみてやっと、茂が死んだことに気づいた。

「こんなことになるなんて」

母親は茂の遺体に縋って泣き伏す。それを敏夫は苛立たしい気分で見守った。なぜ具合が悪くなったときに病院に来させなかったのか、連れてこなかったのか。

——もちろん、分かっている。間に土日が挟まったからだ。茂の両親が息子のことを心配しなかったわけではない。健康に無頓着だったわけでも。両親の心配以上に激烈に茂は悪くなったのだ。それは当初、休日の医者を呼び出すほどのことではないと思えた。けれども息子のことが心配だから、週が明けたら一番に医者に診せようと考えていた。そして、間に合わなかった。月曜を待つほどの暇を、病は茂に与えなかった。

休日にも病院を開ければいいのだと敏夫には分かっている。村の者は敏夫と密接な親

交がある。だからこそ、敏夫から休日を搾取できない。それをしては申し訳ない、という配慮をするのだ。それは善意で――まったくの善意に他ならないのだが、この病に冒された患者にとって、土日二日は、たかだか二日のこととは言え致命的な遅滞になる。

患者のことばかりではない。これでは困る。呼ばれるたびに遺体に対面するのでは――しかも病理解剖さえできないのでは、経過も観察できないし、病因の特定もできない。とにかく死亡診断書を出すのに必要だと言って、茂の病歴、両親の病歴、昨今の動向を訊くので精一杯だが、近頃、誰に会ったか、どこに行ったか、そこで感染するようなことが何かなかったか、そこまでは本人でなければ分からない。せめて本人にそれを尋ねることができれば。意識が清明なうちに。

このところ、訃報がやんでいた。ごく短い小休止だ。そしてそこに飛び込んできた茂の訃報。おそらくはこれが皮切りになる。小休止が終わって次のピークがやって来たのだ。今度の波は前回の波より高いだろう。

土日にも病院を開ければいいのだ、それは分かっている。しかしながら、病院を開けるということになれば、スタッフの手が要る。それでなくても忙しいスタッフに、これ以上働けとは言えなかったし、新規にスタッフを募集したところで右から左に埋まるはずもない。

敏夫は泣き伏す大川夫妻を、暗澹たる気分で見つめていた。

静信が大川茂の訃報を受け取ったのも、例によって朝の勤行が済んで間もない頃のことだった。寺務所に戻って一服していた静信らは、電話の音に一瞬、互いに目を見交わし合った。朝の電話はろくなものではないと、彼らの誰もがこの夏で身に滲みていた。電話を取ったのは光男で、「また」と小声で呟いたのは鶴見だった。誰もそれ以上のことは言わなかった。

枕経のために水口の大川家を訪ねると、そこではお定まりの愁嘆場が繰り広げられていた。

「こんなことになると知ってたら、土曜に病院に引きずっていったのに」母親の規恵は泣き崩れる。「本人が、大丈夫だって言うものだから」

ふきの——後藤田秀司の死で、繰り返されたことが、ここでも繰り返された。父親の長太郎も規恵も、一廻りも小さくなったように見える。茂はまだ結婚していない。嫁や孫がいないことを、幸い、と言うべきなのか、不幸にして、と言うべきなのか、静信には分からない。

大川長太郎や規恵にとって、息子の茂の死は、我が身の死に匹敵するほどの重大事だった。夢にも思わなかった突然の死。その衝撃も意味も、彼らにとっては量り知れないほどのものだろうに、静信にとって、これはこの夏、吐き気がするほど繰り返されたお

定まりの一場面にすぎないのだった。

だから、それとなく大川茂の、最近の動向について問うのも、どこか消極的なままだった。どうせなんの接点も見えないに決まっている、と心のどこかが端から徒労感を感じている。——そして実際、これまでの死者と茂の間にはなんの接点も見出せなかった。

（これが続くのか……いつまで？）

自問して暗澹たる気分になったまま、静信はふと、茂が死の直前、会社を退職していなかったかを訊いた。

規恵は、なぜそんなことを訊かれたのか分からない、という顔をした。

「とんでもない」

そうですよね、と静信は内心で苦笑する。そう、意味は存在するのではない、観察者によって付与されるのだ。自嘲じみた沈黙を規恵は不審の表れと受け取ったのか、言葉を重ねた。

「そんなはずはないです。今朝、溝辺町の職場に、茂のことを知らせたときにも、そんな話は出ませんでしたから」

「いや、済みません。少し気になっただけなので。お気に障ったら申し訳ないです」

静信はそう詫びて、通夜にまたと言い置いて大川家を辞去した。再び大川家を訪ねたのは、通夜の始まる少し前、座敷の脇に控えながら、静信は例によって弔問客の死者を

悼む声と、雑然と通り過ぎる会話を聞いていた。
　じっとそうして控えていると、弔問客の中に大川富雄の顔が見えた。そう言えば大川酒店の亭主は、大川茂とは血は濃くはないものの、縁続きになるのだと思い出した。
「ああ、これは若御院。お疲れさまですな。昨日の今日でまたお会いすることになろうとはねえ」
「大将もお疲れですね」
「縁続きで二軒目ですよ。まったくねえ」
　大川は溜息をつき、頭を下げて親戚のところに戻っていった。喪主であるほうの大川夫妻は、対して悄然と坐ったまま、来訪者の弔問を受けていた。
「どうも、このたびは突然のことで」
　そう大川夫妻に声をかけ、手を突いたのはダークスーツの壮年の男、その背後には同じく略喪服の数人が控えていた。
「知らせをいただいて、びっくりして。さぞお気落としのことでしょう。明日の御葬儀、わたしどもに手伝えることがありましたら、どうぞおっしゃってください」
　長太郎も規恵も、これに深々と頭を下げた。
「ありがとうございます。……近所の人たちが全部やってくれますので、お気持ちだけ」

そうですか、と男は嘆息した。

「それにしても、本当に急のことで。茂くんは、どこかお悪かったんですか」

いえ、と規恵はハンカチを目許に押し当て、首を振る。

「そうなんですか？　……いや、皆とも」と、男は背後の数人を振り返った。「茂くんが突然、辞めたのは療養のためだったんだなあ、なんて言っていたんですよ」

規恵は顔を上げ、泣き腫らした目で男を凝視した。長太郎もぎょっとしたように腰を浮かせる。静信もまた、思わずその男の顔を正面から見つめた。

「あの……何のお話でしょう」

規恵はハンカチを手の中でもみくちゃにする。今度は男のほうが困惑したように大川夫妻を見比べた。

「いえ、あの。先週の金曜に、茂くんが退職なさって、その時には理由を一身上の都合です、というふうに言っておいでだったんですけど、きっと具合が悪くて療養に専念するために辞めるってことだったんだなあ、と」

男は言って、長太郎と規恵のぽかんとした顔を見つめた。

「あの……お聞きではなかったんですか？　辞めたんです、茂くん。それも突然に。どうしても事情があるからということで、本来なら引き継ぎやなんやかやが終わってから辞めてもらうところを、その日限りということで」

男は援護を求めるように背後の数人――同僚たちだろう――を見た。

「茂くんにしては強引なやり方だったので、よほどの事情があるんだろう、と言っていたのですが、訃報をいただいて、それでだったのかと……ええと、あの……」

「そんな――はずは」

規恵は絶句し、そして座敷の隣室に控えていた静信のほうを見た。

「あの子は、そんなことは、何も――」

彼らは困惑したように顔を見合わせる。会話を小耳に挟んだのか、周囲にいた人々もまた目配せをし合っていた。

へたり、と腰を浮かせていた長太郎が坐り込んだ。

「わたしはもう……何がなんだか。――どうして、こんな」

それきり絶句して、嗚咽を漏らし始めた。

静信は坐ったまま、自分がまるで不条理劇の中に放り込まれたように感じていた。

清水隆司、広沢高俊、そして大川茂。いずれもまだ若い男で、近隣へと勤めに出ていた。それが突然に死んだ。死んだことは奇異なことではない、もはやこの村では。――だが。

六章

I

外場に住む加藤義秀が妻の澄江に支えられて来院したのは、九月も二十日になってからのことだった。急患です、と十和田が声をかけてきた。診察中の敏夫は目線をやすよに向ける。意を受けて、やすよが待合室に出てみると、老人は妻と武藤に両脇を支えられ、やっと椅子に坐り込もうという有様だった。

「大丈夫ですか」

やすよは膝をつき、老人の顔を覗き込む。かろうじてやすよを見て頷いたが、朦朧としているようで顔色も悪く、肩で息をしている。呼吸は浅く弱い。手を取るとひんやりして冷や汗をかいているのが分かる。脈も速い。

やすよは駆けつけてきた律子と聡子を振り返る。

「ストレッチャー。先生に知らせてくるから処置室のほうに運んで。脈と血圧、測っといてね。動脈カテーテルの用意をしといたほうがいいかも」

はい、と返事をして、てきぱきと動き出した二人を残し、やすよは診察室に取って返

す。敏夫が、どうだ、と言うように顔を上げた。
「処置室に運びました」
敏夫の目を見て言う。それで意図は通じたらしい。敏夫は患者に断って立ち上がり、処置室に向かう。
「どんな具合だ？」
「頻脈、頻呼吸です。ちょっとチアノーゼが出てるようで、縮瞳してます」
敏夫は頷き、処置室に入る。
「どうしました」
敏夫が声をかけると、澄江は筋張った両手を握り合わせた。
「二、三日前から、風邪を引いて寝込んでたんです。寝てれば治ると本人も言ってたんですけど、今日になってもこの有様で——若先生、まさか肺炎ですかねえ」
「まだ何とも言えないな」
聡子がメモを差し出した。脈拍が多く、血圧は極端に低い。
「動脈カテーテル」
はい、と律子はカテーテルを差し出す。すでに加藤の手首は固定されている。敏夫は頷き、澄江に声をかけながら動脈血を採取した。
「熱はどうでした」

「八度前後です」
「咳や頭痛は」
「咳はありません。頭痛も別に……。本当に風邪だと思ったんです。本人もそう言ってましたし。それで煎じ薬を飲ませたんですよ。姑が風邪のときに使ってた薬で、どんなに酷くても一晩で治るんです。なのに、少しも良くならなくて……」
「ガス分析」言いながらスピッツを聡子に渡し、敏夫は澄江を振り返った。「……何を考えてるんだ、あんたは」
　澄江はきょとんと目を見開く。
「チアノーゼが起こってる。ここまで引っぱってくる間に、どうして救急車を呼ばないんだ。おまけに風邪だろうと思った、だって？　あんたはいつ医者になったんだ。なんだって素人が勝手に診断をして、勝手に投薬をするんだ！」
　先生、と律子が小声で言う。敏夫はとっさに律子を睨み、すぐに自分が我を失ったことを悟った。
「……いや、申し訳ない」
　澄江は目に見えて狼狽している。
「済みません。――とにかく、救急車を呼びます。それまで最低限の処置をしますから」

「あの、お爺さんはそんなに悪いんですか」
「検査してみないと何とも言えないが、呼吸不全が起こっているのはたしかですね」
敏夫は胸の中でARDSだろう、と付け加えた。例のやつだ。それも、病状の後半段階——もうMOFに移行しようとしている。律子に酸素ボンベの準備をさせ、胸部XPの指示を出す。とりあえず澄江に最低限の問診をした。
すべての結果が出揃う間もなく救急車が到着し、国立病院へと義秀を運んで行った。
「先生」と、やすよは救急車を見送りながら低く言う。「例のやつですかね」
「……だろうな」

2

彼岸に入る前に、と静信は二十日の夜、外場の村迫宗秀を訪ねた。村迫宗秀は外場集落の弔組世話役を務めている。外場で立て続けに出た二人の死者の葬儀に際しても世話役代表をしたはずだった。
商店街の一郭にある村迫米穀店の灯は消され、シャッターもすでに降ろされていたが、事前に連絡をしていたからだろう、一枚だけが半分ほど開けたままになっている。身を屈め、そこからガラス戸を開けて店内に入ると、静信は土間から声をかけた。

すぐに答えがあって、顔を出したのは長男の宗貴だった。宗貴は闊達な笑顔を見せる。

「よう。久しぶりだな。どうしてる」

相変わらずです、と答えた静信に、宗貴は奥を示す。

「親父に用だって？　奥で待ってる。上がってくれ」

促されて、静信は店のほうから住居へと上がり込んだ。宗貴は静信の三級上になる。学校では一緒になったことがなかったが、今は遠方に出ている次男の英輝が一級上だった。高校までは村迫米穀店にもよく遊びに来たし、その時に宗貴にも世話になっている。ずいぶんたくさんの本を借りたし、勉強も見てもらった。会ったのも店を訪ねてきたのも久しぶりのことで、懐かしかった。

奥の座敷へと行く途中、茶の間の脇を通った。ぺこりと頭を下げたのは宗貴の妻、智寿子だ。智寿子の左右には小さな男の子と女の子が坐っている。

「博巳くんも智香ちゃんも大きくなりましたね」

だろう、と先に立って廊下を歩きながら、宗貴は笑った。

「お前が会ったのって、智香が幼稚園に入る前だもんな。もう二年生だ。小学校の低学年の子供ってのはすごいよ。目に見えて大きくなるし、人格ができてくる」

でしょうね、と答えたところで、ちょうど二階から降りてきた少年と出会った。三男の正雄だ。宗貴とは十いくつも歳の離れた弟で、静信が出入りしていた頃には、まだ本

当に小さな子供だった。
正雄は静信を見て目を逸らす。会釈しているのか首を竦めているのか、どちらともつかない様子で通り過ぎた。
「正雄、挨拶しないか」
宗貴が呼びかけたが、ちらりと振り返っただけで返事もない。ちょうど家族に対しては寡黙になる年頃だ。
「大きくなりましたね。もう高校生？」
「二年だよ」と、宗貴は苦笑した。「図体ばかり大きくなって、ちっともしっかりしない。親父とお袋が甘やかしたもんだから、扱い難くて」
もっとも、と宗貴は照れたように笑う。
「自分が親父になってみると分かるもんだが、いちばん下の子供ってのは、可愛いもんなんだよな。別に上の子が可愛くないわけじゃないんだが、どうしても愛玩しがちになるというか。ちょうどおれたちが可愛気をなくした頃にできた末の子だからさ、親父たちにしてみりゃ、そりゃあ可愛かっただろうと、今になって思うよ」
「そんなものなんでしょうね」
「うん」と頷きながら、宗貴は突き当たりの襖に手をかける。「——親父、若御院だよ」
「ああ、こいつはどうも」と、宗秀が腰を上げた。どうやら一人で晩酌の最中らしかっ

た。酒気で赤らめた顔をくしゃくしゃにして、まずはビールでも、と勧めるのを、車だから、と断る。それでもなお勧めようとして、宗貴に咎められ、しゅんとしたのがおかしかった。宗秀はもう還暦の前後だったか。人間はある程度歳を取ると、どこか子供じみてくる。

宗貴に案内の礼を言い、茶菓子を振る舞ってくれた智寿子に礼を言う。宗秀と二人きりになってから、静信はそっと切り出した。

「……佐伯明さんが亡くなったと聞いたんですが」

宗秀は上気した顔で頷いた。

「そうそう。亡くなったんだよ。若御院は知り合いでしたか」

「知り合いというほどではないんですけど」と、静信は少し後ろめたい思いで目を逸らした。訃報は石田から聞いた。佐伯明というその男を、静信はそれまでまったく知らなかった。「人づてに聞いて驚いてしまって」

「うん。急なことでね。いや、わたしもあまりよくは知らないんだけどね。弔組は上外場になるんで、葬式の世話をしたわけじゃないから」

「もうずっとお悪かったんですか」

「いや。突然のことだったらしいよ。夜中に突然、胃が痛いって言い出して——実は心臓が悪かったらしいんだよ。心臓の痛いのは胃痛と勘違いすることがあるんだってね。

家族はそれ知らないもんだから、胃薬飲ませて様子を見てたんだけど、どうもおかしい。それで病院に連れて行ったら心臓にきてて、翌日には亡くなったんだ」

言って、宗秀はちょっと考え込むようにした。

「家族は驚いてたが……ひょっとしたら本人には、ずっと前から自覚症状があったのかもしれないなあ。急に仕事を辞めちゃっててね」

静信は、ぎくりとした。

「辞職していたんですか？」

「うん。倒れる三日前かな。家に帰ってきて、会社辞めたから、って突然、言い出したらしいんだな。親や女房は普通、驚くよ。相談もなしになんで、と問い詰めたけど、本人が辞表出してきちゃったもん、あとの祭りさ。しばらくのんびりしたい、休みたいと言ってたらしいんだけどね。だから、身体(からだ)が辛(つら)かったのかもなあ」

静信は困惑した。静信が宗秀を訪ねたのは、佐伯の最近の動向について知りたかったからだ。交友関係はどうか、生活圏はどこか、他の患者と共通するような何かがないか。そしてこれまで、それらの質問は徒労に終わっている。家族や親族の場合を除き、患者同士はほとんど接点を持たない。これと言う共通項も見つからなかった。にもかかわらず、すでに清水隆司、広沢高俊、大川茂と、佐伯の他にも三人が死の直前、唐突に辞職している。なんの共通項も持たない彼らに、唯一(ゆいいつ)共通するのがこれだというのは、どう

いうことなのだろう。

「あの、他にも最近、亡くなってますよね、外場で」

「ああ」と、宗秀は頷いた。「高嶋さんな。そう言えば、あれも急だったなあ。突然、寝込んでそのまんま」

「その方はまさか、……辞職されてませんよね」

宗秀はぽかんとし、何か奇妙なものでも口に含んでしまったような、なんとも複雑な表情をした。

「そう……高嶋さんとこも、辞めたって言ってたよ。こっちはもともと仕事の続かない人でね。奥さんとこの実家が苦労して仕事を見つけて、頼み込んで入れてもらったのに、やっぱり嫌だから辞めることにする、って。そんで辞めちゃったらしいんだけどね。――そう、あれも死ぬすぐ前だよ。ほんの数日前だってふうに、弔いのときに言ってたからね」

静信は動揺した。死亡者の共通項――辞職。例外は秀司、幹康、大塚康幸。外場で自営業に携わっていた者たち。

(……村外通勤者)

これはどういうことだろう。犠牲者には村外に通勤している者と、そうでない者の二グループがあって、通勤者のグループのほとんどが死の直前に辞職している。――いや、

と静信は思った。唯一の例外は太田健治だが、太田も辞表は出していたのだ。慰留されていたというだけのことで。
「何なんですかね、これは」宗秀は狐につままれたような顔をしていた。「今気がついたが、妙な話ですな」
静信は曖昧に頷いた。宗秀はひとりごちる。
「どうも最近、妙な感じがする。葬式が多いし……」
言って、宗秀は静信を見た。
「駐在の高見さんも亡くなった。えらく多いような気がするんだ。若御院はそう思いませんか」
「そう……でしょうか」
「多いですよ。そりゃあ、今年は暑かったけど、にしてもこんなに死ぬもんかね。外場地区だけじゃない、つい最近にも、どこかでも葬式があったって聞いたな、客に。――まさか」
宗秀は険しい表情で静信の顔を覗き込むようにする。
「疫病なんてことは」
「まさか」と、静信は苦しく微笑った。「どなたも伝染病で亡くなられたわけじゃないんでしょう?」

「そりゃあ、そうだが」
「伝染病なら病院がそのように言うでしょう。家族に言わないはずがないし、場合によっては家族も隔離されることがあります。よしんば家族が伏せていても、診断書にそうあったら役場は土葬の許可を出せないです」
「ああ」と、宗秀は釈然としないふうながらも頷いた。「まあ、そうですな」
「死人が多いのは事実ですが……」
「妙な感じだ。伝染病が流行ってるわけでもないのに、人がばたばたと死ぬ。その死人が二人、どっちも死ぬ前に職を辞めてたり。えらく暑かったり雨がなかったり。今年は妙だ……と言うより、村が、と言ったほうがいいのかな。この村は、この頃ちょっと妙ですよ。やたら引越があったり」
　言って宗秀は、複雑そうに笑った。
「この近辺だけでも、もう二軒、引越しましてね。なんだか、見捨てられていくみたいですな」
　そう言えば、静信も最近、門前のどこかの家が越したという噂を聞いた。郵便局の大沢も引越したようだし、駐在所の高見の家族も、転出してもういない。大塚製材を訪ねたときにもそんな話が——。
　静信は首を傾げる。何か釈然としないものが胸に立ち込めて、喉が詰まるような感じ

がした。それはちょうど、恵や後藤田ふきが死んで、漠然と異常を察知したときの気分に似ていた。

とりあえず宗秀に訊けるだけのことを聞いて、静信は村迫家を辞去する。少し迷い、寺の手前で車を停めた。

静信は車を降りて田茂の奥座敷を覗き込んだ。およそ戸締まりをしていた覚えのない裏門を入り、蔵に沿って庭を横切ったそこが、田茂定市の私室だ。奥庭に面した静かな書院で、定市は隠居を決め込んでいる。

「定市さん」

声をかけると、一人本を開いて碁盤に向かっていた定市が顔を上げた。

「おや、若御院」

田茂家はお定まりの兼業農家だった。定市は小学校の校長を勤め上げて定年退職し、息子は外場の中学校で教師をしている。農地は家族の食い扶持ぶんを、ほとんど道楽のようにして定市と妻のキヨで作っているが、本来、田茂は外場でも一、二を争う豪農だった。余剰の山や田圃を人に貸し出しているばかりでなく、外場の商店街にもかなりの数の貸し店舗や貸家を持っており、溝辺町にもいくつかアパートやビルを持っている。本来ならその賃貸料だけで悠々自適のはずなのだが、本人にも家族にもそんな暮らしをするつもりはなさそうだった。

「夜分、遅くに済みません。ようやく涼しくなりましたね」
静信が言うと、定市は本当に、と笑う。
「まあ、お上がんなさい。どうしました」
ちょっとお尋ねしたいことがあって、と静信が言うと、それ以上は問わずに、奥座敷に付属の小さな台所に立つ。そこで手ずから煎茶を淹れて戻ってきた。
「爺の淹れた茶じゃ、お口に合わないかもしれませんが、母屋から婆さんを呼ぶのもなんなんでね。どうせ婆ァの淹れた茶じゃ大差ないでしょうから勘弁してくださいよ」
お気遣いなく、と静信は笑う。
この気安げに笑っている老人が、現在の外場の重鎮だった。外場は現在では行政区分上、外場校区と呼ばれるが、これは六地区――かつては山入地区があったが現在では門前に合併されていた――に分割され、各地区から一名、区長が選ばれて町長の承認を受ける。そうして揃った六区長が区長会を作り、そこで会長が選出されるが、この区長会会長が、現在の実質上の村長と言って差し支えない。それがこの田茂定市だった。寺にあっては檀家総代会の会長を務め、外場ＪＡの理事を務める。同時に神社の氏子総代を務めて宮司を兼ねる。定市はそういう老人だった。
「なんだか近頃、ばたばたしちゃってね。若御院と差し向かいで話をすんのも久しぶりかね。どうです、寺のほうは」

「……おかげさまで」言って、静信はときに、と切り出す。「うちの光男さんが、門前のどこかで引越があったと言ってたんですが、定市さん、どこの家だか御存じじゃないですか」
「ああ、松尾ね」定市は即答した。村の重鎮とは言え、村の端々にまで目が届くわけではない。それでも門前のことなら、およそ定市の耳に入らないことはなかった。「ほら、境松ですよ」
ああ、と静信は呟いた。境松が松尾の屋号だった。地所がちょうど門前と上外場の境に位置しており、境の松尾、と呼ばれる。
「引越したんですか？　境松が？」
「そうなんですよ。あそこの息子が高志ってんですが、若御院は御存じですか。たしか、若御院よりちょいと上だと思うんですが」
「ああ——はい。分かります」
「あの高志くんが、単身赴任でどこだったかに飛ばされたって出て行ったんですけど、これが嘘っぱちでね」
「……は？」
「だから、本人は単身赴任になったって、そう言って嫁さん子供を置いて出てったんですけど、それきり音沙汰が絶えちゃってね。それで境松の康志さんが心配して、会社に

問い合わせたら、単身赴任どころか辞めたって話で」

静信は、思わずどきりとした。

「家族に何も言わずに、辞めちまってたんですよ。こりゃあ失踪だってんで、康志さん、血相を変えてね。うちにも相談に来たんだけど、事が事だけに内緒にしてくれって言うんで、わたしも黙ってたんですけど」

「それは、いつ頃の話です？」

「九月の頭ですよ。――そしたら、高志くんから連絡があったらしいんですわ。何がどうしてそういう話になったんだか知らないが、ともかくも息子のとこに行くって言って、家を引き払っちまったんです。それがついこの間、十八日ですわ」

「……妙な話ですね」

「でしょう？」と、定市は急須に湯を足した。「それがもう、ある日、家の前にトラックが停まってて、それで隣の守広のかみさんが訊いたら、そう答えたって話でね。かみさんが訊かなきゃ挨拶もなしに引越すつもりだったんじゃないですかね。康志さんは律儀な人なんだが、よっぽどの事情があったんでしょう」

定市は湯呑みに茶を注ぎ足して渋面を作る。

「それも夜の話ですよ。それでね、まあ、近所のもんと、こりゃあ夜逃げかもな、って話をしてたんですけど。おおかた高志くんが怖いところから借金でもして、それで逃げ

出したんじゃないかって」
そうですか、と言って、静信は定市の好々爺然とした顔を見る。
「定市さん、最近、他にも引越した家はないですか」
定市はきょとんとして、はて、と呟いた。
「そう言や、八月の末に上安の婆さんが引越しましたっけね。なんでも息子と同居することになったとかで。上外場でも似たようなことがあったって聞いたな。定次んとこの婿がね、そういう話をしてましたよ、たしか」
定市の弟、定次は上外場でスーパーをやっている。
「……こうしてみると、多いですね、最近」
定市は、ぽかんとしたような顔をする。
「みたいですね。外場でも何軒か、越したという話を聞きました。それも最近になってです。それで定市さん、申し訳ないんですが、何かの寄り合いの折で結構ですから、近頃になって越した家がどれだけあるか、それとなく訊いてもらえませんか」
「そりゃァ――構いませんが。どうしたんです、それが何か？」
「単に気になるだけなんですけど。何かあるのじゃないかと思って」
「何かって」
いや、と静信は言葉を濁し、とっさに話を捏造する。

「あの——去年の夏でしたか、リサーチ会社の人が外場に頻繁に来ていたでしょう」
ああ、と定市は頷いた。
「そう言えば、そういうことがありましたね。リゾート施設だか何だかを造るとか言って。ゴルフ場だのキャンプ場だのと、やくたいもないことを言ってたらしいですが、あの話は立ち消えになったんじゃないんですか」
「——そう、聞いていたんですが」
ふむ、と定市は腕を組む。
「たしかにねえ、妙に出て行く者が多いですからねえ。まさかとは思うが、たしかに気になるな。分かりました、それとなく聞いておきますよ」
「済みません、お願いします」
頷いて、定市は息を吐いた。
「どうなってるんだかね。……若御院、近頃、妙だとは思いませんか」
静信はひそかに狼狽した。
「転居……ですか?」
「それもですけどね。なんだか、葬式が多いような気がしてねえ。義一のとっつぁんに次いで、工務店の嫁さんでしょう。坊やも亡くなって、幹康くんも亡くなって。親子三世代、仲良くやってたってのに、工務店じゃ、もう徳次郎さんと節子さんの二人きりで

すよ」
「ええ……そうですね」
「駐在の高見さんも亡くなったし——そう言えば、郵便局の大沢さんも引越したんですよねえ。ああ、図書館の柚木さんも辞めたんですよ。御存じでしたか」
静信は目を見開いた。
「いえ。お辞めになったんですか？」
「そうなんですよ。これも急な話でね。もうずいぶん前になりますよ。八月の終わりか、九月の頭だったかな。今は保育園の事務をやってる寿美江さんが、見よう見まねで図書館の世話もしてますけどね」
定市は軽く首を振って、あらぬほうを見る。
「つい先日——二日ほど前だったかな、小学校の校長もね、辞めたんだそうで。もともと腎臓壊してて、透析するのしないのって按配だったらしくてね、それがいよいよ良くないらしくて、とうとう学年半ばで辞職ですわ。なんかこう……年寄りの歯が抜けるみたいにポロポロ人が欠けてる気がしてね」
静信は頷きながら、わずかに胸騒ぎを感じた。村は比較的、村の内部で完結しているが、柚木や小学校長のように、村外から働きに来る者がないわけではない。村外に働きに行く者はもっと多かった。

(……通勤)
太田健治、広沢高俊、清水隆司、大川茂、佐伯、高嶋。いずれも村外に通勤しており、死の前に辞職している。柚木、小学校長、やはり辞職した彼らは村外から通勤していた。
(義五郎さん)
大川義五郎は、村の外に出かけ、戻ってきたときには具合が悪かった。
何を考えているんだ、と静信は軽く額を押さえる。どうかしている。まるで——村の外を何かが取り巻いているようだ。
村の内部で疫病が流行っている、そのはずだ。なのに、どうしてだろう、これではまるで村の外部にこそ何かがあるかのようだ。
——鬼。
(……馬鹿なことを)
だが、それは映像のように明瞭だった。銛の穂先の三角形。村を取り巻いた樅の林。村を外から包囲し、林のあちこちから内部を窺っている無数の鬼たち。
村は死によって包囲されている。
静信はどこか酩酊したような気分で定市の許を辞去し、寺に戻って役場の石田に電話をかけた。
「石田さん、済みませんが、転出者の名簿がほしいんです」

は、と石田は困惑したように声を上げた。
「住民基本台帳か何か、当たってみてもらえませんか。——お願いします」

3

木曜日、敏夫は溝辺町の国立病院から連絡を受け、運び込まれた加藤義秀が結局、昨夜遅くに死亡したことを聞いた。
昼休み前には、上外場に住む行田悦子が来院した。これも明らかな貧血。鉄剤とビタミン剤の投与、抗生物質の投与、念のために全血の輸血。文字通りの暗中模索だ。
「なんだか先生、すっかりピリピリしちゃってますよね」
昼休み、そう言ったのは汐見雪だ。
「分からないでもないけどねえ」言ったのは、やすよだ。「忙しいでしょ、最近。そのわりに報われないからね」
そうね、と清美も頷く。仕出し弁当の蓋を開けながら、息をついた。
「なにしろ、肝心の患者が悪くなるまで来ないんだから」
「でも、先生が患者さんを怒鳴ったでしょ。あれには驚いちゃいました」井崎聡子も溜息をつく。「あ、すごくナーバスになってるんだな、とは思ったんですけど」

「加藤義秀さん？　……そうねえ」やすよは頷く。「風邪だから煎じ薬を飲んだって言われちゃあねえ。そりゃあ、こう――がくっと来るわよ」
「そんなもんなんですか？」
訊いたのは十和田だった。やすよは肩を竦める。
「本当のところは、風邪なんて病気はないわけだからね。風邪様症候群とか言うんでしょ、最近は。要は上気道炎よね。気道の上のほうで炎症が起きてるの。冷たい空気の刺激とかアレルギーで炎症が起こることもあるけど、ほとんどがウイルス性の炎症でしょ。だったら、薬なんて何飲んだって効くわきゃないんだから」
「へえ」
「風邪の場合は、とにかく養生するしかないのよね。食べて寝て体力つけるしかないわけ。風邪薬なんてのは、それを助けるもんでしょ。別に風邪をやっつける薬ってわけじゃないんだから、飲ませとけば安心ってもんでもないしね。でも、年寄りなんて特に、薬飲めば治るもんだと思ってるわけじゃない。これを飲めば一発だ、なんてよく言うでしょ。いくら薬飲んだって、養生しなきゃ治るはずもないのにさ」
「そうだなあ」十和田は苦笑する。「どこの家にもあるんですよね、我が家秘伝の風邪薬って言うのが」
「そうそう」やすよは声を上げて笑った。「卵酒とかニンニクの焼いたのとか、そうい

うのはまあ、身体温めて体力つける役には立つんだから理にかなってるけど、中にはとんでもないのもあるからね。我が家秘伝の風邪薬ってのは、得てして万能薬だったりするじゃない。風邪も腹痛も、何もかもそれで治るって思ってたりするのよね。それで蓋を開けてみたら、婦人病の薬だったりするのよ」

看護婦たちは笑い崩れる。

「まあ、無害なものなら気休めも薬のうちだからさ、いいようなもんだけど。けど、それもちゃんと養生しての話でしょ。薬飲ませて寝かせておけばいいってもんじゃない、どんな様子か、昨日より悪くなってないか、ちゃんと食べてるか見守ってさ、それで初めて意味があるんだし、そうやって気をつけてりゃ、チアノーゼ起こす前におかしいと気がつくでしょう。結局、薬を飲ませたから大丈夫なはずだってんで油断して、あの始末なんだろうからねえ」

「なるほどなあ」

「だからって患者や家族を怒鳴っても仕方ないんだけどね。でも、気持ちとしちゃ、分からないでもないわ。とにかく近頃、忙しいでしょ。そのうえ、こうも次々に死なれると、虚しくなるじゃない。せめて患者が協力的で、頑張ったのに駄目だったってんなら諦めもつくけどさ」

「本当に最近、増えましたね。死人だけじゃなく、患者さんも」

十和田は武藤を見る。武藤は渋面を作って頷いた。
「結局、みんな不安なんだよ。最近の死人の数は尋常じゃないからな。悪い病気でも流行ってるんじゃないかって、噂にもなってるみたいだし、だから普通なら寝て済ますところを、先生に診てもらわないと安心できない、ってことなんだろう」
「その一方で、煎じ薬を飲ませて目を離しちゃう人もいるわけですね」
「難しいのよね、この病気は」やすよは湯呑みに口をつける。「なにしろ本人がぼうっとしちゃってて大騒ぎしないみたいだから。あそこが痛いの、ここがどうだのと本人が訴えれば、周囲だってそんなもんかと思って心配するわけじゃない。ところが、肝心の本人が自分の具合の悪いことに気づいてないんでしょ。感情が鈍麻しちゃうみたいなのよね。おかげで最近、顔を見ると分かるようになっちゃったわ」
　そうね、と清美も頷く。
「他人事みたいな顔をしてるもんね」
「そうそう。だから家族が頼りなんだけどねえ。意外に見てるようで見てないもんなのよね、家族の顔なんて」
「そうねえ」
「行田悦子さんもあれでしょうか」
律子の問いに、やすよは頷く。

「だろうね。そういう顔だったわ」

しんと休憩室の中が静まり返った。彼らにとって「あれ」とは、目下のところ罹ったら助からない絶望的な病を意味している。

「なんか……怖いですね」

雪がぽつりと言って、それでさらに深い沈黙が降りた。揃って溜息をついたところに電話が鳴った。間近にいた律子が受話器を取った。

「あのう、高野ですけど」と、電話の相手の声がする。パートの高野藤代だった。朝いちばんに今日は休むと連絡が来ていた。「先生はおいでですかねえ」

「今、来客中ですけど。お呼びしましょうか?」

「ああ……じゃあ、いいです」言って、藤代は口ごもった。「あのう……先生に伝えてもらえませんかね。……あたし、今日限りでそちらを辞めさせてもらおうかと」

「藤代さん」

「ごめんなさい、忙しいのに済みませんねえ。でも、あたし、とてもじゃないけど怖くて怖くて」

律子は言葉に詰まった。藤代はずっと不安を訴えていたのだ。そして、事態は拡大こそすれ、一向に終息する気配を見せない。

「こんなに次々に死人が出て。次は自分じゃないかと思うと……」

律子はかける言葉を持たなかった。藤代を責めるわけにはいかない。最前線にいるのだ、という恐怖感は忘れようと思っても忘れられるものではない。律子ら看護婦ですらそうなのだから、掃除や雑用のために来ている藤代なら、なおさらだろう。

「先生は大丈夫だって言うけど、本当に大丈夫なのか分からないでしょう。ゴミを捨てる時なんか、針がどっかから出てないかと思って心臓がどきどきするんですよ。だから」

「……分かりました」

「済みませんねえ」

「先生にはお伝えしておきますから」

お願いします、と藤代は言って、電話を切った。律子が受話器を置くと、全員が怪訝そうな表情で律子を見守っていた。

「藤代さん。……辞めるそうです。怖いからって」

清美が大きく息を吐いた。

「仕方ないわよねえ。何言ってんの、大丈夫よ——なんて安請け合いはできないし」

誰もが無言で頷いた。——頷くしかなかった。

4

金曜日、敏夫は車を上外場に向かって走らせる。うろ覚えの行田の家を捜し、地所に車を乗り入れた。納屋の前で大根を干していた老人が驚いたように腰を浮かせた。悦子の夫、文吾だろう。

「若先生」

「悦子さんの具合はどうです」

敏夫は車を降りるなり訊く。行田は腰を屈めて頷いた。

「はあ……」行田は困惑したように答えた。「おかげさんで、今日はいいようで……」

「いい?」敏夫は行田の顔を見る。「今は寝てるのかい」

「さあ……ついさっきまで、昼飯の片付けをしてましたけど」

「片付けができる程度ではあるわけだ」

言うと、行田はのんびりと頷く。

「今日の朝いちばんに来るよう言っておいたはずなんだが」

行田は言葉の意味を摑みかねたように瞬いた。

「……あの、ですけど、今日は祭日で」

「そう。全国的に祭日だ。それでも来るようにと言ってあったんだ。悦子さんから聞いてない？」
「はあ……」
ただひたすら困惑しているふうの行田を残し、敏夫は勝手に玄関に向かう。奥に向かって声をかけると、少ししてから億劫そうに悦子が出てきた。
「あら、若先生……」
「あら、じゃない。予約を入れてあったのに、どうして来ないんです」
「でも」悦子は上がり框に坐って小首を傾げる。「今日は気分がいいんです」
「そういうことでなく。しばらく経過を見ましょうと言ったでしょう。ちゃんと来てもらわなくては困る」
「はい、あの……済みません」
敏夫は苛立つ。行田も悦子も少しも危機感を抱いてないふうなのに神経が尖るのを感じた。いっそのこと、ぶちまけてやりたいほどだ。悦子のそれは例の疫病だ。悦子は間違いなく発症している。そしてこれまで、発症して治癒した例はない。数日以内に全員が死亡しているのだ。
それを吐き出す代わりに、敏夫は大きく息を吐いた。
「――で、気分はいいんですね？」

悦子はどこか間延びした動作で頷く。まだぼうっとしてはいるようだった。敏夫は上がり框に勝手に坐り込み、悦子に手を出させる。脈を取ると昨日よりは減っている。顔色も昨日よりは良かった。
鉄剤、ビタミン剤、抗生物質はこれまでにも投与してきたが効果がなかった。だとすると、全血の輸血が良かったのか。
「たしかに、少しいいようだ。採血するよ」
「はあ……」
悦子はいかにも、不承不承、というように腕を出した。有無を言わせず末梢血を採取する。それをしまって、敏夫は悦子に念を押した。
「あんたのそれは油断しないほうがいいんだ。多少、気分が良くなったからと言って、勝手に治ったと思わないように。明日も来るんだ、一時に予約を入れておくから。いいね？」
「でも……明日は土曜で」
「いいから。とにかく、必ず来るように。来なかったら、また押しかけるからな」
はあ、と悦子は頷いた。玄関先に立った行田は、呆気にとられたようにそれを見ていた。

5

「若御院」
言って、田茂定市が寺にやって来たとき、ちょうど静信は、奥の私室で調べ物をしていたところだった。寺と付き合いの長い定市は、別段、声をかけることもなく庫裡の奥までやって来る。庭を廻って直接、茶の間に顔を出すことも再三だった。
「ああ、こんにちは。——いえ、こんばんは、ですか」
「今、よろしいですかな。彼岸でお忙しいでしょうし、早くお休みになりたいのは分かってるんですが、先日の件で」
静信は頷き、座布団を引っぱり出して定市に勧めた。定市は渋面を作って腰を据える。
「いかがでした」
「いかがもなにもないです。どうなっとるんですか、この村は。あちこちで聞いてみたら驚くじゃありませんか。たぶんこの夏以来、越した家は二十軒じゃ利かない。びっくりするような勢いで人が減っているんです」
やはり、と静信は内心で呟く。定市はメモを出した。
「とりあえず、わたしが聞いただけのものは控えてきましたが、実際のところは、まだ

まだあると思いますよ」
　静信はメモを受け取り、列記された名前に目を落とした。総計で二十二軒の家が引越している。中には静信に見覚えのない名前もあったが、多くは檀家だ。普通、この村では檀家の人間が転居する際には、寺に一言あるものだ。にもかかわらず、その誰についても、引越すという話を聞いたことがなかった。
「こんなに……」
「一体、どうなっとるんでしょう。どの家も唐突に引越しているんです。その支倉の婆さんは、若御院も御存じでしょう」
「ええ」
　支倉糸子は上外場に住む独居老人で、朝の勤行にもしばしばやって来る。思い返してみると、しばらく顔を見ていなかった。
「なんでも、息子と同居することになった、と言って越したらしいんですがね。しかしあの婆さんは、息子の嫁さんと昔、大喧嘩してますからね。もともと同居してたのが、嫁さんが逃げ出す形で息子ともども、出て行ったわけでしょう。まあ、嫁さんと仲直りしたのかもしれない、あるいは息子のほうが嫁さんと駄目になったのかもしれないが、だったら帰ってきそうなもんです。それを、同居するって、唐突に」
　静信は頷く。支倉糸子と嫁の確執は、あまりにも有名だった。なにしろ問題の大喧嘩

の際、逆上した嫁が包丁を持ち出している。とは言え、別に糸子を襲ったわけではなく、包丁を握って表に駆け出し、死んでやると叫んだ、という話なのだが、それでも村では語りぐさになるような事件ではあった。それきり息子は妻を連れて家を出、それを怒った糸子とは、ほとんど絶縁状態にあると聞いていた。

「本人がそう言うのなら、そうなのでしょうが……でも、変ですね」

「でしょう？　境松の件といい、妙な話ですよ。わたしも聞いて驚いちまってね。そんなことがあるもんなんですかね」

「そうですね……」

そもそも村に残っている独居老人は、本人の意向にせよ事情があるにせよ、子供とは同居できない理由があるからこそ村に一人で残っている。もちろん事情が変わって同居が可能になった、ということもあるわけだが、それがこの数、短期間に続くというのは、少し信じがたいことだった。

「そう言えば、三安の嫁さんも逃げ出したって話、聞きましたか」

「三安——中外場の安森誠一郎さんのところですか」

ええ、と定市は頷く。

「嫁さんが日向子ってんですけどね、これが朝起きたら、いなかったって話なんですよ。あの家もね、支倉の婆さんのところと一緒で米子婆さんと嫁さんと折り合いが悪くてね、

いつか支倉のようなことになるんじゃないかと中外場の連中は思ってたらしいんですが、嫁さんのほうが亭主を捨てて逃げ出したみたいで」

「事故か何かの可能性はないんですか」

「ないようですよ。とにかく、寝る時までは一緒だったってんですから。隣に寝てたはずなのに、朝起きると布団は蛻(もぬけ)の殻、家のどこにも嫁さんがいない。夜のうちに荷物まとめて、出て行ったらしいんですわ。これも、驚いた話で」

「そうですね……」

　夜のうちに、と静信は内心で反芻(はんすう)する。ひどく胸に引っかかる。

「支倉さんは、夜に引越したんですか」

「さあ。息子と同居することになった、と言って荷物をまとめているのを見た者がいるらしいんですが、実際に家移りをしたのがいつなのか、よく分からないらしいんですよ。あの婆さん、ちっとばかり偏屈で、あまり親しい人間もいませんでしたからね。家も上外場の集落から、ちょっと離れているんで。たぶんその翌日か、翌々日だろうという話なんですが」

　そうですか、と静信は呟く。何だろう、この釈然としない妙な気分は。

「まあ、一人暮らしの年寄りが多いですね。上外場の篠田みたいに、親子で転居した家もあるみたいですけど。それよりも、ほら」

定市は身を屈めてメモを示す。
「下の安森の婆さんに、前原のセツさん、でもって猪田の爺さん。中外場の三村」
静信が意図を量りかねて定市の顔を見ると、定市は何に対してか頷いた。
「これで、山入は本当にないも同然ですわ」
「——え？」
「ほら、中外場の三村と言ったら、山入の下の山を持ってるでしょう。北山のちょうど裏あたりですわ。爺さんが頑張って、未だに山に入ってた。それが息子が転職するってんで、一家五人、越したんですよ。安森のみすずさんは、山入一帯の山持ちですよ。もう山は諦めてたみたいですけどね。爺さんが死んだときに、かなり物納もしちゃったんで。前原のセツさんは、林道のあたり一帯の山持ちでしょう。セツさんも山はもう諦めてたみたいですけど、丸安がぽつぽつと木を伐り出してましたからね。その林道の先は猪田の爺さんの持ち山です。あの爺さんはまだ山で食ってたんですよ」
　静信は眉を顰める。
「これで山入に入る連中は、ほとんどいない勘定になるんで。残ったのはもうずっと放置されてる山か、物納された山か。山入の三人も死んだし、出入りする連中もいなくなったしで、まったく山入って場所はないも同然になっちまった。——まあ、猪田の爺さんなんて、自分が死ぬまでは、なんて言ってましたけど、ああいうことがあったら気味

が悪くて山入に行く気になれんでしょう。最近、山の中にゃ野犬も多い。前にも野犬に咬まれて大怪我したことがありますしね。とうとう見切りをつけたってことなんでしょうが」

定市は言って、深い溜息をついた。

「これも御時世ってもんなんですかね。これまで村じゃ、あまり人が減ってるふうじゃなかったでしょう。過疎だ過疎だと言われるわりに、外場じゃよく人が残ってた。たいしたもんだと思ってたんですが、時流には逆らえないってことなんですかね。とは言え、こうもバタバタと人が減ると、何と言うか複雑な感じがしますねえ」

そうですね、と答えながら、静信は途方に暮れた気分がしていた。うまく言えない。何か理解不能なものが目の前にあって、目眩を誘うような感じ。増え続ける死者、疫病の恐れ、それと転居者との間にはなんの関係もないはずだ。にもかかわらず、歩を合わせるようにして人が村を出ている。死者と転居者と、それは別物でありながら、住人の減少、という事実であることには代わりがない。何か意味がありそうな気がする、けれどもどんな意味が——どんな関連性があると言うのだろう？　疫病に気づいて逃げ出したわけではないだろう、にしては行動が早すぎる。

考えながら田茂を送り出し、静信はふと思いついて車を出した。

何もかもが釈然としない。そもそもの最初に立ち返って考え直してみるのも悪くない

だろう。すべては山入から始まった。たしかなのはそれだけだ。山入に行ってみれば、何かが見つかるかもしれない、と漠然と思った。
我ながら雲を摑むような気分で車を山入に向け、静信は改めて愕然とせざるを得なかった。
——道が、ない。
山入に向かう切り通しの途中で土砂崩れが起こり、かなりの範囲にわたって道が途絶していた。たかだか二月にも満たない前、静信が辿った道は消えていた。いつぞやの雨だろう。瞬間的な雨量こそは凄かったが、近辺の貯水量にはさしたる恵みをもたらさなかった雨だ。どこかでも、干上がって割れた斜面が、突然の大雨で崩れた、と言っていた。
これほど山入は孤立していたのか、と粛然とする思いだった。土砂の山の向こうに、小さな明かりが何度か明滅した。反射板のような光は小動物の目だろう。あるいは野犬のものかもしれなかった。
静信はハンドルを抱き、顎を乗せて土砂の山を見つめる。道が消えていることはもちろん、それがこのときまで誰にも知られなかったことに衝撃を受けていた。誰ももう必要がなかった、というのもある、野犬が出没して危険だというのもあっただろう。——それにしても。

本当に山入はあの日を境に死んだのだ。住人を失い、野犬や小動物を除いては、訪ねる者さえ失った。人々の意識のうえから消え、思い出の中にしか存在しなくなった。本当に、消失してしまったに等しい。

(連絡をしないと……)

道が塞(ふさ)がれていることを、役場なりに連絡しておかないと、と思いながら、果たしてそうすることに意味があるのだろうか、と思った。辿る者を失った道も、また死亡してしまったに等しい。

村は死の中に孤立している。

七章

I

敏夫は控え室に居据わって、いらいらと時計を睨(にら)んでいた。三時を過ぎて、我慢ならずに受話器を取った。行田の家に電話をする。

あれほど言ったのに行田悦子が来ない。今日は土曜だ。病院の受付は十一時半までで、午後は本来、診察はしていない。悦子も行田もそれを気にしているのだろうが、そんなことを気にしている場合ではないのだ。

呼び出し音は十六を数えた。行ってみようかと電話を切ろうとしたところで、ようやく相手が出た。出たのは行田文吾だった。

「ああ……若先生」

行田は狼狽(ろうばい)したような声を上げた。

「悦子さんが来ないんだがね。どうかしたのかい」

「いえ」と行田は口ごもり、それからおずおずとした声を出した。「あの、いくら何でも土曜の午後じゃ申し訳ないんで。本人も気が咎(とが)めるって言うし、今日明日、様子を見

て、月曜に行かせようかと……」
　敏夫は溜息をつく。
「行田さん。脅すわけじゃないが、悦子さんのその病気は、目を離さないほうがいいんだ。まだたしかなことは言えないが、ガツンと悪くなる可能性がある。そうなったら、悦子さんも歳だし、最悪の事態になることも考えられる。だからこそ、来てくれと言っているんだ」
「はあ……」
「あんたが悦子さんの生き死にに興味がないと言うのならいい。悦子さんも、それでいいなら勝手にするさ。だが、女房のことが心配だったら、余計な気を廻す暇に連れて来てくれないか」
「しかし……」
「おれは来てくれ、と言ったんだ。病院のほうに詰めて待ってる。あんたはおれに気を遣ってくれたつもりかもしれないし、それには感謝するが、同じ気を遣ってくれるなら、予約通りの時間にさっさと来て、早目におれを解放してくれたほうが、助かるんだがね」
　済みません、と行田は言って、これから悦子を連れて来る、と言う。敏夫は息を吐きながら電話を切り、そうして軽い自己嫌悪を感じた。

医者には患者に来いと命令する権利などない。それは患者の自由意思に任されている。敏夫は村人の生命と健康を預かっているが、それを監督する責任を負っているわけでもないし、監督する権限があるわけでもなかった。それを無視して頭ごなしに来いと命じた自分が苛立たしい。それをさせる行田にも腹が立った。何よりも腹立たしいのが、そうした振る舞いが、ひどく父親に似ているように思われたことだった。

村人の生命と健康を預かっているのだと、そう口先では言い、村人のそれが損なわれることを、自分に対する侮辱であるかのように振る舞っていた父親。怪我をした患者には、不注意を責め、病気をした患者には不養生と家族の不注意を責めた。

敏夫は舌打ちをする。自分の振る舞いは、父親のそれとまったく似ている。それが我慢ならないほど不愉快だった。

(冷静になるんだ……)

村人が危機感を抱いてないのは仕方がない。そもそも敏夫自身が、無用な危機意識を抱かせたくなくて事態を伏せているのだ。実状をぶちまければ、行田も危機感を抱くだろう。それをあえて伏せておいて、行田を責めるのでは理に合わない。

自分にそれを言い聞かせているうちに、済みません、と声がした。敏夫は軽く苛立ちながら立ち上がる。インターフォンがあるのに目に入らないのか、とそんなことに苛立っている自分の理不尽に、いっそう苛立った。

出てみると、やはり行田で、そして悦子の具合は悪化していた。明らかに一昨日よりも状態が良くない。それを電話で呼びつけたことに、敏夫の自責の念はいっそう膨らんだ。悦子は足許が怪しい。この状態で出歩くくらいなら、敏夫のほうが行くべきだった。それがまた敏夫を不快にする。やはり悪化しているじゃないか、だったらどうしてそう言わない、と行田に対する怒りに形を変え、神経を尖らせるから手に負えない。――実際、敏夫は自分の感情の手綱を、自分でも御しきれていない、という自覚があった。

悦子の状態が悪化していることに対しては、なんとか何も言わずに通した。とにかく採血をし、採尿する。尿は色が濃く、濁っているうえに量が少ない。呼吸には微かに喘鳴が混じっている。もう一度、全血を輸血した。他に有効だと思われる治療方法が思い浮かばなかった。

くれぐれも容態が急変したら、自分を呼ぶなり救急車を呼ぶなりするよう言い渡して帰した。だが、そう言った敏夫自身、悦子を救えるなどという甘い想像はしていなかった。

2

かおりが目を覚ますと、もう昼が近かった。カーテンを開け、窓を開くと、どこか秋

めいた風が通った。気温こそはまだ涼しいというのにはほど遠かったが、空が少し高くなった。風の肌触りはどこか硬い感じがする。

九月二十五日。九月も終わりに近づいた。そして恵の三十五日の法要から七日。六七(ろくしち)日(にち)で四十二日だ。

かおりは着替え、佐知子に小言を言われながら遅い朝食に形ばかり箸(はし)をつけた。

「日曜ぐらい家事を手伝おうっていう気はないの？」

佐知子はかおりをねめつける。

「いつまでも、うじうじして。恵ちゃんが死んだのを言い訳にして、だらだらしてるだけじゃないの。いい加減にしなさい」

そういうわけじゃない、と思ったが、かおりは口に出しては言わなかった。結局のところ、佐知子にとって恵の死は、少しも重大なことじゃないのだ。だから早く片付けてしまえと急(せ)かし、かおりがいつまでも片付けられないことを責める。

小言を続ける佐知子に生返事をして部屋に戻った。

「……でも、あたしは忘れないよ」

かおりは窓に坐(すわ)ってひとりごちる。

恵は幼馴染(おさななじ)みだった。いちばんの親友だった。かおりは恵が好きだったし、だから周囲の大人が何と言おうと、恵のことを片付けたりはしない。ずっと覚えているし、ずっ

と悲しい。恵の死を嘆いている。
そう思っているのに、かおりは近頃、そう意識しないと恵の死を忘れそうになる自分に気づいていた。恵が死んだ直後には、何を見ても恵を思い出したし、何かにつけ恵がいれば、と思った。恵のことを思い出しただけで涙があふれて止まらなくなったのに、今は一生懸命、恵との思い出を辿らないと涙が出てこないのだった。
（……嫌だ）
恵を忘れて片付けてしまうなんて嫌だ。そんな自分にはなりたくない。そう思って、恵のために泣ける自分を確認しようとするのだけど、少しずつ、それが難しくなっている。
かおりは唇を噛んで、そうして机の抽斗から恵の葉書を引っぱり出した。丁寧に書かれた残暑見舞い、懐かしい恵の文字。
（……こんなに丁寧に）
心を込めて。なのに投函できなかった。どんなに無念だっただろう。
恵が死んだと聞いて、家に駆けつけて、でも、少しもピンと来なくて。呆然としていたかおりが、ようやく泣けたのは、この葉書を見つけたときだった。こんなに丁寧に、と思うと、それだけで涙があふれて止まらなかった。三十五日の時もそうだった。今も悲しい。可哀想だと思う。なのにどうして涙が出てこないのだろう。

心を込めて、ともう一度、心の中で繰り返す。そうやって自分に嚙んで含めるように言い聞かせないと涙が出てこない。——涙が出るほど悲しいという気持ちになれないのだった。

（こんなの、嫌だ）

たった四十二日で、悲しみが摩耗してしまうなんて。そんなことがあっていいはずがない、と懸命に自分に言い聞かせても、呑まれるような感情の高ぶりはやってこなかった。

それどころか、こうして葉書を見ていると、別の意味で後ろめたい。発作的に恵の部屋から持ち出してしまったけれど、こんなことをして良かったのだろうか。あのときはそうしなければならない、という気がしたのだが、時間が経つにつれ、なぜ自分がこんなことをしたのか分からなくなった。恵の部屋が片付けられてしまうのじゃないか、と焦ったのは覚えている。恵のいた痕跡が拭い取られてしまう。そうなる前にひとつでもいい、痕跡を救い出そうとしたのだけれども、よく考えると本当に恵の部屋が整理されるとは限らない。

自分のしたことが疑問に思えたのは、あの直後、学校で教師と話をしたせいなのかもしれなかった。

たまたま、かおりは当番だった。英語の教師にプリントの印刷を手伝ってくれと頼ま

れ、もう一人の当番の子と印刷室に行った。
「田中さんは最近、元気がないね」と、その教師――広沢は言った。「悩み事でもあるふうだね」
友達が死んで、という話をしたのは、もう一人の当番、小池董子だった。それで初めて知ったのだけれども、広沢と恵の父親は友達らしい。葬儀で広沢の顔を見かけたようにも思ったが、そんな縁だとは思わなかった。その広沢から、恵の父親がひどく気落ちしてすっかり塞いでしまっている、と聞いた。かおりはそれで、少し救われた気がしたのだった。誰もが恵の死を片付けたわけでも、片付けてしまいたいわけでもないのだと思ったし、そこに至ってようやく、自分よりも恵の両親のほうが辛いのに違いないという、ごく当然のことに気がついたのだった。まるでこの世には、自分以外、恵の死を悲しんでいる者はいないような気がしていたけれども、それがとても不遜なことだったと気づいた。
それでも――と、かおりは思う。だったら忌明けを繰り上げたりせずに、せめて四十九日まで恵を家にいさせてあげればいいのに。広沢が首を傾げたので、かおりは、法要がまるでお祓いのように思われたことを話したのだった。
「ああ……なるほど」と、広沢は複雑な感じで笑った。「それで田中さんは、恵ちゃんが家を追い出されるように感じたんだね」

頷（うなず）くかおりに、広沢は、けれども、と言う。「それは少し、誤解があるね」
「……誤解？」
「うん。人が死ぬとね、四十九日の間、この世とあの世の境目に留まっているんだよ。まあ、境目と言っても、どこにあるのかよく分からないから、その間は仏壇に留まっているというふうに言うね。これを家にいると言えば、たしかに家にいることになるのだろうけど。死んでもうこの世にはいないんだけど、まだあの世にも行けない。というのも、行き先が決まらないからだね」
「行き先？」
「そう。輪廻（りんね）転生という言葉を聞いたことがないかな。人は、六つの世界を転生しているんだね。死んでは生まれ変わり、ぐるぐる廻っている。死んだ人は生前の行ないによって、次の生まれ先を決められるんだよ。七日ごとにそのための裁判が行なわれるんだね」
言って、広沢はやんわり笑った。
「要は、閻魔（えんま）様の前に引き出される、というやつだね。七日ごとに呼び出されて取り調べが行なわれる。生前の行ないが悪ければ、いわゆる地獄に堕（お）ちるのだけれど、生前の行ないが良ければ極楽に行く。極楽に行けるほど行ないが良くない場合には、もう一度人に生まれて修行をやり直すことになるんだ」

「人に……？」
「そう。六つの世界を転生するから、六道輪廻と言うんだよ。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六つの世界。法要はね、いわばその裁判で、少しでも良い判決をくださいい、早く終わらせて極楽に行かせてやってください、とお願いするために営むんだよ」
かおりは、ぽかんとした。小池董子のほうを見ると、董子は心得たような顔をしていた。
「董子ちゃん、知ってた？」
「うん。うちのお祖父ちゃん、弔組の世話役だもん。そういう話なら小さい頃からいっぱい聞かされるから」
広沢は微笑んだ。
「四十九日で結論が出ないときは、百箇日、一周忌、三回忌に持ち越されるんだそうだよ。長々と境目——中陰とか中有とか言うんだけれども、そこに留まっているのは、むしろ良くないことなんだね。もちろん、早く良い結果が出たほうが死者だっていい。だから遺族は、そのために法要を行なって、仏様の加護で早く良い結果が出るように祈るんだし、死んだ人の代わりにお経を上げたり、お布施をしたりして死者の徳を追加しようとするんだね」
そうだったのか、と、かおりのほうが憑き物が落ちた気分だった。誰も——少なくと

も恵の両親は――恵を追い出そうなんてしてない。忘れよう、片付けようとしていたのじゃなかった。
そう分かってみると、自分の行為が馬鹿馬鹿しく、軽はずみなものに思われた。どうしてあんな、今にも恵の部屋がなくなるように感じてしまったのだろう。恵が大切にしていたもののすべてが、おざなりに処分されてしまうように思ったけれども、本当に恵の家族はそんなことをしただろうか。
それを思うと、自分のしたことが恥ずかしかった。それでも恵はこの葉書を両親に見られたくはなかったはずだ、それだけが救いだ。かと言って、恵はそれを、かおりがこうして所有していることだって望んではいないだろう。もしも自分なら――と考えると、宛先に届けられるか、さもなければ誰の目にも触れないところに処分されてほしいと思うような気がする。
(どうしよう……)
かおりは、あの日以来、何度もそうしたように、葉書を見つめて考え込んだ。もちろんいまさら恵の両親には渡せないし、それはやはりするべきじゃないという気がする。元の場所に戻してこようか。でも、何と言って恵の部屋に入れてもらおう。恵の代わりに自分が処分してしまうのがいいのだろうか。それとも――。
かおりは葉書の宛名を見つめた。

彼のために書いた残暑見舞い。書いてそれきり、投函できずに恵は死んでしまった。こんなに丁寧に書いたのに。

（恵……これ、出したかっただろうね）

心の中で、はっきりと呟いてみたけれど、やはりもう涙は出てこなかった。

でも、投函したかったのはたしかなはずだ。恵はそのために書いたのだから。だからこそ、かおりは葬儀の時、これを宛名の当人に手渡してやろうと思ったのだ。なのに当の本人が、いらないと言った。

（あんな酷い人のことが好きだったの？）

少しも恵の死を悲しんでるふうじゃなかった。恵がこんなに思いを込めたものなのに、だから渡してやりたかったのに、夏野は喜ぶどころか、とても迷惑そうだった。

（付き合いがあったわけじゃない、って……恵はあんなに好きだったのに）

恵の思いを、恵の死を、あんなにも軽々しく扱った夏野が許せない。

かおりはじっとその葉書を見つめた。

――投函してやろう。彼はこれを受け取る義務がある。

それがいい、とかおりは立ち上がった。自分が持っているより、処分してしまうより。恵だって投函したかったはずだし、夏野だってこれを見れば、恵の気持ちに気づくかもしれない。自分がどんなに酷いことを言ったのか、理解するかも。

かおりは階段を駆け下りた。母親が何か、また小言を言ったようだけれども、構わずに表に出る。何度も通い慣れた道を小走りに走って恵の家の側まで来た。ポストは恵の家のすぐ近くだ。
（たったこれだけの距離だったのに）
それを歩いて投函に行けないほど、恵は具合が悪かった。突然、急に悪くなって、だからとうとう……。
かおりは最後にもう一度、葉書の文面を見つめた。それをポストの中に差し入れ、少し迷う。なんだか自分は、こうすることで楽になりたがっているように思えた。
別に、持て余してるわけじゃない。恵がそれを望んでいたから、自分が代わりにそれを行なうのだ。そう自分に言い聞かせても迷う。葉書が指を離れたのは、背後から声をかけられたからだ。
「——かおり？」
昭の声がした。驚いて、かおりは葉書を放し、そして葉書はポストの中に落下していった。それを鼻先で追うように、昭がかおりの脇から顔を突き出した。
「あーあ。お前、なんで今頃、残暑見舞いなんだよ。今九月だって分かってるか？」
ぎくりとして、かおりは昭の顔を見つめた。
「やだ。……見たの？」

「見えたんだよ。じーっとポストの前に立ってるんで、何してんのかな、と思って覗き込んだら」言って、昭はわざとらしく溜息をついた。「かおりがここまで常識知らずだとは知らなかったぜ」
「いいじゃない。まだ暑いもの」かおりは苦しく言い訳をして踵を返す。「それに、暑中見舞いならお盆までじゃなきゃいけないけど、残暑見舞いにはいつまでって期限はないでしょ」
「こんな物知らずな奴が姉貴だなんて、おれ、涙が出ちゃいそう」
追いかけてきた昭を、かおりは振り返った。
「なによ」
「残暑見舞いにだって期限ぐらいあるだろ。九月も終わろうかってのに、無茶言うよな。しかも、暑中見舞いは盆までじゃないの。あれは立秋までだよ。恥ずかしいなあ、もう」
かおりは瞬いた。
「嘘でしょ?」
「嘘じゃないよ。あれは立秋までなの」
「……立秋っていつ?」
「知らない。でも八月の最初のほう。盆よりは前だよ、たしか」

「でも」と、かおりは呟いた。「恵が言ったんだよ、お盆までだって……」
昭はきょとんとした。
「恵ぃ？」
「そう。いつだったか、恵がそう言ったの。だからあたし、ずっとそうなんだと思ってた……」
昭は溜息をついた。
「恵って物知らずなくせに、妙に自信満々なところがあったからなあ」
そうだったのか、とかおりは思った。立秋を過ぎたらもう残暑見舞いで良かったのだ。恵がそれを知っていたら、ちゃんと自分で投函できたろうに。
そう思い、かおりはふと足を止めた。背後のポストを振り返る。たった今、季節はずれの葉書を呑み込んだポスト。赤いポストのある四つ角、あれを曲がってすぐのところに恵の家はある。
恵は投函できなかった。あんなにポストが近くにあるのに。なぜなら、恵はお盆から残暑見舞いだと思っていたから。なのにお盆には具合が悪くて、寝込んでしまっていたから。
（でも、たったあれくらいの距離、歩けないほど具合が悪かったんなら……）
「恵……あれをいつ書いたんだろう……」

ひとりごちた声を聞きとがめたのか、昭が首を傾げた。
「なに？　あれって恵が書いたの？」
しまった、と思ったが遅い。かおりは不承不承、頷いた。
「内緒よ。……恵が残したの。だから季節はずれだけど、投函してあげようと思って」
「へええ」
「恵は、十三日から残暑見舞いだと思ってたんだと思う。でも、十三日には具合が悪かった。ううん、十一日にはもう悪かったの。山の中で倒れちゃったんだから」
「じゃあ、その前に書いたんだろ」
「その前だったら、暑中見舞いでしょ。恵はそう思ってたんだもの」
「そっか。じゃあ、具合悪いのに無理して書いたんだ」
「そういう……ことだよね？」
恵が葉書を書いたのは、具合が悪くなってからだ。そうとしか思えない。けれども、何かが引っかかる。何かおかしい。
足を止め、首を傾げていたかおりは、自分が大塚製材のすぐ脇まで来ているのに気づいた。積み上げられた材木の山を見ていて、ふと思う。
「恵……いつ桐敷の奥さんに会ったんだろ」
「はあ？」

「あたし、奥さんを見たの。十三日」
「そう言ってたよな」
「うん。恵のお見舞いに行く途中だった。それで恵にそう言ったの。綺麗な人だったよ、って。そしたら、恵が知ってる、って」
「知ってる？　じゃあ、恵も奥さんに会ったことがあるんだ」
「だよね？　でも、十一日、坂の下で会ったときにはそんなふうじゃなかった。だって恵、家族がどういう人なのかも知らなかったんだもん。奥さんと娘さんがいるって噂をしたら、初耳だって顔してたもん」
　昭は首を傾げる。
「ええと？　それが十一日なんだよな？　それって恵がいなくなった日のことだろ？」
「そう。坂の下で別れたの。恵は坂を登っていった」
「でもって、夜中に見つかったんだよな。具合が悪くて山で倒れたんだろ。それからずっと寝込んでて」
「そうだよ。もしも十二日か十三日に外を歩いてたら、恵、葉書を投函してるよ。十二日に投函したら、着くのは十三日以降だもん」
「てことは、十二日にも十三日にも家から出てないってことだよな？　だったら兼正の奥さんにも会うわけないんだから、十一日だよ。そうとしか考えられないじゃん。坂を

登っていって、それで奥さんに会ったんだ」
「でも」と、かおりは呟く。「あんな大騒ぎになったんだよ？　山狩りして、兼正の若い人が出てきて手伝ったって。誰も恵がどこに行ったか知らなくて、あたしが坂の下で見かけたのが最後だったの。兼正の人が会ったんなら、そう言うんじゃない？」
昭は首をひねる。
「会ったのに、黙ってた……」
「でも、なんで？」
――何があったのかしらね。
かおりの母親はそう言う。
――女の子があんな時間まで。戻ってきてから、様子がおかしいって言うじゃないの。何かあったのよ、きっと。あんたも気をつけるのよ、かおり。夏には変な人が多いんだからね。
(本当に何かあったのかも……)
かおりは顔を上げて西の山のほうを見た。かおりが今いる位置からは、樅の山しか見えない。
(坂の上で、何か)
何か、恵が具合を悪くするようなこと。他人に知られては困るようなこと。

「なあ……かおり」と、昭が珍しく深刻な声を出した。振り返ると、ひどく真面目な顔をしていた。「最近、えらく死人が多いと思わないか？」
かおりは首を傾げる。
「思う、けど」
「それって、兼正が越してきて以来だよな」
どきりとした。そうだったろうか。自信がないが、前後しているのはたしかだ。
「でもって恵、急に具合が悪くなって死んで、その具合が悪くなる直前にさ、兼正に登っていったんだよな。そこでたぶん、奥さんに会ってる」
「う、うん」
「お前さ、十三日に会ったんだろ、桐敷の奥さんと。それ、製材所の康幸兄ちゃんと一緒だった、って言ってなかったか？」
かおりはハッと息を呑んだ。
そうだった。大塚製材の康幸と一緒にいたのだ。そして——。
「康幸兄ちゃんも死んだんだよな」
かおりは立ち竦んだ。そう、ちょうどこのあたりだ。材木置き場の中で、千鶴に何やら説明していた康幸。それから少しして、康幸は急に身体を壊して死んだ。
「恵は奥さんと会ってるはずだ。でも兼正の誰もそんな話——」

「ねえ……やめよう」
「かおり？」
「なんだか怖いよ。そういう話するの、やめようよ」
かおり、と声を上げた昭に、かおりは首を振る。その場を逃げ出して家へと駆け戻った。

3

「あれ、また引越だ」
夏野は足を止めた。
「うん？」と、例によって煙草を買いに出てきた徹も足を止める。「ああ、ほんとだ」
ちょうど武藤を出てすぐ、刈り入れの終わった田圃越しに見える家並みにトラックが横着けになっていた。夏野はとっさに腕時計を見る。
学校の帰り、バスで保と一緒になった。そのまま保にくっついて武藤に戻り、夕飯まで御馳走になって家に戻るところだった。そろそろ退散しようかと思っていたとき、徹の父親が戻ってきた。このところ病院は忙しいらしく、武藤の帰りが遅い。遅いばかりでなく、家に仕事を持ち帰っているらしい。母親の静子がそれを手伝っているのも見か

けたことがあった。こんな時間まで仕事か、と時計を見たが、その時点ですでに夜の十時を廻っていた。案の定、腕時計の針は十一時に近づこうとしている。どう考えても引越には遅い時間だ。
「また高砂運送だ」
夏野がひとりごちると、徹は首を傾げる。
「また?」
「ついこの間も、変な時間に引越してただろ。あれも高砂運送だった」
「そんなこともあったっけか」
「もうボケ始めてるよ、このおっさんは」
聞こえよがしに溜息をついてみせると、徹の拳が飛んできた。それを笑って躱し、徹と別れる。夜道を家へと向かいながら、何か妙だ、と思っていた。
死人の続いた夏。それが終わってみると、今度はやたらと転居を見かける。いや、何も終わってないのかもしれない。武藤の帰宅が日を追うごとに遅くなっているのが、その証拠だ。とにかく忙しい、と武藤は零している。忙しいということは、それだけ患者が多いということ、具合の悪い者が増えているということだろう。実際、葬式を見かけることも多い。それがどんな人間かは知らないが、確実に人が死んでいる証だ。過疎にさらされている村というのは、こんなものなのだろうか。死人が多く、引越が

多い。――だが、その引越がいちいち夜に行なわれているのは解せない。しかもどれも同じ運送会社というのは、どういうことだろう。

釈然としない気分で家に戻った。玄関に入って靴を脱いでいると、湯上がりらしい母親が渋い顔で出てくる。

「おかえり。また武藤さんとこ?」

「うん」

「いつもいつも、御飯まで御馳走になって。近所なんだから夕飯ぐらい食べに戻ってくればいいじゃない」

うん、とこれには生返事をしておく。

「せめて一回、家に戻ってから出かければ?　まったく、どこの家の子なんだか」

どこの家もないもんだ、と夏野は心の中で呟いた。ここは「家」じゃない。そもそも夫婦という形態を拒み、家という制度を拒んだのは自分たちじゃないか、と思う。ここは単に二人の男女と子供が一人寄り集まっているだけの場所だ。両親の生き方を云々しようとは思わないが、当たり前を拒みながら同時に当たり前を要求する無頓着さには閉口する。

ぶつぶつ言っている母親を無視して部屋に戻ろうとすると呼び止められた。

「ねえ、葉書が来てるわよ」

母親は下駄箱の上を示す。

「おれに?」夏野は葉書を手に取った。「——何だ、これ?」

それは残暑見舞いだ。文面に目を通し、それを裏返して夏野は眉を顰めた。

「今頃、残暑見舞いなんて、変な話ねえ。誰、その清水さんって」

「人の手紙を読むなよな」

「あら、葉書なんだから仕方ないでしょ」

母親を冷たく見やって、夏野は葉書に目を落とす。

——清水恵。

「清水さんちの娘さんじゃないの、それ」

「……だろうな」

「嫌ね。どうして今頃、葉書が来るの。気味が悪い」

「誰かの悪戯だろ」

そう言って、さっさと部屋に向かう。部屋の明かりを点け、改めて葉書を眺めた。

間違いない、これはあの「清水恵」だと思う。だが、恵は八月の半ばに死んだ。死者から手紙が来る道理はないし、残暑見舞いにはどう考えても遅すぎる。恵が死ぬ前に書いたものか。それが何かの事故で、今頃になって届いたのだろうか。

なんとなく割り切れないものを感じたが、ことさら気味悪く感じる必要があるとも思

えなかった。夏野はそれをゴミ箱に放り込もうとし——なぜというわけではないものの、その手を止めた。

後生大事に保存しておく気はない。だが、捨てるのはなにも今日でなくてもいいだろう、という気がした。

徹は自販機の下に屈み込んで、煙草のパッケージを取り出した。釣り銭をポケットに戻し踵を返す。夜道を歩きながら、どこか妙な気がする、と思っていた。

葬式が多い、引越が多い。——たしかに多いと思う。これまで、こんなことはなかった。これまでなかったことが起こったから異常だと短絡する気もないが、どうにも釈然としない。近頃、村はどこか変だ、という気がしてならなかった。調子が狂っている感じ、歯車の噛み合わせがズレてでもいるような。あるべき状態からひどく逸脱している。

無意識のうちに煙草のパックを投げ上げていて、それを取り落とした。掌の上で跳ねたそれは路面に落下し、不規則にバウンドしながら転がっていく。転がった先に若い男の姿が見えた。男の手がそれを拾い上げる。

「ああ、済みません」

「いえ。どうぞ」

手渡してくれた男の顔には見覚えがない。徹より若干、年上だろう。村の人間のすべ

てを知るわけではないが、同世代の者はさすがに分かる。見覚えがない以上、兼正の誰かだとしか思えなかった。
「ひょっとして、兼正の人？」
そうです、と相手は笑った。
「同じ年頃の人に会ったのは初めてだな。ぼくは辰巳と言います。よろしく」
「どうも、こちらこそ。おれは武藤です」
「ぼくぐらいの歳の奴って、村にはいないのかと思いましたよ」
「そんなことはないです。数は少ないんで、遭遇率は低いと思いますけどね」
答えながら、こいつが、と思っていた。こいつが噂の「兼正の若いの」だろう。正雄のところに現れた奴だ。
「——散歩ですか？」
「そういうわけでもないんですけど、ぶらぶらと。家の中は退屈だけど、行くところがなくって。村の若い人は、毎日、何をして過ごしてるのかな」
辰巳の言に、徹は笑った。
「村の中じゃ、テレビ見て寝るぐらいしか、することはないな。あとはダべるくらい。もうちょっと有意義に遊ぼうと思うと、村を出ないとどうしようもない」
辰巳は微苦笑を浮かべた。

「じゃあ、やっぱり溝辺町まで行かないといけないんですね。車で?」
「そう」
「でも、車で遊びに出ると、飲みに行けないでしょう」
「まあ、額面はそういうことになるけどね」
辰巳は溜息をつく。
「いいところだと思うんだけど、さすがに遊び場がないんで時間を持て余すな」言って、辰巳は笑う。「かと言って、昼間に出歩くと、自分が珍獣になった気分がして」
徹は笑った。
「遊び相手がいないと、どうにもならないよ、この村じゃあね。かと言って、溝辺町までわざわざ出かけたところで、一人で楽しく過ごせる場所があるとも思えないけど。特に夜はね。溝辺町まで出ようと、夜が早いのは変わらないから。まあ、都会と違って田舎はそんなもんだよ」
「なるほどなあ」
「そんなたいした遊び場はないけど、それでも良ければ今度、案内するよ」
「本当に?」
徹は頷く。
「良かったら週末にでも声をかけてもらえれば。おれは中外場に住んでるから。病院で

事務をやってる武藤の家、と訊いてもらえればすぐに分かる」
「ああ——尾崎医院に勤めてるんだ」
「親父がね。おれは単なる会社員だけど。やたら賑やかで落ち着かない家だけど、良かったら遊びに来てくれ」
ありがとう、と辰巳は笑う。どこか含みありげに徹を見た。
「そう言ってもらえて嬉しいな。——必ず伺います。どうぞ、よろしく」

4

二十八日、法事で身動きが取れなかった彼岸がようやく明け、静信は中外場の通称、三安——安森家を訪ねた。突然、嫁がいなくなったというのが、気になって仕方なかったからだ。
三安の地所は中外場のいちばん南、西山から流れる細い川に架かった橋の袂にある。コンクリートで囲まれて、川と言うより水路と言ったほうが似つかわしい。その向こうは下外場。
静信は三安の地所に入り、まっすぐ玄関に向かったが、その間にも表に面した雨戸が引かれているのに気がついていた。時刻はほぼ二時、家の者が寝ている時間ではないだ

ろう。それで山入の村迫家のことが思い出された。静信はなんとなく、予感のようなものを感じながら玄関のガラス戸の前に立つ。

案の定、ガラス戸は開かなかった。呼び鈴を押してみても応答がない。念のために裏のほうへと廻ってみたが、どの窓もぴったり閉ざされ雨戸を引かれ、戸締まりがしてあった。

少し用を足しに出かけるなら、誰も戸締まりをしたりしない。ここまでの戸締まりをするのは長期、遠方に出かけるときだけだ。

困惑して表に戻り、静信は道を挟んで向かいの家に向かった。周囲は田圃ばかりで、三安に隣家はない。最寄りの家は向かいの田茂だけだった。中外場に二軒ある田茂のうちの一軒だ。こちらのほうも三安と同じく典型的な農家の造作で、表に面した雨戸は全部開いていたし、縁側から奥のほうに人がいるのが見て取れた。

「済みません」

縁側まで行って静信が声を上げると、奥でテレビを見ていたのだろう、横顔を見せていた中年の女が振り返った。田茂由起子だ。

「あら、若御院」

由起子は言って立って、縁側に出てくる。

「しのぎやすくなりましたねえ。どうなさいました」

「済みません、お向かいの安森さんなんですけど」
ああ、と由起子は声を上げる。
「三安に御用ですか？　あそこ、越したんですよ、つい一昨日（おととい）」
え、と静信は声を上げた。
「まあ、お上がりになってください。何もないですけど、お茶くらい」
由起子が熱心に勧めるので、静信はありがたくそれを受けた。奥の茶の間ではテレビが点いており、その周辺には幼児用の玩具（おもちゃ）が散らばっていたが、子供の姿は見えない。お茶を用意して戻ってきた由起子は、それを慌（あわ）てて集めながら、孫がやんちゃ盛りで、と笑った。
「やっと歩くようになったら、もう目を離せなくって。そのへんに玩具を散らかすし、始終、大声を上げるしで大変。嫁とお祖母（ばあ）ちゃんが連れて買い物に行ったんで、やっと一息ついてたところなんですよ」
由起子は言って目を細める。
「お祖母さんはお元気ですか」
「おかげさまで。わたしより元気なくらいですよ。お祖父（じい）さんが早死にだったぶん、自分は長生きするんだ、なんて言ってますけどね、本当にそうなりそうですねえ」
「それは結構なことです」と、静信は微笑（ほほえ）み、ところで、と続けた。「安森さんですが」

ああ、と由起子は袋菓子の口を開けながら表のほうを見た。
「引越したんです。一昨日、というよりその夜中なんですけどね」
「夜に越してしまわれたんですか」
ええ、と由起子は頷く。
「若御院のところにも挨拶(あいさつ)がなかったんですか？　いえ、うちにもなんの挨拶もなかったんですよ。とにかく、車の音がして、それももう寝ようかって時分でしたから、何事かしらと思って見たら、向かいにトラックが停まってたんです」
「高砂運送……ですか？」
由起子は瞬き、ああ、と一拍置いて頷いた。
「そう言えば、松のマークが入ってました。そういうおめでたい名前の運送屋でしたっけ。よく御存じですね」
まあ、と静信は言葉を濁した。
「その運送屋のトラックが入ってましてね、荷物を運び出してるふうなんで、驚いてお向かいに行ったんですよ。そしたら、引越すことにした、って。——それが妙な話なんですよ」
由起子は声を潜めて身を乗り出す。
「若御院、あそこのお嫁さんがいなくなったの、御存じです？」

「そういう噂は聞きましたが」

「いなくなったんですす。八月の末なんですけどね。お向かいの米子さんが見なかったか、って言ってきたのが夕方だったかしら。話を聞くと、朝からいない、って言うじゃないですか。起きたらもういなくて、出かけてるのかと思っていたら、未だに帰ってこないって言うんですよ。あたし、駐在に届けたら、って言ったんです。最近、村じゃあ何が起こるか分かったもんじゃないですから」

分かるでしょう、と言いたげに由起子は目配せをする。静信は曖昧に頷いた。

「その時は夜になれば帰ってくるだろう、なんて言ってたんですけどね。結局、翌日にも帰ってこなくて。米子さんに様子を聞いたら、日向子さんの旅行鞄がなくなってて、着るものなんかが減ってるんですって。出て行ったんだ、って米子さんは、そりゃあ怒ってて。――でも、こう言っちゃあなんですけど、いつかそういうことになりそうな気がしたんですよ。あそこはお嫁さんと折り合いが悪かったから」

はあ、と静信は相槌を打つ。

「もともとね、日向ちゃんと弘二くんが一緒になるのも、すったもんだがあったんです。米子さんは日向ちゃんが気に入らなかったんですよ。いい子だったんですけどね、わりとサバけた――っていうか、今ふうのぱあっとした子だったから。それをまた、弘ちゃんが結婚するって勝手に決めてね。結婚するって話が出たときには、もう式のことも決

めてたんですよ。どっか外国に行って二人だけで式を挙げるって。それで米子さんも誠一郎さんも怒っちゃってね。外国でなんてとんでもない、そういうことを勝手に決めるとは何事だって話ですよ。第一、二人が結婚するなんて聞いてない、許したわけじゃないって。まあ、あたしでも自分の息子のことなら大喧嘩ですよ。絶対に結婚なんてさせない、って凄い剣幕だったんですけど、実を言うと日向ちゃん、その時にはもうお腹に子供が入っててねえ。させるもさせないもありませんよ」

「子供さんがおられたんですか？」

「結局、流産しちゃったんですけどね。子供がいるんじゃしょうがない、日向ちゃんの親だって黙っちゃいませんから。それで間に人が立って、なんとか丸く治めて、溝辺町で式を挙げることにして。そしたら今度は日向ちゃんのほうの御両親と揉めてね。ほら、三安の長男は家を出てますでしょう。高校の時から良く出来て、結局、都会のいい大学に行って、都銀かなんかに就職しちゃいましたから。ところが日向ちゃんの親は次男だからっていうんで結婚を許したらしいんですよ。それが同居だってことだから、話が違うって。また弘ちゃんが、調子のいいことを言ってたみたいでねえ。両家で揉めたんですけど、そうしてる間にも日向ちゃんのお腹は大きくなるし、弘ちゃんは弘ちゃんで、米子さんベッタリの子でしょう。小さい頃から米子さんの姿が見えなかったら、泣きながら捜して歩くような子でしたからね。同居は嫌だって言うんなら、もういい、って言

い出して、結局、日向ちゃんの親が折れる形で決着がついたんですけどね」
はあ、と静信は頷く。
「そんなこんなで一緒になったんですけど、結婚前からそれじゃあ、上手(うま)くいくはずがありませんよ。とにかく喧嘩が絶えなくてね。米子さんも誠一郎さんも日向ちゃんには冷たく当たる、弘ちゃんはそういう時、母親の肩を持つ、そのうえ子供を死なせちゃって、それだって米子さんたちは日向ちゃんを責めるんですけど、日向ちゃんや日向ちゃんの親にしたら、それもとんでもない話でしょう。本人だって一時は危ないって状態だったのに、子供亡(な)くして、あげくに責められたんじゃたまりませんよ。実家に帰るの帰らないのって話でね、さすがにあたしたちも米子さんを諫(いさ)めたんです。それはないだろうって。それで今度は米子さんたちが頭を下げて、なんとか丸く治まったんですけど、やっぱり喧嘩が絶えなくてねえ」
「ああ……そうですか」
「こういうのってねえ、旦那(だんな)がちゃんと間に立てばなんとかなるものなんでしょうけど、なにしろ弘ちゃんがマザコンって言うんですか、親の肩ばっかり持つんでねえ。それで日向ちゃんとは喧嘩が絶えなかったみたいなんですよ。日向ちゃんも悪い子じゃなかったんですけど、何かあると黙ってない性分だったしねえ。——まあ、それで日向ちゃんがいなくなったって聞いた時も、とうとう実家に帰ったんだな、と思ったんですけど。

迎えに行ってあげなさいよ、って弘ちゃんにも言ってたんですけどね、弘ちゃんも米子さんたちも、本人が出て行きたいなら勝手にしろ、でしょう。でも、こういうことっていうのは、そんなもんじゃないじゃないですか。別れるなら別れるでちゃんとしなさいよ、って、あたしらもアドバイスしたんです。それでようやく実家のほうに連絡したら、実家には帰ってないって。向こうの親御さんのほうが血相を変えちゃって」

　静信は瞬いた。

「向こうの親御さんも御存じなかったんですか？」

「そうなんですよ。親が乗り込んできて、今日まで連絡がなかったのはどういうことだ、娘に何かあったらどうしてくれる、って、そりゃあ摑み合いになりそうな剣幕で。結局、親御さんのほうが失踪届を出すとかいう話だったんですよ。米子さんたちは米子さんたちで、きっと男でもいたんだろう、それで逃げたに違いないって、とんでもないことを言い出すし。いえね、うちの嫁が日向ちゃんとはわりによく口を利いてましてね、それで言うんですけど、日向ちゃんってのは、ぱあっとした外見のわりに、意外に堅い子でねえ。そんなタイプじゃないんですけど、一見すると髪も赤いし、身なりも派手だしで誤解されやすいんですよ、遊んでるんだろうって。そりゃあ、よく溝辺町には出かけてて、夜遅くまで出歩くこともあったみたいですけど、婚家がそんなふうだから、実家に戻って愚痴を言ったり、女友達に会って慰めてもらったりってことだったんです。それ

を米子さんたちは夜遊びが多かった、てっきり男がいたに違いないってねえ」
「……そうですか」
一体、どうしてこんな他家の事情を延々と聞く破目になったのだろう、と静信が内心で困惑したとき、由起子は言った。
「そんな按配(あんばい)だったのに、日向ちゃんに呼ばれたって」
「――え？」
由起子は、だから、と説いて聞かせるように言う。
「日向ちゃんから連絡があって、一緒に住むことにしたって、そう言うんですよ。でも、妙な話でしょう？　日向ちゃんが戻ってくるなら分かるんですよ。なのに、一緒に住むって、なにも三安が引越すことはないわけじゃないですか。弘ちゃんは勤めだってあるわけだし。それが弘ちゃんも勤め辞めて、山も田圃も放り出して、嫁のところに行くなんてこと、あると思います？」
静信は首を振った。
あり得ない。話半分にしても、それだけの確執があって出て行った――それも境松のように息子だというのならともかく、嫁に呼ばれて、一家が土地を捨てて出て行くことなど、あるとは思えない。
「まさか、って言ってやったんですよ。そんなこと、信じられるはずがないでしょ、っ

て。でもね、米子さん、とにかくそういうことにしたんだ、の一点張りで。こう……目が据わっちゃってね。取り憑かれたみたい、って言うんですか。どこに行くとも、どうするとも言わないんです。結局、転居先も言わないまま、出て行っちゃって。それも家財道具なんて残したままですよ。あたし、トラックの荷台を見たんですから。本当に最低限って言うんですか。申し訳程度に荷物を積んで、夜のうちに出て行って。あたしはもう、呆れるやら気味が悪いやらで」

それは異常だ、と静信は思った。その転居はどう考えてもおかしい。日向子と同居するために、という米子の言い分は嘘だとしか思えなかった。しかしながら、なぜそんな嘘をついて村を出て行く必要があったのだろう。土地があり家がある。仕事があり生活があったのだ。それだけのものをかなぐり捨てて、そっと逃げ出すならともかく、見え透いた嘘をついてまで、どうして一家は村を引き払わねばならなかったのだろう。

由起子は溜息をついた。

「またねえ、うちの息子が怖いことを言うもんだから、なんだか気味が悪くって」

「怖いこと?」

ええ、と由起子は声を低める。

「まさか、日向ちゃんが家の裏にでも埋まってるんじゃないだろうな、って」

まさか、と言いかけ、静信はそれもあながち否定できないことに気づいた。——いや、

違う。可能性の有無の問題ではない。三安の転居には、不吉な想像を否定できないほどの不可解さがつきまとっているのだ。

　静信は帰り道、考え込まざるを得なかった。問題は疫病だったはずだ。夏以来、続いている不可解な死。それについて、静信は調べているはずだった。たしかに夏以来の死者の数は尋常ではない。しかしながら、境松や三安のことを考えると、真に異常なのは人が死んでいることではない、というふうに思えた。

　何かが村で進行している。疫病はその一部でしかないのではないか、という印象。だが、何が進行しているというのだろう。不審な転居と死者と、その間にどんな意味があるというのだろう――。

5

　この日、敏夫は夕方になって行田悦子の死亡を伝える電話を受けた。敏夫が駆けつけたとき、悦子は間違いなく死亡していて、それも死後数時間が経っていた。夫の文吾が山に入っている間に死亡したものらしかった。死に顔は穏やかで、着衣の乱れもなかった。昏睡してそのまま息を引き取ったのだろう。敏夫は機械的に急性腎不全と死亡診断書に書き込んだ。

定、行田はこれを拒んだ。早目に来院させ、処置をすれば、とりあえず増悪を軽減することはできるのだ。だが――と、病院に戻り、患者に忙殺されながら敏夫は思う。問題は村の連中が、何でもない症状なら病院に駆けつけてくるくせに、本当に具合が悪くなると病院を忌避することだ。本人も体調が優れないから出かけることを嫌がる、そうしているうちに身動きができなくなる。

どうすれば、連中を即座に来院させることができるのだろう、思い悩みながら診療時間を終えた。静信がやって来たのは、自室に退ってカルテを睨んでいるときだった。

「――どうだ?」

開口一番、静信は言った。敏夫は投げ遣りに、絶望的だ、と答えた。

「やはり、前駆症状になるのは貧血だな。発熱もあるが、あまり高くはない。それから三日程度で劇的に増悪する。多臓器的な機能低下、それに伴う軽い浮腫や軽微な黄疸、あるいは免疫機序の低下による癤や炎症。抗生物質は効かないから、細菌性のものじゃない」

「耐性菌は?」

「バンコマイシンでも効果がない。おそらく原因になっているのは細菌じゃないんだろ

う。とりあえず、貧血が出ている段階で全血の輸血をすると、多少の延命効果がありそうな感じだな。貧血以外に特徴的だと言えるのは癤だ。表出血管に近い部位に、必ず虫さされの膿んだような痕跡が見つかる。媒介生物がいることは確実だと思うが、具体的に何なのかは特定できない。患者同士の共通項はその程度だ。本人の身体的特徴、生活習慣、環境、一切関係がない。水や土壌、食物の汚染は考えられない。中毒じゃない、感染症だ。そこまではとりあえず、確実だと言っていいだろう。――それで、そっちは？」

静信はノートを開いた。挟んだコピーを敏夫に寄越す。

「共通項は相変わらず、見つからない。御覧の通りだ。あと、――これが関係があることなのかどうか、分からないんだが……」

静信は口ごもった。敏夫は頰杖をついて、先を促す。

「山入の義五郎さんは、村外に出かけて戻ってきたときには具合が悪かった」

「前にも言ったろう、それは」

言いかけた敏夫を静信は制す。

「太田健治、広沢高俊、佐伯明、高嶋靖夫、清水園芸の隆司さん、そして大川の茂さん、この六人は村外に通勤しているんだ。そして――死亡の直前、突然、退職している」

敏夫は首を傾げた。

「何だって？」
「だから、死ぬ前に家族にも無断で辞職してるんだ。それも、ものすごく唐突に、理由もなく辞めている。広沢の高俊さんに至っては、出勤しているふりをして溝辺町のパチンコ屋で時間をつぶしていて、そこで倒れてる」
「妙な話だな……」
「死んだ人間のうち、村外に通勤していたのは六人。その全員が死の前に辞職しているんだ。……これはどういうことだと思う？」
分かるもんか、と敏夫は答えた。
「ただ、少なくとも疫病とは無関係だろう。そいつは症状じゃない」
笑ってみせたが、敏夫自身、釈然としなかった。偶然の一致なのだろうが、にしても六人が六人、全員とは。
「あと、これも関係ないとは分かっているんだが……。人が減っているんだ。気づいていたか？」
「減ってるのは分かってる」
「そうじゃなく。死亡だけじゃない。転出が多いんだ。引越したのか、いなくなったのか分からない者も多い。それも唐突に村を出ている。近所になんの挨拶もなく、夜中に逃げるように村を出ているんだ」

言って、静信はメモのコピーを差し出した。静信のものではない、枯れた文字で二十二の名前が記され、その末尾に、これは静信の字で「安森（三安）・中外場」と書き添えてある。

「引越の様子も変なんだ」

言って、静信は境松や三安の事例について語る。敏夫は眉を顰めた。たしかにその状況は奇妙だった。だが、疫病に気づいて逃げ出したのでない限り、転居は無関係だ。

「石田さんにも住民票を当たってもらった。ところが、八月からこちら、転出の届けはないと言うんだ」

「一軒も？」

「一軒も。高見さんのところでさえ、届け出されていない」

「変な話だな、それも」

敏夫はメモを眺めたが、さほどの感興を誘われたわけではなかった。疫病とは無関係であることは明らかだ。どれだけの転居者がいようと、それは敏夫の領分ではない。

「図書館の柚木さんが辞職したとか、小学校の校長が辞職したという話も聞いている。……何かおかしくはないか？」

「そりゃあ」と、敏夫はメモを放り出した。「妙と言えば妙だが、だが、それはこの際、関係ないだろう」

静信は生真面目な様子で頷く。

「とは思うんだ。けれども釈然としないんだよ。村で何かが起こっている気がして。なんだか、疫病もその一環だという気がする」

「気のせいだ」

敏夫は断言した。微かな苛立ちのようなものに襲われた。

「そうかもしれないとは思う。けれども、これは定市さんの指摘なんだが、その転居リストを見てくれ。山入に出入りしていた人間が綺麗さっぱりいなくなっているんだ。山入に住んでいた三人が死んで、山入以外の場所から周辺の山に出入りしていた人々もいなくなって、本当に山入に関係する人間は、いなくなった勘定になる。山入、というところが気にならないか?」

敏夫は溜息をついた。

「何でも結びつけりゃいいってもんじゃないだろう」

「しかし」

「たしかにあれも山入、これも山入だ。転居者が多いのもたしかだし、その様子が妙なのも認める。——だが、それと疫病とどう関係があるって言うんだ?」

それは、と静信は俯く。

「これだけのことを調べるとは、いかにも御苦労な話だな。だが、これはおれたちには

関係ない。今考えないといけないのは、例の疫病のことなんだ。勢いがついているんだ、分かっているか？」

「それは……」

「お前は完全に、調査の目的を履き違えてる。おれたちはなんとか、一連の死が伝染病によるものであることを証明しないといけないんだ。どういう病気なのかを特定して、治療方法を探さないといけない。にもかかわらず、こいつは前駆症状が読みにくく、周囲が不調に気づいたときにはどうにもならないところに至っている」

敏夫は吐き捨てた。言っているうちに、自分が自分の言葉に触発されたように苛立っていくのが分かった。

「症例が必要なんだ。にもかかわらず、村の連中は悪化するまで医者にかかろうとしない。素人判断で民間療法に頼る。いよいよの事態になってから連れてこられたって、助ける方法もなけりゃ、経過を摑むこともできやしない。――感染症なのは間違いない。たぶん媒介生物がいる。分かるのはそれだけだ。肝心の病気の辻褄さえ合わない。おれはたしかに疫学の専門家じゃない。研究者でもない。単なる一介の町医者だ。おれに分かることには限りがある、それは否定しない。だが、これでも最善はつくしてる。だが、調べても調べても、こんな症状が起こるはずはない、という気がするばかりだ。造血段階の異常じゃない、骨髄細胞の異常でもない。内出血も見られない。残るのは溶血だけ

なのに、溶血反応が出てこない。起こるはずのない貧血が起こってる。それも激烈に悪くなる。ぜんぜん症例が足りないんだ。だから死に至る機序でさえ矛盾だらけで整合しない」

敏夫はカルテの山を叩いた。

「肝心の患者はいよいよの段になるまで病院にやって来ようとしない。そのくせ意味もなく不調を訴える患者が増えてる。最近、一日にどれだけの患者が来ていると思う。スタッフだって緊張している。疲れているんだ」

静信は俯いたまま沈黙した。

「好きで出て行った連中のことなんか知るもんか。お前は時間を浪費したんだ。そのうえ、定市さんに訊いただって？　定市さんはお前がそうして、あちこちを嗅ぎまわっているのをどう思ったと思う。それでなくても村の連中だって馬鹿じゃない。何かがおかしいと気づき始めてるんだ。そこに寺の若御院があちこちで聞き込みをしてるなんてことが広まってみろ、不安を焚きつけるようなものじゃないか！」

鬱屈したものが噴出した形になった。静信は何かを言いかけたが、結局、口を噤んだ。その顔には敏夫に対する同情の色が見えた。静信はたぶん、敏夫が焦り、疲労から苛立っていると思ったろう。そしてそれは事実なのだが、今はその憐愍めいた視線が神経を逆撫でした。

「そんなことをする暇があったら、寺に来る連中の顔色に気をつけてくれ。具合の悪い人間はいないか、家族が風邪ぎみだという話はないか、耳をそばだててくれたほうが何倍も有益だ」

静信は不服を言わなかった。分かった、とだけ短く答え、何に対してか、軽く頭を下げた。

6

ランプに火を入れながら、静信は自分が落ち込んでいると聖堂に来るのだ、と改めて確認していた。

すでに午前零時を過ぎている。朝の早い寺は寝静まっているし、寺務所にいようと私室にいようと、顔を出す他人のことなど考える必要はない。単に一人になりたいだけなら、寺のどこででも好きなだけ一人でいられた。なのにわざわざ、ここまで足を運ぶ以上、自分はこの荒れ果てた聖堂に何か慰めを見出(みいだ)しているのだろう、と思う。

単なる廃屋なら、これほど頻繁に足を運んだかどうか怪しい。たぶんここが祠(ほこら)であることに何か意味があるのだろう。同様に、ここが真実、教会なら、やはり足を運んだかどうかおぼつかない。静信は祭壇を見上げ、もしもそこに確固とした信仰の象徴が掲げ

られていたら、自分はこれほどこの場所に執着しないだろう、という気がした。明らかに聖堂でありながら祭壇に祀られる神はいない。それが気に入っているのかもしれなかった。

そう――かつてはきっと、そうだったのだろう。今は、そればかりではない自分を自覚していた。その証拠に、ランプに明かりを入れてからずっと、静信は無意識のうちに耳を澄ませている。

いつの間にか、虫の声が絶えている。聖堂を覆っているのは、風の音だけだった。そこに蝶番の軋む音が微かに響く。

「こんばんは」

静信は、傾きかけたドアの間から滑り込んできた少女に軽く手を挙げた。

「涼しくなったね」

「ええ」と、沙子は頷く。「夜の匂いがすっかり変わったわ。秋が来るのね」

「そのようだね」

「少しは進展があった？」

近くのベンチに腰を下ろす沙子に、静信は首を横に振ってみせた。

「そう……大変ね。それで室井さんは、落ち込んでいるの？」

「どうだろうね」

「分からないの？」
うん、と静信は正直に頷いた。
「なんとかしなければ、とは思うんだよ。なのに何もできない自分が悔しいのは事実だ。こうしている間にも、たくさんの人が死んでいこうとしている。なのに自分にできることはいくらもない」
「……虚(むな)しい？」
「そうなのかな。——ただ、ぼくより敏夫がね。敏夫は医者で、患者を救う義務を背負ってる。なのに救えない。患者がどんどん死んでいく。焦るのも分かるし、無力感も分かる。どうにもできない自分に苛立っているし、怒っているんだ。とても荒れてる」
「可哀想(かわいそう)ね」
「うん、そうなんだよ」
静信は息を吐いた。——そう、自分は充分に敏夫の心情を分かっているつもりだ。敏夫の置かれた立場に同情もしている。友人だから助けてやりたい。なのにそれができないでいる。
「ぼくとしては、なんとか敏夫を手助けしてやりたいと思っているのだけどね。けれども実際には何もできないんだ。敏夫はそんなぼくに苛立つ」
「室井さんが役に立たないから？　それ、八つ当たりって言うんじゃないかしら」

「うん、そうなんだよ。あれはぼくに腹を立ててるんじゃなくて、自分に腹を立ててるんだと思う。そして本来、敏夫はそういう振る舞いを自分に許す奴じゃない。だから見ていて、切なくなるんだよ」

沙子は首を傾ける。静信はそれ以上言わずに、ただ微笑った。

静信は敏夫を助けてやりたい。敏夫の気性は分かっているから、彼が今、どれだけ自分に腹を立てているかも分かっているつもりだ。だから静信なりに最善をつくしているつもりなのだけれども、敏夫にはそれが最善とは映らなかったらしい。時間を浪費した、と責める。

責められたこと自体は、格別、気落ちするようなことでもない。悲しいのは、敏夫の苛立ちを静信が理解していることが敏夫に通じていないことだ。敏夫の焦りは分かっている、だからそれを少しでも軽減してやりたいと思っている、その末の行動であることを、敏夫に理解されていないのが悲しい。——いや、敏夫もそれは分かっているのだろう。けれども自分に苛立って、今は静信に当たらないでいられない。静信を責めたのじゃない、自分を責めたのだ。それすらも分かるから、不当だと怒ることもできないし、あとから振り返ればいっそう自己嫌悪にかられるような、そんな行動を取ってしまう敏夫が不憫だ。

「うまく言葉にできないけど、室井さんの気持ちはなんとなく分かる気がするわ」

「そうかい？」
沙子は頷く。
「気持ちがすれ違ってしまってるのね。ううん、尾崎の先生は、状況に焦って気持ちが閉じているんだわ。だから室井さんが通信を送っているのに、それを受け取ることができないの。室井さんはそれが切ないのね？　自分の気持ちが通じないというより、相手が心を開いてくれないと、通信を送っても受け取ってもらえないのが切ないんだわ。人間はそんなふうに、孤立してるの。それがたまらない——違う？」
静信は苦笑した。
「君は凄いね」
「あら、わたしは室井さんのファンなんだもの」沙子は笑った。「別に今、室井さんの気持ちを推測したわけじゃないわ。前に室井さんの本を読んで、そんなふうに思ったことがあるだけよ」
「へえ？」
「人間は孤立してるのね。真の意味で他者と理解し合うことはできないの。分かったようなつもりにはなれても、お互いに言葉で分かってるねって確認し合っても、本当に理解できているのか、真実は分からない。理解や共感を求めて他と接触するくせに、そんなものは全部、幻想でしかないの。それってとても切ないことだわ。……室井さんの本

を読んで、そう思ったことがある」
「ふうん？」
「きっと作者も切ないと思ってるんだ、って感じたの。それを思い出しただけ」
そうか、と静信は苦笑した。
「ねえ、聞いてもいい？　室井さんが今書いているのは、どういう話？」
「……荒野をさまよう男の話」
沙子は首を傾げた。
「弟を殺してしまった兄が、街を放逐されて荒野をさまようんだ。そのあとを死んだ弟が追ってくる。——そういう話」
「死んだ弟が、幽霊になって？」
「少し違う。屍鬼なんだ」
「しき？」
「屍の鬼。起き上がりなんだ。死体が起き上がって、墓穴を抜け出してきてるんだよ。村ではそれを鬼と言うんだけどね」
「……ああ」と、沙子は少し考え込むようにした。「幽霊とは違うのね？　起き上がりだから、ちゃんと身体があるんだわ。けれどもそれは死体としての身体なの。甦ったわけじゃない」

「うん、そう」

「けれどもゾンビのような単なる死体でもないのね？　ちゃんと精神が宿っていて、人間と等価の存在なんだわ。けれども、生者ではない。ぜんぜん異質な存在」

言って沙子は、屍鬼、と口の中で繰り返した。その単語がいたく気に入ったようだった。得心したように笑う。

「いいと思うわ。とてもいい。——弟が屍鬼になって兄を追いかけてくるのね？　それ、創世記でしょ？　カインとアベル」

「うん……まあ、そう」

沙子は何度も頷いた。

「面白い。室井さんはお坊さんなのに、仏教でない宗教色の強い話が多いのね。今度は聖書でしょ？　その前はギリシャ神話だったし、その前はネイティブ・アメリカン」

「ああ、そう言われてみるとそうかな」

「でもって、またカインなのね」

静信は瞬いた。

「また？」

「そう。異端者の話よね。カインって異端者でしょ？　何て言うのかしら——理不尽に区別された者」

「聖書のカインには、それなりの含蓄があるんだよ」
「知ってるわ。聖書の話じゃなく、室井さんの作風の話よ。神様に見放された者の話。カインって、そうじゃない？　カインにしたらどうして自分が神様に拒絶されるのか分からなかったと思うわ。自分は理不尽に否定されて、疎外されてると感じたと思うの。だからアベルを妬んで殺したんでしょ？」
「そう読むのが普通だろうね」
「必ずそういう話なのね。神様に見放された誰かの話」
「そうかな」
沙子は頷いて立ち上がる。両手を背中で組んで、半壊した空洞の祭壇を見上げた。
「……角が生えた男の話。突然、角が生えてきて、男は常人と違ってしまった自分に怯えるの。謂われのない差別を受けそうで、懸命に隠してる。でも、男は神として崇められてしまうのね。そして奇蹟を要求される。奇蹟を施す力はないのに、角だけがある」
静信は歩きまわる沙子を見守りながら、困惑した気分で頷いた。
「男は差別されないことに安堵したけど、奇蹟を施す力はない。それが他人に知られると、角は神の証ではなく、単なる異端の証明にすぎないことに気づかれるんじゃないかと怯える。けれども誰も、いっかな奇蹟が起こらないことで彼を責めない。――男はやっぱり異端者なの。それを神と呼んで聖別することで排除しているのよ。角は異端者の

て社会の中から排除されてしまう。主観的には謂われのない区別よ。でも、そこから逃れることができない。カインと同じ、でしょ？」

静信は頷いた。

「そのようだね」

「自覚してなかったの、室井さん」

「うん。今、気づいた。たしかにそうだ」

異端者という同形反復。

「面白いのね。わたしは室井さんの作品のそこが好きなんだけど。神様に見放された痛み、みたいなもの？　ミノタウロスは自分が神でないことを見透かされ、排除されるんじゃないかと怯えて、自ら奇蹟を起こすのね。罪人を殺すことで祟りを起こす。村人は彼を畏れ敬って、壁をひとつ築くの。つまり、彼をより遠ざけるのね。そして殺した数だけ壁ができて、彼の周囲には巨大な迷宮が作られていく。迷宮の奥深くに隠されてしまう。そして彼の怒りを鎮めるために生贄を差し出す。彼が望んだのは、神として振る舞うことで社会の中に入れてもらうことだったのだけど、社会は彼を拒み通す——」

沙子は言って足を止め、静信を振り返った。

「でも、不思議だわ。どうしてなの？」

「どうして?」
「室井さんのお話は、全部そんなふうじゃない。でも、室井さんは神様に見放されているようには見えないわ。村の中の重要人物でしょ? 村の人はお寺の若御院が好きみたいだわ。みんな褒めるって、辰巳が言ってたもの。敬愛されて、村の中の重要な位置にちゃんと組み込まれてる」
「組み込まれてるのはたしかだね」
「でしょ? でもって室井さんも村のことが好きみたい。とても大事にしてる感じを受けるわ。いつかのエッセイもそう。今だって余暇を割いて、疫病対策のために走りまわってるんでしょ?」
「そうだね。……そう、ぼくはたしかに村が好きだよ。大事だと思ってる」
「でも、作品はそんなふうなのね」言って沙子は悪戯っぽく笑い、背を向ける。「そして、傷がある」
静信は無意識のうちに時計を握っていた自分に気づいた。
「……なぜ?」
沙子が振り返って、静信は首を横に振った。
「分からない」
実際、静信は村を愛している。静信は疎外されていない。信仰の要として組み込まれ

ているし、村人は静信に対して敬愛を惜しまない。だからこそ、静信もそれに報いたいと思うのだ。それで今も奔走している。
だが、同時に静信が何かから逃げ出そうとしたことも事実なのだった。沙子に指摘されるまで自分でも気づいていなかったが、静信の書くものは「神様に見放された」痛みによって貫かれている。ひょっとしたらそれこそが、正体不明の衝動の由来なのかもしれなかった。
自分は心のどこかで「神様に見放された」と感じており、その痛みからかつて自分を殺傷しようとしたのかも。それはたしかに、神に拒まれたカインの姿に重なる。だから自分は今回もまた、無意識のうちにカインを主人公に選んだのだろうか。
問題は、静信には「神様に見放された」という自覚がないことだった。なぜ自分がそんなふうに感じるのか理解できない。どう考えても自分はそんなことを思っていそうにないし、思う必要があるとも思えなかった。
「面白いわ。室井さんがあそこまで拘るからには、室井さんにとってそれは重要なことなんでしょう？　なのに自覚もなければ、自分でもなぜなのか分からないのね」
「うん。そうなんだ」
「無意識が漏出してるんだわ。作家って不思議ね」
「……まったくだ」

静信は沙子と別れ、山道を辿りながら、一歩ごとに考えた。
静信の書いたミノタウロスは異端者だった。彼は角を得て異端者になるのだが、おそらくはその本質において、そもそも異端者だったのだ。角はそれを顕現してみせたにすぎない。カインが弟の殺傷という罪において、——そして静信が自己の殺傷という罪においてそれを表したように。
（けれども、なぜ？）
たしかに静信は村に組み込まれている。それも信仰の要になる重要な位置に。静信の周囲にいる人々はそれを望んでいたし、もっと肝要なことに、静信自身もそれを望んでいた。沙子の指摘通り、静信は村を大切だと思っている。それなりの愚かさ、それなりの至らなさがあることは承知していたが、それをも含め、良しとしてきた。
そしてまた、静信自身はカインのように不当な区別を受けたことがない。少なくとも、静信はない、と認識していた。区別はあるがそれを不当だと思ったことはなかった。尊崇や敬愛に対しては、ただひたすら感謝する。檀家の人々が静信に対し、時に腫れ物に触るようにして接するのは、明らかに静信自身が招いたことだった。村の中にはそれをもって陰口を言う者がいることすらも知っていたが、それらを不当だとは思わない。たしかに静信は、村の常識において、「あいつは」と指さされるだけのことをしたのだ。

不当な区別はない。理不尽に否定され、疎外されたと感じたことはなかった。ならばなぜ、今回もカインでなければならなかったのだろう？
　静信は寺務所に戻り、原稿用紙を広げた。

　緑野は果てしないほどに広がり、やがて緑の合間に白い石と赤い土が混じり始める。柔らかな緑を蘚（こけ）のように張りつめた、起伏の多い丘陵地の果てには長大な城壁があった。堅牢（けんろう）なその城壁は、さながらその外部を住人の目から覆（おお）い隠そうとするかのように広がり、そして、その東の一郭には、小さな門が閉じている。
　彼はその門から荒野に追い出されるまで、荒野を見たことがなかった。漠然と、不毛の地が広がっていることを知識として了解していただけだった。彼はおよそ、外界に興味を抱いたことがなかったし、そこに自分が在る風景など思い描いたこともなかった。彼にとって世界とは丘を示し、丘以外の場所は存在しないも同然だったからだ。
　たしかに、彼はある意味において、その丘で充足していたのだった。
　野辺の一郭につましい住居を持ち、野に出てささやかな糧（かて）を得た。その頃には、まだ温かな血の通った身体を持つ弟がいた。弟は緑野で羊を飼い、彼は住居の周囲に穀物を植え、二人の生活に事足りるだけの収穫を得ていた。隣人たちは温厚で心優しく、差し伸べられる手はいつでも温かかった。

振り返ってみれば、彼はそこで満たされていたように思う。そうでなければなぜ、これほどまでに丘が恋しく、狂おしいほど慕わしく思えるだろう。

彼は実際、働くことが好きだった。家の周囲のなだらかな土地をそっと耕し、滋味を含んで黒い艶やかな色を見ることが好きだったし、土の匂いを好ましく思っていた。そこに種播き、やがて明るい黄緑の点が小さく芽吹くのを微笑ましく思っていたし、それが伸びてゆくのを見守るのは幸福なことだった。

大地と語らうようにして屈み込み、時に身を起こせば、周囲は一面の緑だった。なだらかな起伏の向こう、森の緑は頼もしく、その彼方に街の建物の突端だけが覗いている。ひときわ高い塔には真昼にも清々しい光輝が点り、それを見るたびに大いなるものに見守られている自分を確信できた。

緑野には野草が群れてささやかな花をつけ、そこに点々と白く綿毛のように羊が散って安穏と草を食んでいる。弟は時に、群を離れた羊を諭すように話しかけながら追い、時には綿羊の間に立って彼と同じように緑の森やその向こうの街の突端を眺めていた。手を休めた彼の視線に気がつけば、振り返って笑い、手を挙げる。

のどかな夕暮れ、厳かな晩鐘、人々はつつがない一日を光輝に感謝する。温かな火影、満ち足りた夕餉、暖かな寝床と豊かな眠り、黄金の夜明け、鳥の声、風の肌触り、雨の匂い、羊小屋の寝藁の温み。

彼はそこで、本当に満たされていた。にもかかわらず、彼の中には硬い種子のように、ひとつの哀しみ(かな)が埋もれていたのだった。
世界はこれほどにも美しいのに、それは彼のものではない。
なぜなら、彼は異端者だったからだ。

八章

I

九月が終わり十月に入った。敏夫は九月のカレンダーを破り取る。

朝には石田から電話があった。一昨日、門前の竹村美智夫(たけむらみちお)が死亡したという。昼前には中外場に住む広沢豊子(とよこ)がやって来た。顔色が悪く、口が重い。敏夫はその顔を見て例のやつだ、と気づいた。

患者に丁寧な問診をする。そこで豊子は息子が最近、死んだこと、息子は高俊ということを告げた。

(息子から移ったのか——にしては、えらく間隔が開いている……)

敏夫は豊子の顔を覗(のぞ)き込みながら、ちょっと気になることがあるので、詳しく検査をすること、検査結果を訊(き)くために明日も必ず来てほしいことを告げた。

「はあ」

豊子は、例によって他人事のような顔で曖昧(あいまい)に頷(うなず)いた。

「少し、経過を観察したほうがいいと思うんだ。予約を入れて時間を空けておくんで、

そんなに手間は取らせない。必ず明日、来てもらえないかな」
「でも……疲れているだけだと思うんですけど。息子が死んで、気が抜けて……」
「だから心配なんだ。あんたの都合に合わせるよ。午前中が都合が悪いなら、昼間でも夕方でも夜でもいい。なんだったら往診ということでも構わないから、必ず来てくれないか」
豊子は、ようやく頷いた。
敏夫も頷き、側(そば)に控えていた清美に目配せをして指示を出す。バイタルサインの計測、採血と採尿、骨髄穿刺(せんし)と心電図、腹部と胸部のXP。清美は心得たふうに頷いて、豊子をどうぞ、と促した。
昼休みに入る間際(まぎわ)になって、もう一人、水口に住む老人が例の症状でやって来た。患者は多く、午前中の患者がはけていないうちに、往診の依頼が入ってくる。敏夫はもちろん、看護婦たちも休憩を取る暇さえない。
律子がようやく食事にありついたのは、午後三時を廻ってからだった。夕方の診療も延びていて、帰宅時間がじりじりと遅れるようになっている。
「大変なことになってきたわねえ」
例によって、笑いながら、やすよが言った。
本当にねえ、と清美も笑い、弁当の残りを掻(か)き込んで湯呑(ゆの)みに口をつける。もう麦茶

よりも熱いお茶のほうが嬉しい季節になった。
「あたしたちは、これで一休みできるけどね。先生は午後も明日も休みなしだから大変だ」
「あの」律子は湯呑みを見つめながら口にした。「これ、変なふうに取らないでほしいんですけど……」
不審そうな目を向ける清美とやすよに、律子は弱く笑ってみせた。
「わたし──先生にお願いして、土曜の午後と日曜も出勤できるようにしてもらおうかと思うんです。あの……先生一人じゃ、あまりに大変だと思うんで」
清美とやすよは、顔を見合わせた。律子は慌てて言い添える。
「永田さんと、やすよさんが家庭があるのは分かってるんです。土日がないと大変ですよね。でも、わたしは別に世話をしないといけない人間もいないし、それに家も近いし。だから、せめてわたしだけでもいれば、先生ももう少し休めるんじゃないかと思うんですよ。だから、言ってみようかな、って……」
清美は軽く噴き出した。
「やあね。似たようなことを考えてるわ。──ねえ?」
清美はやすよを見る。
「ホントにねえ。律ちゃん、染まってきたんじゃなァい」

「え？」
「だからね、清美さんと言ってたのよ。日曜にも病院を開けといたほうがいいんじゃないかって。若先生はきっと、あたしらに気を遣って何も言わないんだろうからさ、ここらであたしらのほうから恩を売っとくのも悪くないわよね、って」
「……まあ」
清美は微笑む。
「先生はああいう人だから、よほどの状態にならないと、済まないけどやってくれ、なんて言わないでしょ。でもってその頃には、肝心の先生がぼろぼろになってるわよ。本当にこのところ休みなしで、夜中や明け方にまで駆り出されてるんだから」
「ええ……そうですね」
「だから、ここらであたしらも天使の一種だってことを思い出してもらおうかと思ってね。やすよさんと、そう言ってたの。でも、そうなると律ちゃんが気を遣うでしょ。雪ちゃんや聡ちゃんは、遠方だから出てこれないのは当然として、律ちゃんはそうじゃないし。でも、若い娘さんのデートのチャンスを邪魔するのもねえ」
「あの……」
雪が聡子と顔を見合わせる。
「あたしらも言ってたんです。実は」

「あらま」
律子らは、若い二人の看護婦を見た。
「だって、本当に先生、大変そうなんですもん。最近、疲れてるみたいでピリピリしてるでしょ？　患者さんだってこんなに多いし、土日に病院が閉まってるから、先生に遠慮して診療を受けられない人もいるし」
「そう、だから。あたしたち、先生に掛け合ってみようか、って言ってたんです。土日も来ましょうかって。そのかわり、村のどこかに寮を用意してくださいって。十和田さんだって先生にアパートを借りてもらってるんだから、できないことじゃないでしょ？　なんだったらとりあえず病室でもいいし。そしたら近くなるし、あたしたちも楽だし……」
「一人暮らしの経験もできるし」と、言って雪はちらりと舌を出す。「親だって、近頃、忙しいの分かってるから、出してくれるでしょ。単に一人暮らししてみたい、じゃ、絶対に許してくれないけど」
「雪ちゃんらしいわ。ちゃっかりしたもんねえ」
「へへへ。それでね、言ってみよう、って話をしてたんです」
もしも、と静かな声を上げたのは下山だった。
「先生がその条件を呑んでくれたら、おれも一口乗せてもらおうかな」

律子はぽかんと口を開けた。
「だって、下山さんは奥さんと子供さんが」
「だからさ。家に妙なもんを持ち帰りたくないからね。どうせ、そう長いことじゃないだろう。先生がデータを取りまとめて、行政に動いてもらうことができるようになれば、うちだけが獅子奮迅することもないわけだし。それまで単身赴任ってのも悪くないね」
相談のうえ、律子らは敏夫を呼んで、その件を伝えた。敏夫は一瞬、目を丸くし、狼狽したように全員の顔を見つめた。
「おいおい。うちを破産させる気か?」敏夫は例によって憎まれ口を叩いた。「それでなくても、規定外の検査が多くて持ち出しなんだ。住居費と手当で破産確定だ」
そう言ったが、表情を見れば、それが本音でないことは明らかだった。
「それもサッパリして、いいかもしれませんよお」
雪の言に、敏夫は破顔する。
「だが、下山さんは困る。おれが奥さんに絞め殺されちまう」
「じゃあ、絞め殺される覚悟ができたらでいいです。手が必要になったら、そう言ってください」
下山が微笑んで、敏夫は笑い、そして軽く頭を下げた。
「――ありがとう」

2

翌日、敏夫は一本の電話に叩き起こされた。下外場に住む前田巌(いわお)の訃報(ふほう)を伝える電話だった。家族が声をかけても目を覚まさない、という。息をしていないように思われる、もしかしたら死んでいるのかも。すぐに行く、と答えたものの、この日まで敏夫は前田家に往診に行ったことがなかった。あまり医者に縁のない家なのだろう、とにかく電話で道順を聞いた。

出かける準備をしていると、母親の孝江が起き出してきた。

「またなの?」

孝江でさえ、早朝の電話は訃報だと理解していた。理解せざるを得ないほどの死者が続いている。

「そのようだ」と、敏夫は答えた。

「一体、何がどうなってるの?」

孝江の声は切迫した調子を孕(はら)んでいる。敏夫は母親の、怒りとも不安ともつかないものに歪(ゆが)んだ顔を見返した。

「あなたがそうやって出かけていくのは何度目? 村で何が起こってるの。どうしてこ

んなに次々と」
　さあ、と素っ気なく答えて母屋を出ようとした敏夫の腕を、孝江は摑んだ。
「まさか、伝染病じゃないでしょうね」
　敏夫は驚いて孝江を振り返った。――そう、ここまでくれば、それを疑わないほうがおかしい。
「……分からない」
「分からないって。これだけ人死にが続いているのよ？」
「伝染病のように見えるのは否定しない。だが、検査しても陽性反応が出てこないんだ。検査結果からすると伝染病じゃない。だから分からない、としか言えない」
「でも伝染しているのね？」
「ここだけの話だが、たぶん」
　孝江は敏夫の手から白衣を引ったくった。
「行くことはないわ。救急車を呼ぶように言いなさい」
「母さん」
「伝染するんでしょう？　しかも正体が分からないってことは、予防できないってことじゃないの。あなた、そうやって人が死ぬたびに駆けつけてる自分が、いちばん危険な場所にいるってことを分かってるの」

敏夫は息をついて、軽く孝江の肩を叩いた。
「充分気をつけてるよ。――呼ばれた以上、行かないわけにはいかないんだ」
「あなたでなくてもいいでしょう」
「村の外の連中は、まだこれに気づいてない。うかつに警告もできないし、だから簡単に外の医者に任せるわけにはには」
「冗談じゃありませんよ！　どうしてあなたが、そんな危険なことをしなきゃならないの。万一のことがあったらどうするの」
「しかし」
「あなたは一人息子なんですよ、分かってるの。あなたが死んだら病院をどうするの。まだ跡継ぎもいないのよ。恭子さんはろくに家に寄りつきもしないし――」
敏夫は息を吐いた。孝江の手からそっと白衣を取り戻す。
「いざとなったら、親戚筋から出来のいいのを養子にすりゃいいだろう」言って、敏夫は笑う。「そうでなきゃ、母さんが再婚するってのはどうだい」
「敏夫！」
「……行ってくる」
敏夫は踵を返して、小走りに病院に向かった。鞄を提げて車に乗り込む。もう六時になろうとしていたが、周囲はほの暗い。夜が長くなった。

あれが孝江にとって「息子の身を案じる」ということなのだ、と車を出しながら思う。別に息子を家を残すための道具だとみなしているわけではない。孝江にとって、自分と家は不可分のものなのだ。孝江は尾崎の一部であり、尾崎は孝江の拠って立つ場所だ。自分を一部として呑み込んだ尾崎を、息子に引き継がせる。孝江にすれば、この世で最も価値あるものを自分ごと息子に託そうとしているのだし、息子だからこそ、譲り渡してもいいと思っている。敏夫を後継者として受容することで、敏夫にも尾崎の存続に参与するという誉れを分け与えているのだし、これは孝江にとって愛情の発露に他ならない。

孝江の不幸は、息子が同じ価値観を共有していない、ということだった。敏夫は尾崎に執着がない。むしろ自分を戒める枷のように感じてきた。尾崎など絶えてしまえばいい、と呪ってみるほど敏夫はもう子供ではないが、絶えるなら絶えても構わないとは思っている。少なくともそれを防ぐために積極的に何かをしようとは思えなかった。

それでも敏夫が村に戻ってきたのは、尾崎のためではなく、尾崎を頼りにしている村人のためだ。彼らを落胆させたくなかった。政治的な思案に汲々としながら大学に残るより、患者に必要とされ感謝される生活を自分のために選んだ。

——ぼくらは家を残すための道具じゃない。

そう、山寺の跡取りは言った。まだ進路に迷う子供だった頃のことだ。

――自由意思のある一人の人間だ。だから、自分の望むように生きる権利がある、と思う。

家族ばかりでなく、村人もまた敏夫にも静信にも家を継ぐよう期待している。けれどもそれを負う義務を、敏夫も静信も持たない。自分の未来は、自分の自由意思で決めていいはずだ。だが、他者の期待に背くためにあえて別の未来を選択することを、果たして本当に自由意思というのだろうか、と静信は言った。

村の者が敏夫や静信に期待を抱くのは当然のことだ。誰もが医者にいてほしいのだし、住職にいてほしいのだ。たしかに医者も寺も、あるに越したことはない。不要なものというのならともかく、それは明らかに必要なもので、その存続は自分の意思ひとつに委ねられている。――結果、敏夫は村に医者を残す道を選んだ。

山の中に孤立した村、日本の同じような村々と同様に若者は流出し、年寄りばかりが残っている。彼らには医者が必要だった。だから自分がそれになった。自己犠牲ではない。他者に必要とされ、感謝される人生を選んだのだ。

（なのに、おれは何もできてない……）

敏夫はステアリングを握りしめる。夏以来、勢いをつけて増え続ける死者、これだけの人間が死んで、孝江ですら怪しむほどの異常事態に至っても、未だに解決の方策が見えない。患者は増え続けている。依然として致死率は百パーセント、死に至る機序さえ

把握できない。
暗澹たる気分で前田家に着いた。明かりの点いた典型的な農家の玄関には、中年の女が待ちわびるようにして立っていた。家の地所に車を入れると駆け寄ってくる。
「先生、済みません」
「あんたは」
ぺこりと頭を下げたのは、前田元子だった。夏の最中、子供が車に撥ねられて駆けつけてきたあの母親。
「いつぞやは……どうも」
元子は、恥じ入るように言って頭を下げた。
「お久しぶり。茂樹くんは、あのあとどうでしたか」
「おかげさまで特に何事もありませんで。本当に、あのせつは失礼しました」
前田茂樹が担ぎ込まれてきたのは、七月のことだったか。もう、はるか以前のことに思えた。もう十月だから、丸二月以上が経過したことになる。
「大事なくて良かった」
元子に促されて家の中に入ると、玄関先に中年の男が一人、途方に暮れたように佇んでいた。元子の夫だろう。
「容態がおかしいのはお舅さん？」

はい、と元子は頷いて奥へと案内する。茶の間を通り抜けた六畳に、二組の布団が敷かれ、その一方の枕許に老女が坐り込んでいた。
「ああ——先生、息が……お祖父さんの」
両手をついて振り返ったのが元子の姑だろう。敏夫は頷き、枕許に坐る。横たわったのは六十過ぎの男だった。すでに死相が現れている。敏夫はとりあえず脈を取る。触知なし、血圧もゼロ、瞳孔も散大。
「……亡くなってます」
わっと妻女が泣き崩れた。それを見つめ、敏夫は顔を覆った元子に目を移す。
「具合が悪かったんですか」
はい、と元子は頷いた。
元子が舅である巌の異変に気づいたのは三日ほど前のことだった。どうも怠そうで、食欲も落ちた。顔色も悪いように思われた。ずっと以前に、班を通してチラシが配られたことがある。元子はその内容を覚えていたし、だから巌も貧血ではないかと思ったのだった。チラシでは医者に行くよう勧めていた。だから元子も、病院に行ってはどうかと巌に勧めた。だが、「嫌だ」と巌は言った。
巌は壮健で、六十を過ぎるこの歳まで病気ひとつしたことがないのが自慢だった。そのせいか、他人が寝付いても何か不始末でもしでかしたかのように言って責める性癖が

あった。実際のところ、特に持病もなく、風邪や腹痛で寝付いたこともない。毎日、元気に山や田圃に出て行く。その巌が傍目にも怠そうだったから、元子は気になってたまらなかったのだが、巌はそれが気に入らなかったようだった。医者にかかる必要などない、と言い張る。

「わしは別にどこも悪くない」

これに同意したのは、姑の登美子だった。

「そうよ。お祖父さんは丈夫な質なんだから。だいたいあんたは心配のしすぎ。すぐに大騒ぎするんだから」

「でも……」

登美子は声を荒げた。

「そりゃ、お祖父さんも人の子だから、ちょっとばかり具合の悪いこともありますよ。でも、そんなのは山に入って汗を流せば治るもんよ。病気をするのはね、不摂生をするからよ。お祖父さんなんて、未だにちゃんと働いてて、朝だって早いし、夜更かしだってしないし。お酒も飲まなきゃ煙草も吸わない。それでどこがどう悪くなるって言うの」

「ええ……でも……」

「うるさい」と、巌は露骨に機嫌が悪かった。「今日は早目に寝る。それで治る」

それ以上は強くも勧められず、元子は口を噤（つぐ）んだが、やはり気になって仕方がなかった。巌は健康なだけでなく、意気盛んな老人で、機嫌を悪くすると口やかましい。それが必要最低限、それだけで口を噤んでしまったのがらしくなかったし、機嫌を損ねると元子などは身が竦（すく）むほど怖いものなのに、怖いと思わせるほどの覇気がなかった。そして、その翌日も治ったようには見えなかった。依然として巌も登美子も、何でもないの一点張りだったが、元子は不安でたまらず、おろおろと口を挟んでは二人を怒らせた。

そもそも巌も登美子も、元子が小心なのが気に入らないのだ。心配性で怖がりなのは、巌らにとって弱いことと同義で、弱いことは良くないことなのだった。はっきりものを言わない、何かと言うと口ごもる、心配をしすぎる、すぐに胃痛や頭痛を起こす、と舅姑（しゅうとしゅうとめ）は元子を責める。元子がそんなふうだから、孫まで神経質だ、と元子は叱（しか）られてばかりだ。自分は実際、気弱すぎるという自覚があったので、元子も懸命に気に病むまい、くよくよすまいとするのだが、舅や姑の及第点には至らないようだった。

「どんなふうに具合が悪かったんだい？」

敏夫に訊（き）かれ、元子は感じたところを述べた。敏夫は溜息（ためいき）をつく。

「医者には？」

「いえ……お祖父ちゃんが、寝てれば治るって言うものですから……」

弾（はじ）かれたように登美子が顔を上げた。

「そうよ。本当に、一度だって寝込んだことはなかったんだから。そりゃあ、丈夫な人で、不養生だってしなかったし」
そう、とだけ敏夫は言った。
「急性心不全だろうね。それ以上、詳しいことは病理解剖してみないと分からない」
「解剖……」元子は血の気が引くのを感じた。「あの、お祖父ちゃん、解剖されちゃうんですか?」
「冗談じゃありませんよ」登美子は泣きながら声を荒げる。「お祖父さんを切り刻むなんてとんでもない」
「医者にかかってないからね。本来的には、最後に診てから二十四時間以内に死んだんでないと、死亡診断書は出せないんだよ」
登美子は敏夫をねめつけた。
「分かりました。——で、おいくら出せば、診断書を書いてくれるんです」
「お義母さん」
元子は声を上げ、敏夫と登美子を見比べた。
「それはどういう意味ですかね」
「そういうことなんでしょ? 出すもの出さないと、診断書も出せないっていう」
「そういうことを言ってるんじゃない」と、傍目にも敏夫が気分を害したのが分かっ

た。「あんたは旦那(だんな)が元気な人だったと言う。元気な人がどうして突然、死ぬんだい。どっか具合が悪かったんだよ。あんたはどこが悪かったのか、知りたいとは思わないのかね」
「そんなこと知ったたって、いまさら取り返しがつくもんじゃないでしょう」
「まあ、そうだな」敏夫の声には棘(とげ)が露(あら)わだった。「具合が悪いときに医者に診せなきゃ、取り返しのつけようもない」
　登美子は敏夫をねめつけ、そして元子を振り返った。
「だいたい、あんたが煩(うるさ)く言うからよ」
　元子は思わず後退(あとずさ)る。
「病院に行け行けって、常日頃から。何でもないことに大騒ぎするから。だからお祖父さんは——だから」
　登美子は言葉を見失ったように突っ伏して声を上げて泣き始めた。夫の勇(いさみ)が駆け寄って母親の背中を撫(な)でた。身を縮めた元子の肩を敏夫が叩(たた)いた。そっと部屋の外に促す。
「……気にしないほうがいい。お祖母(ばあ)ちゃんは気が立っているんだ」
「はい……」
　敏夫は溜息をつく。
「おれが責めたせいだな。申し訳ない。まあ、巌さんの健康を過信して医者に診せなか

ったのが本人にも悔いになってるんだろうな」
そうですね、と元子は呟いた。
「あの、解剖は」
「無理には勧めないよ。本音を言うと勧めたいところだけど、遺族の意向を無視するわけにもいかないんでね。ただ、本当に原因不明じゃ診断書は書けないんだ、本来はね」
「はい……申し訳ありません」
「せめて採血させてもらっていいかね。最低限の資料がほしいんだ。そうでないと、こっちも問題になることがあるんで」
「はい、でも」と、元子は六畳のほうを見た。果たして登美子がうんと言うだろうか。
「死後の処置をするんで、ちょっとお義母さんたちに席を外してもらう。そのときに、どうだろうね」
元子は不安に思いながらも頷いた。敏夫は礼を言い、六畳に戻る。登美子に説明をして、席を外させた。新しい着替えを持ってきなさい、と言われ、元子はそれを捜しに行く。
「おかあさん、何かあったの？」
二階に上がると、茂樹と志保梨が不安そうに部屋から顔を覗かせた。
「ちょっとね」と、元子は言い、寝ているように言う。「お客さんが来ているから、部

屋から出ちゃ駄目よ」
　頷いた二人を見守り、元子は胃のあたりを押さえた。
　ちゃんと言うべきだったろうか。お祖父ちゃんが死んだのだ、と。だが、突然の死をどう伝えていいのか分からない。下手な伝え方をして心の傷になるようなことがあったら、と元子は竦む。——心配しすぎる、という義父母の言いようは不当ではない。実際に元子も自分はいろんなことを考えすぎる、と思う。こうやって迷って、とりあえず嘘(うそ)をついたことが、二人を余計に傷つけるのかもしれない。結局のところ、誰かに相談して、こうしろ、と言ってもらえなければ何をする踏ん切りもつけられないのだった。
　重い息を吐いて、元子は納戸(なんど)に入った。経帷子(きょうかたびら)を着せて納棺するまで、普通は寝間着か浴衣(ゆかた)、でなければ着物を着せておくのが慣わしだった。登美子は浴衣を、と言っていたから、浴衣でいいのだろう。簞笥(たんす)を探り、できるだけ綺麗(きれい)なものを探し出す。
（とうとう、うちでもお葬式だわ……）
　元子は何気なく、そう思った。山入で老人たちが死んだのは夏のことだった。その前後にも葬式があった。友人の加奈美の知り合い——正確には加奈美の母親と仲の良かった誰かが死んだらしい。加奈美の「ちぐさ」では、夏以来、死に事が続く、今年は葬式が多い、という話題が出ていた。実際、元子も「ちぐさ」で頻繁にどこそこで葬式だという話を聞いたし、実際に葬儀を出している景色も見かけたことがある。今年は変だ、

と誰もが言う。そのたびに元子は「そうね」とだけ答えてきた。人死にが多いのは事実だ。——少なくとも、死んだという話が多かったのは事実。

(でも……)

元子はふいに鳥肌が立つのを感じた。話のうえだけだったものが、自分の身の周りで事実になった。これが死というものだ。それが続いていた、夏以来。

元子は背後を振り返る。不安そうに頷いた二人の子供たち。

(余所者が来た……)

元子は頭を振る。それと巌の死はなんの関係もない。巌は事故で死んだわけではない。

(村に……余所者が……)

関係ない。だから、元子の子供を奪っていく者などいないはずだ。

——国道にさえ行かなければ大丈夫。

元子は自分に強く言い聞かせた。

3

「ちょっと、タツさん、聞いた?」

タケムラの店先に、大塚弥栄子が駆け込んできた。

「前田の巌さんが死んだんだって」
へえ、と声を上げたのは佐藤笈太郎だった。
「あのとっつぁんが。あのくらい元気な人もいないと思ってたのになあ」
「……いつだい、それ」
タツが訊くと、弥栄子は今朝、と答えた。
「朝、登美子さんが起きたら、隣で冷たくなってたんだってさ。びっくりするじゃない、ねえ?」
「何かしらねえ」と、大川浪江が渋面を作った。「どうしてこんなに人が死ぬのかしらね、今年は。うちの松村さんとこの娘もさ、こないだ死んだのよ。富雄が葬式、采配してねえ」
「あらまあ」と、弥栄子は頷く。「うちもよ。大塚製材の息子が死んだからさ」
変ね、と言ったのは広沢武子だった。
「なんだかさ、変じゃない。こんなに人が死ぬなんて。夏以来でしょ。ほら、山入で人が死んでさ、もう五人」
「五人」と、笈太郎が目をぱちくりさせた。「そんなにいるもんかい」
「いるよ」と、武子は憤慨した。「山入で三人だろ、でもって大塚の息子と、松村の娘なんじゃないの。五人じゃない」

弥栄子が手を振った。
「だから、巌さんが死んだんだってば。六人よ、だから」言ってから、弥栄子は首を傾げた。「あれ？　違うわ、つい最近もこんな話をしたわよねえ」
ああ、と笈太郎が手を叩いた。
「中埜の息子だよ。そう言えば死んだんだった」
「あら」と、大川浪江は指を折る。「じゃあ、七人？」
「待ちなよ、まだいるよ。ほら、清水の娘が死んだじゃないか。でもって、大川だよ。浪江さん、あんたんとこは縁続きじゃないのかい。大川の茂くんが死んだんだ」
「そうだわ」と、浪江は狐につままれたような顔をした。「じゃあ何？　九人？」
「そんな馬鹿な」武子は口の中で唱えながら、指を折っていった。「七で、八、九……あら、本当に九人だわ」
タツは息を呑んだ。ぞわりと、鳩尾のあたりで悪寒がした。
あ、と老人たちは声を上げる。それぞれが呆気にとられた顔をした。タツはそれを見やり、さらに心の中で唱える。それだけじゃない、葬式で村を出入りする車を何度も見た。安森工務店でも葬式があったし、たしか丸安の製材所でも死人が出ている。誰とは分からないけれども、それとは別に最低でももう二、三軒。——この数は異常だ。
「駐在を忘れてるよ」

「こりゃあ、郁美さんじゃないけど、変だよ。絶対にどうかしてる」
笠太郎は猫のように顔を拭った。
「変ったって……」武子は周囲の顔色を窺うようにした。「だって、別に事故ってわけじゃなし。みんな病気で死んでんだろ？」
「まさか、伝染病じゃないだろうね」
笠太郎が言うと、浪江が手を振る。
「そりゃあ、ないわよ。伝染病だったら役場から色々言われるもの。ほら、隔離したりさ。たしか、伝染病だと土葬にできないのよ。昔、お父さんから聞いたことがあるわ」
「でも、そうでなくて、どうしてこれだけの人間が死ぬんだい？　それも三月――いや、実質、八月と九月、二月の間だよ」
「でも、伝染病はないわよ」
恐る恐る、というふうに声を上げたのは弥栄子だった。
「まさか本当に、何かの祟りなんじゃ」
「祟りって、何の」
「何だか分からないけど。……ああ、ほら、あちこちの庚申さまが壊れてたことがあったじゃない。たしか、神社の弘法さまも壊されて。あれの祟りとか……」
「馬鹿馬鹿しい」武子は鼻で笑った。「あんた、郁美さんに感化されてんじゃないの？

そうでなきゃ、大塚製材の感化よ」
「違うわよ。そりゃ、あたしだって馬鹿馬鹿しいとは思うけど、だって妙じゃない」
「およしよ」と、タツは口を挟んだ。店の前の村道を、郁美がやって来るのが見えた。
タツの視線を追って、年寄りたちがいっせいに口を噤む。
「あら、郁美さん、お久しぶり」弥栄子が取ってつけたような明るい声を出した。郁美は笑い、そして店を通り過ぎようとする。「あら、郁美さん、寄ってかないの」
郁美は足を止めた。
「ちょっとね。忙しいのよ、あたしもね」
「どうしたんだい」笈太郎は瞬いて、そうだ、と声を上げる。「あんた聞いたかい。前田の巌さんが死んだってさ」
そう、と郁美は笑った。これ見よがしに溜息をつく。
「こうなることは分かってたけど、可哀想(かわいそう)にねえ。じゃあ、ちょっと寄ってみないといけないかしら。大変だわ、本当に忙しくて」
タツは眉(まゆ)を顰(ひそ)めた。
「あんた、葬式の出た家に行って、祟りだ何だと言ってんのかい」
「あら。だって教えてあげないとね、やっぱり。あとあと続いたら困るでしょう。一人死ぬと、家族を引いていくことがあるから」

「御苦労なことだね」
タツは皮肉を含ませて言ったが、郁美は機嫌良く笑った。
「感謝されてるのよ。そりゃあ、ものの分からない人もいるけど、世の中、道理の分からない人ばっかりじゃないから。最近、ちょくちょくお祓いしてくれって人が来てさ」
おやまあ、と武子が目を剝いた。
「家の方角はどうだろうとか、相談されちゃってね。これも人助けだから、あたしも気持ち良く相談に乗ってあげるんだけど」
タツは、素っ気なく頷いた。そうか、と思う。それで郁美は上機嫌なわけだ。
郁美は満面に笑みを湛えて老人たちを見渡した。
「知らない仲じゃないんだから、何かあったらみんなも言ってちょうだい。特に弥栄子さんと浪江さんね。縁続きで人死にがあったでしょう。気をつけなさいよ」

4

田茂定市が寺務所に顔を出したとき、静信は法事がひとつ終わって一息ついたところだった。寺務所には静信だけだった。光男は例によって雑用で奔走しているし、鶴見らは法事のために駆けまわっている。夏以来の死者のための法事が、積もり積もって寺を

忙殺し始めていた。
「若御院、聞きましたか」
何を、と静信が定市に問うと、定市は困り果てたような顔をした。
「中外場の昌治さんなんですがね」
静信は背筋を伸ばした。中外場の世話役、小池老だ。
「昌治さんに何か――？」
「いや、それが。昌治さんがどうしたわけじゃないんですが、あそこの息子一家がね、いなくなったって言うんですよ」
静信は虚を衝かれて声を上げた。
「いなくなった？」
「ええ。ゆうべね、氏子の寄り合いがあったんですよ。中外場の三安が越したって話は御存じですか」
「ええ、聞きました」
「三安の誠一郎さんが、中外場の村方世話役でね、その人が突然、引越しちまったもんだから、代わりを立てないといけなくてね。そろそろ霜月神楽のことも考えないとならないんで。それで、とりあえず小池の昌治さんに相談しようってんで来てもらったんですわ。――まあ、寄り合いって言っても、そういう相談だから、雑談と大差なくてね。

例によってみんなで夜中まで飲んで、くだ巻いてたんですけど、それで昌治さんが帰ったら、家の者がいなかった、って話なんですよ」
　そんな、と静信は呟いた。
「昌治さん、驚いてうちに連絡してきてね。一体どうしたんだろうって心配してたんですけど、そしたら今朝になって——ついさっきですわ。近所の者が、昌治さんの留守中に例の高砂運送、あれが来てたって教えてくれたらしいんですよ」
「越したんですか？　昌治さんを置いて？　なんの相談もなく？」
　そうなんですよ、と定市は頭を抱えた。
「わたしも呆れるというか——どうなってるんですかね、近頃の村は」
　定市は顔を上げ、静信の顔を覗き込んだ。
「若御院、何か聞いてないですか、尾崎の若先生から」
　静信は定市の縋るような顔を見返した。
「流行り病だって噂があるんですけどね」
「流行り——病」
「夏からね、多いでしょう、死人が。悪い病気でも流行ってるんじゃないか、ってみんな言ってはいたんですけどね、半分は冗談みたいなもんだったんですよ。けれどもね、ついー昨々日も、竹村の美智夫くんが死んだでしょう。こいつはおかしいんじゃないか、

本当に伝染病なんじゃないかって」
まさか、と静信は答えようとして答えられなかった。わずかに首を横に振った。
「若御院、どうなんです？　なんでも若御院は方々に出向いて、色々と話を聞いているって話じゃないですか。それは——」
「定市さん」静信は先を制した。「ぼくには答えられません。どうしても気になるのでしたら、敏夫に直接、訊いてください」
定市は押し黙って、静信の顔をまじまじと見つめた。
「……近々、区長会議を召集させてもらってもよろしいですかね」
「その前に、三役だけで」
静信が言うと、定市は頷いた。黙って頭を抱え、深い溜息を落とした。

静信は定市を見送ると、光男に留守居を頼み、寺を出た。まっすぐに中外場に向かい、小池老を訪ねる。小池老は広い家の中にぽつりと坐り、虚脱したように背を丸めていた。
「小池さん」
縁側から声をかけた静信に気づくと、小池は、ことりと会釈をする。何のために静信が来たのか、分かっている様子だった。
「あの——定市さんから話を聞いて」

「とにかく上がんなさい」
静信は一礼し、茶の間へと上がり込む。小池は坐るよう、視線で示しただけで、やはり力が抜けたように身動きをしなかった。
「息子さん一家がいなくなったとか」
小池は深く頷く。
「まったく……何を考えてたんだか」
「本当に出て行ってしまったんですか」
「らしいな。近所の者が、荷物をトラックに積み込むところを見ててね」
「保雄さんは何か言い残していかなかったんですか?」
小池は首を横に振った。
「伝言もなけりゃ、書き置きもない。さっき勤め先に連絡したら、三日も前に辞めてやがった」
辞めた、と静信は口の中で復唱した。小池の息子、保雄はたしか、溝辺町のＮＴＴに勤めていたはずだ。
「辞める理由は何も言ってなかったらしくてね。呆れた話だよ。息子がねえ、わしに黙って仕事辞めて一家連れて出て行ったってんだから、情けないやら悔しいやら」
言って、小池は掌の付け根で目許を押さえるようにした。

「あの……事前に何か、それらしいことを言ってなかったんですか。失礼ですが、何か諍いがあったとか」
何も、と小池は投げ出すように言う。
「ゆうべ帰ったら、家が真っ暗でね。全員が全員、寝るような時間じゃないし、近頃は孫が育っ張りでね。それで、何事かあったんだと思ったんだわ。孫が具合でも悪くなったんだろうかって」
小池は自嘲するように口許を歪めた。
「下の子のほうがね、一昨日から具合が悪かったもんで。立ち眩みってのかな、風呂上がりに坐り込んでね。それで寝かせてあったんだ」
静信は、どきりとして小池の震える口許を見つめた。
「保雄もぼうっとしたふうだったし、嫁もなんだか気分が優れないふうでさ。おまけに孫はその有様で、上の子もなんだか青い顔してしてね、それで一家揃って風邪でも引き込んだのかと思ってたんだわ。……そしたら、なんのことはない、あいつら、胸に納めたことがあって、黙り込んでただけなんだ。さすがにわしに後ろめたかったのか、含むとこがあったのか」
「……小池さん」
小池は何の意味でか、首を横に振った。

「そんなこととは思わねえで、家の明かりが消えてるのを見て、下の子が具合悪くて病院にでも連れて行ったのかと思ってね。肝を冷やしたら、出て行ったたって」

「待ってください、小池さん」

静信は小池に躙（にじ）り寄った。

「具合が悪かったんですか？　下の子——郁生（いくお）くんですよね、たしか」

「ええ」

「郁生くん、どんな具合だったんですか。熱はありましたか？」

いや、と小池は落ちくぼんだ目を瞬かせる。

「熱があるふうじゃなかったなあ。脳貧血ってやつ、あれだろうって言ってたんで。もともと瘦（や）せた子で、貧血ぎみで低血圧っててんですか、それでね。顔色は紙みたいに真っ白でしたけど、熱はなかった」

「頭痛とか、吐き気とかは」

「いや。別にそういうことは言ってませんでした」

「それが一昨日ですか？」

「はあ」

「保雄さんはどうです。他の人は？　似たような感じですか」

「上の子は似たような感じだったなあ。ぼうっとしたふうで。——いや、ぼうっとして

たのは保雄か。怠そうというか、眠そうというか。妙な目つきで……こいつ酔っぱらってるのかなと」
「ちょっと待ってください。それは誰の話です？　上の——董子ちゃん？　それとも保雄さん？」
ええと、と小池は呻いた。
「分からない……わしは」
「ひょっとして、みなさん似たような状態だったんですか？」
静信が言うと、小池はぽかんとしたように静信を見返してから、そうか、と呟いた。
「そうです——そうだ。たしかに、みんな似た按配だったんです。どうもぼうっとしたふうでね、何て言うんですか、口を利くのも億劫なふうで。顔色が悪くて、なんか目ばっかりぎらぎらしててね。妙に据わってるんですよ、目が。そのくせあらぬところを見てる感じで——」
「憑かれたような……？」
「そうですわ、それ」
「それが一昨日から？」
「一昨日——なのか。その前の日だったのか。けれどもそのくらいです」
「保雄さんが仕事を辞めたのと、同じ頃ですよね？」

「ええ、そうです。そういう計算になりますわな」
　まさか、と静信は思った。ひょっとしたら、一家は発症していたのではないのか。それはあまりに、例の病気の前駆症状に似ている。そして突然、仕事を辞め、そして転居した。仕事を辞めたところまでは清水隆司らと同様だ。そのあとが違うだけで――。
「保雄さん一家は、最近どこかに出かけませんでしたか。村の外じゃなくても、村の中でもいい。たとえば山に入ったとか、山入に行ったとか」
　小池は首を傾げた。
「いや、別に……」
「では、誰かを訪ねたとか、訪ねてきた人がいるとか、そういうことは？」
「それも別にないと思うけどね」言ってから、小池は思い出したように、「そう言えば、嫁が兼正の住人に会ったとか言ってましたた」
　静信は眉を顰めた。
「桐敷さん――ですか」
「はあ。夜に、近所に回覧板持って出かけて、その帰り道に桐敷の旦那に会ったとかで。それでちょっと立ち話をしたとか言ってましたが。今度、遊びに来てくださいよ、って言ったら、奥さんと娘を連れてくるって。あそこの娘、うちの下の孫と同い年くらいだそうで。そう言ってたらしいですけど、それきり別に来たって話は聞いてねえなあ」

「そうですか……」

何か事件はなかったか、それこそ虫に咬まれたとか、その程度のことでもいい、そう言ったのだが、小池は特にこれと言うことを思い出せなかったようだった。ともかくも慰め、静信は小池の家を辞去する。帰り道、尾崎医院の前を通ったので車を停めた。

これを敏夫に伝えておくべきかどうか——静信は少し迷った。敏夫は疲れているのだ。重大な事態を前に焦っているし、精神的なプレッシャーに喘いでいる。実際のところ、静信が転居者に時間を割くのは、敏夫にしたら時間の浪費以外のものには見えないだろう。気持ちは分かる。その苛立ちも、無力感も。だから寄って、わざわざ小池老の話を伝えることは躊躇われた。

だが、一家は発症していた可能性がある。静信では見極めがつかないが、敏夫が直接小池老から話を聞けば、見極めがつくかもしれない。どうしようか迷い、結局、静信は車を降りて病院の裏手に向かった。

この日は日曜だったが、玄関は開いていた。開けるようにした、という話を、静信は敏夫から電話で聞いている。それで控え室を覗き込んだが、敏夫の姿はなかった。診察中なのだろう。声をかけようかどうしようか悩み、とりあえず勝手に控え室に上がり込んでメモを書いて残した。どうするかは——敏夫が決めるだろう。

敏夫は昼休みに控え室に戻ってそのメモを見た。小池老の一家が転居したこと、保雄が無断で辞職していたこと、その頃から一家の具合が悪かったこと、話を聞く限りそれは例の前駆症状に似ていること——。

良かったら、小池に話を聞いてみてくれ、と静信は結んであったが、敏夫はそのメモを投げ出した。具合が悪かった、という言葉は気になるが、転居者にかまけている暇はない。今日も朝から叩き起こされて、全身が泥のように疲れていた。

気にならないわけではない。だが、それは静信の言い訳に見えた。無理にも疫病と転居を結びつけて、自分の行動を正当化しようとしているように。

今でなくてもいい。——敏夫はそう思い、ソファに身体を投げ出し、目を閉じた。

5

村迫宗貴は精米の機械を止めて倉庫を出た。宗貴の家は、村に一軒だけの米穀店だった。そもそもは格別良いということもないが、悪いということもない商売だが、近年になって米の流通が様変わりした。店もそれに合わせて変えていかざるを得ない。溝辺町の同業者の配達区域が拡大したせいもあって、最近では日曜だからと言って休んではいられなかった。

とは言え、父親の宗秀はまだまだ元気だし、妻の智寿子も嫌がらずに店を切りまわしてくれる。年中無休で店を開ける、と決めたときには不安だったが、やってみるとさほどの困難はなかった。まだ手のかかる子供が二人いて、智寿子は家事をしながらだから大変だろうが、これに関しては不平を言ったことがなかった。そんな智寿子に感謝してか、それとも単に孫が可愛いからか、宗秀も気を遣って、何かと言うと自分が留守番をするから子供を遊びに連れて行ってやれ、と言ってくれた。

倉庫から店に戻ると、その智寿子が、待ちかねたように奥から転がり出てきた。

「あなた――博巳の様子が変なの」

宗貴は手袋を脱ぎながら、智寿子の顔を見る。

「変って」

「ぐったりとして元気がないの。でも、熱もないし、下痢もしてないようだし」

ふうん、と宗貴は呟いた。そう言えば昼食のとき、いつになく博巳がおとなしかったような気がする。

「博巳は何て言ってるんだ?」

「何も」智寿子は首を振った。「どこか具合が悪いんじゃないの、って訊いてもきょとんとしてるし」

「風邪かな」

宗貴の言葉に、智寿子は低く呟いた。
「また正雄くんに何かされたんじゃないかしら」
「智寿子」
宗貴は咎める調子だ。智寿子はキッと顔を上げた。
「あなたはいつもそうやって庇うけど、正雄くんが博巳を苛めてるのはたしかなのよ。妙な痣をこしらえてるのだって、しょっちゅうなんだから。博巳を脅して口止めしてるの。でも、智香だってそう言ってるし、博巳だって否定しないわ」
宗貴は溜息をついた。
「しかしな……」
「正雄くんは博巳が気に入らないの。智香もよ。お祖父ちゃんが、博巳や智香のほうに興味を示すのが我慢できないのよ」
「親父は充分以上に正雄を可愛がってるよ」
「正雄くんにとっては、それじゃ不充分だってことでしょ。初孫が出来るまでは、お祖父ちゃんの興味を独占してきたんだもの」
宗貴は半信半疑の様子だ。宗貴はいつも、父親の宗秀は正雄に甘い、と言うが、宗貴だって甘いと思う。もう子供ではないのに、まだまだ庇護を必要としている子供のように正雄を扱う。

そもそも、と智寿子は唇を噛んだ。正直なところ、智寿子と正雄は折り合いが悪い。それは智寿子自身も自覚していることだ。

智寿子は宗貴の明るい屈託のない為人に惹かれて結婚した。その智寿子の目から見ると、正雄は暗く、屈折が多すぎる。常に人を上目遣いで見る、そのくせ決して視線を合わせようとしない。隙を窺うような目つきで見て、人を試すような振る舞いをするし、絡む。

——義姉さんは、兄さんのどこがいいの。

結婚することが決まって、何度目かに会ったとき、正雄にそう訊かれた。明るい屈託のないところ、人望のあるところだ、と答えると、正雄は卑屈な笑みを浮かべた。

——じゃあ、おれみたいなのは、嫌いだろうね。同居なんて我慢できないんじゃないかな。

そんなことはないわ、と智寿子が否定するのを待ち構えている顔だった。好きよ、という言葉を待っている。さりげなく、そう言わなければ同居に差し障りがあるぞと恐喝しながら、正雄は褒め言葉を強請り取ろうとしているように見えた。

——まだ分からないわ。正雄くんをよく知っているわけじゃないし。

——きっと嫌いになるよ。おれ、兄さんほど出来が良くないし。

そのようね、と答えたいのを我慢して、自分が何と答えたのか、智寿子は覚えていな

い。覚えているのは、その時以来、正雄のことが嫌いになった、ということだけだ。智寿子はそもそも、義弟が気に入らなかった。夏場や風呂上がりに妙な目で智寿子を見ているのも気味が悪い。何度か、しげしげと干した下着を見ている姿を見かけ、以来、自分の下着は正雄が学校に行っている隙に始末するようになった。
「ねえ、病院に連れて行ったほうがいいんじゃないかしら」
「そうだな」と、宗貴は困ったふうに笑った。「様子を見て、本当に具合が悪いようなら、連れて行ったほうがいいかもな」
「そんなんじゃ駄目。すぐに行かないと。どこか調子が悪いのよ。もしもそれが頭を打つかどうかしたせいだったら？」
おいおい、と宗貴は目を丸くした。
「考えすぎだよ」
智寿子は頭を振る。
「怖いの。このところ、あちこちでお葬式が続いているでしょう？　気のせいかもしれないけど、それですごく不安なのよ」
「まあ、葬式はたしかに多いかな」宗貴は表情を曇らせた。「だからって博巳は関係ないだろう？　そんなふうには考えられない？」
智寿子が再度、首を振ると、宗貴はよし、と声を上げた。

「じゃあ、明日いちばんに――」
「今からじゃ駄目？　尾崎医院、近頃は日曜日にも開けているのよ」
「へえ。――まだ間に合うな。今から連れて行くよ。何でもなければ、智寿子も安心できるしな」
「ありがとう」
智寿子は智香を隣に預けると、元気のない博巳を急かして服を着替えさせた。博巳の手を引き、宗貴の車に乗り込もうとしたところに正雄が帰ってきた。
「へえ、出かけるんだ」
「博巳の具合が悪いんだ。ちょっと病院に連れて行ってくる」
宗貴が言うと、正雄は薄笑いを浮かべて博巳を見る。
「兄貴も博巳には甘いなあ。おれが風邪引いても、寝てりゃ治るって言うくせにさ」
宗貴は正雄を無視して車に乗り込んだ。
「大事にされてて良かったなあ、博巳」
正雄が後部座席を覗き込んできて、思わず智寿子は正雄を睨んだ。正雄は何か言いたそうにしたが、車が動き出したので結局、口を噤んだ。
尾崎医院は、平日ほどでもない混み具合だった。たいして待たされることなく診察室

に入り、問診を受ける。智寿子は「ひょっとしたら頭でも打ったのじゃないかと思って」と敏夫に懸念を伝えた。
「頭を打った？　どういう状況で？」
「いえ、そういうこともあったかもしれないって——。この子、不器用で始終転んだり、階段から落ちたりしてるものですから」
そう、と敏夫は答えただけだったが、どこか気遣わしげな表情だった。検査には時間がかかった。異常に丁寧なように、智寿子には思われた。
「頭部に異常はないいな」
敏夫が言ったとき、もう患者は他に残っていなかった。宗貴と智寿子、博巳の三人だけが取り残されていた。
「ただ、貧血が出てる」敏夫はまるで、それが難病の告知でもあるかのような口調で言った。「ひょっとしたら、難しい貧血かもしれないな。ちょっと経過を観察するから」
智寿子は青ざめた。宗貴も同様に顔色を変える。
「それは、たとえば白血病とか——」
「今の段階では何とも言えない。とりあえず、予約を入れておくんで明日も来てもらえるかな」
智寿子は救いを求めるように宗貴を見た。宗貴にしてみれば、智寿子の不安を取り除

いてやろうという、それだけのために博巳を連れてきたつもりだった。まさか敏夫にこんな顔をされることになるとは思わなかった。
まさか、と思う。……まさか、うちでも葬式を出すことになるのじゃないか。
「……それは、だいぶ悪いのかい」
昔馴染みの気安さで、宗貴は敏夫の顔を覗き込む。本当のところが聞きたかった。
「本当に、今の段階では何とも言えないんだよ。ただ、貧血にも色々あってさ。種類によっては、ガクッと悪くなることもあるから、目を離さないようにしたいんだよ。博巳くんはまだ小さいし」
「ああ……うん」
「トイレの回数と、尿の色には気をつけてやったほうがいいな。もしも血尿があったりしたら、夜中でもいいんで連れてきて。それ以外でも、具合が急に悪くなるようなことが——たとえば、息苦しそうにしているとかがあれば連絡して」
ああ、と答えながら、宗貴は手が震えるのを感じていた。まさか——こんなことになるなんて。
抱き上げるには大きく重くなった息子を抱えて車に戻った。後部座席に坐らせると、隣に坐った智寿子が、恐ろしいものから守ろうとするように博巳を抱き寄せた。帰途、ほんのわずかのドライブを、宗貴も智寿子も無言で通した。

家に戻ると、宗秀が不機嫌な顔で待っていた。
「こんな時間までどこに行ってたんだ」
「済みません」智寿子は詫びた。「博巳の具合が悪くって。それで病院に」
なに、と宗秀は博巳の顔を覗き込む。
「寝かせてきますね」
智寿子はそれだけを言って、博巳の手を引いて二階に上がった。宗秀は不満そうに宗貴を見る。
「それにしても、二人がかりで行くほどのことなのか。今何時だと思ってる。配達から戻っても店番がいない。夕飯の支度をしてる様子もない」
「正雄に言って出たんだけどな」
「あいつは部屋に閉じ籠もったまま出てこん。あいつだけを残して留守番の役に立つものか。――それで？　博巳は大丈夫なのか」
それが、と宗貴は口を濁した。
「ちょっと難しい病気かもしれないって。貧血らしいんだけど、貧血にも色々あるからって言ってた」
「難しい、って」
宗秀は目に見えて狼狽した。

「まだ、はっきりしたことは分からないみたいだけどね。とにかく明日も連れてこいって。具合が悪くなったら連絡してくれって、マジな顔で言われちゃってさ」
宗秀は押し黙る。
「なに、博巳、本当に具合が悪いの」
声がして、振り返ると正雄が店を覗いていた。ああ、と宗貴の声は、自然、低くなる。
へえ、と正雄は言う。
「それで義姉さん、顔色が変わってたんだ。最近、死に事も多いしさ」
「正雄、縁起でもないことを言うもんじゃない」
宗秀の叱責に、正雄は薄笑いを浮かべた。
「事実だろ。最近、葬式ばっかりだもん。うちだけは特別だなんて思わないほうがいいんじゃない？　確率ってのは個人的な心情に頓着してくれないもんだからさあ」
「正雄！」宗秀は声を荒げる。「その言い方は何だ」
正雄は怯んだ様子だったが、すぐにまた薄笑いを浮かべた。
「だって事実だろ」
「正雄」宗貴は口を挟む。「よせ。それ洒落にならねえぞ。博巳は本当に具合が悪いんだ。ひょっとしたら難しい病気かもしれない」
へえ、と正雄は呟く。

「まあ、そういうこともあるよ。死なない人間なんていないんだからさ。そこで血相を変えるのは、自分だけは、って傲ってた証拠だよ」
正雄、と宗貴が怒鳴る前に、宗秀が怒鳴った。
「お前、何だ、そのもの言いは！　お前には情ってものがないのか！」
「何だよ……」正雄は一歩退る。「ちょっと言ってみただけだろ」
「軽口のネタにできるようなことか！」
「おれが言ったんじゃない、そういうふうに言う奴もいるってだけの話で……」
「もういい」宗秀は吐き捨てるように言って、宗貴を見た。「――智香は」
「隣。預けて出たんだけど」
「連れに行ってくる」
憤然とした様子で出て行く父親を見送り、そして宗貴は正雄を振り返った。正雄はどこか傷ついた顔で、同じように父親を見送っていた。宗貴の視線に気づくと、顔を歪めて二階へ駆け戻っていった。

九章

1

武藤は目覚ましの音で目を覚ました。——十月三日、月曜日。
大きく寝返りを打って息をひとつ吐くと、家の中の賑やかな物音が耳に流れ込んでくる。慌ただしく家の中を走りまわる足音は、おそらく保のものだろう。それに向かって何かを言う葵の声が聞こえていた。静子の用意する朝食の匂いが微かに流れている。
目覚めは悪くなかった。先週から、妻の静子が事務を手伝いに来てくれるので楽だ。溜まっていた書類もこの土日、静子と十和田の手を借りて、とりあえず処理することができた。肩の荷をひとつ下ろしたような気がする。
かえして言えば、自分はそれだけ疲弊していたのだと思う。こうやって手伝ってもらうことのできる自分はいいが、誰も手伝うことのできない敏夫の疲労をいまさらながら再確認した。
(若先生は大変だ……)
それを配慮した看護婦たちが、土日にも出勤すると言い出した。昨日には村の外から

通ってきていた二人の看護婦が村に越してきて、とりあえず尾崎家の持っている貸家に納まっている。
（いい子たちだ……）
病院はスタッフに恵まれている。これで敏夫も少しは楽になるだろう。それも常日頃、敏夫がスタッフを大事にするからなのだし、そう思うことは気分が良かった。静子がパートで来てくれるから、武藤にも余力ができた。土日に付き合うくらいのことはできる。十和田も手伝うと言っているし——。
布団の中でトロトロと、そんなことを考えていると、静子の足音が寝室の前を通り過ぎていった。手伝ってくれるのはありがたいが妻も大変だな、と思う。パートに出て、その外にいつも通り家の中の用事を片付けるわけだから。そう思うのは、常々病院でやすよや清美の愚痴を聞いているからなのかもしれない。
「徹、いい加減にしなさいよ」
二階に向かって上げる静子の声が聞こえる。徹はまだ起きていないのか、と思った。二十歳にもなってまだ母親に起こされないと仕事に行けないのか、と思うと、情けないようでもあり微笑ましいようでもある。
「徹ってば。遅刻するわよ」
武藤はようやく身体を起こした。

「あんた、今日も休むの？」
階段を登っていく静子の声を聞くともなく聞きながら、そう言えば、と武藤は思った。徹は一昨日の土曜、仕事を休んだのだったか。「風邪を引いたから休むんですって」と、静子が呆れたように言っていたのを思い出した。静子は徹がサボったのだと思ったらしい口調だった。
かつん、と小さく何かが胸の中で引っかかる感じがしたが、武藤にはその理由が分からなかった。耳は聞くつもりもないのに家の中の物音を拾い、頭は吟味するつもりもないことを思い出している。
「――徹！」
静子の強い声が真上から遠く聞こえた。武藤は同時に大きく伸びをし、どうしてだか、そういう自分の暢気な振る舞いに違和感を覚えた。自分が何かそぐわないことをしているような感じ。何に対して「そぐわない」と感じるのかは自分にも分からない。
徹、と再び静子の強い声がした。金切り声のように聞こえた。おや、と思い、天井を見上げると同時に、再度、静子の悲鳴じみた声がした。
「お父さん！　お父さん！」
武藤は布団を撥ね除けて立ち上がった。急速に、良くない予感のようなものが立ち込めてくるのを感じていた。馬鹿な、と思う。悪いことなど起こるはずがない。そう思い

ながら部屋を飛び出すと、きょとんと階段のほうを窺(うかが)っている保に出会った。どうしたの、とこれまた暢気そうに葵が洗面所から顔を出す。

武藤は二階へ駆け上がり、寝室の真上にある徹の部屋に向かった。静子は部屋の入口でへたりこんでいた。

「——お父さん、徹が」

「どうした」

部屋に飛び込もうとしたが、静子がパジャマの膝(ひざ)に縋(すが)りついてきたので果たせなかった。徹の六畳間には布団が敷かれ、徹はそこに横たわっている。部屋の中は閉め切られたカーテンのせいで暗かったが、窓が細く開いているらしく、吹き込む風がカーテンを揺らし、時折、鮮明な明かりが射(さ)し込んだ。

その明かりが、一瞬、徹の寝顔を照らし出した。徹は半ば目を開いて、あらぬ方向を見ていた。

「——徹」

武藤は縋りつく静子を引き剝(は)がし、大股(おおまた)に布団へと歩み寄る。膝をつき、息子の顔を覗(のぞ)き込み、虚(うつ)ろに半ば開いている目を見て、それが微かに混濁しているのに気づいた。

あらぬ方向を見たまま動かない。それどころか、瞬(まばた)きすらしない。もう一度、名前を呼んでこちらを向かせようと息子の顔に手をかけ、指先にひやりとした皮膚の温度を拾っ

た。

体温がない。もう、冷たい。こちらを向かせようとした力以上に、あらぬほうを見たまま動こうとすまいとする徹の身体は頑だった。

「徹……おい」

まさか、と思う。こんなことがあるはずがない。何かの間違いだ。早くどこが間違っているのか気づかなければ、という気がした。早く正さなければ、取り返しがつかないことになる。

「お母さん、どうしたの？」

葵の声が聞こえた。階段を登ってくる足音。来てはいけない、と武藤は振り返った。戸口に坐り込んで同様に背後を振り返っている静子、階段を登ってくる葵、そのあとを追うように、保が何か下から言っているのが聞こえる。

（来るな）

誰も見るのじゃない。誰も知らなければ、なかったことになる、と馬鹿気た思考が浮かび、同時に危険に近づくのじゃない、という危機感のようなものが浮かんだ。

「どうしたの？」葵は怪訝そうに部屋の中を覗き込む。「お兄ちゃん、どうかしたの？」

何も、と武藤は言いたかった。何でもないから、下に行っていろ。だが、武藤は低い自分の声を聞いた。言ったという自覚はなかった。

「……病院に電話してくれ」
「え？」
「病院に電話して、若先生に来てくれと言うんだ。急いで」
「お兄ちゃん、どうしたの」
武藤は答えられなかった。葵の背後から保が怪訝そうに覗き込む。
「具合、悪いの？」葵の顔が不安に硬直するのが見て取れた。「救急車、呼ぼうか？　そのほうが」
「いいんだ。若先生を呼びなさい」
「でも」
「……お兄ちゃんは、死んでる」
静子が坐ったまま跳び上がったふうに見えた。血相を変え、そのまま這ってこようとする。葵が、保が部屋に飛び込んでこようとするのが分かった。
「とにかく電話するんだ！」
徹に近寄らせてはならない。
「ここはこのままにして、先生に来てもらうんだ。保、お母さんを下に連れて行け」
でも、と保がたたらを踏む。這ってきた静子を抱き留め、叫んで徹に縋りつこうとするのを力ずくで押し戻す。

「降りてなさい。保、連れて行くんだ」
「でも」
「いいから」
畳に爪を立てる静子を、無理矢理、部屋の外に押し出す。保に押しつけるようにして襖を閉じた。近寄らせてはならない。——隔離しなければ。
思って、武藤はその場にへたりこんだ。
例のあれだ。そうでなくてどうして、こんなにも唐突に息子が逝ってしまうわけがあるだろう。
「なんで……」
気づかなかったのだ、もっと早くに。そう、徹は土曜に仕事を休んだのだ。風邪だと言っていた。それがどれほど恐ろしい言葉だったか。だが、武藤はそれに気づかなかった。なぜだかそれは、武藤たちを避けてくれるような気がしていた。
大丈夫だと思っていたのだ。なぜなら、武藤はそれを分かっていたから。疫病に気づいていないのならともかく、武藤は疫病の存在を知っていた。だから、物陰からそれが襲いかかってくることはないのだと、なんとなくそう思い込んでいた。
「……どうして」
なぜそんな誤解をしたのだろう。なぜ分かってやれなかったのだろう。息子の危機に

気づかず、みすみす息子を死なせた。

いや、と武藤の中の理性は思う。敏夫はまだ原因も治療法も分からないと言っていた。いったん発症したら、最悪の事態になるしかないのだ。だから武藤がそれに気づこうと気づくまいと、結果が変わったわけではない。

自分にそう言い聞かせるものがあったが、到底、武藤は自分でもそれを信じることはできなかった。自分が気づけば助かったのではないかと思う。どこかの時点で、自分が誤らなければ、修正は可能だったはずだ。今からでも遅くない。何か正しい方法があるはずだ。すべてを正常に戻すための方法が何か。

だが、そんな方法など存在しないことは明らかだった。

「……済まん」

武藤は畳に突っ伏した。

「済まなかったなあ、……徹」

2

静信に武藤徹の訃報を伝えたのは、中外場の世話役である小池老だった。

「事務長さんとこの長男さんが亡くなって」

小池老は、わざわざ寺にやって来てそう言った。
「事務長――武藤さんですか？　徹くん？」
「そうだ。若御院、この村は一体、どうなっとるんだ」
小池に言われて、静信は返答に窮した。
「死に事が多すぎるとは思わんかね。死に事だけじゃない。わしの息子だって――」
言って、小池は口を噤む。
「わしは、この歳まで生きてきて、こんな妙な目に遭ったのは初めてだよ。やたら人が死んで、やたら人がいなくなる。普通じゃ考えられんような妙な按配のことがあまりに続く。こないだまで、村は普段通りだった。それが最近の村はどうかしてる。若御院はそう思わんかね」
「……そうですね」
「伝染病だって噂を、若御院は知っとるかね」
「聞いてます」
「実際のところ、どうなんだね」
「ぼくには分かりません」
「兼正の女房と娘は身体が悪いというじゃないか。それが村の連中に移ったということは考えられんかね」

静信は眉（まゆ）を顰（ひそ）めた。
「それはあり得ません。桐敷さんの奥さんと娘さんはＳＬＥといって膠原（こうげん）病です。膠原病は伝染しませんから」
「じゃあ、兼正が何かしてるという話は」
　静信は明らかに怒っているふうな小池老の顔を見返した。
「兼正の住人だよ。あいつらが越してきてから変だ。わしだけじゃない、みんなそう言ってる」
「それは……無関係でしょう。越してきてから、とおっしゃいますが、実際には桐敷さんのところが越してくる以前から死に事は続いています」
「死に事だけのことを言ってるんじゃない。この村は変だ、という話をしとるんだ。そもそも、兼正の土地にあんな家が建ったところから、この村はどうかし始めたんだ」
「小池さん」静信は小池老の目を見る。「どうかしている、とは、具体的に何を指しているんですか？」
　小池は黙した。
「村が変だということは、わたしも認めます。死に事が多すぎるのはたしかで、何か原因があるのかもしれません。けれども桐敷さんのところは無関係でしょう。あの一家が越してこられたのは、村で死に事が続き始めた、そのあとのことです。転居が多いこと

も認めます。それもはなはだ、不審な転居が多い。何がどう変だとは言えませんが、尋常の転居じゃない、それが続いているのはたしかだと思います。小池さんのところを筆頭に、何かがおかしいのはたしかです。兼正の家が変わっていることも認めます。桐敷さんが一風変わった人々だということも認めます。けれども、桐敷さんが変わった家に住んでいることと、死に事や転居の間に何の関係があると言うんですか？」
「いや……それは」
「どう関係すると言うんです？　桐敷さんに何をできると言うんです？　亡くなった人たちは別に誰かに殺されたわけではないのですよ。明らかに病死です。桐敷の奥さんと娘さんは病気を抱えていますが、これは他人に移るようなものじゃありません。関係のしようもないでしょう。引越した人たちだって、誰かに拉致されたわけじゃないんです」
「それは、そうだが」
「お願いですから、冷静になってください。小池さんの落胆は分かりますが、小池さんがそんなことをおっしゃると、村の人たちはそれを信じてしまいます」
「わしは……別に」小池は目を逸らす。「息子がどうこう、というわけじゃ」
　小池は言ったが、静信の目からすると、息子に捨てられた衝撃を老人が引きずっていることは明らかだった。それを誰かのせいにしたくて、スケープゴートとして余所から

入ってきた桐敷家にそれを負わせようとしている。理不尽な排斥に向かって踏み込もうとしているように見えた。
「とにかく今は、武藤さんのところです」
小池は、ああ、と気まずげに呟いた。
「そう、それを相談に来たんだった。武藤さんに聞いたんだが、あちらは寺の檀家に入っているんだって？」
静信は頷いた。
「ええ。武藤さんのお母さんの十三回忌のときに、身近に墓を移したいということで」
寺の斡旋で墓所を求め、墓を移して檀家に入っている。だが、と静信は思った。火葬にするべきではないだろうか。村の者は土葬に対して拘りがある。火葬に対しては抵抗が大きい。だが、武藤家はそもそも村の者ではない。これまで死者を火葬にしてきたのだ。だったら抵抗はないはずだ。火葬にしたほうが安全なのだが、と思う。
「埋葬はどうなさるんでしょう。これまで茶毘にしてこられたのだし、納骨できるお墓もお持ちなわけですし」
「いや、村の慣例通りにということなんだ。尾崎の若先生もこれまで通りにしたほうがいいんじゃないかと勧めたようだがね、奥さんがせっかくだから、と言って」
静信は頷いた。武藤は村に墓所を求めたときから、そもそものつもりだったのだ。

村の一員として、何事かあれば弔組の手を経て墓所に埋葬され、そうやって完全に村に根づくことを考えていた。武藤は事情を分かっているだろうから、諭せば火葬に同意するだろうが、いまさらそれを強く勧めるのも躊躇われた。

「そういうことなんで万事、慣例通りってことで。戒名は相応でいいということなんで、枕経を頼みますな。通夜は今日、葬儀は明日、いつも通り昼前ってことでいいかね」

「……結構です」

3

律子が休憩室に入ると、すでに敏夫がいて、ぐったりとした様子で椅子のひとつに腰を下ろしていた。おはようございます、と声をかけたが、返ってくる声は低い。目線を合わせようともしないので、よほど疲れているのだろうと思い、黙ってコーヒーを淹れに立った。

コーヒーを淹れているうちに、やすよが出勤してきて、十和田が出勤してきた。それを配る頃には雪と聡子が到着した。妙にむっつりとした敏夫のほうを気にしながら、引越の首尾を話しているうちに清美がやって来た。

「武藤さん、遅いわね」
　清美が時計を見上げたときだった。
「——武藤さんは来ない」敏夫が低い声で口を挟んだ。「忌引だ」
　え、と律子は敏夫の顔を見返した。疲労の色が濃い、いたく気落ちしたふうな——。
「何かあったんですか」
　勢い込んだのは、やすよだった。敏夫はむっつりと頷いた。
「徹くんが亡くなった。武藤さんとこのいちばん上の息子さんだ」
　そんな、と律子は絶句した。まさか、と問いかけるような声を上げたのは誰だったろうか。これに対して、敏夫は再び、むっつりと頷いた。
　あれだ、と思った。律子は目眩を感じた。前方にだけ注意していたら、いきなり背後から足許を掬われたような気がした。
「そんな……」
「手の空いた者は、折を見て悔やみに行って構わない。弔組がいるんで人手は足りてるようだが、みんなも武藤さんの顔を見ないと落ち着かないだろう。通夜が終わるまでに診察が終わるかどうかも怪しいしな。明日は葬式の間だけ、休診にするから」
　敏夫は自分でも、脱力しているのか、怒っているのかが分からなかった。いずれにし

ても対象は武藤でも病気でもなく、自分自身であることだけは確実だった。
疫病、深刻な事態、空まわりしている間に、スタッフの家から犠牲者が出た。なぜ徹の不具合に気づかなかった、と武藤を責めたかったが、それは不当だということを敏夫自身、分かっていた。武藤は家にも仕事を持ち帰っていた。この休日にも出勤してきている。妻の静子もその手伝いに追われていた。その状態で息子のことにまで目が届くだろうか。それも両親の庇護を必要とする幼い子供というならともかく、徹は立派な大人だ。

だが——この病に罹った者は、自ら不調を訴えない。それどころか本人自身が不調に気づいてないふうですらある。家族が気づかなければ、どうにもならない。

もっと、注意させるべきだった、まずスタッフの安全について考えるべきだった、と思う。ひょっとして、と恐ろしい疑惑が首を擡げる。徹は何からそれに感染したのだろう。人だろうか、媒介生物だろうか。そうであれば構わない。だがもし——病院から持ち出した何かだったら。あるいは、武藤が不顕性感染していたとしたら。

（そんなことを考えてる場合じゃない……）

今は診療時間中だ。しっかりしなければ。

思いながら、何をするのも億劫で、敏夫は椅子に深く身体を預けて後悔に浸っている。ようよう机の上に目を戻し、何をすれば良かったのだか、と内心で首をひねって、そも

そもどうして自分はぼんやりしているのだろう、と不審に思った。

ぼんやりしている暇などないはずだ。なのになぜだか、目の前に患者はいないし、側（そば）に指示を待っている看護婦がいるわけでもない。これはどういうことだろう、と背後を振り返って首を巡らせると、俯（うつむ）いていた律子が顔を上げた。困ったように微笑（ほほえ）む。

「……いらっしゃいませんね」

敏夫はその言葉の意味を取りかねた。律子が言葉を補う。

「広沢の豊子さん」

そうか、と思った。広沢豊子の予約時間なのだ。だから時間を空けてある。敏夫は急速に覚醒（かくせい）した気がした。

「まだ来てないのか？」

「ええ」

またか、と敏夫は内心で悪態をつく。どうして、どいつもこいつも、と癇癪（かんしゃく）を起こしたい気分がした。ちょうどその時、診察室に顔を出したのは清美だった。

「先生、いちばんにちょっと出てきます」

敏夫は頷き、ついでに、と声をかけた。

「済まないが、武藤さんとこの帰り、広沢豊子さんのところに寄ってくれないか」

清美は目を丸くした。

「来てないんですか？　――ええ、分かりました」
　頷いた清美が戻ってくるまでには小一時間がかかった。清美は狐につままれたような顔をしていた。
「どうだった」
　敏夫が訊くと、口ごもる。
「あの……広沢さんなんですけど」清美は珍しくぼそぼそと、「いません」
「いない？　出かけてるのか？」
「そうじゃなくて……あの、引越したんだそうです、ゆうべ」
　敏夫はまじまじと清美の顔を見た。
「何だって？」
「わたしも、びっくりして。行ったら誰もいなくて、戸締まりがしてあったんです。どこか開いてないかと思ってウロウロしてたら、隣の人が出てきて、広沢さんならゆうべ越したって」
「馬鹿な……」
　そんなことは言ってなかった。あれだけ豊子に念を押して、豊子だって来る、と頷いたはずだ。
　どうなってるんだ、と言いかけ、敏夫は静信の言を思い出した。村では不審な転居が

続いている。そう、いつかメモをもらった。どこかの家が転居して、その前に家族の具合がおかしかったらしいと——。
敏夫は立ち上がり、メモを捜しに行こうとして、清美が何か言いたげに体をもぞもぞと揺すっているのに気づいた。
「——何だ？」
「いえ。……ぜんぜん、関係ないんですけど」口ごもり、口ごもり、清美は言う。「なんだか、その……広沢さんといい、妙な気がして……いえ、別に病気とは関係ないんですけど」
「どうしたんだ」
「武藤さんとこの徹さん、仕事を辞めてたんですって」
敏夫は清美に向き直った。
「辞めた？」
「ええ。武藤さんも知らないうちに、会社に電話して辞めるって——それが、二日前の話だって言うんです。でも……二日前っていうと、これまでの例から考えて、もう具合が悪かった頃ですよね……？」
たしかに、と敏夫は思う。今朝死んだのだから、徹は数日前から体調を壊していたはずだ。

「まさか、徹くん、知ってたんでしょうか、この病気のこと。それで……でも、何も言わないで……」

「まさか」敏夫は言い、さらに静信の言葉を思い出していた。「――そういうことじゃないだろう」

「そうですよね」安堵(あんど)したように、清美はちょっと笑みを零(こぼ)す。「考えすぎですよね」

敏夫は頷いたが、背筋が冷えていくのを感じていた。徹は村外通勤者だ。そして、他にも村外通勤者が、突然に辞職していたと、静信は言ってなかったか。

敏夫は控え室に向かい、デスクの上のフォルダを漁(あさ)る。静信から預かったメモも何もかも、全部ここに入れてあるはずだ。

少し漁ると、すぐにそれが見つかった。

そう、中外場の小池だ。息子一家が突然、家出した。それ以前に、息子一家は具合が悪かったらしい。そして息子の保雄は、小池老も知らないうちに辞職していた。

二十二プラス一名の姓名が記されたメモ。このところの転居者たち。敏夫はそれを改めて見つめ、そこに「前原セツ」という文字を見つけた。

セツは患者だった。ずっと長いこと通院していたのに、そう言えばもうずっと顔を見ていない。最後に会ったのはいつだったろう、そう記憶をまさぐって、どこかでセツの名を聞いたような気がした。

いつだったか、律子と話をしなかったか。たしかセツが薬を過剰に使っているとか。

敏夫は椅子に腰を下ろす。

(そうだ……山入で事件が起こった日だ)

そんな話を律子とした。セツは橋本病で甲状腺ホルモン剤を投薬されていて、それを勝手に――。

敏夫は蟀谷に指を当てる。甲状腺機能低下症の場合、症状はまず全身の倦怠感だ。そして感情の鈍麻、それは貧血の症状に似ている。

「そうか……」

セツは病状が悪化したのじゃない。あの時点で例の疫病に罹っていたのだ。それを病状の悪化だと思って薬を余計に使用した。律子が薬を二日ぶんだけ出して、月曜に必ず来るように言ったが、セツは来なかった。それきり来院していない。いないはずだ。セツはその月曜に村を出てしまっている。

山入堙滅は八月六日のことだ。セツの転居が八日。そしてセツは発症していた。セツは心臓に障害がある。もしもあれなら、弱った心臓を直撃しただろう。それでなくても発症してから数日、セツの場合は三日と保たなかったのに違いない。

「ギリギリだ……」

セツは月曜の早朝――深夜と言っていい頃に転居している。だが、その頃のセツは、

もはや朦朧としていた時期だろう。体調は悪かったはずだ。本人に自覚があったかどうかはともかくも、身動きに差し障るほど悪化していたはずだし、下手をすれば心不全の症状が出ていてもおかしくない。

にもかかわらず引越した。その理由も行く先もメモには書かれていない。田茂定市がこれを調べたのだったか。定市にも分からなかった、ということだろうか。

「……あり得ない」

これまでの事例から考えて、セツが引越などできるはずがない。最善の場合でも、もはや支える者がなくては、満足に歩くこともできなかったはずだ。そもそも予定していた転居だったにせよ、運送屋が何もかもやったにせよ、セツに采配ができたはずもないし、ましてや本人がそこからの旅に耐えられたはずがない。家族がいればともかく、セツは独居老人だった。

もしも、と敏夫は息を呑んで、静信から委ねられた紙片を見つめた。ここに書かれている一家のすべてが発症していたとしたら。敏夫は机の上に放り出したままのグラフを見た。横軸に日を、縦軸に罹患者数を取っている。現在の時点では罹患者数は死亡者数そのものだった。今のところ、それは横軸に沿って切れ切れに続く点線でしかない。伝染病ならこれは波を描くはずだが、まだはっきりと波形を描くほどの罹患者が出ていない。

敏夫はペンを手に取った。紙片に書かれた名前を辿る。前原セツは一人暮らしだった。猪田元三郎には妻がいた。家族構成を思い出し、仮に転居した一家の全員が発症したものとしてグラフに書き込んでいく。家族構成がはっきりしない家は、看護婦に聞いてみた。それでも分からない家は便宜上、三人として数える。

すべてを書き込んで、敏夫はしばらくそのグラフを見つめた。それは八月の初め、切れ切れの点として現れ、一週、二週と日を重ねるうちにごく小さな波を形作り、次第に高くなり、九月に入って明らかな連続する波形を現した。

「……そういうことか」

敏夫はようやく悟った。静信が拘っていたのはこれだったのだ。そして、静信が思っていた以上に、疫病と転居の――あるいは辞職の間には強い関連性がある。

小池老に会わなければ。会って息子一家の様子について問い質さなければ。

そして、静信に会う必要がある。

4

静信はとりあえず支度をして、武藤家に向かう。武藤の落胆は酷かった。武藤はよく知っているだけに、落胆を見るのは辛い。ましてや武藤が自身を責めているふうだった

からなおさらだった。
「なんで気づかなかったのか……」武藤は目を真っ赤に泣き腫らしている。「土曜にね、休むって言ったんですよ。会社は休むって布団から出てこないで、……そこでおかしいと思わなきゃいけなかったんだ」
静信は何か慰めの言葉をかけようとしたが、実際のところ、出てくる言葉はなかった。死に至る数日間。武藤はこれを見逃したのだ。武藤が自分を責めずにいられない気持ちは分かった。これを慰撫しようとすれば、事前に気がついても助ける方法はなかったのだと、そう言うしかないが、もちろんそれが武藤の悲嘆を軽減するとは思えなかった。
「おまけにあいつ、会社を辞めてましてね」
武藤が顔を拭って、静信は息を詰めた。
「……辞めて」
「ええ。ひょっとしたら、あいつ、分かっていたのかな、と思うんですよ。わたしはことさら徹に何かを言ったことはなかったですけど、徹は気づいてたのかもしれないです。こいつが、罹ったらもうどうしようもない病気なんだってことに。それで……」
それは違う、と静信は思った。
（まただ……）
徹は溝辺町に勤めに出ていた。清水隆司らと同じだ。

静信はそれを言うべきか迷い、武藤にそれを知らせることに意味を見出せずに口を噤んだ。何と言えばいいのだろう？　それはこの疫病の特徴のひとつだ、とでも言えばいいのか。因果関係などあるはずがない。言ったところで武藤に意味があるはずがない。枕経を上げて武藤家を辞去し、寺に戻って法事の準備に追われながら、静信はひどく困惑していた。

疫病と辞意の間には、関連性があるように見える。不審な転居との間にも、何らかの関係があるように見える。しかしながら、どう考えても、関連などあるはずがなかった。

（単なる疫病だと思っていいのか）

しかしながら、これが疫病でなかったら、何だと言うのだろう？　小池のように、誰かの謀略だとでも言おうというのか。

分かるのは、これが尋常の事態ではない、ということだった。疫病だ、だから原因を探し、防疫方法を探して治療法を模索する。それは妥当な手段のはずだが、そんな尋常の方法で本当に事態を止められるのか、という気がした。これは敏夫や静信には手に負えない種類のことではないのか。もっと力のある誰かが、事に当たらなければ無為に時間を浪費するだけではないのか。

静信は考え考え、そして空き時間を見つけて保健係の石田に電話をした。

「……ああ、若御院」

「あの――例の件なのですが、どうなっていますか？」

静信が問うと、石田は一瞬、何のことか分からない、というような間を作った。

「……どう、とは？」

「ですから、石田さんがデータを取りまとめて、溝辺町のほうへ送っているんですよね？　何か反応はありましたか」

石田は狼狽したように言葉を濁した。

「ええと……ええ……いえ」

「調査をしようとか、何か指示はないのですか」

「あの……ありません」

静信は溜息をついた。これだけの死者を、行政はどう思っているのか、と暗澹たる気分になる。

「これは出すぎかもしれないのですが、少しせっつくというか――兼正に話を通して、動いてもらったほうが良いのではないでしょうか。このまま、町がその気になってくれるのを待っていては埒が明かない気がするのですが」

そうですね、と同意する石田の声は、あたりを憚るような調子だった。

「ああ、済みません。隣に誰かおいでですか？」

「あ、いえ……その」

「とにかく、兼正の耳に入れるだけでもしておいたほうがいいと思うんです。事情を説明して、担当の方と少し話をしてもらったほうが」
「はあ……そうですね」
「担当者のお名前が分かりますか？　とにかくまず、個人的に話をしてもらって」
静信が言いかけたとき、石田がそれは、と口を挟んだ。
「――何か？」
「いえ……その」
静信は眉を顰める。石田の応答は、いかにも歯切れが悪く、明らかに狼狽している様子だった。
「石田さん、どうかしたのですか？」
「ああ、いえ」
「データは上申されているんですよね？」
「はあ……その」
ふっと直感のようなものが胸を過ぎった。
「してないのですか？」
石田は答えない。言葉にならない呻くような声で、自分が的を射たことを静信は悟った。

なぜ、と言いかけ、理由などひとつしかないことに思い至る。
「……敏夫ですか」
再び石田が呻いた。静信にとっては、それで充分だった。敏夫の気性はよく分かっている。敏夫が具体的に何を思い、どう石田を言いくるめ、何を指示したのか——それは分からなくても、それがどういう性質のものだったかは分かる。
「……分かりました。お仕事中、済みません。敏夫と相談してみますから、石田さんは気になさらないでください」
静信が言うと、石田は小声で、済みません、と詫びた。

5

夏野が学校から家に帰ると、一枚のメモがダイニングテーブルの上で夏野を待っていた。母親の書いたメモだった。
おかえりなさい。
武藤さんのところの
徹くんが亡くなりました。
私達は手伝いに出かけます。

これを読んだらあなたも来てください。

夏野はしばらく、その短いメモをじっと見つめた。

武藤さんのところの

徹くんが亡くなりました。

どうしても、二行だけ、うまく意味を把握できない文章があった。母親は何を慌てていたのだろう、と思う。こんな書き方をしたら、まるで徹が死んだようじゃないか。

夏野はしばらく、母親がこの一見して徹の訃報を伝えるかのような文章で、本当は何を伝えようとしたのか、想像してみようとした。どんな単語が脱落し、文章上のどんな過ちが起こっているのか。

ダイニングキッチンに立ちつくしてメモを眺めている間、声をかけてくる者はいなかった。家の中の物音は絶えている。工房のほうからも音が聞こえなかったので、本当に両親は出かけているのだろう。

私達は手伝いに出かけます。

夏野はそれをじっと見つめる。次いで、どうしても意図を読みとれない二行に戻った。

武藤さんのところの

徹くんが亡くなりました。

じっと文字を眺めたまま、夏野は思う。とにかく武藤家に行ってみよう。行ってみれ

ば両親が本当はどこの家の手伝いに行ったのか、武藤家の誰かが知っているかもしれない。そして、ついでに徹たちにこの話をしてやろう。母親のうっかりしたミスが招いた、ブラック・ジョーク。

（……本当のはずはない）

徹は恵とは違う。夏野とも。だって徹は、村を出ることを望んでなんかいなかった。

村迫正雄もまた、その訃報を学校から帰ってから聞いた。家族に促され、慌てて武藤家に駆けつけると、見慣れた家には鯨幕が張り巡らされ、喪の装いを終えていた。人混みを掻き分け、いつものように縁側に廻ると、やけに暗い着衣の人々が家の中にもあふれている。居間の隅のほうで肩を寄せ合うように坐った葵と保の姿が見えた。声をかけると、二人が顔を上げる。正雄は家の中に上がり込んだ。

「保——あの」

坐ったまま正雄を見上げた保の目は真っ赤になっている。葵は涙に濡れた睫毛を伏せた。何か声をかけなければならない、と正雄は思う。こういう場合に、言わなければならないことがある。それが口から出てこない。

「おれ……びっくりして」

保は頷く。頷いただけで言葉はなかったので、やはり正雄は次の台詞に詰まった。自

分を持て余していると、葵が正雄の背後に目をやる。振り返ると、正雄同様、制服姿のままの夏野がやって来るところだった。

夏野は居間に上がり込んでくる。まるで怒ってでもいるような顔つきでやって来て、正雄の脇に立った。正雄のほうには視線を寄越すこともなく、坐り込んだ葵と保の前に立ち塞がる。

こいつは何を言うかな、と正雄は思った。見守ったが夏野は何も言わなかった。じっと二人を見下ろし、やがて抑揚のない声を出す。

「……徹ちゃんは？」

保が座敷のほうを指さした。夏野は頷き、正雄をその場に置いてさっさと廊下に出て行った。

「何だよ、あいつ」

正雄は言ったが、これに対する保らの返答はない。

夏野は座敷に向かい、そこにしつらえられた棺を見て、では、母親のあのメモは間違いでもジョークでもなかったんだ、と何度目かの確認をした。夜道を歩き、武藤家が見え、そこに鯨幕と忌中の提灯を見たとき、臓腑を鷲掴みにされた気がした、その気分が舞い戻ってきた。

それは何かに手ひどく裏切られた、という気分に近かった。それだけ自分は、訃報が何かの間違いであってほしかったのだろう。自分の期待になど、世界はなんの頓着もしてくれないことを改めて確認して、子供のように落胆している。何度経験しても慣れることのない、吐き気のするような気分。
　ぼんやりと立って棺を睨みつけていると、武藤が顔を上げ赤くなった目を向けてきた。
「やあ……」
「……顔、見てもいいですか」
　夏野が訊くと、武藤は頷く。棺の蓋は開いたまま、白装束の身体の顔面には白い布がかけられている。武藤は壊れ物を扱うような手つきで、その布をめくった。
　間違いなく徹だった。瞬間的に吐き気を感じた。この期に及んでもまだ、自分はどこかですべてが間違いであったという期待を捨てきれていなかったのだ、と悟った。
　まじまじと徹の死に顔を見つめ、顔を上げると、白い布を手にしたまま、まるで何かを探すような顔で武藤が徹の顔を見ていた。
「……徹ちゃんの抜け殻だ」
　夏野が言うと、武藤は瞬き、夏野を振り返ってから頷いた。
「肝心の徹ちゃんは、どこに行ったんだろうな」
「さあ……」

「捜す方法があればいいのにね」
「まったくだ」
「お悔やみを言います。おれ、こういう場合の常套句(じょうとうく)って分からないんだけど」
武藤は深く頷いた。夏野は武藤に頭を下げる。
武藤は頷いた。
「残念です、すごく。小父(おじ)さんたちはそれ以上だろうけど」
「そうだね……そうなんだよ。とても残念だ。自分が情けなくて悔しくてね」
「……おれもです」

正雄が座敷に向かうのと入れ違いに、夏野が座敷を出てきた。夏野は依然として怒ったような顔つきで、特に泣いている様子もなかった。正雄は駄目だった。周囲の様子を見るにつけ、徹は死んだのだという事実が胸に迫ってきて、そのうえ棺の中の徹を見るともう我慢ができなかった。

兄のような存在だったのだと思う。実の兄たちより徹のほうがよほど正雄に優しかった。にもかかわらず、徹は奪われてしまった。母親の良子(りょうこ)のように。正雄を残して、逝(い)ってしまったのだ。徹の顔を見ていると、失ったのだという思いが否(いや)が応でも身に迫ってきた。徹のもの言いや、細かな思い出が去来して、正雄は泣きじゃくらずにいられな

かった。

　武藤に励まされ、静子に慰められた。二人と一緒に泣いた。同じ悲しみを共有している、という思いが、いっそう涙を誘った。声が嗄れるほど泣いて、ようよう居間に戻ると、夏野は相変わらず、むっつりと押し黙って坐っている。その平然とした顔を見て、正雄は苛立たずにいられなかった。

「……お前、泣きもしないのな」

　正雄が口にしたのは、深夜が近づいてからのことだった。残っていてもすることもないのだが、何かしら後ろ髪を引かれる気がして、武藤家を辞去する気にはなれなかった。それで保らと四人、居間の隅で押し黙っていた。沈黙に耐えかね、正雄は時折、口を開く。零れ出てくるのは徹の思い出話ばかりだった。こんなことがあった、あんなことがあった、と小声で辿るうちに涙があふれてきて、そのたびに保らと泣きじゃくることを繰り返す。そうしているうちに弔問の人波も途切れた。居間に残っていたのは、正雄ら四人だけだった。ついに夏野は、ただの一度も涙を見せなかったし、思い出話にも参加しなかった。

「少しも悲しんでないみたい。仏頂面して押し黙ってるだけでさ」

　夏野はちらりと正雄に視線を寄越しただけで、黙っている。

「お前、だいたい冷たいよ。情ってもんがないのかよ」

「……そういうことにしとけば？」
「何だよ、その物言いは」
「絡むな」夏野はぴしゃりと言う。「おれたちが喧嘩していい状況じゃねえことぐらい、分かるだろうが」
「おれがいつ絡んだよ。お前こそ難癖つけてるんじゃねえぞ」
夏野はうんざりしたように溜息をつく。
「喧嘩したいってんなら、またの機会に相手してやるよ。今ここで保っちゃんたちに喧嘩の仲裁なんかさせんなよな。子供じゃねえんだから、ここにいる間くらい我慢しろ」
「お前……どっちが年上だと思ってんだよ」
「あんただろ。だったら、おれにできることぐらい、できるよな？」
「何だよ、その言いぐさは！」
「いい加減にして」
口を挟んだのは葵だった。葵は正雄を睨みつける。
「ナツの言う通りよ。喧嘩なら外でやって」
「何だよ。葵ちゃんは腹、立たないのかよ。徹ちゃんが死んだんだぜ？　こいつ、ぜんぜん冷たいよ。そうだろ」
「冷たいのはあんたのほうよ。ここで喧嘩の仲裁なんてさせないでよ」

「おれが冷たい？　冗談じゃねえぞ、どこがだよ。徹ちゃんが死んで、すげえ悲しいよ。さっきからそう言ってるじゃないか。どんだけショックだと思ってるんだよ」
「そんなの、あたしたちはそれ以上よ。うちの兄貴なのよ、分かってる？　なによ、さっきからさも自分の不幸みたいに。自分だけが悲しいような顔をしないでよ。あんた、あたしたちを慰めに来たの？　それともあたしたちに慰めてもらいに来たの？」
正雄は血の気が引くのを感じた。保のほうを見ると、保も眉根を寄せたままじっと膝(ひざ)先の畳を見ている。少なくとも、正雄を弁護してくれようという気はなさそうだった。
「……分かったよ」
正雄は踵(きびす)を返した。足音を立てて居間を出る。逃げるように武藤をあとにした。胸の中に苛立ちが沸き上がって渦を巻いた。その圧力で今にも吐きそうだ。
あんな奴(やつ)ら、二度と知るもんか、と正雄は夜道を足早に戻った。
正雄は徹を失った。それは、保や葵だって徹を失ったことには違いないが、悲しいのは同じだ、と思う。徹が死んでどれだけ悲しいか、それは家族だとか何だとか、そういうことで決まるのじゃないはずだ。それは徹に対する思いの丈で決まる。家族だってだけで、正雄の悲しみを偽物(にせもの)のように言う権利はないはずだし、正雄の心情を無視してあんな酷(ひど)い言葉を投げつける権利だってないはずだ。
これっきり縁なんか切ってやる。二度と顔も見たくない。

背中に貼りついた、いたたまれない気分から逃げるように足を速め、飛ぶ勢いで家に戻った。家が見えて、ようやく足を止め、荒い息をつく。

（どいつもこいつも……）

誰も正雄の気持ちなど分かろうとしない。人の気も知らないで、と理不尽な扱いを受けたことに対する憤懣が胸の中で渦巻いて息苦しかった。

「くそ……！」

吐き捨て、正雄は店のシャッターに手をかける。正雄が出かけているのを分かっていてシャッターを閉めてあるのも腹が立つ。しかも手をかけると、中から戸締まりがしてあった。正雄は思わずシャッターを蹴り、家の裏手へと廻る。

裏口から家に入るためには、ずらりと並んだ人家を迂回して、一ブロックを廻り込まねばならなかった。たかだかそれだけの距離のことではあっても、正雄が出かけているのを分かっていて、と思うと腹立たしい。近しい人間が死んで、悔やみに出て行ったのだ。気落ちしている人間を待っていて慰めてやろうという気もないのか、と憤りで胸が灼けた。

夜道を踏みしめ、角の衣料品店を曲がる。その店の脇から細く暗い路地が延びていた。路地と言っても、一方通行とは言え車がぎりぎり走れる程度の道幅はある。にもかかわらず角口に街灯があるきり、寝静まった家並みに挟まれた道は暗い。それすらも苛立た

しい。
路地の左右には、塀だの裏庭だの、あるいは小さな畑だのが続いている。かろうじてコンクリートで舗装されただけの道を、正雄は前のめりに歩いた。ひとつ角を曲がり、そして正雄は行く手に白い人影を見た。
ぎょっとして足を止めた。無意識のうちに息を殺していた。それはひょっとしたら、徹が着ていた白装束とイメージがダブったせいかもしれなかった。
白い背中——男の後ろ姿だった。路地を往き来する人影を見ることは、もちろん珍しいことではない。時間が時間だから近所の誰かが正雄と同様、家に戻るところなのだろう。それだけのことだ、と気を取り直し、正雄は歩みを進めようとした。そしてその人影がまさしく正雄の家の裏庭に入っていくのを見た。
(宗貴兄さん？)
にしては少し、歳がいっているように思える。かと言って宗秀と間違うほどの歳でもなさそうだ。背中の広さ、姿勢の具合、何よりも歩調が、そんなふうに見えた。
そろそろと正雄は家に近づく。裏庭と言っても、正雄の家のそれは広い。博巳らが遊べる程度の庭と、小さいながらも家庭菜園が取れる程度の広さではあった。人影は、裏木戸から庭に入っていった。たしかにそのように見えたが、見上げた家の窓のどこにも明かりは見えない。しんと寝静まっているとしか思えなかった。

（変だな）

正雄は首を傾げた。宗貴が出かけているなら、智寿子が起きて待っているだろう。第一、宗貴が出かけるとも思えない。家の連中は今、博巳のことで手一杯だ。御苦労にも枕許に交代で詰めている。

気のせいだったのか、と思う。暗い夜道のこと、両隣の家に入っていったのを見間違えたのかもしれない。そう思いながら、正雄は裏口に向かう。ドアに手をかけると、さすがに裏口の鍵は開いていた。ドアを開け、家に入ろうとして、正雄は庭のどこかで物音を聞いた。さして多くはない庭木の陰のどこか。枝を揺するような音。

正雄は動きを止めて振り返った。

6

敏夫が患者から解放されたとき、通夜はとうに終わっている時刻だった。慌てて武藤家に顔を出し、武藤と静子に改めて悔やみを言う。それからその場で小池老を捕まえた。息子さんたちの話を聞きたいんだが、と言うと、小池老は渋い顔をした。それを無理に促し、家に戻る小池についていって詳しい話を聞く。出て行ったという家族が具合が悪い様子だったというのは本当か、具体的にはどういう様子だったのか。聞けば聞くほ

ど、小池の息子一家は発症していたのだとしか思えない。
（発症――転居）
関連性などあるはずがない。なのに明らかな相関関係を描いている。何かがおかしい。あり得ないことが起こっている。
考え込みつつ家に戻ったときには日付が変わっていた。私室では静信が待っていた。
「来てたのか」と何気なく言い、頷く相手の硬い表情を見て、良からぬ事態が起こったことを悟った。
「……何か言いたいことがありそうだな」
「石田さんに何を言ったんだ？」
それか、と敏夫はひとりごちた。いつかはバレるだろうと思っていたが、いかにも時期が悪かった。敏夫はすでに手詰まりになっている。調査はほとんど進展していないに等しい。それどころか、正体不明の何かが附帯してきて、混迷の度合いを深めている。それなりの結論や結果があるならともかく、現在のような状態で、石田に口止めしたことを責められれば、敏夫としても返す言葉がない。
「理由を訊こうとは思わない。石田さんとデータを取りまとめて、兼正と会見できるようにしてくれ」
「静信――いいか」

「至急だ」
敏夫は息を吐く。
「こういう場合、封じ込めしかないんだ。それで疫病の拡大は止められても、村は救われない」
「詭弁だ」
「詭弁？　冗談じゃないぞ。それ以外に、どう打つ手があると言うんだ？　外場で疫病らしきものが流行っている。これの正体は分からないが、少なくとも既存の伝染病じゃない。法的な根拠がなければ、行政だって動けないんだ。救済策など取りようがない」
「じゃあ訊くが、その封じ込めは何を根拠に行なうと言うんだ？」
「それは」
「具体的にどうやって封じ込めると言うんだ。お前はまさか、町が警察や自衛隊を派遣してきて道路を封鎖するなんてことを言い出すつもりじゃないだろうな？」
敏夫は痛いところを衝かれて押し黙った。
「まったく現実的じゃない。いくら溝辺町がそれを望んでも、そんなことは実行できない。道路を封鎖するのならともかく、そうでなければどうやって村から人が出るのを防ぐと言うんだ。村外の職場に通っている人間をどうする。高校に通っている人間をどうするんだ。単に買い物に出る人間は？　店に入って店員と接触するのをどうやって止め

るんだ。ナチスがユダヤ人にしたように識別票でもつけさせるのか?」
「……たしかに」敏夫は息を吐いた。「おれだって行政がそこまで思い切ったことができると本気で思っているわけじゃない。ただ、連中が保身に走ることは間違いない。外場は疫病の流行地として水面下で封じ込められることになる。有形無形の圧力で」
静信の答えは低かった。
「疫病の存在が知られれば、外場は忌避され差別されることになる。そんなことは当然のことだし、それは行政が動こうと動くまいと変わらない。必ず起こることで、避けられない」
敏夫は押し黙った。この一見して温厚な友人が、一線を越えると恐ろしく辛辣になることを敏夫はよく知っている。敏夫自身、かなりのニヒリストであることを自認しているが、静信は時に自分以上のニヒリストではないかと思うことがある。果たして本人は、それに気づいているのだろうか。
「……意味がないんだ。報告を差し止めても起こることは変わらない。報告したからと言って、行政が医師団を派遣して外場を助けてくれるとは思えない。病名を特定できないというならなおさらだ。だからと言って、積極的に外場が不利益を被ることもない。封じ込めなどあり得ない。そんなことはお前だって分かっているはずだ」
敏夫は内心で舌打ちをした。そう——分かっている。その通りだ。

静信は白々とした表情で敏夫を見た。

「封じ込めは言い訳だ。お前だってそんなことは信じてない。お前は状況を自分の支配下に置きたかったんだ」

敏夫は息を吐いた。

「……おれは余所者(よそもの)に口を挟んでほしくないんだ」

「そのために情報を握りつぶしたのか」

「そうだ」と、敏夫は静信を見る。「その通りだ。もちろん、封じ込めなんてことは起こらない。だが、律儀(りちぎ)に報告書を上げていれば、連中はいずれ異常に気づく。外場で正体不明の疫病だと思われる疾病(しっぺい)が蔓延(まんえん)していることを知るんだ。だからと言って救済の手を差し伸べてくれるほど、連中が親切なもんか。自分の足許に火が点(つ)かなけりゃ何もしないんだ、絶対に。だが、不安にはなるだろう。それがいつ外場をあふれて溝辺町にも蔓延し始めるか分かったものじゃないんだからな。だから煩(うるさ)く口を出す。そうなることは分かり切ってる」

「役所が口を挟み始めると、お前は事態のイニシアチブを取れない」

「その通りだ。三役なんて言ったところで、非公式の存在でしかないんだ。外場の外にまでは通用しない。役所はおれに事態を任せてくれたりはしないだろう。煩く指図してくるに決まってるんだ。しかもおよそナンセンスなことを言ってくる」

たとえば、と敏夫は、何度も想像したことを改めて確認した。村を流れる渓流は、溝辺町を貫く尾見川の源流になる。尾見川は溝辺町の水源だ。町がまず考えることは水源を汚染されないことだろう。生活汚水の管理、水質のチェック、目の前の患者救済にはたいして益もないことのために村は奔走させられることになる。そういうことが無数に起こるに違いなかった。
「連中にとっちゃ、外場救済なんかは二の次だ。自分たちの身の安全が優先、これが外場の外に漏れないことが最優先になるんだ。そのためにこまごまと指図してくる。およそ実効性のない雑用に忙殺されて、肝心の患者をケアする時間も手間も奪われていくんだ」
　しかも、と敏夫は吐き捨てる。
「それが起こるときには、さらに状況は逼迫してるんだ。村の連中を見ろ。最近になってようやく異常に気づいた。村の中にいてさえこうなんだ。村の外の、しょせんは対岸でしかない連中が異常を察知するのはいつの話だ？　外の連中が異常を認める頃には、村の中は混乱を極めてにっちもさっちも行かないようになってる。そこにのほほんと、報告書を出せだの、やって来て説明しろだのというナンセンスな指示が割り込んでくるんだ。そのくせ、口は出しても手は出さない。足を引っぱるだけだ。だから伏せたんだ」

静信の声は冷ややかだった。

「それが正論だと思うなら、なぜ最初からそう言って石田さんを説得しないんだ？」

敏夫は返答に詰まった。

「町が口を出してくるのは確実だろう。それがおよそ現場の人間にとってはナンセンスな指示になることも分かり切ってる。――それで？　それにいちいち対応するのは面倒だから嫌だという駄々と、お前の主張はどう違うんだ？」

「それは」

「面倒なやりとりが必要になるのはたしかだろう。だが、今それを済ませておくのと、状況がもっと逼迫して、行政の助けを借りなければどうにもならない段階になってからそれをするのと、どちらが本当に患者にとって有益なことなんだ？」

敏夫は黙り込んで視線を逸らした。

「報告書をまとめてくれ。兼正にはぼくが話しに行く。どう理由をつけようと、お前は自分のすべきことを怠った。しかも意図的に、だ。こんなことは許されない」

敏夫は息を吐いてうなだれる。

「静信……」

「お前は行政は無能だと責める。だから愚かな対応をするだろう、と言うわけだ。――違うんじゃないか？　お前は無能であってほしいんだ。愚かな対応をするような連中で

あってほしい。そうに違いないと自分を騙すことで、報告を握りつぶす大義名分を捏造しているだけだろう。理由も何もない、お前は自分が状況を支配したいんだ。余所者に口を挟んでほしくない。横合いからやって来て、自分の取り分を奪っていってほしくないんだ」

敏夫は静信の白々とした硬い表情を見た。

「つまりおれは、功名心に駆られて石田さんに口止めをしたってわけか？　よほど信用されてないんだな」

静信は冷ややかな表情のまま首を横に振った。

「これはもっと単純なことだ。人間は誰だって自分が世界の中心だという幻想から逃れられないんだ」

「おれは途方もなく我が儘で利己的な人間だと思われてるらしい」

「そうじゃない。どんな人間も当人にとって自分は、この世界で唯一の主体なんだ。自分以外のものはすべて認識の客体にすぎないから、自分が唯一の中心点だという幻想から逃れられない。自分こそが中心点だと主張する有象無象の一例でしかないことを受容できないんだ。だから事態に巻き込まれ、単なる端役に成り下がることを拒む」

それがお前の人間観か、と敏夫は問いたい気がしたが、声にはならなかった。静信はその内面に敏夫にも理解できない空洞を飼っている。時として現れる辛辣さ、人間や社

会に対する途方もなくペシミスティックな態度は、そこから表出するものではないかと思うが、確証はない。それこそがかつて、この一見してなんの問題もなさそうに見える友人が、死を選ぼうとした理由ではないかと思えたが、これについては本人に向かって訊いたことがなかった。敏夫はそれを話題にしたことがない。

「……悪かったよ」

敏夫は軽く息を吐いて手を挙げた。

「お前の言う通りなのかもしれん。別に自分がヒーローになりたかったわけじゃないが、余所者が入ってきて指図されるしかない立場になるのが嫌だったのはたしかだ。おれがこの事態をなんとかするんだ、という気があったことも否定しない」敏夫は自嘲した。「正直言って、おれは事態を舐めてた。調べれば、それなりに原因が見えてくるはずだし、対処方法も分かるはずだと思ってた。だからおれにもなんとかできると思ってたんだ。だが、これはそれほど簡単なことじゃない。——さっき、小池さんに会ってきた」

「小池の昌治さん？」

敏夫は頷き、広沢豊子が発症したこと、敏夫が念を押し、豊子も通院していたにもかかわらず、転居したことを告げた。前原セツもそうだった。転居者と疫病の間には、あるはずのない関連性がある。

「おれには手に負えないんじゃないかという気がしていたんだ。おれ一人でなんとかで

きると思い上がるのは危険すぎる、という気がしている。……武藤さんのこともあるしな」

静信は頷いた。

「潔く非を認めるよ。至急、石田さんと相談して報告書を書いてもらう。それを持って兼正に状況を説明に行く。早急にだ。――それでいいか?」

静信は頷いた。そうしてようやく、我に返ったように、困惑したふうな表情を浮かべる。

「ずいぶんな言い方をしたな」恥じ入ったように言う。「敏夫が最善をつくしていることは分かっているんだ。……悪かった」

敏夫は苦笑してみせたが、同時に背筋が冷える思いもしていた。内部に空洞を飼っていながら、こうして詫びる幼馴染みの心根が、敏夫には今も理解できない。

7

小さく傾いた扉が動く音がして、静信は自分がそれを待ちわびていたことを知る。

「こんばんは」と笑う幼い顔を、静信はしげしげと見た。

「……どうしたの?」

いや、と静信は首を振る。娘ほどの年頃の少女に、今や自分が精神的に依存しているのを自覚して複雑な気分がした。
「また落ち込んでるのね。今度は何があったの？」
「敏夫と……ちょっと」
「喧嘩したの？　世話の焼ける人ね」
沙子は言って笑う。そうだね、と静信は苦笑した。
「また尾崎先生に当たられちゃったの？」
「少し違う」
苦笑して、静信は空洞の祭壇を見る。少し迷って、かいつまんで事情を語った。
「分かっているんだ。敏夫はぼくではない。敏夫は敏夫なりに良かれと思って行動しているのだし、それが自分にとっての最善ではないからと言って、ぼくには敏夫を責める権利はないいんだ。……けれども」
その先の言葉を、静信は見失った。
「腹が立つ？」
「ノーと言うのは正直じゃないな。そう、腹が立つんだよ。どうしてそんなことをするんだ、と思う。自分に怒る権利がないことは分かってる。けれども無視できない。結果として相手を責めて、責めた自分に嫌気が差すんだ……」

実際のところ、と静信は視線を自分の掌に向けた。
「敏夫のほうが普通なんだと思う。そうだね、ぼくはたしかに君の言う通り、センチなんだよ。敏夫はぼくを理想主義者だと言う。その通りなんだと思う。ぼくのほうが特異なんだ。敏夫のほうが当たり前で。どちらがマジョリティだと問われれば、敏夫のほうがマジョリティなんだし、その立場に立てば、ぼくの言うことは潔癖すぎるし青臭いんだろう。だから本当に、ぼくには敏夫を責める権利はないんだ。なのに責めてしまうんだよ」
「それで落ち込むとここに来るのね」
静信は首を傾げた。沙子は笑う。
「室井さんは殉教者になりたいんでしょ？」
「ぼくが？」
「そう。神様に殉じて自分を捧げてしまえるような、そういう人間になりたいんだわ。けれども神様の姿が見えない。……なぜなら自分は神様に見放されているから」
静信は苦笑して首を横に振った。
「そう？　でも、わたしにはそんなふうに見えるけど。室井さんは本当にロマンティストなのね。絶対的な正義ってものを貫きたがってるみたい。——絶対的な正義とか理想って、神様の別名よね？」

「ああ……そう。そうだね」
　沙子は頷く。
「室井さんは神様に忠実でありたいのね。村で疫病が流行ってる。神様の意思に従うなら、その蔓延を食い止めて、村の人たちを助けることが正しいことよ。だから室井さんは、そうしようと努力する。村の人たちを助けたいのは尾崎先生も同じだわ。でも、尾崎先生は室井さんほどロマンティストじゃない」
　静信は黙って沙子の顔を見守った。
「尾崎先生だけじゃない、すべての人が、と言ってもいいんだと思うけど。誰だってそこに疫病が蔓延してれば、食い止めなきゃ、と思うわよね？　けれども中には、目的のためには手段を選ばない人もいるし、それが正義だと分かっていても自己保身や臆病から行動できない人もいる。自分の安全を守りたい、だったら、疫病対策なんて自分が安全でいられる範囲内のことよ。それ以上はできないの。別の人にとっては、自分の存在意義を貫きたい、そういうことかもしれない。だったら自分の意地や矜持のほうが優先なの。疫病対策はそれに抵触しない範囲内。そうやって優先順位をつけていく。
　けれども、室井さんは唯一絶対の神様に奉仕したい。絶対的な正義に対して忠実でないと我慢できないんだわ。神様より優先される何かがあっちゃいけないの。──でも、自分一人しか信奉してない神様の絶対性ってどこにあるの？」

「ああ……」静信は顔を両手に埋めた。「その通りだ」

「室井さんは神様を信じているのよね。それに奉仕したいと思ってる。殉じられるほど忠実でいたいんだわ。けれども誰も、室井さんの信じる神様を信じてない。それを確認するたびに、室井さんは実は神様なんていなくて、それは単に自分が固執してる価値観でしかない——誰もが持ってる多様な価値観のひとつでしかないことを悟るんだわ。それは神様じゃない。室井さんはそのたびに神様を見失ってしまう」

沙子は軽く笑った。

「だから室井さんは落ち込むとここに来るのね。ここを建てた誰かさんに共鳴するんだわ。神様を信じたい、それに殉じたい、なのに神様が見つからない。あの祭壇と一緒」

静信は祭壇を見上げた。掲げられるべき神を持たない空洞の祭壇。

「そこに神様を据えるべきだって分かってるのに、どういう神様を据えればいいのか分からないんだわ。自分の思い描く神様は、理念としては理想的だけど、自分だけのものだから神の名に値しない。かと言って、世の中の人が指し示す何かは、大勢の人の信仰を集めているけど、理念としては不純で、やっぱり神の名に値しないように見える」

「……そうだね」

「神様の僕(しもべ)なのに、その神様は室井さんの前に姿を現してくれない。だから室井さんは自分が神様に見捨てられているように感じるんだわ」

静信は頷いた。
「……そうかもしれない」
沙子は首を傾げた。
「これを訊くのは酷いかしら。子供の無邪気な残酷さってことで許してもらえると嬉しいんだけど。——だから室井さんは、死にたかったの？」
「だから？」
「この世のどこにも神様がいないから。自分の前には姿を現してくれないから」
いや、と静信は首を振った。
「そうじゃないと思うよ」
「思う？」
「うん。……ぼくには分からない。実を言うと、ぼくも動機を知らないんだ」
「まさか」
本当に、と静信は苦笑した。
「ぼくがとても理想主義者で、そしてその理想が、自分だけの理想でしかないことにしばしば喘いでしまうのはたしかだと思う。そういう自分の有様をこの聖堂に重ねて見てるのもたしかだろうね」
けれども、と静信は祭壇を見上げる。

「実を言うと、ぼくは絶対的な何かなんて信じていない。あればいいとは思うけれども、ないんだってことを分かってるんだ。ひとつの価値観が絶対的であるなんてことは、そのように統制された結果としてしか生じないことだと思うんだよ。そして統制の結果、絶対的な地位に祭り上げられた理想なんて、理想を語る値打ちがない。ぼくは君が考える以上に理想主義者なんだ」

沙子は呆(あき)れたように静信を見つめた。

「そのようね」

「だから、そんなことじゃないんだ。こんな、簡単に理屈にしてしまえるような、言葉で表現できるようなことが原因じゃない……」

それはもっと深いところからやって来た。知識や理屈や言語を司(つかさど)る部位などとは別の、まったく異質な部分から唐突に浮上し、静信を突き動かした。衝動、としか呼びようのない、それ。

「自分でも不思議に思う。……ぼくは一体、あのとき何を考えたんだろうね」

章

I

夏野は暗闇の中に横たわっていた。ステレオのパネルの明かりだけが光源で、小さな音量でAMのラジオが鳴っていたが、すぐにそれが疎ましくなって消した。あとに残ったのは無音だった。微かな素子の明かりと、無音。

夏野はそこから「死」をイメージしようとしてみたが、上手くいかなかった。

徹は今日──いや、もう昨日だ──の午後、山の中に埋葬されてしまった。もうこの世のどこにもいない。

永遠の停止。少なくとも、どんなに暗くてもどんなに音がなくても、他のいかなる感覚が遠くても、「死」はこうやっているのとは、まったく別物だろう。これが死だ、という認識さえも失われる。認識の主体である自己が消え去ってしまったら、あとには何が残るのだろう。自分以外のすべてがそこに残っても、それを夏野はもはや知覚することができない。それは夏野にとって、世界のほうが消失することに等しいはずだが、世界を失ったと認識する夏野自身もそこにいない。そういう虚無。虚無と認識されること

もない全き無。

徹はそこに行ってしまったのだし、夏野もいずれはそこに行く。両親も保も葵も、すべての人間がそこに向かって突き進んでいる。自己と世界のすべてを喪失する破滅に向かって。

怖いとは思わなかった。ただひたすら不思議だった。想像することさえできない無というものが、明らかに存在することが不可解だ。確実に存在するのに、誰もそれに手を触れることができない。触れた瞬間、それを知覚することは不可能になる。

自分がいなくなる。「いる」と感じる自分自身でさえ存在しなくなる。それは消え去るというよりも、永遠に凍結され停止されるのにイメージとしては近い気がした。

いずれにしても、と夏野は思う。徹は行ってしまった。村を出た。それを望んでいたのは自分だったはずなのに。夏野は置いて行かれてしまった。

続く死者。恵、徹。他にもいる。村のあちこちで何度も葬式を見たように思う。そして転居。どこかの誰かが逃げたとか引越したとか。徹だって訝しんでいた。今年は変だ、と。変だと言われるほど多くの人間が村を出て行って、なのに夏野はまだ村に囚われている。

そっと溜息をついて、夏野はそれで微かな物音に気づいた。それはめくれ上がった布が、はたりと落ちる音に似ていた。何気なく音の出所とおぼしき方向を見ると、枕許に

近いカーテンが揺れていた。それは風に揺れるというふうではない、まるで誰かがカーテンをめくり上げてみて手を放した、それが今も揺れているというふうに見えた。

夏野はなんとなくその動きを見守る。カーテンはすぐに静まり、風に揺れるでもなく無表情に垂れている。

気のせいだったろうか、と思う。音を聞いたのも、揺れているのを見たと思ったのも。窓の外で微かに物音がした気がした。それはあるいは、夏野自身が起こしたベッドの軋みだったかもしれないし、本当に何でもない物音だったのかもしれない。意外に夜にも物音はするものだ。

夏野はじっとカーテンを見守る。窓を開けていただろうか。――開けていたと思う。部屋に戻ってから窓を開けて、閉めた覚えがない。

カーテンは動かない。物音もしない。すべてが気のせいだと言わんばかりで、それで逆に、夏野はたしかに誰かがカーテンを動かしたのだ、という確信を抱いた。誰かがカーテンをめくり、そして窓の外で物音を立てた。

夏野は起きあがり、そしてカーテンの端をめくってみる。ちょうど窓の外がわずかに覗けるほど持ち上げて手を放すと、さっき聞いたのとまったく同じ音がした。

やはり、これだ。夏野は窓辺に寄り、少しだけカーテンを開けてみる。窓ガラスは部屋の暗い光に黒い鏡のよう、陰鬱な陰影のついた自分の姿が映っている。さらにカーテ

ンを開くと、十センチほど開いた窓の網戸越し、艶のない闇が覗いていた。付近にはなんの物音もない。

夏野は窓ガラスに額を寄せる。室内の光が身体の陰になって遮られたが、やはり何も見えなかった。朧に闇の濃淡で、裏庭の空洞じみた横に長い広がりと、その向こうの林、茂みが見える。すぐ近くにこんもりと盛り上がっているのは木苺の茂みだ。それが揺れている。付近の下生えも林の梢も動いていない。ただ柔な枝を伸ばした木苺だけが身震いするように動いていて、それもすぐに静まった。まるでさっきのカーテンのように。

その動きを見守っているうち、そうやって闇を見つめている自分を誰かが見ている、という感覚を得た。視線を感じる。自分を見ている誰かの気配が、そう遠くないところにある。

目を凝らしてみても、闇の濃淡以外、何も見えなかった。ほんの一メートルほど離れた林の中に、誰かが潜んでいたとしても、夏野には見えないだろう。あまりに窓の外には明かりがなさすぎる。

視線は断ち切られることなく、注がれている。たしかに誰かが、夏野を見ている。

しかし、誰が？

真っ先に浮かんだのは、同じ歳の少女の俤だが、これはあまりにリアリティを欠いていた。すでに夏野は恵がいないことを承知している。恵の机は未だ教室に残されていた

が、最近では花が飾られることもない。最初は恵がいた位置に他人を拒むようにして残っていた空席は、席替えのたびに目立たないあたりに移動して、今では本当に視野の中に入らない隅の最後列に弾き出されてしまっている。それは、恵の存在をこの世から抹消していく手続きの一環だった。たしかな現実性をもって、恵の死亡をこの世に刻みつけ、そうして刻まれたそれは、もはや摩耗していこうとしている。

今や、恵が存在しないことは、夏野にとって、自分が存在することと同等に自明のことだった。だから、自分を見ている誰かが恵のはずはない。

「……徹ちゃん?」

声にならないほどの声で、零れ出たのはそれだった。死者が別れを言いに生者を訪れるという。あまりによくある怪談話。ひょっとしたらそれだろうか。そんなことはあり得ないと思いつつも、それは妙にリアリティを伴っている。

だったら、どんなにいいだろう。別れを言いに訪れることができるなら。徹の意思と、意思に従って行為をなすほどの何かが、抜け殻が埋葬されてしまった今も、どこかに残っているのなら。

闇に目を凝らしたが、やはり何も見えなかった。もう物音もしない。木苺の茂みも動かない。そうしている間に、視線も感じられなくなっている。

徹かもしれない何かは立ち去ってしまった。――そんな気が、夏野にはした。

2

十月五日、敏夫の許にまた訃報が届いた。外場の村迫博巳が死亡した。わずか九歳の子供は決着が早かった。

昼には石田から連絡があった。明日には、頼んでおいた報告書の取りまとめが終わると言う。

「悪かったな、急に」

いえ、と石田は妙に安堵したような声音で答えた。

「おれか静信が兼正に連絡を取って」敏夫は言いかけて、控え室に顔を覗かせた汐見雪に頷く。「今、行く。ちょっと待っててもらってくれ」

「診察中でしたか?」

石田の声に、敏夫は苦笑した。

「どうもうちの午前の診察時間は、二時、三時までになったようだ」

「そりゃあ、お手を取らせて済みません。なんでも土日にも診察をしてるんですって?」

「幸い、うちのスタッフは理解があってね。なんだが、今日はレントゲンの担当が欠勤なんで天手古舞だ」敏夫は笑って、「とにかく、できるだけ早い時期に会えるようセッ

ティングをする。そうだな——明日、書類が出来たらもう一度連絡をくれるか？　あまり先走ってもなんだし、それを聞いてから兼正に連絡をしてみよう」
「分かりました。じゃあ、終わったら連絡をします。先生に？」
「おれは急患で出ているかもしれないから、静信のほうに連絡してもらったほうがいいだろう」
石田は了解して電話を切った。敏夫はＴＶＸ線室に急ぐ。途中で物療室から患者を送り出している清美に会った。
「永田さん、下山さんは？」
「お大事に」清美は患者を押し出して敏夫を振り返り、声を低める。「それがまだ連絡がないんです」
「おかしいな。あの人は無断欠勤は、したことがないんだが」
レントゲン技師の下山が出てこない。今に至るも連絡がなかった。
「連絡してみましょうか」
清美は表情を曇らせる。誰もが心配している。武藤の例があるからだ。
「してみてくれ。ひょっとしたら、疲れ果てて寝てるのかもしれないが」
清美は頷き、廊下を急ぐ敏夫を見送った。それから事務室に向かう。そこから下山の家に電話をした。

下山は溝辺町のはずれにできた住宅地に住んでいる。病院までは車で三十分ほどだ。
コール三回で下山の妻が出た。名乗って事情を伝えると、彼女は、まあ、と声を上げる。
「済みません。自分で電話するって言ったのに、してなかったんですか?」
「ええ」
「ちょっと待ってくださいね」
無理に代わらなくても、と言おうとしたが、間に合わなかった。ややあって、下山が電話口に出た。
「どうしたの?　大丈夫?」
「ああ……永田さんか」
下山の声は低かった。
「みんな心配してるのよ。どうしたの、具合でも」
清美が全部を言う前に、下山が口を挟んだ。
「辞めます」
え、と清美は言葉に詰まった。
「今、何て言ったの?」
「仕事を辞めます。先生にそう伝えといてください」

清美はぽかんと口を開けた。
「下山さん……そんな」
事務机に向かっていた十和田が、怪訝そうに顔を上げた。
「勘弁してください。女房と子供がいるんです。家のローンだって残ってる」
清美は口を開きかけ、結局噤んだ。
「そう……。でも、先生に直接、話をしたほうがいいと思うけど。それも嫌？」
下山は、勘弁してください、ともう一度言って電話を切った。
清美は深い溜息をつく。十和田がどうしたんですか、と訊いてきた。
「辞めるんだって。……下山さん」
そんな、と十和田も言ったが、すぐに視線を書類の上に落とす。
「……そうですか」
清美はなんとなく頷き、診察室を覗き込む。敏夫はまだＴＶＸ線室から戻っていない。
隣の処置室でやすよと雪が、次の患者のために器具を消毒していた。
「先生、まだ？」
「まだです」雪は笑う。「下山さん、いないと、ペース狂っちゃいますね」
「辞めるんだってさ」
やすよも雪も、弾かれたように顔を上げた。雪が、そんな、と声を上げて、やすよが

それを制す。壁の向こうにある中待合のほうへ目配せをして、内緒話に誘うように、手招きをした。
「辞めるって……」
「勘弁してくれ、って言われちゃったわ。先生にそう伝えてくれって」
「どうしてえ?」雪は子供のような声を上げる。慌てて自分で口を塞ぎ、声のトーンを落とした。「だって、こないだだって下山さん、外場に越してこようかって言ってたのに」
「武藤さんとこの件が堪えたんでしょ」
言ったのは、やすよだった。
「でも」
「下山さんには奥さんも子供もいるからね。子供だって小さいし、家だって去年、建てたばかりでしょ。ローンだってあるだろうし」
清美は頷く。
「そう言ってたわ」
「実際、それとなく覚悟してたとは言え、武藤さんとこから死人が出ると、堪えちゃうわよね」言って、やすよはさらに声を低める。「武藤さんだって悔やんでたもの。自分が持ち帰ったんじゃないか、って」

「そうね……」
「武藤さんとこのお葬式に行って、目の当たりにしちゃったから考えちゃったんでしょ。こればっかりは、下山さんを責めるわけにはいかないわ。あの人は外場の人ってわけでもないし」
「そんなの、関係ないですよ」憤然と雪は口を挟んだ。「気持ちは分かるけど、なんか……こう……」
　やすよは肩を竦める。
「もっとやり方がありそうな気はするけどね。せめて先生に相談して、みんなに一言、詫びるとかさ」
「そう、それですよ」
「でも、もう外場に足を踏み入れるのが怖いんでしょ。そんなもんだと思うわよ。そのうち、溝辺町の人たちも気がついて、それこそ学校とか職場でさ、外場の連中とは係わり合いになるなとか、そういう話になっていくのよ」
　清美は溜息をついた。
「いかにもありそうな話よね」
　呟いたところに、敏夫が診察室に戻ってきた。敏夫に下山の件を伝えると、敏夫も、敏夫に従って戻ってきた律子も軽く息を呑んだ。しかしながら、律子は何も言わなかっ

たし、敏夫も「そうか」と言っただけだった。
「十和田くんに言って手続きをしてもらってくれ。武藤さんもまだ忌引だし、こんな時なんで急がなくていい。下山さんには悪いが、それくらいは辛抱してもらおう」
清美は頷いた。急に、ひどく心細く、同時に恐ろしく感じられた。
自分たちはどうなるのだろう、——これから。

3

村迫米穀店の前には、見慣れた提灯(ちょうちん)が出ていた。それを見たとたん、武藤葵は泣きそうな気分になった。抹香の匂(にお)い、人のざわめき、夜には似つかわしくない賑々(にぎにぎ)しさ。どれも経験したばかりだ。やっと終わったところなのに。葵は繰り返す悪夢の中に迷い込んだような気がした。
立ち竦んだ葵を、弟の保が促した。
「……行こう」
うん、と葵は頷く。そろそろと店に近づき、中を覗(のぞ)き込んだ。店の中の棚は壁に寄せられ、それを鯨幕が覆(おお)っている。奥の戸は外されて、住居が真通しに見えた。上がってすぐのところに村迫宗貴が坐(すわ)っている。

葵は数珠を握りしめて、宗貴に近づいた。そっと声をかけると、泣き腫らしたふうの赤い目が葵を振り仰ぐ。

「……ああ、武藤さんとこの」

葵は頭を下げた。

「このたびは、御愁傷様です」

「どうも御丁寧に。――武藤さんのところも、お兄さんが亡くなったんだって？」

はい、と葵は頷いた。

「そりゃあ大変だったね。もう落ち着いたかい？」

「まだピンと来なくて……」葵は苦労して微笑んだ。「宗貴さんのところも、大変でしたね。その……お辛いでしょう？」

うん、と宗貴は頷いた。

「まだ小さかったからね。別に大きかったら構わないってわけじゃないんだけど、どうしても不憫な感じがしてね」

「分かります」

「でも、ひょっとしたら、まだろくに物心もついてないようなものだし、今のうちのほうが良かったのかもしれないね。仕事を持って、それこそ彼女でもいたらさ、そのほうが可哀想なのかも」

そんなことは、と言いかけて、葵は嗚咽に言葉を途切らせた。残された者にとっては、子供だろうと大人だろうと関係ない。家族が死んだという意味では同じだ。
保が「姉さん」と、軽く小突いた。葵は頷き、懸命に涙を拭う。
「済みません。お悔やみを言いに来たのに」
「いいんだよ。こっちこそお悔やみを言うよ。本当に、残念だったね」
はい、と葵は頷いた。
「あの……正雄くんは？」
宗貴は複雑そうに顔を歪めて笑った。
「二階。しんどいとか言ってね、降りてこないんだよ、部屋に籠もったまま」
「そんな……お通夜なのに？」
宗貴は苦笑する。
「あいつは博巳のことが気に入らなかったんだよ。家の人間の関心が、博巳に向いてしまったのが面白くなかったんだろう」
「そんな……」
「死んでも顔色ひとつ変えなかったからね」と、宗貴はどこか不快なものを呑み下すような表情をした。「そう、でおしまいだよ。まったく他人事の顔してる。降りてこいって言っても、関係ないってさ」

「そんな……」

そういう奴（やつ）なんだ、と宗貴の声は吐き出す調子だった。

「……あたし、兄が死んで動転してて、お通夜のとき正雄くんに酷（ひど）いことを言っちゃったんです。それでお詫びしないとと思って」

「先に正雄が失礼なことをしたんでしょう。こちらこそお詫びしなくちゃな」

「とんでもないです」

「正雄は降りてこないよ。二階の部屋にいるから。悪いけど、勝手に行ってくれるかな」

葵は頷き、保を促した。

弔問客の間を縫って、二階へと上がる。正雄の部屋は保が知っていた。保はドアを開けようとしたが、鍵（かぎ）がかかっているらしく開かない。改めてドアをノックした。

「おい、正雄」保が呼びかけたが、部屋の中から返答はない。「いるんだろ？　おい」

「正雄くん、葵です。お願い、開けて」

しばらく中からはなんの気配もなかった。何度かノックを繰り返し、呼びかけると、やっと中で身動きする気配がしてドアがわずかに開いた。部屋の中は暗い。まるで隙間（すきま）から外の様子を窺（うかが）うようにして、正雄が顔をわずかに覗かせた。

「あの……ええと、御愁傷様です」

葵が言うと、正雄は視線を逸らす。
「おれ、関係ねえから」
そんな、と言いかけ、葵は言葉を呑み込んだ。今夜は詫びに来たのだ。責めるようなことは言うべきじゃない。
「その、この間はごめんね。あたし、酷いことを言ったと思う」
別に、と正雄は掠れた声で言った。
「ごめんな。ちょっとおれたち、動転してて」
「……そう」
正雄は低く言って、ドアを閉めた。かちりと中で鍵を下ろした音がする。
「──正雄」
保がドアを叩く。葵も呼びかけたが、もはや部屋の中からはなんの応答もなかった。しばらくドアの前で声をかけていたが、保が溜息をついたのを合図に、葵もノックする手を止めた。ひどく泣きたかった。
保がそっと促して、仕方なく踵を返した。また改めて謝ろう、と思いながら。
正雄はしばらくドアの脇にもたれ、廊下の物音を窺っていた。
軽い足音が廊下を遠ざかり、下に降りていくのを聞いてドアを離れ、ベッドによろめ

き寄る。足に力が入らず、腰が抜けたように坐る破目になった。勢い余って倒れ、後頭部を壁にぶつけたが、正雄は特に反応をしなかった。虚ろに目を開いて天井を見ている。その目には憑かれた色がある。結膜が異様に青味を帯びていた。顔は白く、唇にも色がない。その唇を、正雄は同じく色味を失った舌で舐めた。異様に喉が渇いている。水がほしかったが、動くのは億劫だった。

「……水」

呟いた声は、ドアの外までは届かなかった。

正雄は天井を見つめたまま、水、ともう一度、呟いた。

4

窓の外で、また人の気配がした。

夏野は机を離れ、カーテンを少し開けてみる。なんとなく窓は閉めている。だから窓から見えるのはガラスに映った自分の姿だけだった。

ぱたりと部屋の中で音がして、振り返るとスタンドの明かりの中、机の上に開いておいた英語の辞書が閉じたところだった。——そう、何かが動かなければ音は生じない。気配、というものを、正確には何と言えばいいのか、夏野には分からない。それは呼

吸音、衣擦れの音、あるいは身動きにまつわる小さな音の集合なのかもしれないし、聴覚ではなく臭覚に訴えるものなのかもしれない。別にオカルトじみたものでも、超常的なものでもないと思う。「これ」だと指摘できないほど些細な、意識に引っかからないほど微細な何かが気配として察知されるのではないかという気がしていた。

(……視線)

そう、気配はそのように解釈することができても、視線はどう解釈していいのか分からない。たしかに誰かに見られている、という気がすることがあり、振り返ると実際に誰かの視線に出会うことがある。経験的に、視線は察知できるものだという気がしているが、なぜ察知できるのかは分からなかった。けれどもたしかに、あると思う。そして今も、それを感じる。

誰かが見ている。おそらくは窓の外、林の下にわだかまった闇の中から。

(……でも、誰が?)

徹ではない、という気がした。もしも徹が別れを言いに来られるものだとして、だとしたら、今、夏野を見ている誰かは徹ではない。別れを一度だけ言いに来るのは徹らしい振る舞いのような気がした。けれども再度、訪ねてくるのは徹らしくない。いつまでも未練がましくやって来るのは、徹にまったくそぐわない。

(だったら、誰だ?)

ふっと浮かんだのは、やはり恵のことだった。一度なら恵ではない。けれども二度以上続けば恵だという気がする。恵本人ではなくても、恵のような誰かだ。

窓に額をつけて見たが、やはり闇の中に人影は見えなかった。窓を離れ、カーテンを閉じて息をつく。視線のような何かが途切れたのを感じた。その安堵感が、かつて恵に感じていたものにひどく似ていた。

（けれど、清水は死んだ……）

徹もいないのだし、恵もいない。訪ねて来られるはずがない。

机に戻り、これという理由もなく雑然としたものを放り込んでいる箱を見た。辞書の箱だ。それを書類差し代わりに本の間に立ててある。

夏野はその中から一枚の葉書を取った。捨てようと思いながら、なんとなくここに入れておいた。

結城　夏野　様

宛名の、無邪気な気取りを感じさせる文字。時季はずれの残暑見舞い。届くはずのないものが夏野の手に届いた。

夏野はそれを見つめ、ゴミ箱に放り込もうとして、やめた。もとの箱の中にぞんざいに戻す。取っておきたい意思があるわけではない。あえて捨てようという意思がないだけのことだ。

耳を澄まし、息を吐いて、夏野は閉じてしまった辞書をもう一度開く。まだ今日の予定を消化できていない。これは夏野にとって「勉強」という行為ではなく、村を出て行くために支払わねばならない「代価」だ。やらなければ、それだけ望みが遠のく。
窓の外のことは意識から締め出して、夏野は辞書を引き始めた。

5

十月六日の午後、結城がクレオールに行くと、準備中の札が下がっていた。あてが外れた気分で踵を返し、さりとて家に戻る気にはなれなくて、仕方なく近所をぶらぶらと歩いた。あたりを一廻りして再度クレオールの前を通りかかると、準備中の札が外されている。おや、と思いながらドアを押すと開いた。
「いらっしゃい」
長谷川がカウンターの中から笑う。
「ついさっき来たら準備中だったんですよ。てっきり今日は休みなのかと思った」
ああ、と長谷川は苦笑した。
「そりゃあ、失礼しましたね。ちょっと出てたもんで。葬式だったんですよ」
結城は眉を顰めた。

「――葬式」
「ええ。商店街の中に米屋があるでしょう。あそこの子供が死んだんですよ。わたしも個人的に親しいわけじゃないんですけどね、いちおう商店街の寄り合いで付き合いがあるんで、お悔やみに」
またか、と結城は思う。少し俯き、考え込んだ。
「どうしました？」
「いや――これは絶対におかしい。また、としか言いようがないでしょう。武藤さんのところの息子さんも亡くなったばかりですよ。こんなに人が死ぬなんてどうかしてる。そう思われませんか」
「それは……」長谷川は目に見えて狼狽した。「たしかにそうかもしれませんが」
「田舎ではこんなものだ、という話は聞きました。そうなのかもしれないと思う。けれども、それも死者がこの半数ならの話です。これはどういう常識に照らしてもおかしいと思う」
結城は言って、長谷川の顔を見た。
「伝染病なんじゃないでしょうか」
長谷川は言葉に窮したように黙り込んだ。俯いたその顔色で、長谷川もそれを疑っているのだ、と結城は悟る。

「でも……役場からも何も言ってきませんし……」
「伏せている、ということは考えられませんか。それこそ村がパニックになるのを恐れてのことだとは」
「……そうかもしれません」
店の中には結城と長谷川だけ、そこに妙に明るくピアノの音が響いていた。黙りこくったままでいると、店のドアが開いた。入ってきた田代は店の中の妙な空気に気づいたのか、結城と長谷川を見比べた。
「どう――したんです?」
結城は同じ指摘を繰り返した。田代もやはりそれを疑っていたのだと、その表情を見て分かった。誰もがおかしいと思っているのだ。それを口に出せないでいた。
「確認したほうが良くはないでしょうか」
結城の声に、田代はしばらく考え込む。結城は言い添えた。
「もちろん、収拾がつかなくなることを心配して、伏せてあるのかもしれません。だったらそれでもいい、わたしも協力します。ですが、このまま黙ってはいられない。明らかにおかしいと分かっているのに、確認しないで不安なままでいるなんてことは、わたしにはできません」
「そうだねえ」と、田代は沈痛な表情で頷いた。「そのほうがいいだろうね」

尾崎医院に電話をしたのは田代だった。敏夫を呼び、少し話をしたいことがある、と切り出す。敏夫はそれで話の内容を予想したようだった。低く、分かった、とだけ答え、その内容については問わなかった。今からクレオールに来る、と言う。午後の診察が始まるまでに戻らなければならないが、それでいいかと問うので、田代は了承した。長谷川は表に出て準備中の札を再び下げた。

敏夫は本当に、いくらも経たないうちにやって来た。結城も病院で、あるいはここで、何度か会ったことがあるから初対面ではない。敏夫は入ってくるなり、ごく何気ない調子で長谷川にコーヒーを注文し、カウンターに腰を下ろして煙草に火を点けた。

口火を切ったのは田代だった。この中では最も敏夫と付き合いが長い。

「その……村迫の博巳くんが死んだろう」

ああ、と敏夫は悪びれた様子もなく頷いたが、どこか緊張感が漂っていた。

「武藤さんとこの長男も死んだ。なんだかね、死人が続きすぎるような気がするんだよ」

「それで？」

「ここで話をしてたんだが——伝染病ってことはないのかな」

敏夫は煙を吐きながら田代をじっと見つめる。田代は慌てて言い添えた。

「いや、もしも事情があって伏せているんだったら、おれたちも協力する。ここだけの

話でいいから、もしもそうならそう言ってもらえないかな。どうも変な気がして、なんだかもう、釈然としなくて――」

敏夫は煙草を揉み消し、軽く息を吐いた。

「伝染病じゃない。少なくともこれまでの死者で、伝染病で死んだ者は一人もいない」

「――本当に？」

「医師免許を賭けてもいい。まったくのシロだ。少なくともおれが診た限り、伝染病に罹っていた患者はいない」

割って入ったのは、結城だった。

「じゃあ、これだけの死者が続いたのは偶然ですか？」

「偶然にしちゃ続きすぎてることは認める」

「でも伝染病ではない？　伝染しているわけではないんですか」

「伝染病と、伝染する疾病を一緒くたには語れない。だが、伝染してるという確証もないな」

「確証が――ない？」

敏夫は頬杖をついた。長谷川がそっと出したコーヒーを見つめて新しい煙草に火を点ける。

「おれには、何とも言えないんだ。伝染病じゃないのはたしかだし、伝染している確証

もない。うかつなことを言って村を騒がせたくはないし、言えるのはここまでだ」
「でも、敏夫」
田代が口を挟むと、敏夫は黙り込む。しばらく何かを迷うように考え込んでから、口を開いた。
「おれには何も言えないが——そうだな、もしもおれの家族が死んだら、おれは火葬にするよ」
結城は少しの間、敏夫の横顔を見つめ、そして長谷川や田代と目線で頷き合った。
——やはり。
「……了解しました」結城は息を吐く。重い溜息(ためいき)になった。「じゃあ、伝染病ではないってことなんですね」
「伝染病ではない。それに関しては信用してもらって構わない」
「これは単なる世間話として聞くんですが、どうも死人が多いでしょう。それも突然死が多い。なので——そう、健康ってものが気になるんですよ。何か気をつけることはありますかね」
敏夫は結城を見なかった。
「そうだな。貧血には気をつけるね、おれなら。顔色が悪い、怠(だる)そうに見える、食欲がない、息切れがしているようだ——そういう様子があったら医者に診せたほうがいい」

「自覚症状としては？」

「ない」敏夫は投げ出すように言った。「本人が具合が悪いと周囲に訴えるようなら、突然死んだりはしないんじゃないかい。本人が無自覚ということがあるんだよ。最近、患者の中にも多いよ。本人は少しも不具合を意識してない、むしろ周囲が心配して連れてくるって例がね。そういう患者は大変なんだよ。話しかけても上の空でね。こっちの言うことを聞いてるんだかどうなのか、質問をしても答えが鈍かったりね。コミュニケーションが取りにくくなるんだ。人形か何かを相手にしてるみたいでね。まるで他人事のような顔をしてる」

「……予防する方法はありますか」

「さあ。月並みだが、きちんと寝て食うことかな。地下水は飲まないほうがいい。死体や汚物に触れる時は手袋をしたほうがいいだろうな。あとは害虫の駆除だね。特にダニ」

そうですか、と結城は呟く。感染経路が分かっていないのだろう。ダニなどが媒介している可能性もあるということか。

「それで……早目に診せれば治りますか」

敏夫はちらりと結城を見て、煙をあらぬほうに吐いた。

「——いや。単なる貧血なら治るが、そうでなければ難しいな、正直言って」

結城は息を呑(の)んだ。敏夫はようやく、結城らに向き直る。

「おれはこの店に来る客は信用してる。さほどに馬鹿(ばか)ではないだろう、とね。軽はずみな行動も取らないし、簡単に逆上して見境をなくすこともないと思ってるんだ」

結城は頷いた。

「そして、無責任な噂話(うわさ)もしない。そう信用してください」

うん、と敏夫は頷いた。

6

夏野は奇妙な威圧感と戦いながら、黙々とノートを埋めていた。単語を暗記することも、数学の例題に取り組むことも、とうに諦(あきら)めている。窓の外に存在する妙なプレッシャーとでも言うべきものが気になって、作業に集中できなかった。それで窓の外に意識を向けたまま、ひたすら歴史上の語句や人名を書き写している。

手が文字を覚えてくれればそれでいい。そう思いながら手を動かして、ふと気づくとノートの端や余白に、「徹」という文字や「清水」という文字が現れている。そのたびに消すが、現れる頻度は圧倒的に「清水」のほうが多かった。それも時間を追うごとに、明らかに増えている。

自分はこの——現在の、奇妙な監視下にある、という緊張感に覚えがある。それが何に由来するものなのかも知っている、と思う。だが、恵は死んだはずだ。棺の中に納められ、夏野自身は見届けていないが、徹のように担ぎ上げられ、土の中に埋められたはずだ。

だが、窓の外に誰かがいる。暗闇の中から部屋の窓を——夏野を見ている。カーテンに映る夏野の影、それをじっと見ている。

夏野は何度目かに「清水」という文字を消して、それで諦めて書類立てから葉書を抜き出した。夏野には理解できない感性の賜物。文字も文面も、何もかもが、自己アピールに見えないように意図されたあからさまな自己アピール、という矛盾に満ちている。距離を保持しているように見えるよう意図された、あからさまな接近。残暑を見舞う言葉以外、何も書かれていない。けれどもそこには、あえて書かないのだという差出人の意図があまりにも明らかで、明らかであるというその事実が真情を露呈している。——それは恵そのものだ、という気がした。

今もそうだ。明らかな監視。けれども監視者は気配を殺し、姿を隠そうとしていることが明らかだった。それがあまりに明らかだから、逆に監視されているのだという確信を与える。

（……清水）

けれども、そんなわけはない。
夏野は立ち上がった。カーテンを開け、窓を開ける。室内の明かりが外へ向かって流れ出たが、木の幹や茂みの作る闇はかえって濃くなった。そして明らかな視線。誰かが闇の中にいて——それもほど近いところから、自分を見ている、という確信。
夏野は闇を見渡す。誰も見えない。いないのではない、見えないだけだ。相手からは夏野が見えている。間違いなく見ている。
闇に向かって、誰何するようなことはしなかったし、する気もなかった。黙って夏野は片手に持った葉書を翳した。光が当たるよう、ゆっくりと指の先で何度か廻す。誰かが近くで息を呑む音が聞こえたような気がした。そして身動きをする微かな音。
視線が強い。そんな気がする。そう思いながら右手に摘んだ葉書に左手を添える。ゆっくりと、監視者の目に見えるよう角度を保ってそれを裂いた。また、微かな音がした。
両手で葉書を二度三度と裂く。細かな紙片になったそれを、窓の外に向かって投げ捨てた。白い紙片は文字通りの紙吹雪となって舞い、闇の中に零れて落ちた。
闇を——物陰を見渡し、夏野は窓を閉める。カーテンを閉めて机に戻り、じっと耳を澄ました。微かな物音がした。今度はあまりに明らかだった。下生えの揺れる音、誰かの足音。それが窓のすぐ近くにまでやって来る。
——いる。

窓の外に誰かがいて、その誰かは小声を漏らした。意味をなさない短い声は、ごく微かな悲鳴のようでもあり、押し殺した嗚咽の最初の一声のようでもあった。

微かな物音は続いている。まるで地面を小さな生き物が這いまわるような音。今ここで立ち上がり、カーテンを引き開ければ、それの姿が見えるような気がする。姿を消すには間に合わないだろう、という思い。そうしてみたい衝動を、夏野は懸命に堪えた。なぜだかは分からない。見てはいけない、という気がした。窓の外を覗いてはいけない。

それは窓の外に禁断の何かが存在すると思っているせいなのかもしれないし、あるいは、単にそれを見ることが恐ろしかったのかもしれない。見れば取り返しがつかない、という気がしたし、同時に見たら落胆することになる、という気がした。そうしてその奥底で、夏野が最も恐れていることは、何も見ないことなのだった。

隠れる間もないほど迅速にカーテンを開けて、そしてそこに何もいなかったら？ それが即座に何かを意味するとは思わない。怖いのは、目に見えない何かがいる、という認識と、単に隠れたのかもしれないという認識の間に宙吊りになることだった。

じっと耳を澄まして耐えた。窓の外の気配は付近を這いまわって、やがて絶えた。夏野はノートを埋める作業に戻ったが、やはり手は頻繁に「清水」という文字を、いつの間にか綴っていた。

翌朝、ほとんど眠らないまま、夏野は裏庭に出た。薄青い光の中、雑草のまばらに生えた地面は黒い色をしている。そこに二、三の白いものが散っていた。拾い上げてみると、葉書の一部だった。

捜し出した破片はわずかに三枚。それ以外の破片は、まったくどこにも見えなかった。

7

七日の朝いちばんに、村迫家から連絡があった。朝、起きてみると三男の正雄が死んでいた、と言う。敏夫は暗澹(あんたん)たる気分になった。村迫家は博巳が死んだばかりだ。その通夜(つや)、葬儀と家中がバタバタしている間に、少年はひっそりと病み、誰にも看取(みと)られることなく死んでいったのだった。

受付が開くと、工務店の安森節子が入ってきた。顔を見れば分かる。例のあれだ。着々と惨禍は工務店を蝕(むしば)んでいる。午後には外場に住む清水祐(ゆう)という若者が運び込まれてきた。これもやはり発症。節子よりも容態は悪いが、救急車を呼ぶほどでもない。もはや受け入れ先の病院の不審を恐れる必要もないのだし、さっさと転院させても良かったのだが、とりあえず、本人が望むなら、とアドバイスするに留めた。国立なりに行ったところで結果は変えられない。溝辺町の病院に行って検査入院なりすることになれば、

そこで死んで二度と家には戻らない、ということだった。それを本人に言うわけにもいかず、だからいっそう、転院を勧めるのは躊躇われた。
控え室に戻り、グラフに書き込みをしているところに、静信から連絡があった。静信の声は硬い。
「石田さんがいない」
敏夫はグラフに目をやったまま、それが、と答えた。
「失踪したんだ、昨夜。家族の話を聞くと、そうだとしか思えない」
敏夫はペンを落としそうになった。
「馬鹿な」
「奥さんは、夜、自分が寝るときにはたしかに起きて居間にいたと言っている。それが、朝起きると家のどこにもいなかった。車は車庫に残されたままだ。遠くに行っているはずはないと、朝から捜しているけれども、未だに見つからない」
(失踪――転居)
敏夫は立ち上がる。
「石田さんのところに行ってみる」
「ぼくも行く」
石田の家で落ち合う約束をし、取るものも取りあえず駆けつけた。石田の妻の千枝は、

顔色を失っていた。
「何が起こったんでしょう。――あの人がいなくなるなんて、そんな」
「落ち着いて。昨夜、石田さんの様子に変わったところはありませんでしたか？　たとえば顔色が悪かったとか、口数が少なかったとか」
「いえ……別に。いつも通りでした」
「夕飯は？」
「普通にいただきました。一昨日は忙しかったみたいで、家に仕事を持ち帰ってたんですよ。昨日も午前中は役場を休んでやっていたんです。でも、それも終わったみたいで、午後からは役場に行って、帰ってきてからはのんびり晩酌をして。むしろ、いつもより明るかったぐらいです」
　では、と敏夫は静信に目配せをする。石田は発症したわけではない。しかし、ではなぜ、石田が急にいなくなるのだろう。それも妻が寝たあとに家を出て行く理由がどこにある？
　あの、と静信が千枝に声をかけた。
「済みませんが、石田さんから書類を受け取ることになっていたのですが、御存じありませんか」
「書類……ですか？」

「ええ。一昨日、家に持ち帰っていた仕事というのがそれだと思います」
ああ、と千枝は頷いた。
「それなら主人の部屋だわ。昨日、封筒に収めて机の抽斗に入れているのを見ましたから。——そう、若御院にお渡しする書類だったんですね。昨日、役場に持って出なかったんで、変だと思ったんです」
千枝は先に立って、二階の部屋に案内する。階段を上がってすぐの部屋は、もともとは石田の子供が使っていたものなのだろう、ワープロの載せられた古い学習机と、今は使われていないふうの家具が置かれ、不要品が入っているらしい段ボール箱が二、三、積み上げてあった。
「息子の部屋で——今は納戸と兼用なんです」千枝は言って恥じるように微笑み、学習机の抽斗を開けた。「ここに——あら？」
千枝は抽斗の中を探る。
「変ね。ここに入れているのを見たと思ったんだけど」
千枝は呟きながら、他の抽斗も開ける。
「おかしいわ。やっぱり役場に持っていったのかしら」
「済みません」敏夫が千枝を押し除ける。「ちょっと見せてもらっていいですか。重要な書類なんです」

「ええ……どうぞ」
敏夫は抽斗を探る。そこにあるほとんどは文具やメモを書き留めた紙の類で、きちんとまとめられた体裁の書類はどこにもない。報告書ばかりでなく、資料として使ったはずのメモやコピーまで見当たらなかった。
「資料がないはずは……」
敏夫の声に、静信はワープロを引き寄せた。石田はこれを使ったはずだ。見るが、ディスクが入っている様子はない。試しにイジェクト・ボタンを押してみたが、やはりディスクは挿入されていなかった。蓋を開け、スイッチを入れて起動してみる。
「敏夫、どこかにディスクがないか?」
「ある。三枚だけ。二枚はラベルがついてる。一枚は年賀状、一枚は住所録」
静信は敏夫からディスクを受け取る。ラベルのない三枚目を挿入したが、目指す文書は見つけられない。ワープロ本体にもセーブされていない。念のために他の二枚も挿入してみたが、タイトル通り、年賀状と住所録の文書が入っているだけで、報告書はどこにも存在しなかった。
「ない……どこにも」
敏夫は千枝に向き直った。
「どこか、他の場所に書類を移したということはありませんか。ディスクを入れている

ということは？」

「いいえ。主人は几帳面（きちょうめん）な性格で、あちこちに物を置き散らすような人じゃありませんから。そこになければ、家にはないんだと思います」

「馬鹿な」

千枝は困惑したように首を振る。

「机になければありません。……ええ、たしかに昨日は、手ぶらでした。役場に行くのに、手には何も持っていませんでした。たいがいいつも手ぶらなんです、あの人」

「たしかですか？　玄関先まで持って出たということはないですか？」

「ありません。お昼はおにぎりにしてくれって言ったんです。朝、そう言われて、それで、お茶とおにぎりを持ってここに来て、そしたら主人が書類を封筒に入れているところでした。封筒に入れて、ディスクを抜いて片付けて、全部、抽斗の中にしまっていたんです。もう終わったから、下で食べるって」

千枝は言って、敏夫と静信を見比べる。

「それ……そんなに大切な書類だったんですか」

まあ、と敏夫は言葉を濁した。

「主人と一緒に下に降りたんです。わたしがわざわざ持ってきたのに、って言ったものだから、主人が自分が持って降りるから、って。それで一緒に降りて、お昼を食べて、

それから役場に行くって。寝室で——寝室は一階です。そこで着替えて、出かけました。出かけるまで世話をしたんだから間違いはないです。たしかに手ぶらでした。二階にも戻っていませんし」
「いいんです」静信は口を挟んだ。「驚いただけなので。大丈夫です。控えがありますから」
そうですか、と千枝は半ば安堵したふう、半ば依然として困惑したふうだった。
「あの……捜してはみますけど」
「お願いします。もしも石田さんから連絡があったら、至急、寺か病院まで連絡をくださるようにと」
はい、と頷いた千枝は、それで再び夫の行方を案じ始めたようだった。
「でも……どこへ。こんな、馬鹿な」
千枝を慰め、敏夫と静信は石田の家を出た。敏夫は、病院に寄っていくか、と静信に声をかけたが、静信は腕時計に目をやって首を横に振る。
「いや……もう戻らないと。今日は通夜があるから」
敏夫はその言葉に胸を衝かれた。
「そうか……」
「石田さんは——」

「どう考えても変だ。あの人が突然、いなくなるはずがない。奥さんの話からする限り、発症してたわけでもなさそうだ。なのに、夜中に行方をくらましている。しかも、たぶん書類と資料の一切合財を持って」

データは敏夫の手許にもある。静信の手許にもあるのだから、書類自体はもう一度、作り直すことができる。だが、なぜ石田が書類を持って姿を消さなければならないのだろう。

村は死によって包囲されている。

これはそう——包囲されている感触だ。転居者、辞職、自分たちが何者かによって意図的に孤立させられているという感触。敏夫たちは包囲され、切り離され——妨害されている。

（馬鹿な……）

それこそ、馬鹿な話だ。誰が何のためにそんなことをするというのだろう？　自分は、馬鹿馬鹿しい陰謀説でもぶち上げるつもりなのだろうか。

「何かが変だ……」

車のドアに手をかけたまま考え込んでいた敏夫の背後で静信が呟いた。

敏夫も頷く。

「……ひょっとしたら、これは単なる疫病なんかじゃない」

静信も頷き、そして自分の車のほうに戻っていった。

（通夜……村迫家の）

発症者が二名、失踪者——一。

敏夫は病院に戻りながら、それを頭の中で繰り返していた。死者一、発症者二、失踪者一。呪文のように唱えながら病院に戻ると、カーテンを閉めた玄関のドアの前で、高校生ぐらいの少年が中を窺っているのが見えた。車に気づいたのか振り返り、敏夫が車を駐車場に入れる間に小走りに寄ってくる。

「どうした？　急患かい」

敏夫は車を降りながら声をかけた。どこかで見た顔だ。何度か診察したことがある。

「急患じゃないんですけど……。尾崎先生ですよね」

少年は言う。その口調で、敏夫は思い出した。ずっと以前、脛骨結節を腫らして通院していた患者だ。

「君はたしか、結城さんのところの息子さんじゃなかったかな？」

「そうです」と少年は頷く。下の名前は夏野といったはずだ。「ちょっと先生に訊きたいことがあるんですけど、いいですか」

「どうぞ。ときに、君を結城くんと呼べばいいんだったかな。それとも小出くんと？」

夏野は肩を竦めた。

「どっちでもいいです。戸籍の名字は小出ですけど、普通は結城」
「じゃあ結城くん、だ。——結城くん、訊きたいってのは何だい？」
「清水さんのことなんです。清水、恵さん。先生が診察したんですよね」
「診察もしたし、死亡診断書を出したのもおれだよ」
「彼女、なんで死んだんですか」
「悪性の貧血だな」
夏野は少し言い淀み、敏夫の顔を上目遣いに見る。
「たしかに死んでました？ ——ほら、脳死とか、色々あるでしょ」
敏夫は軽く笑う。内心では何か得体の知れないものがもやもやとたゆたっているのを感じていた。
「脳死している患者を死んでいないと言う医者はいても、心臓死している患者を死んでいないと言う医者はいないだろうな」言って敏夫は笑う。意味もなく手の中で車のキーを持ち換えた。「呼吸、心拍は停止、血圧はゼロ、瞳孔反射も消えてた。彼女は死んでたよ。疑問の余地はない」
「でも、仮死状態、ってよく言いますよね」
敏夫は苦笑する。
「あまり仮死という状態にはお目にかかったことはないが、極めて死体に似ていて実は

死んでない患者というのはたしかにある。あまりに心拍が弱くなって素人では脈を探れない、呼吸が浅くなって、息をしていないように見えるってことはあるだろうさ。だが、彼女の心臓は完全に停止してた。あれだけの時間、心拍が停まれば、生きている者だって死ぬだろうな。――まあ、仮死状態で、死斑や死後硬直が起こるとも思えないが」

「早すぎた埋葬って、知ってます?」

敏夫はさらに笑う。

「おれは、ほんのちょっとでも生きている可能性があれば、死亡診断書なんか書かんよ。断固として治療をする。家族が止めたってな。そして、おれが死亡診断書を書かなきゃ、埋葬はできないんだ」

「じゃあ、清水さんが生き返ることは、絶対にないんですね」

敏夫は爆笑した。

「あの状態で生き返ったら、ゾンビか吸血鬼だよ」大いに笑い、敏夫はふと笑いが強張るのを感じた。(今、おれは何て言った?)夏野を振り返り、とりあえず笑む。「死斑や死後硬直が現れるということは、もはや彼女が単なる死体になったことを意味する。命のないモノとして腐敗しはじめているってことさ。どんな名医でも、腐敗を始めた人間を生かすことはできんと思うぜ」

「そうですか」夏野は考え込むようにして呟く。すぐに顔を上げて頭を下げた。「分か

りました。済みません、変なことを訊いて」

「ところで君は――」敏夫が言いかけたにもかかわらず、夏野は身を翻す。逃げるように駐車場を横切り始めた。「なんだってまた、そんなことを訊きにきたんだ？」

敏夫の問いに、夏野は答えない。ちらりと振り返って軽く会釈をし、小走りに敷地を出て行った。

――ゾンビか吸血鬼だよ。

敏夫は、自分の言葉を反芻する。

患者の様子、死因。考えて首を振った。（馬鹿な）自分自身に苦笑したが、やはり笑いは中途で強張り、消えていった。（あり得ない。そんなモノは、存在しない）

――悪い子のところには、鬼が来るぞ。

墓場から起きて、やって来る。子供を捕まえ、墓穴の中に連れて行って食べてしまう。ほんの子供の頃、古老に言われて、墓穴の中に人間二人は入れない、と言い返した覚えがある。墓から甦る鬼などいない（死者一、発症二、失踪一）。死体は人間を捕まえたり、食ったりはしない。それはただ腐敗して、土に還っていくだけだ（死者一、発症二、失踪――一）。

（癤……虫さされのような傷）敏夫は裏口に廻り、通用口から控え室へと戻った。（傷、貧血――死）

死者一、発症二、失踪一。
控え室のドアを開けかけて閉め、敏夫は休憩室に顔を出す。
「永田さん」声をかけると、看護婦たちがガーゼを折っていた手を止めて振り返った。
清美が軽く腰を浮かした。「悪いんだが、勤務表を作り直してくれるか」
「勤務の予定表、ですか」
敏夫は頷いた。
「人手が足りないのは分かってるんだが、どうもまずい気がする。——安森の奥さんに入院してもらおう」
夏野は小走りに歩く。西の山に向かって釣瓶落としに陽は傾き、夏野の影は足許に長く伸びていた。
(ゾンビか吸血鬼)影は前兆に見えた。(生ける屍——甦った死者)
それでいけないはずがない。
この村では、未だに死者を土葬にするのだから。

小野不由美著

魔性の子

同級生に〝祟る〟と恐れられている少年・高里は、幼い頃神隠しにあっていたのだった……。彼の本当の居場所は何処なのだろうか？

小野不由美著

東京異聞

人魂売りに首遣い、さらには闇御前に火炎魔人、魑魅魍魎が跋扈する帝都・東京。夜闇で起こる奇怪な事件を妖しく描く伝奇ミステリ。

西村京太郎著

黙示録殺人事件

狂信的集団の青年たちが次々と予告自殺をする。集団の指導者は何を企んでいるのか？十津川警部が〝現代の狂気〟に挑む推理長編。

西村京太郎著

ミステリー列車が消えた

全長二〇〇メートルに及ぶ列車「ミステリー号」が四〇〇人の乗客ごと姿を消した！　奇想天外なトリックの、傑作鉄道ミステリー。

西村京太郎著

丹後　殺人迷路

容疑者として浮上したのは、昨年焼身自殺した男だった——。十津川警部を愚弄する奇怪な連続予告殺人の謎と罠。長編ミステリー。

西村京太郎著

京都　恋と裏切りの嵯峨野

「私は、彼を殺します」美女の残したメッセージ。京都で休暇中の十津川警部が、哀しい事件に巻きこまれる。旅情豊かなミステリー。

貫井徳郎著
迷宮遡行
妻が、置き手紙を残し失踪した。かすかな手がかりをつなぎ合わせ、迫水は行方を追う。サスペンスに満ちた本格ミステリーの興奮。

乃南アサ著
幸福な朝食
日本推理サスペンス大賞優秀作受賞
なぜ忘れていたのだろう。あの夏から、私は妊娠しているのだ。そう、何年も、何年も……。直木賞作家のデビュー作、待望の文庫化。

乃南アサ著
6月19日の花嫁
結婚式を一週間後に控えた千尋は、事故で記憶喪失に陥る。やがて見えてきた、自分の意外な過去――。ロマンティック・サスペンス。

乃南アサ著
死んでも忘れない
誰にでも起こりうる些細なトラブルが、平穏だった三人家族の歯車を狂わせてゆく……。現代人の幸福の危うさを描く心理サスペンス。

乃南アサ著
凍える牙
直木賞受賞
凶悪な獣の牙――。警視庁機動捜査隊員・音道貴子が連続殺人事件に挑む。女性刑事の孤独な闘いが圧倒的共感を集めた超ベストセラー。

乃南アサ著
女刑事音道貴子
花散る頃の殺人
32歳、バツイチの独身、趣味はバイク。かっこいいけど悩みも多い女性刑事・貴子さんの短編集。滝沢刑事と著者の架空対談付き！

帚木蓬生著
白い夏の墓標
アメリカ留学中の細菌学者の死の謎は真夏のパリから残雪のピレネーへ、そして二十数年前の仙台へ遡る……抒情と戦慄のサスペンス。

帚木蓬生著
十二年目の映像
東大安田講堂攻防戦と時計台内部から撮影したフィルムが存在した。情報社会を牛耳る巨大組織テレビ局の裏面を撃つ異色サスペンス。

帚木蓬生著
カシスの舞い
南仏マルセイユの大学病院で発見された首なし死体。疑惑を抱いた日本人医師水野の調査が始まる……。戦慄の長編サスペンス。

帚木蓬生著
賞の柩
日本推理サスペンス大賞佳作
199×年度「ノーベル賞」には微かな腐臭が漂っていた。医学論文生産の裏で繰り広げられる権力闘争と国際犯罪を山本賞作家が描く。

帚木蓬生著
空(くう)の色紙
妻との仲を疑い、息子を殺した男。その精神鑑定をする医師自身も、妻への屈折した嫉妬に悩み続けてきた。初期の中編3編を収録。

帚木蓬生著
安楽病棟
痴呆病棟で起きた相次ぐ患者の急死。新任看護婦が気づいた衝撃の実験とは？　終末期医療の問題点を鮮やかに描く介護ミステリー！

屍鬼（二）

新潮文庫　お-37-4

平成十四年二月一日発行
平成十四年三月五日三刷

著者　小野不由美（おのふゆみ）

発行者　佐藤隆信

発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二—八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部（〇三）三二六六—五四四〇
　　　読者係（〇三）三二六六—五一一一

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・憲専堂製本株式会社

ISBN4-10-124024-8 C0193